

---

# 浮遊島の黒の恩寵管理者

tomotomo

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

浮遊島の黒の恩寵管理者

### 【Nコード】

N1107X

### 【作者名】

tomotomo

### 【あらすじ】

大陸歴2001年3月、150年前に時の聖人であるエウルーペ王国国王によつて滅せられたはずの魔王ティアナークが復活。拠点は亜人や魔獣を大量に載せている浮遊島 アーク。時代は勇者を求めている……のかもしれない。召喚された田中黒乃は異世界で何を成すのか。

ジャンルのには、従者、人形、スキル、建国、内政等。

作者はかっこいい(厨二な)武器名や技名を考えられる人を尊敬し

ております。

## 主要登場人物紹介（前書き）

更新や改訂はいくどもする予定です。

今のところ主要な中の重要な人物のみ。

11/10/22 クズノハ追加

## 主要登場人物紹介

人物名 / 種族 / 髪色 / 瞳色  
年齢 / 身長 / 魔術属性

(大陸歴1843年時点)

(28話までのネタバレ)

田中黒乃 / 人族 / 黒 / 黒

20歳 / 185 / 160 / 闇氷

本作の主人公。

不幸なことに天使(仮)に召喚されてしまう。最初は一人称を「私」としていたが、途中からこの世界での目標を覚悟と共に定め、「俺」に変わる。性格は温厚だが、子供っぽいところもある。基本的に外での服は黒を主体。城の中、プライベートでは日替わりで和服を着ている。

上位世界の人間のために根源量が世界よりも圧倒的に多く、恩寵タシクとなっている。

細いので肉弾戦はほぼできない。剣すら満足に振れません( )

パステル / 人形 / 白 / 赤

20歳 / 170 / 光風

本作のメインヒロイン(?)

元人形。いや今も一応人形。アンダーワールドに降りてきた時に自我が芽生えた。主人第一主義。

基本的な服装は特注の侍女服。目立たないタイプにしているが、彼女の完璧な容姿の前では意味をなさない。彼女は容姿やスタイルを

いくらでも自由に変えられるのでずい、と周りの女の子たちは羨んでいる。

クロノが恩寵タンクなら彼女は蛇口（？）。片っ端から恩寵技能を使いまくっている。

戦闘力No.1。

アイリス / 人族 / 紫 / 藍

14歳 / 151 / 雷

王都の路地裏でクロノとパステルが奴隷狩りから救った電撃少女。珍しい【魔力性質変換 雷】を身体に宿し、戦闘力はピカイチ。

レン / ハーフエルフ / 薄緑 / 濃緑

26歳 / 156 / 光風

マッドな科学者になると予想される、ロリ巨乳ハーフエルフ。常に敬語を使う。クロノとの相性がよく、クロノの方針に大きな影響を与えた。

研究者としてそれなりに優秀。魔術の方式についてはクロノとよく口論している。

フラン / 兎人族 / 青 / 青

14歳 / 155 / 水

初期に買った奴隷少女その1。【魅了】を持っていてクロノを無意識に惑わせてしまったことも。

ミア / 猫人族 / 赤 / 茶

18歳 / 160 / 火

初期に買った奴隷少女その2。【魔獣使い】を所有しており、騎乗技術が高い。それを活かして魔獣を飼っている。

ステラ / 人族 / 茶 / 茶

16歳 / 163 / 地

初期に買った奴隷少女その3。

悪戯好きで、クロノに対しても積極的。レンという年が離れた悪友を見つけて今日も暴走する。ステラ印の罾はブリトニア島では悪名高い。

セルヴィ / ホムンクルス / 黒 / 水色

0歳 (16歳相当) / 155 / 闇水

クロノが造った最初のホムンクルス。

自我がしっかり形成されてからは、その天然に見せかけた腹黒さを発揮。パステルをよくやり込めている。水属性の魔術に関しては最も習熟している。

トゥール / ホムンクルス / 黒 / 紅

0歳 (16歳相当) / 150 / 闇核

二人目のホムンクルス。彼女には自我が薄い妹がたくさんいる。

ツンデレ風味だが実はヤンデレの才能の方が強いかも。珍しい核属性の魔術の使い手。だがしかしあまり上手くない。練習するときは半径1キロに人がいないところでやっている。

キヨウ / 銀時計 & 守護霊 / 銀 / 銀

約100歳 / 180 / 雷水

クロノの祖父の祖父が時の天皇陛下から下賜された銀時計。永年を経て戦争をも乗り越えた彼女には多くの強力な恩寵技能が刻印されている。

クロノの母親的な存在。年齢のことを言うと怒るので気を付けよう。ちなみに少し大日本帝国への思い入れが強すぎる面も。

(大陸歴2001年時点)

(43話までのネタバレ注意)

田中黒乃 / 人族 / 黒 / 黒

22歳(肉体年齢) / 160 / 闇氷

主観時間としては30歳くらい。しかし精神は肉体に引つ張られるために大人っぽくはない。そういう演技は部下の前でするけども。苗字がちゃんと発音されない。タナカ テアナク テアナーク テ

イアナーク。

1846年に神聖王国に難癖つけられて魔王ティアナークとして攻められ、裏切りや人質や罠など、ある意味人間らしい作戦で追い詰められ、最後には心臓を貫かれた状態で自分の周りごと氷に閉じ込め、内部の時を止めた。

この時にクロノの身体自体も時が止まり、氷が溶けてからも時を止める中心であり媒介だった身体の時間は止まったままとなってしまう。よってクロノの身体には心臓がない。多くの傷も残っているが、それは人工の皮膚で誤魔化している。心臓や全身に残る痛みも常に薬を服用して抑えている。時が止まった状態で身体が固定されているため、新たにけがをしてもすぐ破損個所が元に戻る。

アルメイダ・ランスロット / 犬人族 / 銀 / 青

20歳（肉体年齢） / 178 / 光氷

マギレーヴェンナイツの一人で円卓の騎士。スタイルがよい。

『あの日』に操られてクロノに致命傷を負わしたことより、『裏切りの騎士』などと揶揄される。この仇名は、いつ復活してくれるかもわからないクロノを待つ騎士たちの心を震わせまとめるのに利用されたために広く定着した。

主武装は『貫きし道に魔は残らず（ツアヴェルジェルグ）』。新たにクロノが与えた『アロンダイト』は使っていない。

裏切りを強制された屈辱を胸に忠義を果たす。

ヘンリエッタ・ガヴェイン / ダークエルフ / 金 / 赤

17歳（肉体年齢） / 145 / 闇金

マギレーヴェンナイツの団長でかつ円卓の騎士の一人。ロリっばい。150年間戦い続けたことを認められ、『忠節の騎士』と呼ばれる。裏切りの騎士アルメイダには未だに隔意がある。150年間の想いは簡単には消えはしない。感情は理屈ではないのだ。

武器はクロノからもらった『ガラティン』。【ベクトル変換】をもつ彼女にしか使えないほど重く、根源の空き容量も大きい。使えば

使うほど成長していくだろう。

パステル並みに主人に対し盲目的。仕事時には口数が少なくなる。

クラリツサ・フラン / 兎人族 / 青 / 青

26歳 / 161 / 水

フランの子孫。クロノの直系の子孫でもある。

マギレーヴェンに敗れてならず、アンシャントルシュヴァリエの団長を務め、教導員のような立場になっている。

セルヴィ直伝の水魔術は強力。

ステラ / 人族 / 茶 / 茶

16歳 (肉体年齢) / 163 / 地

150年たつても悪戯好き、面白いものに目がない性格は変わらず。マギレーヴェンだけどナイトには特例で所属していない。製造番号二番。

レン / ハーフエルフ / 薄緑 / 濃緑

184歳 / 158 / 光風

エルフの寿命は150年くらいだが、【体内魔力行使】で常に体内の状態をよくしているので、若い姿を保っている。

マッドっぷりには拍車がかかり、もはやクロノが理解できない代物まで作っている。

今日も研究所では爆発が起こるのだー。

クズノハ / 狐人族 / 金 / 赤

20歳 (肉体年齢) / 160 / 光火

狐人族だけあつた『幻影』系が得意。わっち語を巧みに操る。  
『狐火』は彼女たちの種族魔術。マギレーヴェンには5尾の時になつた。

? (大賢者) / 人族 (上位世界) / ? / ?  
50くらい / ? / ?

悪名高い魔法『亜人隷属』を開発した男。

正体は上位世界から堕ちてきた勇者である。勇者には『上位世界から堕ちてきた者』と『天階恩寵【勇者】を持つ者』の二種類に分かれており、彼は前者だと思われる。

#### 簡易年表

1843年 クロノ落ちてくる  
1844年 レスト建国  
1846年 滅亡  
1995年 クロノ復活  
2001年 反攻作戦開始



## 主要登場人物ステータス（前書き）

作ってみました。正直物語ではほとんど関係ないかも……？  
戦闘中心ではありませんしね

43話までのネタバレ入ってます

11/10/23 更新

## 主要登場人物ステータス

ステータスは、生命力・攻撃力・防御力・敏捷力・魔術攻撃力・魔術防御力・魔力支配量・魔力支配速・魔力貯蔵量・概念強度・概念速に分かれる。後半7つが魔術関係。

幾つかは説明を。特に魔術関係は特殊なので。

生命力：文字の通り。無くなったら死ぬ。

攻撃力：物理攻撃力。

防御力：物理防御力。

敏捷力：瞬発力や走力。

魔術攻撃力：魔術により起こす現象を攻撃力と同様に表したものの属性や術式によって広く変化する。

魔術防御力：魔粒子への対抗力。魔粒子を岩や氷にした物への対抗力なので、本物の岩や水を魔術で飛ばしてきた場合には適用されない。

魔力支配量：魔粒子を把握・支配して魔力にできる量。基本である術者を中心とした半球状に支配した時の半径で表す。細い棒状に伸ばす場合は二倍から四倍ほど。

魔力支配速：上記の限界まで魔力を支配する時にかかる時間。一般的に、量が増えるほどかかる時間が大きくなる。

魔力貯蔵量：身体の表面や内部に溜めておける魔力量。この量の分は即座に展開できる。これも魔力支配量と同じように展開時の半径で表す。

概念強度：『概念を注ぐ』強さ。要するにイメージ力。魔法陣や詠唱でサポートする。

概念速：『概念を注ぐ』時間。つまりは魔術が発動するまでのラグ。

生命力から敏捷力までは、人間や魔獣を倒した時に相手の根源から一部を吸収できる時がある。よって肉体的に限界が来ても、根源量に余裕があれば肉体に変化がなくなるとも強くなっていく。同じ肉体であっても攻撃力に二倍以上の差がでることもあり得る。

名前：一般成人男性 種族：人族

魔属性：（光闇火核水氷風雷土地の内二つか二つ）

生命力：200

攻撃力：20

防御力：10

敏捷力：10

魔攻力：10

魔防力：50

魔支量：0.1m

魔支速：5s

魔貯量：0.05m

概念強：1  
概念速：3s  
装備品：なし

一つの基準として。

以下では【体外魔力行使】などの魔術系恩寵技能を持っていない場合は魔術関係を省きます。（日常でしか魔術を使わない者の魔術ステは横並びなので）

名前：一般王国兵 種族：人族

魔属性：（光闇火核水氷風雷土地の内二つか二つ）

生命力：400

攻撃力：40（+200）

防御力：25（+40）（+200）

敏捷力：20（-10）

装備品：鉄の片手剣、革の鎧、鉄の盾

装備の重量によって敏捷が下がっています。『（）』の部分装備品によるものです。

名前：王国精鋭部隊の魔術師（【体外魔力行使】もち） 種族：人族

魔属性：（光闇火核水氷風雷土地の内二つか二つ）

生命力：300

攻撃力：30（+30）  
防御力：20（+10）「+250」  
敏捷力：15（-2）  
魔攻力：10（最も弱い魔術） 500（最も強い魔術）  
魔防力：100  
魔支量：5m  
魔支速：10s  
魔貯量：2m  
概念強：10（+50）  
概念速：2s  
装備品：補助魔導具、上質な服

『 』は魔術による部分。魔術の一番のアドバンテージは不可視による攻撃なので、単純に数値では魔術の怖さを実感しにくい。

また、殺すことでステを吸収できるため、魔術師がひ弱というのはあまり当てはまらない。

以下が登場人物のステとなります。  
魔術の威力は、一般的な人間が喰らって死ぬのは200くらいからと考えてください。

名前：田中黒乃 種族：人族 魔属性：闇氷  
生命力：100  
攻撃力：6

防御力：8（+8）「+600『氷壁』」  
敏捷力：7（-3）  
魔攻力：50（『氷針』） 1600  
魔防力：200（+100）  
魔支量：11m  
魔支速：6s  
魔貯量：3m  
概念強：500  
概念速：1s（氷属性に限り0.1s）

装備品：黒のコート（防御力+8&魔防力+100）。鉄扇（攻撃力+60）。唐傘キヌガサ（攻撃力+250）。万年筆（魔法陣スツクと速く繊細に描ける）。パーパーカッター（攻撃力+300）  
銀時計キヨウ（『守護霊』発動時は女性の姿となって出てくる。単体で魔術も使える）

戦闘系恩寵：【魔力性質変換 氷】【体外魔力操作 氷華】【体外魔力操作 影闇】【体内魔力行使】【治癒魔術】【結界魔術】  
【剣裁き】【棍棒使い】【槍使い】【槌使い】【貫通強化】【集中力強化】【打撃耐性】【風属性耐性】【魔術耐性 火】  
（もつとたくさんの戦闘系恩寵技能を持っているが、黒乃は呪いで高階以下のアクティブスキルは使えないので発動しているのはこれくらい。）

魔術：

アイスバレット

『氷弾』：弾丸を模した氷を飛ばす。上位世界の知識を用いてライフリングを刻んでいるために他の者の『氷弾』の20倍の威力がある。魔攻力500

アイスジャベリン

『氷槍』：槍を模した氷を生成する。空に出して落とす場合が多い。

魔攻力80

『氷壁』：魔防力600

『治癒』：回復量10 100

『黒い霧』：空中の水分に閻属性の魔力を通す。目くらましに便利。  
『アンデッド作成』：閻魔術で禁術。これを応用してホムンクルスを作った。

『無魔空間』：外に向けた不発大規模砲撃術式の自動魔法陣を描き、一定空間にある魔粒子を使い切って一時的に魔的真空を作る。

『封魔結界』：陰陽術。敵の魔力を魔粒子に強制変換する。大規模に張る場合は補助する術者が必要。変換した魔粒子を結界内で自らの魔力にするには、補助術者は全て同じ属性の者でなくてはならず、今の段階ではホムンクルスの姉妹を用いている。

『神降ろし』：封魔結界内で吸収し練り上げられたある属性の魔力一つの属性で統一しなければ反発してできない。を用いて、祭壇で媒体を持つ巫女に神を降ろす。その巫女の身体自体が封魔結界となり、いかなる魔術も無効となり、身体能力も数段階上がる。脳のリミッターを外すことによってトランス状態になることで能力が上がるのだらうと黒乃は考えている。

『式神』：術者の目や戦いの相棒となる式神を作成・使役する。

『妖怪召喚』：魔粒子でできている存在である妖怪を召喚・使役する。

『巫術』：「呪符」「護符」を使った陰陽術一般。符で剣を作ったり使い捨ての障壁を張ったりと。式神もこれの一種。陰陽術は大陸魔術よりも『概念を注ぐ』上で洗練されているため、魔力を持たないものでも比較的簡単に扱える。しかし前準備には時間がかかる。

『無音結界』：【結界魔術】を最大限まで使って外に音が漏れない結界を張る。『人払い』の概念や『認識阻害』の概念を持った結界は熟練度的に張れない。

『時をも凍らす棺』：闇と氷属性混合の上級魔術。闇の浸蝕性を持って隔々まで凍らすことにより、肉体を氷の中に生きたまま保存できる。時を止めるに等しい魔術。

『マギレーヴエン化』：アンデッド作成の応用と【根源管理】【恩寵刻印】による裏技。中心核ケインに根源を写し、不老不死の魔造生物化する。肉体は上の魔術で保存。

『えいえんのせかい』：『時をも凍らす棺』の上位版で黒乃の用いる術式では最も高度。絶対に溶けない氷を顕現する。内部は永遠に変わらない、時が止まった世界となる。撤退戦で用いた時には、威力が大きすぎて術者の黒乃の根源の時間まで永続的に止まってしまう。

『凍てつく白雪の箱庭』：自動魔法陣や他の術者の補助を得て発動する大魔術。吹雪く氷のフィールドを顕現させる。雪や氷は魔粒子で出来ているので、天候操作魔術ではないが、魔法といってもいい広大な結界。

『エターナルフォーสบリザード』：再現しようと頑張っているが未だに未完成。遠隔で凍らせるのは難しい。補助魔法陣を大量に使えば大きな氷の中に閉じ込めることができるが、魔法陣や術者から順々に凍っていくだけで、相手の周りをスマートに凍らすのはできない。凍ったあと、指パツチンで氷ごと相手をバラバラにする術式も組めていない。

## 戦技

『千本桜』：キヨウによって発動する。銀時計キヨウが【切断強化】  
【鬼蜘蛛系作成】【系繰り】【変型】により桜の花びらを模した刃  
を千枚操って切り刻む。キヨウが上位世界出身であり、【不可壊】  
まで持つので圧倒的な攻撃力を実現する。攻撃力3000。

『レーザー』：キヌガサに刻印された魔法陣を用い、唐傘の先から  
レーザーを発する。魔攻力700

その他：

持っている武器はすごいのに自分ではめったに戦闘しない。身体は  
貧者なのでそれも正しいのかもしれない（危ない前線に出してもら  
えない）。

数ある恩寵技能の一部しか行使できない代わりに、魔術については  
研鑽をしている。黒乃が残した自動魔法陣は魔術界に大きく影響を  
与えた。

戦闘時は基本は後方。治癒や結界や『封魔結界』での補助。黒乃ま  
でもし敵がたどり着いた時には銀時計のキヨウが守護霊として出て  
きて護る。

名前：パステル 種族：人形 魔属性：光風

生命力：8000

攻撃力：150（+1500）

防御力：300 (+30)  
敏捷力：35 (-1)  
魔攻力：10 (『風斬』) 500  
魔防力：600  
魔支量：13m  
魔支速：5s  
魔貯量：11m  
概念強：120  
概念速：1s (風属性に限り0.1s)

装備品：隠しナイフ (上位世界からの持ち込み。攻撃力+1500)  
。特製侍女服 (白) (防御力+30)

戦闘系恩寵：【魔力性質変換 風】 【体外魔力操作 颯風】 【体外魔力操作 煌光】 【体内魔力行使】  
【魔力貯蔵】 【治癒魔術】 【結界魔術】  
【傳く者 サークヴァント】 【戦乙女 ヴァルクユリエ】 【ベクトル変換】 【乱魔】  
【短剣使い】 【剣裁き】 【棍棒使い】 【槍使い】 【槌使い】 【熱波】  
【衝撃】  
【貫通強化】 【集中力強化】 【爪攻撃強化】 【牙攻撃強化】  
【打撃耐性】 【風属性耐性】 【魔術耐性 火】 【守護】 【再生】 【自動修復】 【不可壊】  
【系繰り】 【蜘蛛系作成】 【鬼蜘蛛系生成】 【魚鱗生成】 【強酸生成】 【麻痺毒 弱】 【麻痺毒 強】  
【威圧】 【夜目】 【ひとり狼】 【捕食者】 【疲労軽減】 【水中呼吸】  
【風読み】 【怪鳥の翼】 【変形】 【換装】 【液化】 【無音】

魔術：

エアカッター

『風斬』：風で刃を形成する。遠くに行くにつれ加速度的に威力を失う。暗殺に最適

『風弾』：風斬よりも遠くまで飛ばせ、威力も高い。魔攻力150

『風槌』：広範囲を押しつぶす。殺傷力は低い。魔攻力30

『真空刃』：一時的に真空を作る。切れ味は抜群。魔攻力500

『光嵐結界』：風と光による広範囲攪乱魔術。目立つが安全に脱出できる。

『幻影』：光属性。囷やフェイントに多用。

『幻術』：姿を変えることができる。パステルの熟練度だと静止していないと崩れる。

戦技：

スカートレッツウアルキリーロン<sub>下</sub>

『たった一人の朱輪舞曲』：【戦乙女】を発動させながら三次元軌道戦闘を行う。生半可な攻撃では傷つかず止まらないパステルが、返り血を浴び縦横無尽に飛び回る姿は相手の戦意を折ってしまう。時間が経って流れる血が増えることに動きが速くなっていくのは悪夢でしかないだろう。

その他：

人形なために身体の制約（根源による拒否反応）が少なく、とことん強化されている。肌触りや体温は人間と同じようだが、皮の下になると防御力が高い素材で守られている。彼女曰く「人間の身体は無駄が多すぎる」。

魔術に関しては黒乃同様深い研鑽を積んでいる。風と光という、物理攻撃には向かない属性なために黒乃よりも魔攻力は低いが、風の不可視の刃（幻術付き）の殺傷力は随一。馬鹿正直に防具があるところを狙う必要などないのだ。風魔術は相手に間合いを悟らせない

のが魅力。

風を纏って動きを速くしたり、空中に即席の足場を作ったの三次元軌道戦闘が得意。飛行も割と難なくできる。人形だから身体の一部を使つて簡単に【怪鳥の翼】を作ることができ、その制御も『そういう人形だ』と考えることで扱うことができる。ために厄介どころの話ではない。

根源量が黒乃並みとは言わずともかなり多いので、黒乃が手に入れた恩寵を片端から刻印されている。人形なので身体の一部を変換する【強酸生成】や【怪鳥の翼】も問題なく行なえる。

恩寵の数から攻撃の手段が多く、人形なので核を破壊しないと戦闘不能に追い込めないが、【不可壊】があるために中階以下の攻撃は全て無効になるという鬼畜仕様。魔術も【乱魔】により減衰させられてしまう。

様々なアドバンテージにより世界最強クラスとなっている。ドラゴンにもタイムマンで勝つてしまうほど強い。

彼女を倒せる可能性があるのは上位世界から降りてきた勇者のみ。

名前：セルヴィ  
種族：ホムンクルス人造人間  
魔属性：闇水

生命力：800

攻撃力：70

防御力：50(+30)

敏捷力：20(-1)

魔攻力：5（『水針』） 2500

魔防力：250

魔支量：10m

魔支速：7s

魔貯量：4m

概念強：90

概念速：1s

装備品：特製侍女服（水色）（防御力+30）。

戦闘系恩寵：【体外魔力操作 影闇】 【体外魔力行使 水】 【結界

魔術】 【治癒魔術】

魔術：

『水弾』：水を弾丸上にして打ち出す。水の発展属性である氷に変換して打ち出す場合が多い。水のままだと魔攻力180、氷だと400。

『水蛇の氷鞭』：水の流動性を活かして軌道が読めない鞭を放つ。先端は蛇の顎状にして凍らせてある。斬られても水なのでそのままくっつく。

『ウォータージェット』：魔攻力の低い水属性魔術最強の魔術。魔攻力2500。水に高圧をかけるため制御が難しく、失敗したら自分が細切れになることも。

『ウォーターシュレッド』：『ウォータージェット』を多数展開する。多人数を対象にするか、相手の動きを制限する目的で用いる。魔攻力2300

『水剣』：『ウォータージェット』の近距離版。相手の剣と打ち合う

と相手の剣が折れる。間合いも制御範囲で自由自在。

『浸食する毒』：闇と水の合成魔術。闇で毒を作って、水の粘性と闇の浸蝕性により、相手のちよつとした傷口から入って徐々に浸蝕していくエグイ魔術。

『大津波』：津波を起こす。海や水が大量にあるところだと割かし簡単にできるが、地面の上でやろうとすると水を集めたり魔粒子から作ったりで莫大な時間がかかってしまう。よって海上でしか使わないが、自然の暴威の具現は船など歯牙にもかけない破壊力をもつ。

水属性は基本的に氷に変換しないと攻撃力が低いと思われていたが、黒乃の上位世界の知識によりダイヤモンドでも切れる『ウォータージェット』を覚え、セルヴィは最高峰の攻撃力を手にした。(制御が甘いと暴発するのでセルヴィ以外は何等かの補助を用いて行使する)

ホムンクルスなのでボディは人間よりも丈夫なものを使えるが、肌の下に金属を入れるなど、人間の根源に記録されているのとかけ離れた異物を挿入すると拒否反応がでてしまうため、肉体の強度は人形のパステルより低い。内臓の位置も大きくは変えられず、腕を斬られるとくつつけてもすぐに扱えるようにはならない。なぜならそういうものだと根源に記録されているからである。この辺りは人格を目覚めやすくするために根源量が多い人間の頭蓋骨を用いた故のデメリット。

ちなみに【不可壊】は刻印しても意味がない。なぜならば、身体は物でも根源は人間だと判断しているから。(【不可壊】は生き物に効果はない)

名前 : トウール  
種族 : 人造人間 ホムンクルス  
魔属性 : 闇核

生命力 : 800

攻撃力 : 65

防御力 : 45 (+30)

敏捷力 : 20 (-1)

魔攻力 : 150 (『エナジーブラスト』) 8000

魔防力 : 280

魔支量 : 11m

魔支速 : 7s

魔貯量 : 4m

概念強 : 90

概念速 : 1s

装備品 : 特製侍女服(紅色) (防御力+30)。

戦闘系恩寵 : 【体外魔力操作】 影闇 【結界魔術】 【治癒魔術】

魔術 :

『エナジーバースト』 : 核属性基本魔術で、純粋なエネルギーを球にして飛ばす。威力は最低でも1000くらいは出てしまい、扱いが難しい魔術。魔力次第では魔攻力3000ほど。

『エナジーブラスト』 : エネルギーを放射する。間合いを詰められた時や障害物がある時に使うことが多い。

『舞い落つる漆黒の爆羽』 : 闇と核属性混合魔術。エネルギーを圧縮した黒い羽根を大量に作り出して降らせる魔術。当たったら「ボンッ」という音を立てて弾けることになる。魔攻力1500ほど。

核属性は使い手も少ない上に制御が難しく、失敗したら即死亡もあり得るために使わない者か、一番基本の『エネルギーブラスト』だけしか扱わない者が多い。トウルも例に漏れず、『エネルギーブラスト』以外はまだまだ練習中。短気な性格なのでこれからもあまり期待できないかもしれない。

名前 : アイリス 種族 : 人族 魔属性 : 雷

生命力 : 200

攻撃力 : 25 (+140)

防御力 : 13 (+55) 「+250 『磁鉄障壁』」

敏捷力 : 25 (-5) 「+80 『紫雷を纏いし獣』」

魔攻力 : 1 (『静電気』) 1000

魔防力 : 140 (+30)

魔支量 : 12m

魔支速 : 8s

魔貯量 : 12m

概念強 : 35

概念速 : 0.03s

装備品 : 特製ピッケ。軽鎧

戦闘系恩寵 :

【魔力性質変化 雷】 【魔力貯蔵】 【敏捷強化】 【魔術耐性 雷】

【捕食者】 【思考強化】

魔術 :

『紫雷を纏いし獣』 : 魔力を雷に変換して身に纏い、筋肉を刺激して素早く動けるようにする。敏捷+80

『マグネティックシールド』  
『磁鉄障壁』：砂鉄や鉄くずを電磁力で集めて盾とする。その場に材料がないと使えず、形成に時間がかかることからあまり使う機会がない。

『マグネティックファイールド』  
『磁鉄結界』：砂鉄や鉄くずを舞い上げて敵を阻む。

『レーダー』  
『電磁波索敵』：電波を飛ばして障害物の裏に隠れている敵を炙り出す。【思考強化】を使わないと情報が処理しきれない。また、生まれた時から【魔力性質変化 雷】によって電気と共に生きてきたアイリスではないと返ってきた電磁波からうまく情報を読み取るこ  
とができない。

紙装甲。軽くしてスピードを上げている。マギレーヴェンが戦闘時  
に来ている鎧は、最低限の部分だけにしてある。

眼にも見えない速度で動き回るため、場所場所で魔力を練っている  
暇がなく、黒乃からもらった【魔力貯蔵】を用いて多めに貯蔵した  
魔力を戦闘では用いる。よってその魔力を使い切ったら文字通り『  
電池切れ』になってしまい、数秒かけて魔粒子を支配し、身体に貯  
蔵しなくてはならない。

生前も猪突猛進であったが、マギレーヴェンになってからは死んで  
も復活できるのでその傾向がより顕著になってしまった。  
特製ピックは魔力と電気の伝導性を良くした特別品。

名前：アルメイダ・ランスロット 種族：犬人族 魔属性：

光氷

生命力：500

攻撃力：50（+500）

防御力：35（+100）「+400『氷盾』」

敏捷力：28（-12）

魔攻力：5 1100

魔防力：240（+120）

魔支量：10m

魔支速：7s

魔貯量：9m

概念強：18

概念速：2s（氷属性は0.2秒）

装備品：槍『貫きし道に魔は残らず ツアヴェルジェルグ』【

破魔】が刻印されており、槍の先10m範囲の魔力を飛散させる。

【不可壊】もちでA級神刻物。攻撃力+500）。

マギレーヴェンの黒鎧（防御力+100、魔防力+120、敏捷力

-12）

戦闘系恩寵：

【魔力性質変換 氷】 【魔力貯蔵】 【戦乙女 ヴァルキュリエ】

【剣使い】 【槍捌き】

魔術：

『氷盾』：【魔力性質変換 氷】により瞬時に展開できるのが強み。

『光華』：目くらましの光を出す。

基本的に愛槍が魔力を根こそぎ吹き飛ばすので、自分もゆっくりと魔術を使う暇がなく、専ら『氷盾』や牽制用の『氷槍』しか出さない。

対マギレーヴェンや対妖怪戦だとほぼ無敵。【破魔】や封魔結界でもマギレーヴェンを構成する魔粒子はバラバラにならないが、直接

破魔の槍を食らうと話は別で、肉体が霧散してしまう。操られた時に多くの同胞を狩って黒乃を追い詰めた。

奴隷化されたマギレーヴェンの大半はこの時にやられたため、アルメイダを恨む者は絶えない。

黒乃陣営側は封魔結界を張るのが基本ドクトリンとしているので、戦闘における魔術の万能性は失われている。あくまでも魔術が使えない中での近接戦闘を想定してマギレーヴェンは鍛えられている。

名前：ヘンリエッタ・ガヴェイン 種族：ダークエルフ 魔

属性：闇金

生命力：600

攻撃力：42 (+3000)

防御力：28 (+100)

敏捷力：25 (-12) (+20)

魔攻力：20 1800

魔防力：280 (+120)

魔支量：9m

魔支速：8s

魔貯量：3m

概念強：27

概念速：2s

装備品：『もう一つの聖なる黄金剣 ガラティン』 (オリハルコンをそのまま用いたような無骨な超大型剣) 【不可壊】 【固定化】

【重量化】 【衝撃】 【切断強化】 などが刻印されたA級神刻物。その破壊力は折紙付きだが、扱えるのは【ベクトル変換】を習熟した彼女のみ。攻撃力+3000)。

マギレーヴェンの黒鎧

戦闘系恩寵：【体外魔力操作 影闇】【戦乙女 ヴァルキユリエ】  
【ベクトル変換】

魔術：

『足止まりの泥沼』：地属性。地面を泥のようにする。高速戦闘する彼女は滅多に使わない

『鍊金』：地金混合属性。足場を作る場合が多い。

『封魔結界』：ヘンリエツタは闇属性なので適性が高い。

彼女も封魔結界内で戦うことを見越して、150年間鍛え上げられた近接戦闘特化型の騎士。

子供の時から所持して使いこなしている【ベクトル変換】を最大限に生かし、全騎士最強となった。【ベクトル変換】によって武器の重量を無視して自在に操り、防御時には鎧が受けるダメージを分散、一部を反射し、また、体内の筋肉や骨にかかるベクトルを操作して最も効率のいい動きをとることができる。

絶対に壊れないガラティンの破壊力はパステルであっても受け止めることができない一撃。それが短剣を振るような速度と剣筋で迫ってくる。なんとか受け止めるか受け流すことができても、ガラティンが触れたところを通してベクトルを操られてバランスを崩されてしまう。また、発生する衝撃波すら指向性を操れるために紙一重で避けてもダメージを食らう。

アルメイダとの模擬戦 マギレーヴェンは復活できるので真剣で行う では最初に一撃入れたほうが勝つ。

名前：リーナ 種族：狼人族 魔属性：火

生命力：400

攻撃力：43 (+450)

防御力：30 (+100)

敏捷力：28 (-12)

魔攻力：5 1100

魔防力：240 (+120)

魔支量：10m

魔支速：7s

魔貯量：9m

概念強：18

概念速：2s (氷属性は0.2秒)

装備品：『炎獅子の鬣』(B級神刻物。アダマンドイトにルビーで修飾している両手剣。様々な炎属性魔法陣を刻印してある。攻撃力+450。炎の斬撃を飛ばすこともできる。)

マギレーヴェンの黒鎧

戦闘系恩寵：

魔術：

戦技：

『火炎の渦潮』：『炎獅子の鬣』を中心として5mを炎が渦巻く。

間合いを開ける場合に使う

『全炎の獅子』：『炎獅子の鬣』から炎の獅子を召喚する。

実力的にはマギレーヴェンで上の方。魔術なしで冒険者ギルドAに行ける腕の持ち主。

王城を守っていたマギレーヴェンの例に漏れず、封魔結界内での戦

闘を意識しているために魔術は不得手。

名前 : クラリッサ・フラン      種族 : 兔人族      魔属性 : 水

生命力 : 450

攻撃力 : 45 (+300)

防御力 : 26 (+150)

敏捷力 : 23 (-13)

魔攻力 : 5 1800 (+200)

魔防力 : 170 (+100)

魔支量 : 13 m

魔支速 : 8 s

魔貯量 : 4 m

概念強 : 26

概念速 : 1 s

装備品 : 水のレイピア (攻撃力+300、魔攻力+200。水属性の魔術を補助することを前提として造られている。)

戦闘系恩寵 :

【体外魔力操作 水渦】 【剣裁き】 【集中力強化】 【貫通強化】

魔術 :

『ウォータージェット』 : セルヴィ直伝。レイピアを補助として用いる。レイピアの刀身を水の流れる川と考え、切っ先で集め、それを一点から放出するイメージで行っている。本家より多少威力は落ちってしまう。

『水纏付与』 : 剣に常に水を流れさせる。切れ味が落ちない。そのまま『水斬』などに持って行きやすい。

アンシャントルナイトの団長。マギレーヴェンになる実力はあるが拒んでいる。

国家（前書き）

11/10/22 更新

## 国家

アンダーワールド世界地図

> i 3 3 4 0 2 — 4 2 3 2 <

・シークリッド大陸

最も巨大な大陸。『神聖なる』という意味の名を持つ。

大陸の東側に大きく広がる大砂漠があるため、東へ進出するのが難しくなっている。

神聖エウルーペ王国：

大陸歴1850年にアークライト王朝がハーヴェイ王朝を「魔王と共謀している」として倒し、『エウルーペ王国』から『神聖エウルーペ王国』に改号された。以後アークライト王朝のみが王家として君臨している。1850年以降は国をまとめるために宗教を熱心に広めている。魔王討伐、シルフの聖女など、アークライト王朝を正統化させる要素が多かったために上手く利用できている。

現在は国の政策として、神の後押しを受けた王国が未開地を切り開いてやるという考えの元に他大陸の占領が進められている。

土地がやせているために農業は弱いが、海洋資源は豊富。

大陸一の軍事国家であり、新大陸やダークヌス大陸へ進出している。しかし王国北部の開拓はあまり進んでいない。

身分制としては、王家の下に貴族、その下に平民、さらに下が奴隷

となっている。

奴隷狩りは法律的に（表向き）禁止だが、奴隷の売買は公に行われている。

ラーシアン帝国：

大陸のかなりの面積を占める国家群。いくつかの国家が合わさってできているために、大きい国力を持ちながら発展できていない。魔法文明ではかなり劣っている。

農業がさかん。

帝国の中にはエルフが治める自治区が存在する。

奴隷制度有り。

アイスル教国：

とても排他的な宗教を持つ。国の首都に世界樹があり、神がもたらした物として崇めている。宗教により最も身分制度が厳しい。亜人どころか異教徒は人間ではないとされる。

砂漠地帯が多いため、かなり生活が苦しい。

東には大砂漠があるため、西のダークヌス大陸に進出を狙っている。しかし貧乏なために王国に先を行かれている。

エルフの王国：

人々に追われて出来た。

同族にも排他的な国となっている。

しよっちゅう帝国からちよっかいを掛けられているにもかかわらず、ドワーフの国と小競り合いを続けている。

ドワーフの国：

山脈があり、鉱石が多く取れるために栄えている。帝国には人種では作れない高品質な品を卸すことにより表面上は仲良くしている。エルフの国との小競り合いが絶えない。

・ダークヌス大陸

名前の由来は魔獣や亜人が多く、汚れている大地と見做されたため。しかし魔獣や亜人を追いやったのもシークリッド大陸側である。

2001年現在、王国と教国によって南下政策が進められている。様々な資源があり、亜人を奴隷にして労働力にできるので勢いがある。

残った亜人や、元からいた人族で手を組んで防衛戦線を張っている。しかし少しずつ追いやられ、大陸の3割近くの生活圏が奪い取られた。

主に生息しているのは獣人とダークエルフ。

・新大陸

発見されたのは大陸歴1830年頃。

主にシークリッド大陸から逃げたエルフ族が多数の集落を作って暮

らしていた。

2001年現在、王国に東海岸をほとんど取られ、シークリッド大陸にいるエルフは新大陸に入りにくくなっている。

西側には先住の亜人（魚人やハーピー等）がばらけて暮らしている。最近西海岸にビッグイーターの侵略があり、生存競争は一進一退の状況。

#### ・アンノーン大陸

発見されたのは大陸歴1930年頃。黒乃を包み込む氷棺が海を海流に乗って流れてたどり着いたのがこの大陸。

新大陸にいるエルフ族とアンノーン大陸に移住してきた旧ブリトニア島勢力しか存在を知らない。

浮遊石の大量採掘地。有用と判断されたため、大陸中からかき集めている。浮遊島アークは南の果てで見つかった。

#### ・ジャポン

シークリッド大陸の東にあり、極東と呼ばれる。

大陸側とはドワーフの国を通じて帝国と多少の交流がある程度で、大陸とは何から何まで異なった文化を歩んでいる。

1840年頃から大陸魔術師と陰陽師で争いが起こり、2001年現在、大陸魔術師勢力が増えて内乱状態となっており、より情報が手に入らなくなっている。

東の海のまっ只中にあるという幻の大陸から、瘴気が流れ込んで闇属性の、黒髪の子供ばかり生まれる。天皇家の継承魔術によって瘴気を弾く結界が張られ、都市ごとにも結界が張られている。

固有種として魔粒子生命体である妖怪が存在する。

・???大陸

極東の更に東にあるという幻の大陸。

一説によると文明が遙かに進んでいるとか。

ビッグイーター発祥の地ではないかとごく一部で疑われている。

・浮遊島アーク

> i 3 3 4 2 2 — 4 2 3 2 <

アンノーン大陸で発見された超巨大浮遊島。

浮遊石には発動する向きがあり、上向きの数を調整することによって高度を変える。操作は難関であり、20年ほど訓練しないと上手くできない。

高低差としては右方が高く左方が低い。よって着水時に左後方に海水が入る。これを利用して養殖ができないか研究が進められている。世界樹があるためにかなり魔粒子がかなり濃密。

幻獣の森があったため、乗騎として育成している。

城はブリトニア島の王城よりも高くできていて、低い階層には様々な仕事場やレジャー施設がある。城の地下にはマギレーヴェン化した者の肉体が氷漬けにして保存されている。

聖泉は身体を癒し病気すら治す効能があるため、また温泉のように温かくなっているところがあるため、観光地として使う。

アークの組織構成は、黒乃を王として、その下に様々な分野の代表

者があつまる『代表会議会』がある。

実際に執務を取り仕切るのはパステル。（しかしパステルが前線に出たがるようになったのでセルヴィが負担する機会が増えている）。トウールは騎士団に出向して戦闘力を磨いている。

代表は、騎士団・農林水産・財政・法務・内務・外務など。

0話 魔王復活(前書き)

11/10/19 誤字訂正

## 0話 魔王復活

シークリッド大陸歴2001年、新しい世紀を迎え盛大なミレニアムカウントダウンが行われた翌々月に『それ』は起こった

世紀が変わる年であったこの年の祭りは毎年の年明けの祭りと比較にならないほど大きく、祭り自体に一月以上、そして終わってからも人々は集まり続け出店や露店が国の主要な街にあふれていた。そんな中であつては通常業務に戻りつつあつた国を守護する警備隊も弛緩しており、大空から『何か』が雲に隠れながらやってきているのになかなか気づくことができなかつたのも仕方ないことであつたのだろう

しかしこの日の夕方、忘れることができない出来事が起こる

最初に空気が変わったことに気づいたのは王国の重犯罪者や政治犯罪者を収監する国营牢獄であるヴェストローウ牢獄　王国の西端、大陸から突き出た半島のような所にある　の警備兵だつた  
ヴェストローウ牢獄は大陸の西端にあり、陸路だと王国の内部を、海路だと王国が南の海を越えたところにあるダークヌス大陸との販路を通らなければならないために長い歴史の中でもほとんど攻撃されず、またヴェストローウの東側にある城塞により難攻不落と知られており、一度も攻撃されたことのない西の海側の物見塔にまじめに務めているもの好きな輩　特に今は100年来の祭り後だ　など  
いながつたのだ。

その警備兵は、近くの街には祭りの残滓が色濃く残る中で辛気臭い

牢獄エリアにいるのに耐えられず、せめて気分を変えようと城壁の方にでてきたのだった。

嗜好品として葉巻を取り出し一服して、息を疲れとともに吐き出すと上を向いた。すると空にある雲の色が少しおかしいことに気づく。

そういえば先ほどから鳥や動物が騒いでいたので今夜は嵐にでもなるんだろうか、などのんきにしていたのだが、たしかにその雲は明らかに色がおかしく、雲の下に茶色の岩のようなものが見えた時に嫌な予感がして「これは何かの異変だ、本部に連絡しなくては」と電信兵に連絡しに行くために身を翻そうとしたその時

地を引き裂くような轟音と数瞬遅れて建築物が崩れた音が響き、大きな『島』が雲の下から現れた。

その島は横に20kmもあるような巨体であるにもかかわらずどのような術によつてなのか浮いており、浮遊島の中央の方には威容を讃える荘厳な黒い城が建っている。

こちらの方に向けられている前方にはこれまた大きな筒のようなものがいくつも見え、数瞬ごとに500mの距離を何かが飛来して破壊を振りまく。

警備兵をその異様な光景に暫しの間目を奪われ沈黙していたが、城壁の一部や牢獄付近にある建物が壊れたことによりやっと異常に気付いたほかの警備兵や収監されている囚人達が騒ぎ出したことによつて現実に引き戻される。

「敵襲う！！敵襲うー！！！！」

叫びながら牢獄に隣接している、電信兵が居る事務所に駆けっていく警備兵。

敵襲を知らせる鐘については、鐘がある塔に向かっていく同僚の警備兵が見えたため、電信兵に【通心】を使って王国の中枢部に知らせてもらおうと向かったのだ。

事務所がある通りに差し掛かると正面の事務所を視界に捉え、動転して空回りする足を向ける。

が、

先ほどと同じ地を裂くような轟音が聞こえ、同時に100m前にあつた事務所が吹き飛びその余波の爆風で鍛えた身体が簡単に浮き上がり後ろに飛ばされ壁に背中から激突することになった。

この警備兵が気を失う前に最後に見たのは、敵性浮遊島から幻獣と呼ばれるグリフォンや、存在するだけで空でも海でも山でもその場を支配してしまうことから、根っからの支配者であるとおそれられるドラゴンが群を成して飛んできており、ローブを着こんで魔術師と推定できるダークエルフや鎧を背負った騎士のようにみえるオーガやゴブリンたちが騎乗している姿だった。

彼は最後にこう呟き、意識を暗転させた。

「神聖な幻獣と邪悪な亜人がなぜ……？」

『魔王ティアーナの復活!!』

王都でも地方の街であっても街角でこの情報が叫ばれていることであらう。

片時も離れなかった純白の従者と共に150年前に亜人や魔獣を率い魔の国を建国し人族排斥を目指した、漆黒なる魔王。

短命種である人族では直接経験した者はおらず文献や吟遊詩人の詠う物語にのみでてくる、邪悪である魔王。

当時最も繁栄を誇っていたエウルーペ王国の長い歴史の中でも屈指の聖人であった　また国名をエウルーペ神聖王国に改号した  
国王ジェラルド・アークライトの命令により滅せされた、悪の根源たる魔王。

災厄の化身の復活の報は国中に広がると共に、ヴァストーウ牢獄の

重犯罪者の大部分が解放され、ヴァストーウの城塞までを占拠されたという不名誉の報が相次ぎ届き、歴史上一度も国土を侵されたことがないということに誇りをもつ神聖王国国民を激怒させることになった。

今もなお世界最高の軍事力を持ち西の大海を超えた先にある新大陸の発見・開発や、魔獣や亜人が多い穢れた大陸であるダークヌ大陸の制圧の先駆けとなっている神聖王国にはプライドの高い民が多いのだ。

命からがらに逃げてこれた目撃者によると、魔王が乗った浮遊島は浮いているのが不思議なほどの巨体であり、海の上雲の下から現れ遠距離魔術での先制攻撃、その後には幻獣や魔獣に騎乗した亜人達がヴァストーウ牢獄に乗り込み、浮足立った且つ祭りの後で弛緩していた。あろうことに装備を点検していない者すらいた。警備兵を蹴散らし、後方からの長距離魔術砲撃の援護を受けながら白兵戦で易々と牢獄の本部や事務所を押さえてしまったとのこと。

また、牢獄には魔王の過去の仲間やその子孫が収監されていたように牢獄を破壊して解放し、逆にヴァストーウ全体が占拠されてしまい詰めていた警備兵達が多数牢獄に放り込まれることになったようだ。

魔王の復活だとすぐにわかって【通心】や【電心】で王国首都に伝えられた、のは牢獄に閉じ込められていた者がティアナーク様！と歓喜に叫んだことによる。

復活した魔王ティアナークからの声明は未だ届いていないが、ここ、王都から少し離れた街であるノルルーでも先ほどから老若男女さま

ざまな人々が外を走り回っていて、文献や歌物語で邪悪に語り継がれた魔王の現実での復活に対し何等かのアクションを起こしている。恐怖し神聖王国が崇める神に祈る経験な老人、事態がわかっておらず大人が叫んだり慌てている状況に泣き出す子供、物語での話など誇張されたものだど嘯き隣にいる彼女に強がってみせる青年、この情報が神聖王国にどのような影響を与えるか、隣国との交易への影響を考えている恰幅のある女商人

まだまだ混乱は終わりそうもない

いや、まさに始まったばかりなのであろう、魔王の復活による動乱が。

願わくば物語のように勇者が現れて魔王を打倒してくれんことを。

ノルウーの知

識人グレンの日記より

ヴァストーウ牢獄を解放し東の城塞を占拠して兵士達が一息ついた頃、周りを圧倒する程輝く内装であるのにもかかわらず、静謐で厳粛な雰囲気漂う空間に男と女だけがいた。

ここは浮遊島の中心にある城の最上階付近にある魔王ティアノークの私室で、広い空間の扉から奥には大きな事務机が置いてあり、その周りの壁には古今東西種々の本がきれいに整頓された本棚が並んでいる。また、本棚のない壁にもガラス張りの巨大な棚があり、魔王配下となっていたドアーフ達が作り上げた武器や甲冑が並べ部屋に威圧感を出すのを促していた。

部屋の主　事務机に座ってティーカップを傾けていた　がコトツとカップをソーサーに戻す。するとすかさずに部屋の端で控えていた純白を主張する従者が紅茶のお替りを入れる。その時に従者は主である魔王が少し震えていることに気づく。

「ふ、ふ……ふふ……」

その震えは武者震いによるものか。もしくは自分に至らないところがあつて不興を買つたのだろうか。

「どうかいたしましたか」

従者は機嫌を損ねないように慮りつつ尋ねる。

「いや、どうかもなにも……とうとう、じゃないか」

万感胸に迫っているのが震えの理由のようだ、と従者は気づく。

「そう、ですね……」

いよいよ主の復讐が、解放が始まるのだ、ということとは従者も重々

理解していた。

しかし胸に去来する気持ちは、主が前を向いて願いを叶えようとしそれに手をかけていることへの喜びだけではなかったのだ。寂しさ、淋しさ。これは何に対して抱いているものなのか、まだ生まれて200年も経っていない彼女にはわからない。

いや、わかっていても無駄な感情として切り捨てようとする気持ちが理解を拒絶しているのだ。

この心は主のためだけにあり、この身体は主が歩む道を切り開くための剣（剣）である盾。心の中で呟いて先ほどまでの思考を排除してまた主に目を向けた。

この城の主、この浮遊島の主である魔王ティアナークは全身を黒という色で統一している。

烏の濡れ羽とでもいうべき艶やかな髪は肩口まで流れており、すべてを吸い込んでしまうかのような瞳は今閉じて何かを思考しているようだった。

上半身は黒っぽい紫のシャツに赤色のラインが走る黒いジャケットを、下半身はこれまた漆黒という表現が似合う仕立てのいいパンツスタイル。手に持っている白磁のカップはその金細工の細やかさから高価であることが伺える。机の近くに立てかけてあるのは大きめの黒い剣で彼が持つ時は部下の前にてて士気を上げる時のみとなっており、その質の良さ 【拡声】 【守護】 【軽量化】 【威圧】 などの恩寵技能 グレイススキル が刻まれている に対してもつたいない使い方をしている。また、机の上には事務仕事をするための様々な小道具の中に優美とも無骨ともとれるような黒い鉄扇が置かれている。これも恩寵技能がいくつも刻まれた名品であり世界にただ一つしかなく彼のお気に入りである。

従者は主へのあふれんばかりの愛ゆえかいささか、いや、大幅に評価しすぎるところがあり今もまた主の美しさ・かつこよさを目に刻まんばかりに主を凝視しているが、ほかの者たちが見ると、ほとんどの人物が従者を見るであろう美貌を従者は持っている。背中までまっすぐ伸びる純白の髪は透き通りすぎて周りの色を薄く映しているし、人形のように整いすぎた顔は白い肌と妖しく光る赤い瞳とで危うくも奇跡と言えるバランスを持っていて、その身に纏う、侍女服を発展させたような淡い桃色のエプロンドレスもシンプルながらも従者の完璧な容姿を美しく映えさせている。この従者だと、主を立てるために目立たないようにと選んだ服装でもそこまで効果がないうようだった。

崇拜以外にも愛情やら色欲やらが混じっている熱い視線を主に送っていた従者だったが、主が目を開けたと同時に目を伏せ、のんびりしている暇はないのだと思いだした。

これまでも怒涛のような忙しさだったが、かつての仲間やその子孫を一部解放した今でも、解放した者たちの居住区への誘導や整理、神聖王国につかまっていた間に得た情報の聴収・分析など、仕事が溜まっているのだ。

こうしてはいられないと、扉の方へ向かい扉を出る前に主に向かい礼をして背を向ける。

その時だった、敬愛する主から言葉がかけられたのは。

「この150年間、俺が封印されている間ご苦労だった。まだまだ迷惑をかけることもあると思うが、これからもずっと、仲間の解放と新たな理想国家の建設の道中でも夢が成された後になっても、俺の半身として共にあってくれ」

その発言は従者にとって不意打ちだった。しかしまったくもって不快ではない。

「もったいなきお言葉。ご主人様が良いという限り生涯お側でお仕えさせていただく所存でございます」

主からの労いの言葉、150年間待ちわびていたのだ。うれしくなはずがなく、忙しい時でなければ今すぐに主人と寝室に行きたい気分だった。歓喜に震えながら廊下を歩きつつ呟く。

「次は、絶対に、二度と、離れませんわ」

しかしその言葉に混じるのは愛情崇拜歓喜そして……

主人を守れなかった後悔、主人の邪魔となる敵（害虫）への憎悪だった。

150年間を取り返しに行く魔王と、150年間を取り返しのつかないものと認識する従者。

常に共にあった二人は、しかしこの150年ですれ違ってしまっただのかもしれない。

## 0話 魔王復活（後書き）

初めて小説というものを書いたのですが、予想以上に時間かかることを体験しました。

定期的に更新してる作者様はすごいですね……

作者側になってわかる苦悩というのを知っておけば読者の時に考えられることが増えるかなあ、と期待してたりもします。

1話 召喚！ ……いや、拉致の間違いじゃ？（前書き）

主人公視点です

1話 召喚！ ……いや、拉致の間違いじゃ？

「おーい？話聞いてんのかあ？高貴なるセイントクリス様のお言葉を無視してんじゃないぞ。全くせつかく上位原型世界から人間を召喚できたと思えば男だしよお、その年齢じゃあ」

はて。

私は田中黒乃といいます。

容姿は日本人らしく黒髪黒眼で肌は日焼けしていない黄色。身長は185cmだが身体は痩せ形のため威圧感はなく、そればかりか女顔に近い童顔のせいで身体と顔がアンバランスだと大学の女子達から微妙な評価を受ける始末。

勉強だけはそれなりにできる現役大学生で、9月からの留学に備えて6月である今から現地入りするために荷物を準備していた極々平凡な少年？青年？だ

…っと思うのだが……

なぜに、準備の途中に唯一の趣味である人形いじり 女っぽいとか言うな。人形なめんなよ、人形の美しさ神秘さ妖しさをなぜわからない人が多いんだらう。私的にはぬいぐるみも守備範囲ですけど一番好きなのはビスクドールです。ちなみに今いじっているお気に入りの人形は生まれた頃に祖父に買ってもらった世界に一つだけしかないビスクドールでかなり有名な人形匠が造ったらしい。だが自分でもさらに改造していて造形は完璧なバランスなので変えていな

いものの中には暗器とか宝石とかティーカップとか仕込んでます、戦って世話をできる人形を目指して（動かないけどね、自己満足です）。球体関節もつけました　をしていたら座っていた床に穴が開いて落ちたと思ったら天使（仮）がいるっていう状況……？

漫画や小説なんかで見たことのある異世界召喚？いやまさかそんな非科学的なことがあるわけ……

でも目の前にいる天使っぽい翼を生やした男の着ている服は見たことがない素材だし、この地面の土は緑色をしているし、天使（仮）の周りにはたまに光るエフェクトが出ているし……着々と異世界、少なくとも自分は全く知らない世界であるという根拠を見つけてしまっている。

「　ということ。わかったか人間」

ぐちぐちと文句を言いながら　勝手に召喚されたのに愚痴られても困るのだが　この世界と自らに関しての説明をし終わった天使（仮）。

天使（仮）の説明を述べようと思う。天使（仮）の説明は間に愚痴や自分への賛美がしょっちゅう入るので要点以外思い出したくないのだ。

まずこの世界についてだが、識別番号UW5000433で『クリスワールド』というらしい。

どうせ『クリスワールド』という名前は明らかに目の前にいる天使（仮）がつけたのだろう。自分のことセントクリスって言ってたし。なんだよ『聖なる救世主』って。

気に食わないので自分の中では『アンダーワールド』と呼ぶことにする。私がいた世界のことを『上位原型世界』と呼んでいたから逆の低位の世界ってことで。

どの世界でも、全ての物質には『根源』と呼ばれるものが内包されている。

これは無生物にもあるが、生物の場合は一般的に『魂』と呼称されることを考えると想像しやすいと思う。

根源にはその物質のほぼ全ての情報　人間だと身体の形や内臓の場所、どんな知識や記憶を持っているか、どんな能力を持っているか、など　や性質が入っていて、持っている量でその物の存在のあり方が決まる。ある一定量から人格を持つ、言葉を理解する、大きい形を維持できる、等と段階によってわかれるのだ。人型の生物は高度な知能を持つために維持に必要な最低根源総量が大きく、知能があまりなかったり身体が小さかったりすると必要量も減り、人格を持つかいなには大きな壁がある。

しかしそこらにある石ころや、パソコンのような道具にも根源はある。世界の神話などで長年を経た道具や多くの血を吸った刀、先祖代々大事にされ続けた宝物ほうぶつなどが意思を持つようになる、つまり『付喪神化』するというのは、根源が大きな物に触れ続け思いを受け取り続けたことにより、その物質に人格を持つ量まで根源が溜まった　根源の増える量には限界があり、よほどの業物じゃないと人格持つレベルには届かないが　ということだ。

この根源という考え方を使うと根源に必要な最低量の大きい方からの順番は、人間＞人格を持った人間以外の生物＞人格をもった無生物＞＞＞＞一般的な動物＞＞無生物、という風になり、生物無生物という区分はあまり役に立たない。どちらかというとなんか人格を持

つたか否かで区分しているのだ。人格を持った無生物を生物と定義するならば区分として意義があるかもしれないが。

さて、上位原型世界は神々を束ねる主神の直轄世界であるため、人間だけでなく全ての物の根源量が圧倒的に多い。存在に必要な根源量も多いのでそのことを同じ世界にいながら感じることはないのだが。ので人間の創作物や想像された歴史などが文章等の媒体にある程度の量記されると、世界群の下位の方では発生・存在するに十分な根源量を超えて、何らかのきつかけ。人間の想いであったり、たまに生じる人間には知覚できない世界の歪。よって下位の方に降りてきてその創造物を『原型』として、模範として、モデルとして下位世界を形成するのだ。つまり、今私がいる世界は元いた世界でだれかが妄想して黒歴史ノートにでもまとめた物語の世界を『原型』とした世界だということ。

。つてことは元いた世界で読んだ数々の小説や漫画そしてゲームなどの世界も下位世界群のどこかに存在するのか：怖い世界には絶対行きたくないなあ、というのがこの話を聞いた最初の感想だった。もちろん半信半疑だ。相手は嘘をついているようにも見えないが、若干頭がかわいそうで妄想癖がある可能性は少なくないだろう言動的に口調的に。

それで気になるこの世界だが、基本的な物理法則は同じ。

しかし今いる惑星は地球の10分の1くらいのサイズのように、最も異なるのは『魔粒子』と呼ばれるものが存在していることだろう。『魔粒子』は原子よりも小さく、大気中にも海中にも岩盤にも人体の中にさえも存在しており、『恩寵技能 グレイススキル』の一

部や『魔術』を行使することによって、集まってそれ自体が固体や液体、炎等になったりすると、物質の原子配列を変えて形を變形させたり性質を変えさらには違う物質に変換する仲立ちとなることができる。

ちなみに魔粒子は使用してもなくなることはない最小単位であり、固体になっても魔術を行使しなくなると元の魔粒子に戻り拡散し、原子配列を変えた後にも拡散していくので原子配列が安定でない形になっていると反発して粉々になってしまう。

「　　っていうわけでお前二度と元の世界には戻れないから」  
この世界を考えた奴は魔術っていう未知の力、上の世界にいた頃はファンタジーの中でしたか？でてこなかった物を何とか科学的に扱えるようにしようとしてこういう設定を考えたのかなあ、と益体のないことを考えていたので今までで一番の懸念事項であったことを聞き逃しそうになった。

「ちよ、ちよつと待って！　いま最後なんて言ったの！？」  
慌てて聞き返す

「またぼーつとしてたのか？　さすがは低俗な人間風情め、男だし期待してなかったけど想像以上に愚鈍なようだな。それに比べて俺様は高貴で」

確かに話に集中してなかったのはこちらの不注意だと思う。が、いきなり召喚しといてグダグダと愚痴や自己賛美を入れて聞きにくい説明を自分で何とか咀嚼していたのだ、少しくらい大目に見てくれないんじゃないだろうか。この天使（仮）には無理な相談かもしれないが。というか男だからとか関係ないだろ。それに人間風情って……こいつの説明だとこいつも元は私と同じ世界出身らしいし、黒髪黒眼なんだから日本人だと思うのだが……天使に抜擢されたか

ら選民思想でも芽生えたか？ この世界に来たのは30年前くらいらしいけどその程度の期間で変わるもんだろうか？ ちなみになぜこいつが選ばれたのか知らないけど、正真正銘の下位神候補の天使見習いらしいです。肉体は人間だけど世界を改変できるほどの『恩寵技能』を持っているらしい。その力に魅せられて吞まれたというところだろうか。

あとなんで名前が「セイントクリス」なんだよ……あんだ日本人だる全然似合っていないから。

「つまりよお……」

あ、やっと先ほどした話をもう一度してくれるみたいだ。大事な部分を抜き出すと、

「上位世界でそこらへんにある文房具でも下位世界群のさらに下位の方ならその文房具の根源に刻まれている歴史を元に小さな世界が発生することもあるからさあ、創作によってできる世界は下位世界群ではかなり上の方なわけよ」。

世界の段差が比較的高くないので召喚という形で上位世界の物や者を呼べるわけ。人を呼ぶのはかなり大変なんだけどな、俺様が10年くらいかけて準備したってわけよ。何で人間を呼ぼうと思ったかだって？ この世界だと神がいらないから俺様が実質的に最高神みたいなもんでよお、正直このクリスワールドの愚民どもと戯れるのも飽きちゃったんだわ。金だって神権限使えばいくらでも出せるし女だって洗脳していくらでも手に入れられるわけさ。つまりこの世界の者も物も全部俺様にとっては玩具で紛い物なんだ、だったら『本物』の女を手に入れようとするのは普通な流れだろう？ で、召喚した女を墮とすためにいろいろと小細工を用意してたつてのにそれがおじちゃんになったわけだが。だからお前はいらなんだわ。元の世界には戻せないしなあ。できてもやらねえけど。

さっきの理屈なら戻れないのもわかるよな？ 俺様みたく賢くない

と理解できないかなあ？ 世界間の段差はとび降りるのはできても上るのは無理ってこと。降りるときに準備が大変なもの、あまりに高いところから落ちてきたときに死なないように衝撃を逃すクッションを用意するのに手間取るようなもん、ってわけだ。その物質や生物が粉々のぐちゃぐちゃになってもいいなら召喚自体はそこまで準備しなくてもいいんだよ。まあ召喚のきつかけとなる世界の歪みは滅多に起こらないけどな。全くこんだけ喋らされるとはなあ、すぐに処分す

途中からはほとんど聞いていなかった。帰れない？ この知り合いもない、魔粒子なんて得体のしれないものがある世界で死ぬまで生きるというのか？ 自分は天才ではなかったけど堅実に勉強し続けて良い成績をとってアメリカの大学への3年からの編入条件とT o e f l を何とかクリアしたんだぞ？ 祖父が死んでからは裕福とはとても言えない状況だったので高校からバイトして大学そとしてのちの大学院の学費や生活費のために準備してきて、これから勝負というところだったんだぞ？ その準備には家族 両親と妹 が一体となって助けてくれたんだぞ？ 自分の夢を叶えるためのルートを、学校や昔の恩師、留学経験のある先輩や大先輩と一緒に親身になって貴重な時間を割いてまで考えてくれたんだぞ？ 理想であるところある研究の成就を目指し、未熟ながらも手伝ってもらいながらヴィジョンを立ててその達成のために多くの物を対価にしてきたんだぞ？ 自分の想いと労力・努力だけでなく、周りの人たちも巻き込んで邁進してきたんだぞ？

……なのに、道を、閉ざした、理由、が……女がほしいから？ それも関係ない上位世界から拉致も同然に？

信じられない

許せない

コイツダケハ

『ガガ、ガ、ギギ、ガガガ、ガ、ギ』

ふと気付く、周囲の空間がゆがんでいることに。

「なんだあ？ お前、上位世界の人間だから根源量が超でけえからあまり感情を爆発させると世界が軋むんだよ、まあ俺様ほどの多さじゃないけどなあ。つーかなによ？ ただの人間の分際で俺様に対して殺気をぶつけてきてるわけ？ 俺様の素晴らしさに嫉妬するのは仕方ないって許すだけとさあ、敵意とかうざったくてもしょうがないわけよ。まっ、どうせ処分するんだし今やっちやうかあ」

処分、だと？

勝手に拉致って他人の人生を無茶苦茶にしておいて、お目当ての物じゃなかったらガラクタのように捨てるのか？

やはり……コイツはユルセナイ

人生で抱いたことのない殺気をぶつける。ああ、私は、初めて人を殺そうと、殺してもいい、いや殺したいと思っている！

「あああああああ！！！」

ジャケットの横ポケットに入っていた万年筆を握りしめ天使（仮）に飛びかかる。

跳躍により一瞬のうちに距離をつめ天使（仮）の喉が目に入り万年筆を握った右腕で掻っ切るうとする！

ドゴツ！

確かに喉に向けて万年筆が突き出され天使（仮）は避けられない速さだったのにも関わらず、何故か自分が後ろ向きに吹っ飛んで倒れていた。みぞおちに何等かの攻撃を加えられたようで猛烈に痛む。

「ぐっ……あ、な、何を？」

天使は嗤う嗤う嗤う

「ひゃっひゃっひゃっ」

何をしたかって？ お前説明聞いてたの？ 頭大丈夫？ 俺様あ天使だぞ？ この世界の最高神みたいなもんだぞお？ 俺様は強力な恩寵技能をいくつか持ってんだっつうの。さっきのは「物体時間停止」して腹あ蹴り飛ばしたってわけだ。」

天使は嗤いながら、説明しながら私を蹴り飛ばす。髀るように。一瞬で殺せる力はあるけど甚振るのが楽しいから手加減しているといわんばかりのやり方。こいつは天使じゃない、悪魔だ。

「がはっ、ぐう、げほっ……や、めろ……」

「あひゃひゃひゃひゃ。この世界の人間も思う存分殴ってきたけど、

やっぱり元同族、元々は同じ立場だった上位世界の人間を殴るつてのはまた違った爽快感があるなあ。ひひっ、下位世界は元から玩具としてしかみれないからすぐ飽きちゃうんだよなあ」

猶も殴り蹴飛ばされる大事な内蔵器官はおそらく壊れていない  
まだ壊されていないだけ　　が痣だらけで左腕は動かなくなっているし意識も朦朧としてきている。

「んー。でもやっぱり男はダメだなあ。身体固いし。女の方が身体が壊れ行くことへの恐怖が強いからもっと逃げ惑うつてのによお。女は身体の美しさを頼りにしてるやつが多いからかねえ。次は女が召喚されますよーにと。ってことでもういいや。じゃね」

天使（仮）の右腕に巨大なハンマーが現出する。どう考えても天使（仮）の細腕じゃ持てないだろうハンマーは軽々と持ち上げられこちらに振り下ろされる。必殺だ。あんなもの耐えられるわけがない。

ここで終わるのか？

成す気はあったのに何も成してないぞ？

イヤダ

「あああああああああ！ー！やめろおおおおおおお！ー！ー！」

しかし私は所詮凡人。

できたのはせめて黙って殺されないということのみ。

私は召喚された勇者じゃないのだ。

こんなときにご都合主義に新たな力が芽生えたりしない。

世界によって優遇されるなんてことはない。

そして私の人生、凡人が努力して凡人なりの夢を叶えるための道は、途中で悪魔のような天使に終わらされた。

1話 召喚！ ……いや、拉致の間違いじゃ？（後書き）

幾人かお気に入り登録してくれたようでうれしい限りです。

2話 おはようございます、ご主人様。 & 恩寵技能について（前書き）

7500文字ほど。私にしては長めです。説明回

## 2話 おはようございます、ご主人様。 & 恩寵技能について

ハンマーが落ちてきて殺された私、田中黒乃。

暗いようで白い、何色なのかわからない世界。見えているのか見えていないのかもわからない。

ここは夢の世界？　これが天国なのだろうか？  
次は本物の、優しい天使に会えるといいなあ。

「ご主人、様？　起き、て」

だれだろうか、心地よい眠りを妨げるのは。  
さつきから身体を揺する陶器の感触

ってこれは召喚時に持っていた人形の手の感触……？

「目を開け、て」

私好きなハスキーボイスが響く。  
そして目を開ける。

「意識、戻ったです、ね？」

持ってきてきた人形が動いて言葉を喋っているという衝撃の場面を見た。

えっと……どういう状況だこれは？  
とりあえず身体は左腕が動かなくて身体中が痣だらけなこと以外に  
負傷はない……かな？

「がはっ、ごほっごほっ……」  
そしてなぜか私を殺そうとした天使（仮）が倒れながら肺からヒュー  
ーヒューって音を立てて苦しんでるのだが。

「ご主人様、叫んだ時、に、動けることに気づいた、です。そして  
咄嗟に、守った、です。無事、でよかった、です……」

そういつて舌足らずに話す人形の右手には仕込んだ隠しナイフが禍  
々しい赤色に染まっていた。

つか背中から刺したんですか……ナイフでうまく致命傷与えるって  
すごいな。予想以上に人形には力があるのか？

人形はまだ人格をもったばかりだからなのかわからないが、感情を  
うまく表現できないように表情があまり動かない。いや、陶器の肌  
なんだから本来は全く動かないはずか。

しかしこの人形、表情があまり動かないとはいえ、心からの笑みを  
湛えているのはわかる。いいのか人形よ、私を救ってくれたとはい  
え人間 天使（仮）も肉体は人間 を殺したのだぞ？

「ご主人様、以外、価値ない、です。それ、にまだ、死んでない、  
です」

……さいで。まあそこまで思ってくれてるといのは嬉しいけども  
ん？ 最後に気になることを言ってたような。

「とどめ、さします、ね？」

そういつてちよこちよここと歩いていく身長40cmの人形。

ここで私は考える。殺されそうになったときも結局何もしないで黙って死ぬのは嫌だと、何とか叫びをあげたけど、実際そんなのは何もしてないのと同じだ。私に特別な力が目覚めたりしなかった代わりに運よく人形の人格が形成されて助けてくれたわけだけだ。助けてくれた人形にとどめまで、手を汚させていいのか？

あまりの情けなさに人形の主人としての矜持を取り戻そう　すでに粉々に修復不可能な気がするけど　という気持ちが生えた。

「いいよ、私が、とどめはさす、よ」

と人形を抱きかかえる。こんなこと言いながら、初めての殺人に身体が奥底から震える。さつきは本気で殺そうとかがついていたくせに情けないことだ。

「はあ……はあ、ごぶっ」

「いま、楽にしてやる……」

持っている万年筆をペーパーカッターに持ち替え喉に当てる。

このとき根源についても知ったばかりである私は、天使（仮）が苦しみながら何をしているのかに気づかなかったのだ。震える手に力をいれて喉を掻き切る瞬間にあいつは叫んだ。

「呪い　カース　！！」

気付いた時には遅かった掻き切った天使（仮）は絶命したが、その時に何かを吸収した高揚感・全能感と共に根源に直接ナイフを当てられたような感触が駆け巡る。

「ご主人！？」

先ほどよりはるかに人間らしい表情をした人形が叫ぶのが見え、意識がブラックアウトする。

次はその人間らしさで笑顔が見たいなあ。

「知らない天」

危ないあと一文字を勢いでいいそうになった。

実際にあるのは天井じゃなくて天だよ。それもさつき見たばかりで知らないとは言えない天。

さて

愛すべき人形がその小さい足で膝枕をしてくれていたようで顔の隣に佇んでいる。陶器なので痛かったりするんだけど嬉しいものは嬉しいのです。さつきは天使（仮）もいてそれどころじゃなかったけど、人形が動いてくれるというのはある意味理想の一つだったのですから。

身体の調子は変わらず、かな。全身痣だらけで左腕は感触がなくプランとしていて肩口に鈍痛。骨折だろうか？ 医療方面にはまったく明るくないからわかん。ひとまず人形の頭を優しく撫でた後に立ち上がる

が何故か眩暈がした

って目線がかなり下がってるんですけど！ 比較対象がはるかに小さい身長の人形しかないから正確な身長はわかんないが……もしかして165cmくらい？ 高い身長が平凡な私の数少ない特徴だったってのに。

天使に最後にされたのは身長を低くする呪い……？ 命の瀬戸際に振り絞った結果としては微妙すぎるんじゃないかなあ。私にとっては本格的な呪いじゃなくて助かったけどさ。

「げほっ、おえ……」

唐突に天使（仮）の喉を刈った感触と光景がフラッシュバックしてえずいてしまった。

スッとハンカチをだす人形。こういう細かい気遣いができる自立人形を妄想したことがあったけど、実際にやられると気おくれしてしまう。私、坊ちゃんとかじゃないのにな。

無言で差し出す人形はかわいいからいいけども。

精神状態は殺したのがトラウマになってそうだというくらいかな。気づいてないだけで鏡なんかで自分の顔を見たら憔悴しきってたりするのもかもしれないけど。それにしても、とどめだけ刺すってのは予想以上に もしかした一撃で殺すよりも きつかったのかも。とどめを刺すってのは完全に『殺す』っていう概念のみの行動だし。意地を張って最後は自分がやるだなんて言わなきゃよかったかな。

ちなみに元の世界への郷愁の念は全く消えていないが悲壮な気持ち

はだいぶましになっている。天使（仮）を殺したことで発散したんだろうか？ だとしたら嫌な解決の仕方だな。ただ戻れないのにつまでもいじいじしていられない。

夢もこつちで叶えればいいじゃないか、と前向きに考えることにする。そうじゃないと心を維持できそうにないよ。

魂、この世界でいうと根源か。さっきの天使（仮）の死に際にされたことの違和感がまだ残っているのと、高揚感を感じたときに何かを吸収したからか、自分の存在が漠然とだが増えたように感じる。

ん？ 自分の根源が見えるようになってる。根源はイメージでは球体。大部分は空きで、一部に四角いボックスとパズルのように少し複雑な立体図形がある感じ。

どうやら四角いボックスは私の身体のあらゆる情報がつまっているみたいだ。肉体の筋力やら素早さみたいなのが頭に浮かんでくる。

MMORPGに詳しくればSTRやINTなんかで表せるんだろうけどその手のゲームは時間かかりすぎるために敬遠してた俺には無理だ。

立体図形は、どうやら個々が恩寵技能 グレイススキル のようだ。恩寵技能については天使が語っていた中の一つにあった、この世界固有の物であり仕組みはブラックボックスとなっている。

なぜかって？ それはこの世界を妄想したやつがそうしたからだ。魔粒子の方や魔術の設定を頑張つて凝つたら疲れちゃって恩寵技能の方は細かく考えられなかったのだろうと私は予想している。

設定上は『神から恩寵として全種族に与えられた神の力による技能』

らしい。実際には、神の力によるという言葉通りに意味不明な恩寵技能と、魔粒子によってこの世界の科学的法則に則って発動する恩寵技能の二種類があるって言うていた、はず。天使（仮）の説明はわかりにくかったしそれどころではなかったので記憶に穴があいてるかもしれない。

後者の恩寵技能は魔術で再現できる。なぜなら魔粒子を使っているという点で共通しているからだ。

まあ魔術で再現するにはやたら時間と労力がかかるし、効果もスキルによるものとはじゃ雲泥の差だそうなので再現しようとする人は少ないらしいので気にしなくていい。魔術の細かい仕組みは教えてもらえなかったが、いろいろな現象を起こせるがスキルの出力には歯が立たない器用貧乏というところという認識に私の中では落ちついたのだった。

ちなみにパッシヴ（自動発動）とアクティヴ（任意発動）での分類もできるがここでは割愛。

スキルを持つのとそうでないのでは大きく差が出るのは魔粒子を介さない現象についても同様。

【料理】というスキルをもつてなくても料理できるが、あると腕前にかなり補正がかかる。また、料理を上達していくと【料理】スキルを得ることがある。

ここで一つ気になったことが。根源総量がほぼ固定で持てるスキルの体積が決まっているということとはだ、この世界の人間は生まれたときから何を熟達するのか、どんなスキルをとるのかの取捨選択を迫られるわけだ。家事系統のスキルを大量に持つと、あとになって戦闘系のスキルを得ようとしても不可能なのだから。

上位世界でも人生の時間の関係上、いくつもの分野を極めるのは難

しかつたが、下位世界には能力がスキルとして保存されるために条件がより厳しいと思う。

他に恩寵技能について語るべきなのは、ランクがあるということかな。低いほうから低階、中階、高階、天階という順番になっている。天階は普通の人間じゃたどり着けないし総量を遥かに超えるので考えなくていい。

さて、私の中にある恩寵技能を確認しようか。

すごく大きいのが二つと、すごく小さいのが4つほどある。ちなみに大きいのはお互いうまくはまっている。おそらく技能同士の相性がいいのだろう。

まず大きいうちの二つ目が【グレイスエンゲレイヴァー恩寵刻印】。

クラスは天階。少し上で天階のことは考えなくていいって言うておきながら歯の根も乾かぬくらい早くできちゃったけど、自分、不本意ながらこのアンダーワールドでは普通の人間じゃないですし。

この世界は上位世界の創作物が具現化したような世界、もちろん上位世界の人間である自分は創作物よりはるかに根源が大きいわけだ……正直この世界にあるの根源の総和と比べても遥かに多いのです。つまり天階クラスを二つ持ちながらも全くもって容量を圧迫しておりません。だから恩寵技能同士がうまくはまって容量を少しでもあけるとするのは私に限っては全くの無意味となってしまうのです。

更に補足。なぜ私が天階クラスの恩寵技能を持っているのかということだが、この世界では殺した相手の根源の一部を吸収するこの世

界のシステムにより天使（仮）から奪い取ったのだろう。基本的には根源の空き部分とともに、殺された者の身体能力や技術のステータスの一部を吸収することになり、根源容量については他人の根源の空き部分は拒否反応により自分の根源に取り込まれないためにほとんど増えないが、ステータスのかけらをつけとるにより殺した者の筋力や技術、生命力などが上昇する。このシステムは弱肉強食を正当化するものと認識したので無意識のうちに忘れそうだった。

いくら相手を殺したり鍛錬で根源を磨いても、根源の総量は微々たる量しか上がらず総量は生まれた時に大方決定されると認識されるために、どんな種族にも物体にも才能の限界が存在する。総量を少しでもあげるほかの方法としては、大きな根源を持つ者の側において影響され且つ長年を経ること、くらい。

また、殺した時に運がよければ相手の恩寵技能を壊さずにそのまま吸収して得ることができる。私の場合は天使（仮）にとどめを刺したときに、天階スキルを二つ、その他のスキルを少し吸収できたようだ。

脱線してしまった。【恩寵刻印】の効果は『根源の空きに恩寵技能を刻むことができる』、だ。さすが天階クラス、本来相手を殺した者しか得られないのにこのスキルを使えばたくさん人間に技能を与えることができるというとんでもスキル。うまく使えばバランスブレイカーになりそうな予感かしない。根源は物にも存在するため、武器の根源に攻撃に有利な恩寵を刻むこともできる。

制約としては刻む恩寵を私の根源で複製しなくてはならないので時間的にある程度インターバルがあることと、一度刻印されると消え

ないので刻印されるほうの総量に気を付けなければならぬことくらいかな。特に武器や道具に刻むときは良い素材でできた業物じゃないと総量をすぐ超えてはじけ飛ぶかもしれないから気を付けなければ。

そして二つ目の大きい立体、つまりは天階恩寵技能、【根源管理】ルトラスター。

効果は『根源の情報を見ることと、根源から任意の場所を吸収することができる』、で、根源関連の最上位スキルのような。起きてから自分の根源が急に見えるようになったのは、この世界になれたからじゃなくて天使（仮）からこの技能を奪い取ったからだっただのか。後半の効果はかなり強いが、相手を生かしたまま吸収するには制限がある。『相手を生かしたまま吸収する場合、ステータスの欠片や恩寵技能が根源に完全に一体化する24時間以内の状態でしか吸収できない』、だ。たとえば人形が人や魔獣を殺した時にステータスの欠片や恩寵技能を奪ったとする。その直後から24時間以内は奪ったスキル達は人形の根源にすぐには融合しない。球体の根源に立体図形の恩寵技能と欠片であるステータスがくっついて少しずつ沈んでいくイメージ。なのでその馴染み切っていない状態なら相手を生かしたまま、つまりは根源量を減らさずに 総量が減ると人格がなくなるので 有用な恩寵技能を任意で吸収できる。

ちなみに相手が死んでもいい時なら直接殺すのが一番早いのだ。その時も好きなスキルを回収できるのはこの恩寵技能の大きなメリットといえよう。

根源の情報を見れるということとで吸収した中であつた天使（仮）の記憶と知識の欠片を見てみたのだけど、有用な情報は読み取れなかった。欠片は欠片か……。愉快的オブジェの作り方なんて知りたく

もないわ！ と天使（仮）に叩き返したい。

以上の二つが天階クラスの恩寵。仮にも天使だけあつてすごいスキルを持つていたんだな。もしかしたら他に『天地創造』みたいなのも持つてたかもしれない、スキルはブラックボックスということだったから物理法則越えることもあるのだろうから。

ちなみに天使（仮）にかけられた呪いはプロテクトがかかっているのか靄状のものに覆われていて見ることができない。

立体の輪郭から3つあるというのわかるのだが……

呪いは人の命や大きな意思によって相手の根源に有害なスキルを刻むものなのかな。3つも呪いをかけられたのは天使が根源に精通していたからかもしれないが、ほかの人間でも死の間際には気を付ける必要があるそうだ。

いまだに私の命があるのは、呪いの強さが足りなかったのか、かけられる呪いは限られているのか、それとも生きて苦しめようとしたのか、呪いについてはわかってないことが多すぎる。が、とりあえず保留にしよう。

さて、その他の恩寵技能は、【人形師】【共通語熟達】【極東語精通】【速読】の4つだ。前二つが中階で後ろ二つが低階クラス。【人形師】【速読】がアクティブスキルで、残りがパッシブスキル。スキルの内容からこの4つは上位世界から落ちてきた時に得意だったものがこの世界向けにカスタマイズされたもの、というのが推測できる。

【人形師】は人形を繰ったり上手く改造できる恩寵技能。上位スキルにならないと一からうまく作るのは無理。作れないわけじゃない、作ったときの出来栄がスキルあるなしで変わるだけだ。

【共通語熟達】。これはこの世界の共通語に熟達しているという意味でいいんだろう。つまりはこの世界の共通語は日本語……？たしかに天使（仮）も日本語喋ってたしなあ。日本語が共通で、国や大陸や人名は英語圏に近いもの、か。これってまさに日本人が考えたファンタジー世界ですな。都合がいいので文句はありませんが。

【極東語精通】。こっちのほうで日本語っぽい名前なのに上のスキルよりランクが低いということは、英語に精通しているということか？ 自分の学んだ外国語は英語と中国語のみで、第二外国語である中国語はほとんど喋れないし、留学のために英語をかなり勉強したことから考えて極東語は英語、というのしか考えられないか。なんか普通と逆になった感じだなあ。

【速読】。これは上位世界でも便利な技能だった。自分なりにかなり極めたつもりだったのだが低階クラスということは、何回も使っていればもっと上位スキルになって更に速くなるんだろうか。

以上6つ。この数が多いのか少ないのかはわからない、ひとまず人のいるところに行つて一般的にどの程度の根源をもっているのか調査しなくてはならないだろう。私の量は桁が違つし、人形もかなりのものと見受けられる。上位での創作文がこの世界なのだから人形もこの世界の量を超えているだろう。

「主人、様？ ご主人、様」  
長考していたので気づかなかつたが人形が私を呼んでいたようだ。

「どうしたんだ？」  
長い間スルーしていたのはさすがにまずかつたかな、と反省しながら尋ねる。

「北側、の森から、見ている、います。」  
北側の森からこちらを見ている何かがいるらしい。

そういえばこの世界では魔獣や亜人と呼ばれる人族に対して敵対する生物がいたのだ。普通野生生物であっても熊とか狼であつたらシャレにならない、すぐにこの場から離脱することにしよう。

といつてもこの平原がシークリッド大陸にあるってこと以外何もわからないのだけどね……  
もっと天使（仮）をおだてて地理も聞き出さなくてはだめだったか

後悔は遅すぎるほど後にやってくるのだ

### 3話 エウルーペ王国へ

エウルーペ王国。

ユーラシア大陸をそのまま縮小したような形のシークリッド大陸の西端 地球でいうとヨーロッパ辺り を支配する王政国家で、建国は400年前ほどだが二つの王朝が王座を交代で担任しているために、東部と西部で対立をしている。東部はハーヴェイ王朝の影響が強く、西部はアークライト王朝の支配下にある。

現在の王はハーヴェイ王朝のオリヴァー・ハーヴェイであり珍しいものに目がなく、特殊なスキルや魔術を使える人間を集めたり、魔獣の解剖なんかにも精を出している変人王として名を馳せている。治世や権力争いにはほとんど興味ないそうだ。

産業としては土地は肥沃とは口が裂けても言えない状態なので農業もやっているが他国からの輸入にある程度頼っている。漁業は海に接しているところが多いので主要産業となっている。芸術品や工芸品がさかんで武器でも道具でもユニークなものをそこかしこで見ることができる。

また、侵略で土地を東に何倍にも広げていった歴史から軍事力が増大で、周辺国 北も西も南も海なので東側だけだが との交渉はその軍事力での圧力をかける外交がおおい。

気候としては東の海沿岸にある暖流のおかげで冬もそこまで寒くない ところへんは緯度のわりには寒くないヨーロッパと同様みただいだ。

宗教はこの国だけが信仰している唯一神を崇めている。しかしそれ

ほど熱心な人はおらず、ほとんどの宗教的儀式は形骸化している。

世界の中心である。シークリッド大陸の最西端であることからそれを認めず『極西』と揶揄する国は多いが、最近新たに西の海に先の新大陸が発見されたために、国内ではこのエウルペ王国が世界の中心であるという風潮がさらに高まった。

らしい。

なぜ「らしい」なんて言ったかというところ、今現在私はエウルペ王国の東端の街ウクライン 東には隣国ラーシアン帝国南には小さな海 の酒場で恩人達に多少エウルペ王国びいきな説明を聞いていたからです。

「主人、主人、様。」

「なにっ!？」

人形が何かを話してくるが今は森の中を並走して追ってくる『何か』の気配から全力で逃げているのでかまっていられない

「すでに、包囲され、ました」

もう走る意味がなかったようだ、人形の言葉で周りの状況に気づく。

『ぐるる……』

こちらが観念したのを感じ取ったのか森から現れる狼のような動物達。距離が離れていると根源を読み取って種族名などの情報を見ることはできないようだ。

「排除、します」

先手必勝ということで人形が狼のような動物の一体に飛びかかる。

が、人形にしてはかなりのスピードで走って攻撃したとはいっても四足歩行の野生動物の瞬発力には敵わないようで簡単に避けられ、他の個体の爪で攻撃される。

人形はなんとかそれを身をひねってかわし続けるが、私があるところとに戦闘中に動かなかったために背後から飛びかかってきた狼に反応できず、その攻撃を私から守るために胴体に爪を受け吹き飛ばされる。胴体が真っ二つなんてことにはなっていないが、軽さのせいで私から離れたところに飛んで行った。

そしてそんな状況にもかかわらず、人形を目で追っただけで動けず  
いた私が狼の群れに仕留められるのは時間の問題だったその時、

『シユンツ、シユンツ』

遠くから飛来する音が聞こえ私に今にも飛びかかるうとしていた狼  
二頭の頭に刺さり、狼は断末魔をあげて倒れる。刺さったのは矢の  
ようだ。

「大丈夫かい、嬢ちゃん達」

状況を把握するのに精いっぱいな私に声をかけるのは、大剣をもっ  
て立つ190cmを超えるだろう大柄の男。

その周りにはクロスボウをもった妙齢の女性と短剣を携えた細見の  
男性、槍をもった恰幅のいい男。大柄の男が私の周りにいてほかの  
三人は包囲していた狼たちを順番にしとめていく。

ものの数十秒で半数を仕留めたときにととう残りの狼たちが逃げ  
ようとし、それを三人が追走していった。追撃するようだ。

「なんだってこんなところに一人でいるんでえ？」

残った大柄な男は、私が怖い経験をしたことにより動けないのだと  
思ったのか、優しげに気づかうような声色で話しかけてくる。力強  
く輝く青色の双眸には心配げな色が混じっていた。

「お嬢ちゃんって……私は男ですよ？あと遅れてしまいました、

田中黒乃と申します。このたびは助けていただきありがとうございます  
います」

まずは誤解をとき、そして感謝を。

それにしてもなぜ少女なのだと勘違いしたのだろう？ 女顔と言われることはあったが、その背格好から勘違いされたことは人生で一度もなかったというのに。服も黒いジャケットと長いパンツなのだが。

「おう、気にすんな。しかし男だったのか、背も低いし女の子だと思っちまったよ」

そうだった！ 天使（仮）の呪いで身長が160cmくらいまで縮んでるんだったよ！ ……女性に間違えられるつてのは想定範囲外だったのでつい忘れてたけど、25cmも身長が下がったのだった。

男の娘っていうのに自分になるとは思っても見なかったけど、身長だけ高くても顔のせいで男らしさを磨くことが全然できなかったのだし、むしろこの縮んだ身長の状態のほうがバランス的におかしくないのかもしれない……それもまた男としては屈辱的なことだけだ。

「それに、ツアナッククロノって珍しい名前だな」

「苗字が田中です。極東の方から来たので。こちらでは黒乃・田中ですね」

……そういえば人名は英語圏風味だったんだな。ふだん日本語話するのに「タナカ」ってうまく発音できないのはどうなってんだらう？ 上位世界で創造したやつ、『設定』だから仕方ないのだけどさ。

「ほー東の帝国より更に先か？ それは遠いところから来たなあ。俺の名前はザルモン。お前さんは苗字があるということは貴族かな

にかかい？」

しまった、この文明が中世ヨーロッパなこのアンダーワールドは貴族制度があつて苗字は貴族くらいしかつけないのか。

とっさに言つた極東の文化ということで押し通すしかないかな、さつきの口調だと帝国つてのより東はあまり知られていないみたいだから。

「いやあ、逃げに徹したハイウルフはなかなか追いつけませんね」と、追走していた3人が順々にもどつてきた。女性だけ一頭の狼を手にかけている。大柄な男に話しかけてきたのは槍をもつていた男性で、頬にかかる茶髪に青い瞳をしている。

「槍を置いてサブウエポンの投げナイフを使わないからつしよ」と言つのは短剣を使つていた赤髪茶眼の青年の談。

「私の名前はエメリーナ。そつちの少女の名前を教えてくださいませんか？」

弓矢をもち濃緑の髪と驚色の瞳をした24歳くらいに見える女性が私をその瞳に捉えながら大柄な男ザルモンに声をかける。

「こつちの坊主はクロノ・ツアナクつていう極東の方からはるばるやってきたそうだ。ちなみにこの見た目だが男だぜ」

その言葉に緑の女性達が驚きに目を見開くのを尻目に機械的に会釈を返す。

私の頭の中で思考されていたのは、女子に間違えられたことによる

男の尊厳についてではなく濃緑の髪についてだった。

これがこの世界の普通なのか……？ たしかにどんな設定もありだと思っけど、リアルに緑色の髪を見ると衝撃がでかい。何が衝撃かって緑色が自然に顔の一部として溶け込んでいることだ。文化祭でお遊びで染めたやつは見たことあるけど、脱色してきれいに緑に染めたとしても違和感しかなかったのに。

短剣使いの赤髪茶眼の青年は名をテッド、背が高い茶髪青眼の男性はカルロスというそうだ。

「ご主人、様。無事？ ごめん、なさい」

ハスキーボイスで舌足らずに話しかけてくるのは吹き飛ばされていた人形。身体のパーツは無事だったようだが服が少しきれている。あとで縫い直さないと。

「動いて喋る人形！？ 君は珍しいものを持つてるすね！ その着ている服も珍しいものだし」

人形をみて驚く人族4人組。話しかけてきたのはテッドだ。

アイティファクト

「神遺物……？」とつぶやくのはカルロスさん。なんですか神器って。伝説的な物と勘違いされたらめんどくさいことになりそうで嫌なのですが。人前では人形には動かないでいてもらおう。

「えっと、極東です！ この服も人形も極東の特別なものなんです。そしてこちらには見聞を広めるため旅行に来ていたのですが、お

供の馬車が襲われてしまい迷子になってしまっただけで彷徨っていたので  
す。  
いきなり召喚されたものとしてはどのように状況をごまかすかは必  
ず直面する問題と違っていいだろう。

私はうまい言い訳は思いつかなかったのとつさに極東を主張して  
押し通した。納得したというような顔を大柄な男ザルモンがしてい  
るのでありえないことでもなかったようだ。ひとまず安心する。  
しかし後ろに控える丁寧な物腰のカルロスは読めない表情をしてい  
るのでザルモンが単純なのか、それともザルモンたちのような職業  
の人間はあまり細かく聞き出そうとしないのか、のどちらかなのか  
もしれない。荒事をやる仕事の人達は暴力を使う分暴力の怖さを知  
っているから下手に首を突っ込まないってのが基本のような気がす  
るし。

そしてこの後、すぐ近くにエウルペ王国東端の街ウクラインがあ  
ると知り、一緒につれていってもらって酒場で話をしてもらったの  
だった。

ウクラインでは大きなほうだという酒場では、4人組のうちカルロスを除いた 冒険者ギルドに討伐成功の報告をしにいったらしいメンバーで酒盛りをしている。

このうち最も多くこの国のことについて話してくれたのはお調子者の気があるテッド。テッドはまだ18歳らしい。年下なのに自分よりも風格があつて エメリーナによると、私にも威厳ではないが何か大きなものがあるという雰囲気を感じるらしい。おそらく圧倒的な根源量を感じているのだろう 生まれた世界の環境が違い過ぎたとはいえ、天使にも狼にも成すすべなくやられた自分が恥ずかしくなる。

ちなみに人形は動いたら騒がれるので机の上でじっとしてます。上位世界にいた頃人形を改造しまくってたおかげで【人形師】を得たわけですが、そのスキルを発動させて人形の損傷部分を直すとしたら完全に腕が落ちてました……。【人形師】が発動しません。

すぐさまほかの恩寵技能をチェックしましたが、【共通語熟達】は言葉が通じているために発動している模様、【速読】は発動できず。たまに会話に混じる和製英語みたいな英語 おそらく極東語の一部 も通じているために【極東語精通】は効いていると仮定。そうすると、パッシブスキルである言語関連の中階と低階は発動しているが、アクティブスキルの二つは発動していないことから、アクティブスキルが使えないのが呪いの効果か？ いやしかし、天階のアクティブスキルである【根源管理】と【恩寵刻印】は使えたしなあ。天階スキルは除外なのか？

ひとまずの結論としては、神階以外のアクティブスキルが使えないということにした。

恩寵技能は使うことでしか熟練度があがったりクラスアップしない

から、【人形師】を上位互換スキルの【人形匠】にして質のいい人形を作成するつてのができないってことか……。

部屋にあったほかの人形たちも素晴らしい。最もいいのはダントツで一緒に来た人形だ。ちなみにほかの人形には名前がついている。一緒に落ちてきた人形は生まれた時から共にある唯一無二のものである。識別する必要を感じなかったから名前を付けなかったのだ。ものばかりだったからこの世界でも再現したかったというのに。

というか【人形匠】はそもそも高階クラスだろうからこの計画は初めから頓挫していたのだった。

これで呪いは二つまで判明したわけだ、身長の低下と恩寵技能制限。あと一つはどんなのだろうか。楽しみではないが怖いのでどうせなら早めに判明してほしいものだ。前の二つもそれなりに効果が大きいのである。あと一つは大したことないのかもしれない、そう願う。

酒場の前で別れた。酒代は今回はザルモンさんに奢ってもらった。気おくれしてあまり飲んでないけど。後、こちらでの身分証を手に入れるために冒険者ギルドのウクライン支部に行くことにする。

ザルモンさんたちは明日からまた依頼があつて隣国の方へ赴くらしく、しばしのお別れの挨拶をした。

酔っていたにもかかわらずその背中からは熟練の戦士というべき存在感があつた。

### 3話 エウルーペ王国へ（後書き）

中途半端なところで区切ってしまった

#### 4話 ギルド & 初の恩寵刻印行使

冒険者ギルドはウクラインの東の門のほうにあった。ウクラインはエウルーペ王国の東端であるので国境付近に広がる平原や森側に依頼の元となる案件が多いので出やすくするためらしい。

冒険者ギルドの建物は横幅200mに高さ20mという大きな出で立ちだった。横に長い洋館というイメージできるだろうか。その黒と赤色の外壁は魔物の住む館といったような風貌でギルドの建物にしてはあまりにも威儀を正した感じで堅苦しくいかめしい。

「ようこそ、冒険者ギルドへよくいらつしやいました」

正面の門は最初から開いており中に入る。腕に自信がある冒険者が常にいるからなのか、門番はいないようだ。

入って右側には二階にあがる巨大な階段が、その下には依頼が張ったボードが置いてあり、左側に奥には管をまく荒々しい冒険者が10人ほど、依頼の報酬の配分を行っている。正面には依頼を受ける受付があり営業スマイルで笑顔をくれる。その表情からは読み取れない。さすが営業のプロだ。が心の中では私を見て迷い込んだのかなあ、なんて思ってるかもしれない。

実際に左の奥にいた冒険者の中にはこちらに物珍しげだったり好色な視線をぶつけてくるやつがいる。もともと背が高かったことから電車などでも目立つたために視線にはなれていたはずだが、正直好色な視線は気持ち悪い。美人な女性はいつもこんな視線を浴びていたのか……男の性といえども自重しようぜ男たちよ。

露出狂の気があったり視姦されるのが好きってのは都市伝説なんじ

やないだろうか。慣れる気がしないぞこの視線。

「本日はどのようなご用件でいらっしやいますか」

いけないいけない。思考がそれていくのは悪い癖だ。とくに緊急性が必要な場面や戦闘中においては完全な短所になってしまう。

「私、極東から初めてこちらに来まして、冒険者ギルドに登録してみようと思ったのです。」

受付の女性は何か聞きたそうな色を瞳に一瞬湛えたが、すぐに営業スマイルに戻る。この女性、笑顔のときにえくぼがでるのがすごいかわいい。長いストレートの髪が青色で瞳も青い。この異世界の神秘を感じずにはいられない。

「ではギルドの成り立ちから簡単に説明していきたいと思います。

まずギルドが発祥したのは独立都市群の中心都市であるグリーンシアシティーです。設立の歴史は――  
まずはギルドの発祥が王国じゃないのに驚く。自尊心の高いこの国がほかのところが発祥したギルドを受け入れているとは。

受付嬢に説明されたことによると、独立都市群というのは王国の東南にある内海　グルーミ海と呼ばれ、まんま黒海の場所。座礁や亡霊船が多い魔の海として有名　を挟んだ東側にあり、北をラーシアン帝国、南をアイスル教国、東を壮大に広がる大砂漠に囲まれている緩衝地帯だそうだ。

ラーシアン帝国は現代のロシアの3分の1とカザフスタンの位置を

領とし、アイスル教国はトルコからサウジアラビア、イランに該当する位置を治める大国である。両方とも地球よりはかなりスケールダウンしているが。

よってその間にある独立都市軍はグルジア、アルメニア、トルクメニスタン、アフガニスタンなどの位置となる。このアンダーワールドにはカスピ海に該当する内海は存在しない。

で、ギルドとは直接王国とは接していないものの常に周りの国に威圧されていたグルージアシティーが生き残りのために2000年ほど前に設立した組織らしい。周りの国の中で軍を動かすににくい問題

政府と癒着している犯罪組織の摘発や、国境付近の魔獣の討伐など を解決する代わりにさまざまな場所に支部を置き、少しずつ功績の積み重ねとイメーজ戦略で腕に自信があるが群れるのが嫌いなものや、大国の政府というものが信じられない正義漢、ただただ自由に戦いたいものなど優秀な人材をそろえて、国を跨った問題処理人として活動させる傍ら様々な内部事情を集めて独立都市郡の生き残りのために国のバランスを調節することもあるようだ。もちろんこれらは受付嬢が直接語ったものではなく、言葉の端はしと伝えられる情報から推測した結果。当たっていると思う。

ギルドのシステムとしては大きなものは国家間の問題、身近なものでは近所のお手伝いまで様々な以来が、国家や団体または個人から入ってきて、依頼料を決定しボードに張り出されたのを誰かが受注するか、ギルドから腕利きの冒険者クラン 少数だとグループと呼ばれる に直接依頼して、受けた冒険者は楚々の依頼の解決したらギルドに戻ってきて証拠品を渡し報酬を受け取り依頼が完了する。

依頼には魔獣の間引きなど常に受注している状態にできるものも存在する。魔獣や亜人が大繁殖したときには別の依頼として出るが。

また、ギルドは信頼の商売であるので、冒険者は実力や功績によってランク分けされる。

一番上がSで下がFランクだ。Sはギルド全体でも滅多におらず英雄級のみで、努力の限界がB、才能あるものの努力の限界がAほど。平均ランクはD＋くらいで、Cだと一人前の冒険者という評価。

他にも克蘭でのランクというものもあり、メンバーの力量を考慮して決められる。克蘭ランクだとAにいくのはそれなりに存在するため、克蘭ランクのみにSSクラスが存在する。

「では、こちらの魔法陣に手をあててください」

奥から紫色の金属板 近くで【根源管理】で情報を見たら『ミスリル』であることがわかった に精緻な模様が描かれている。これが魔法陣というものなのか。

「根源には個々の波長のようなものがあるのでこの魔法陣で個人登録をし、その情報を書き込んだギルドカードを持てば個人の証となります。」

魔術を使う時の魔力もこの根源に依り特定の色に染まり、また根源は髪の色にも影響を与えることができるそうだ。髪の色が濃緑だったエメリーナさんは魔力色が濃緑で、この受付嬢 フィリシアさんはというらしい は髪が青なので魔力色は青ってわけか。魔術を使うときはかなりきれいなんだろうなあ。

魔力色は変えられないので犯罪のときに魔術使うと魔力色を見られてバレそう、隠密性にかけるようだしやっぱり魔術って微妙な気がしてきた。

「登録は完了です。この後どうします？ 依頼をうけますか？ この近くでの恒常的な依頼である『薬草とり』と各種魔獣の間引き討伐は

ギルドメンバー全員に受注していただいてますが。こちらはのあたりにでる魔獣の習性や危険性がかれたカタログです。」

「ひとまずは間引きや薬草とりの依頼だけでいいです。それこのあたりで冒険者おすすめの宿つてあつたら教えていただけませんか」  
拠点確保は基本ですよ。依頼は様子見。

「いつか今の段階じゃ魔獣討伐なんてできない気がする。ハイウルフという平原で襲ってきた魔獣は、個体だとD相当で群れになるとBになるらしい。だからEから始まる自分では絶対に遭遇してはいけない相手だ。」

「しばらくはカタログを見て戦える相手を選んでいくことになるだろう。天使（仮）から奪った恩寵も直接戦闘力は皆無なのだから。」

「ここはこの王国支部の中でのも屈指の大きさを誇りますので、二階と三階部分に夜だけです泊まることができます。ただし利用したいという人が多いのでただいま空きを確認してまいりますね。使料をギルドに預けたままの報酬から引くこともできます。」

受付嬢フィリシアさん 推定年齢20歳 は受付の奥の職務机が並んでいる部屋に入っていた

。チラッとみるに夕方は依頼を完遂してもどってくる冒険者が多いので処理する仕事が多いらしくあわただしい。

電話を箱状にしたようなものがある。【根源管理】で情報を覗いてみると恩寵技能【電心】が刻まれているレアアイテムのようだ。遠くと会話する恩寵技能には【電心】【通心】【念話】があり、どれも相手を通心系恩寵をもっていないと一方通行に思ったことを伝えるだけとなる。後者にいくにしたがって伝えられる距離と速度がある。そう、速度といたが、地球の通信と違って通心は電波ではなく魔粒子によってラインをつなぐために少し時間がかかるのだ。

それは今はいいとして、ギルドが銀行の真似事してるのには驚いた。現代の銀行と違って使用者が利子を払うので金庫といったほうがいいんだらうか。

「運よく2階に空き部屋がありましたよ。ランクが低い人向けの部屋なので必要最低限しか設備が揃ってませんがよろしいですか？貴重品も個人でしっかり保管してください」

まあ私は男だしそう問題もおこらないだらう。高価な雰囲気を自己主張する人形は自分で逃げることができるわけだし。

部屋をとっておいてもらったので、夜になるまであと2時間ほどのうちに宿代を稼がなくては。食事については酒場でつまんだぶんでは耐えられる。人形にいれてもってきていた宝石を売ることも考えられるが、相場がわからない。そもそも銅貨や銀貨の価値すら知らないのだ。うちだと足元をみられることもあるだらうし、上の世界からもってきた宝石なので価値がありすぎても、どこからもってきたのだという話になって目立ってしまう。

最悪の場合は売り払うだらうけどそれは最終手段だ

ということではまず薬草と雑魚い魔獣を探しに行くことにする。

周辺警戒は私よりは索敵範囲が広い人形に任せよう。

一時間後、Eランク魔獣『はぐれコボルト』に無双する人形と逃げ惑う主の姿が！

……言い訳させてください。

私の武器、万年筆と扇子ですよ？

万年筆も扇子も祖父の遺品でかなり値打ちのものらしいですけど、でも攻撃力あるわけないでしょ

人形はどうしてるか？

右手には仕込みナイフ、左手には私のペーパーナイフで二刀流です。ナイフのみならずペーパーナイフからも『シュンツ！』って空間を裂くような音がでてますけど……上位世界の物品で根源が大きいから切れ味があがってるってところでしょうか

だったら万年筆と扇子もうまく使えばこの世界ではすごい効果が表れるのかもしれませんが、使用者の私がへたれなのでどうしようもありません。

格闘術の心得も全くなく運動神経もない、そして唯一の長所であった高身長　バスケットかすごい有利だった　がなくなった今、ただの貧弱大学生にできることなどありゃーせんですよ。

はぐれコボルトは群れないコボルトです。群れない代わりに少しだけ能力が高いのですが、知能がある亜人と魔獣の間のようなコボルトやゴブリンは、そのわずかな知能によるチームワークが怖いわけで、個体でいるのは冒険者にとっては力モでしかありません。近くに5体くらいいるのに、群れないことが矜持だともいうのか個人個人でかかってくるという……

「ご主人、様。おわつ、た」

逃げ回っているうちに人形は私が指示したやつを殺し、そのあとに私の周りにいたやつを追い払ってくれたみたいです。

指示した個体は一番有用なスキルをいくつかもっていたので優先して狩らせたのです。そして人形の根源に定着する前に私がもらって、そのあと人形にもあげるといふ手順を踏むことによつて、次からほかの人にもあげられるようになるのです。時間はかかるけど無限チートですよ！　夢が広がります。

「お疲れ。さつそくだけど、恩寵技能もらうね」

そういつて『根源管理』を発動。人形の根源を覗きこみます。人形の根源は白ですね、真っ白です。人形の髪色は白なので魔力色もおそらく白になるでしょう。ちなみに人形の初期保持恩寵は【傳く者　サーヴァント】【紅茶淹れ】【短剣使い】【魔力貯蔵】の三つです。

【傳く者】は『仕えるもののために行動するときには様々な補正がかかる』効果があり、生まれたときから常に近くにいたのと、メイド服に似たドレスを着せていたことから得られたのでしよう。中階  
【紅茶淹れ】は紅茶が入れるのがうまくなるといふまんまのスキル。小さいティーセットを人形の中に仕込んでいたから得られたのか。  
低階

【短剣使い】短剣の使用がうまくなります。仕込みナイフのおかげでしよう。低階

【魔力貯蔵】魔力を貯蔵するのがうまくなります。持ってきた宝石がこの世界では魔力を貯蔵する際に使われる 【根源管理】で確認しました 宝石で、それを身体の中にいれてたから得られたのだと思われず。低階。

人形も根源量は圧倒的なので容量はまだまだ余裕です。

さて、はぐれコボルトを倒して手に入れたスキルは…… 【ひとり狼】

【犬嗅覚】。両方とも低階クラスでした。

【ひとり狼】は一人で戦うと攻撃力と素早さに補正がかかるスキル。人形には有用でしょう。

【犬嗅覚】は嗅覚がかなりあがるという効果。ところで人形には嗅覚あるのか……？ あるそうです。どんな仕組みになっているのか、下位世界は神秘の塊ですね

その二つの恩寵技能が人形の根源の表面に沈んだり浮いて来たりふわふわとしている状態なのを確認、手を伸ばし人形の胸あたりに触れて 直接触らないとイメージしにくい 浮いてきた立体をクレーンでひっかけるようにゆっくりと、このときに他の根源に傷をつけないように丁寧に取り出し自分の根源で迎えます。

自分の根源にゆるやかにぶつかり、少しずつ沈んでいく恩寵技能、私の根源の表面に波が立ち身体のどこから痛みが発し耐えきれず肺から空気がもれました。

しかし天使を殺して吸収したときと同じような高揚感を感じて同時に、確かに恩寵を私の根源が呑み込むのを知覚し一息つけました。

「ご主人、もう帰らない、と、暗くな、る」

人形の言うとおりここから街まで30分ほどなのであと45分くらいで暗くなるとしてもそろそろ街に帰ったほうがよさそうです

【恩寵刻印】で人形に刻むのは帰って宿に入ってからにします。

宿代ははぐれコボルト一体の報酬と、私が集めておいた種々の薬草たちで大丈夫でしょう。

カタログでだいたいの群生地に行けば、あとは根源を覗いて初心者が見つけれないような貴重な薬草も見つけ放題というわけです。

そうして冒険者ギルドに帰ってくることができました。報酬は銀貨2枚。

内訳ははぐれコボルト討伐で銅貨60枚、種々の薬草銅貨140枚です。

受付嬢フィリシアさんも薬草の数には驚いてました。表情を崩すのに成功して内心したり顔をしてしまいました。

銅貨100枚で銀貨一枚、銀貨100枚で金貨1枚、間にそれぞれ半銀貨と半金貨があります。  
気になる物価ですが、宿代が食事なしで銅貨30枚、食事が一食銅貨10枚です。

文化が違うから宿代が安いってのはありますけど銅貨一枚で100円と考えることにしました。食事が高めなのは王国が食物の一部を輸入に頼っているからというのがありそうです。

体感的に夜7時。明かりも無料ではないので、早めに寝るために、【恩寵刻印】をやってみようことにします。

ベッドの上で転がっていた 人形とはいえ小さい女の子がパタパタやってくるのには和む 人形を呼び、胸に手を当てて、【恩寵刻印】を発動。

自分の根源の中にある【ひとり狼】に意識を集中。根源の表面に出し、回転させながら形状と性質を模倣、感触が鮮明なうちに人形の中の根源の空いているところに、【ひとり狼】の形をなぞるイメージ。そしてそれが人形の根源に少しの波を立てながらぶちやぶちやと浮き沈みしているのを確認。いつのまにか身体中から汗が噴き出ていますが成功したようです。これで24時間後には人形の根源にしっかりと固定されるでしょう。

そして同様に【犬嗅覚】【速読】を順番に、根源を割れ物のように労わりながら刻んでいきます。

全ての作業が終わったときには私はベッドの上に倒れこんでいました。

熟練度が低いためにまだまだ負担が大きすぎます。根源は肉体にも精神にもつながっているために両方に影響を与えられるのがわずらわしいと思っています。

最後に今日一番の功労者だった人形に微笑み　なぜか人形はこちらを見るとすぐに違う方を向いてしまった。残念　襲い来る睡魔に身を委ねた

## 5話 魔術との出会い

『ユサユサ』

「　　じんさ、ま。」  
ん……まだ日が昇つてもいないきがするんだけど、人形は私を起こそうとしているようだ

「おはよう」

ひとまず起きてみる。予想通りまだ時間は2時といったところだ。外はまだまだ暗い。

「どう、ぞ」

人形が昨日ギルドに納品しなかった薬草で薬茶を入れてくれる。日は私のジャケットに入っていたジツポライターを使ったようだ。

「ご主人、様、6時間、睡眠」

なぜ起こしたのかと思っていると、不機嫌な色が表情にでたのかもしれない、人形が言い訳をするように私の袖を引っ張りながら上目使いをしてくる。くそ、超かわいい。人形が動かなかったときもそのかわいさに悶える時があつて周りに変な噂　人形異常愛欲者  
ドールフィリア　ってなんなんだよ……命名した奴、「ドヤア」って顔してたので殴りかけた　を立てられたが、いまの人形は人格をもつて動いているんだ、変な趣味ではないだろう。

……いや今度はペドフィリアと言われるのか……？　身長40cm  
だしなあ人形

で、人形の言葉を解読すると私を起こしたのは、私はいつも6時間睡眠を心掛けていたからだそうだ。たしかにそうしてたけども常に共にあったので根源に記録されていたのだろう、それは寝る時間が11時から2時くらいだったからなのだよ。8時に寝て2時に起きるなんて普通やらないでしょ。

といつても人間でいえばまだ生まれればかりなので仕方ない。少しずつ教えていくことにしましょう。この健気な人形の行動にはちょっとした注意と頭ナデナデで返す。

それにしても明かりが蝋燭やランタンしかないのは困り者だ。こちらとらただの大学三回生暗くなった8時から5時まで寝るなんて無理早いところ魔術か恩寵技能で解決する術を考えたい。人形には【速読】もあるからいろんな本を読んでほしいのだ、本が手に入るかという問題があるけど。

昨日の夜、一階の依頼のボードに降りて眺めていた時に、戸締りに来たギルド職員がいて話をさせてもらったのだが、その中には明かりの話もあった。

大別して魔術式ランプと恩寵式ランプがあり、魔術式の方が種類がたくさんあり、安いことから高いのまである。

恩寵式の方は【発光】が刻まれている物ですさまじく高い。なぜなら物に技能を刻めるのは【恩寵調金】という高階スキルを持っている者くらい。数少ない彼らは大抵どこかの国や大ギルドに囲い込まれている。だからだ。それに刻まれる物も根源が相応に高くないといけないことから、根源の総量が大きい高級品に刻むことになるので自然と高くなる。あとは偶然発光をもっている天然ものを見つけることだが、これも市場に出回るときにはかなりの額になって

いる。ただも庶民には手が出る代物ではないということだ。

魔術式の方は、貯めた魔力　いまだに魔粒子と魔力の使い分け方がわからない　を魔法陣に通すことよって小さな『火球』や『発火』をして炎をろうそくのようにだすものが多い。魔法陣を描きこむ素材や魔法陣の細かさによつて効果も費用も変わる。魔法陣が粗悪品だと大量の魔力を注いだのに数分しか持たなかった、なんてことになりかねない。

また、この方法だと魔力を練ることにある程度習熟しなければならぬいそうで、私と人形にはまだできない。

魔術自体は多かれ少なかれ誰もが使えるもので、子供の時から小さい魔術　『発火』や『凝水』など　は教えられる。じゃあそれで明かりをつければいいと思うかもしれないが、魔力を常に注ぎ続けなければならぬので普通の人には耐えられない。明かりの場合、魔法陣は持続化と魔力貯蔵に多くを割り当てることでなんとか一晩ほど持たすのだ。

ひとまずの目標は私と人形が魔力を練ることができるようになりつづ、魔術式ランプを手に入れられる金額を稼ぐこと。

薬草の群生地は見つけたが、とりすぎると生えなくなってしまふのでそこまであてにできない。となると私と人形が強くなって魔獣を狩らなければいけないわけだ。

幸いファンタジー世界にありがちに、宿代など生活用品は安いので無理しなくても食いつばくれることはない　偉そうにいつてるけど一般人である私はEクラスであるはぐれコボルトも単独で狩れないので、人形がいなければ雑用仕事をして小銭を稼ぐ生活になつていた　だろう。

本当にできた従者だ。

睡眠を必要とせず、人形であるがゆえに私よりは夜目が聞くので、私が寝ている間はギルド内や街の闇に紛れて情報収集をしてくれている。

私はまだこの国を信用していない。だから存在するであろう闇を詳しく調べる必要がある、夜に人形を派遣して情報集めを頼んだのだ。余談だが、見つかりにくくし見つかっても無視されるようにと目を出す穴をあけた布をかぶった姿は幽霊にしか見えん……そのうち、ウクラインに亡霊現る！ って噂にでもなるんじゃないだろうか、この娯楽の少ないご時勢。

ということ朝5時になり空が明るくなってきてからギルドを出てカタログ片手に狩りにいくことにする。私は一度読んだだけで情報を覚えられるほど出来がよくないので、片手がふさがってもカタログは必須だ。

東門から出て昨日とは違い南方へ行く。またはぐれコボルトと出くわす可能性は低いと考えて、次は同じEランクの魔獣『アプモンキー』、『マンドラゴラ』を狩りに行くことにした。

二つとも森の浅いところに生息していて、『アプモンキー』は果物を好むが好戦的なでかい猿、『マンドラゴラ』は耳をつんざくような叫び声をあげる歩く植物だ。

アプモンキーは脅威でもないが繁殖がはやく、増えすぎると近くの街に食糧を奪いにくることがあり、マンドラゴラはの叫び声で冒険者の戦いを邪魔したり他の魔獣を刺激することから迷惑な魔獣として間引き対象となっている。

「【犬嗅覚】発、動。」

森の入り口から入って数分、生い茂る樹木で空が見えにくくなってきたところで、人形が呟くとともに嗅覚による索敵を開始する。

【犬嗅覚】ははぐれコボルトがもっていたときは間違いないがパッシブスキルだったのだが、人形や私が見つくとアクティブスキルに変質していた。推測だが、犬の嗅覚を再現できるほどのスペックがないから、常時発動ができないんじゃないかと思われる。

常に発動していると街角の汚臭にダメージをくらいそうだから別にいいけれども。人も動物もある程度の体臭はどうしようもない、風呂という文化がないこのアンダーワールドでは特にだ。なのにいちいち反応していても仕方ないだろう。

『さくつ』

「キイイイイイイ！」

いつのまにか発見して忍び寄り倒していたみたいだ。

人形のスキルによる短剣さばきは鮮やかというほかない。それに天使の時もそうだが後ろからこっそりと忍び寄って刺すのに適性があるように思われる。いつか【暗殺】を得るんじゃないだろうか。

「ご主人、様」

人形が無表情にだが達成感による笑みを隠しきれずにトコトコと近づいてくる。やっつてること、もといやらせてることは物騒だが、犬や猫が手に入れた獲物を主人に自慢しにくるみたいで愛らしい。ついつい抱きしめて頭を撫でてしまう。

さて、人形がアップモンキーから奪ったスキルを回収しよう。今回はスキルは一つ、【目利き 果実】だけだが。敏捷性に関する欠片を吸収したようだ。欠片のほうは私が受け取ってもコピーして返せないから人形が持ったままにしておく。

【目利き 果実】は果実に関してみただけでおいしかどうかかわるといふもの。【目利き】系恩寵は上位に【鑑定】系があるらしい。私には物質の性質を読み取るには上位もいいとこの【根源管理】があるので必要なく、人形は食物をとる必要がないのでこれまた使う機会がないだろう。

恩寵技能は使えば使うだけ熟練度があがっていくのでそのために【根源管理】で吸収して【恩寵刻印】で刻むという作業をやる。やはり肉体的にも精神的にも少し疲れてしまう。

「次、行って、きます」

しかし私には優秀で気遣いもできる半身がいるので問題ない。頼り切ってしまうのを申し訳なく思うが、異物である私たちがこれからこの世界で生きていく時に、いまやっている地道な恩寵集めと熟練度稼ぎの成果がでてくるはず。そう、私が直接動かのは決して二ト的な思考ではない……はずだ、決して年下の子に稼いで貢いでもらってる悪徳な存在ではない……はずだ。

呪いのせいで【人形師】を発動できずろくなメンテナンスも行えない自分、早く人形に恩返しできるように自分にできることをやろう。

その後、3時間ほどかけて 強い魔獣がいると困るので索敵しつつハイドしてゆっくり進んだ アプモンキー2体とマンドラゴラ4体を狩った。上位世界からの持ち込みである人形の仕込みナイフは刃こぼれはしていないものの血糊がべったりついてるのでそろそろ整備しなければならぬだろう。

マンドラゴラはその大きな悲鳴で魔獣を集めたりこちらの攻撃を止めるのだが、人形ボディな人形は聴覚をオフにできる むしろ普

段がわざわざ聴覚をつないでいる　　ので叫ばれたときも硬直せず  
に仕掛けられたので余裕だった。

森の中でぐったりするわけにはいかないのです、今回人形が集めた恩  
寵は街に戻ってから吸収しようと思い、森から抜けて街に入る。

南の森は近いほうなのだが、街の東門から片道1時間半ほどかかる  
のが想像以上につらい。現代人のもやしっこである私はピクニック  
などほとんどしたことがなく、歩くだけでも息が上がり小さい人形  
から心配した顔を向けられる始末。正直人形の前で無様な態度を晒  
したくないという、いささか手遅れな感があるプライドを發揮して  
なければ途中で倒れていたかもしれない。

冒険者ギルドのほうまで戻ってきてみればすでに12時前になつて  
いる。

私は燃費がいいほうなのだが、昨晚の夜は少しのつまみで今朝は何  
もたべていないので腹も減ってしまう。

まずはギルドで討伐証明を行い報酬をもらおう。

一頭あたり、アプモンキーが銅貨50枚、マンドラゴラが銅貨40  
枚なので銀貨2枚銅貨60枚をうけとる。これで手持ちは銀貨4枚  
銅貨25枚　　ろうそくが銅貨5枚だった　　。

これだけあれば食事だけなら相当良いものが食べられる。

私は美食家ではないし人形はたべないため、ウクラインの街の東か  
ら中央に延びる大通りに出ていた適当な露店でホットドックのよう  
なものを買って食べる　　「お嬢ちゃんお腹減ってるみたいだ  
から二本買ってくれたら安くするよ!」っていわれて二つ買ってし  
まった　　。

上位世界で男は女性に甘く、女性は色々と得できてうらやましいな  
あ、と思っていたが実際に自分が女性に間違えられてサービスされ

るとその役得はすさまじいと感じる。  
なのでこちらが得するなら女性だと勘違いされるといふ屈辱には目を瞑ることに決めた。

人形を抱いて大通りを歩くこと数分、遠くのほうに中央の施設、地方行政機関が見える。

人々があわただしく、さすが王国の東で最も人通りが多い 主に冒険者だが 街の中央部だなあ、と眺めていたのだがどうにも様子がおかしい。

人々が大通りの真ん中をあけていくのだが、表情には焦りと恐怖が混じっているのだ。

『君子危うきに近寄らず』と『虎穴に入らば虎子を得ず』のどちらを選択するか数瞬迷い、日本人らしく妥協した折衷案 端によりつつ騒ぎの元を見に行く を選択。

少し早足となって近づいていくと、茶色の仕立てのいいローブ着て杖をもったいかにも魔術師ですという格好をした25歳ほどの赤髪青年が取り巻きと共に冒険者組みと言い争いになっているようだった。

「こっちの女性はもう謝ったじゃないすか！ あんた大人げないすよ！」

……あれはたしか冒険者四人組みの短剣使いテッドさんじゃないか。どうやらぼろ 民族衣装のようなエスニックな柄がなんとか判別できる を纏った女性が魔術師の不興を買い、テッドはそれをか

ばっているらしい。近くには冒険者ギルドで見かけたことのある若いギルドメンバーがいるが、魔術師とのテッドの争いには口を出さずに推移を見守っている。

少し補足。

このエウルーパー王国はシークリッド大陸の西、地球でいえばヨーロッパ地域を全域支配していると豪語しているが、実際にはまったくそんなことはなく、東端のウクラインから西端のバスターウまでの途中で王都を通る大街道を中心に、凸レンズを横に倒したような形にしか実効支配しておらず、特に北のほうは原住民が大量に住んでいる。

そもそもたかだか人口1000万人ほどではエウルーパー王国30万平方キロメートルの全範囲に手をとどかすことなどできがしないのだ。結果、行商や軍事、資源的に有利な拠点のみ押さえていて、目が届かないところにはたまたま税を取り立てにくるだけで盗賊の根城になっているというのも珍しくはない。

だが王国は傲慢でいまだに収められもしないのに侵略と原住民の迫害を続けている。これは王国が軍事力をもち続ける意義を国民に示す意味が大きい。実際にこれは功を奏し、国民は連日届くどころかもしれない辺境の侵略報告に自分たちの国の強さを称え誇る。

正直因縁のつけかたはたいしたことではないのだろう　口論は取り巻きに任せて魔術師は薄ら笑いを浮かべていた　し興味は失い、見た感じこの世界の特権階級である魔術師と平民の間にどれほどの差があるのかを観察することにした。

どうやら魔術師というのは相当な特権階級のようだ。

周りの野次馬も目をあわせないようにし、腕に自信がありそうな冒険者ですら手を出そうとはしていない。テッドの周りの冒険者を見るに、テッドが争いに介入したことに對して「余計なことをしてくれた」と苦々しい表情を浮かべている。

状況が動いたのはうつむいていたぼろを着た女性が急に立ち上がり魔術師のほうに飛び掛った時だった。会話の様子から、魔術師たちが女性の故郷についてこき下ろしたことで怒りの沸点を超えたのだろう。

取り巻きは小物らしく余裕をなくし避けてしまう

が、魔術師は薄ら笑いが罨に飛び込んできたという獰猛な笑みに変わり、周りの冒険者、とくにテッドが女性をとめようとした瞬間、赤い光が出たと同時に一瞬で女性の足が根元から切り裂かれる。起こった変化は赤い発光だけで音もせず、だ。

「ま、じゅつ……?」

人形が珍しく私へ話しかける以外で言葉を口にする。

そうだ、あれは魔術だ。一瞬見えた赤い光がああ赤髪の魔術師の魔力光なのだろう。

そう頭の中ではわかっていても、予想していた魔術と違いすぎて現実を認められない。

無理もないだろう。私の中でのこの世界の魔術は、恩寵技能に劣る性能しか出せない器用貧乏、出力不足の劣悪品、そういう印象だったのだ。

魔力光が必ずでることから証拠がやすく隠密性も薄いとすら思っていた。

しかし実際はどうだ。

女性が近づくと音もなく赤い光を湛えた刃が現れてきりさいた。いくら魔力光を視認できるといっても、こちらに当たる直前で見えても避けるすべなどない。

力自慢の冒険者たちが魔術師に近づいていかなかったのも無理はない。魔術師の近くによった途端に防具のないところを不可視無音の刃で狙われたら一たまりもないのだ。

私は今までの魔術への認識を完全に反転させた。

危険だ。隠密性、間合い、発動までの時間……あれは一人がもつべき力じゃない。

迅速にアレの情報を集めなくては

## 6話 武器屋 & 十日後(前書き)

7300文字也。5000〜8000くらいが一番描きやすいみたいです。

## 6話 武器屋 & 十日後

北方の民族衣装の名残がみえるぼろをまとった女性が足をなくしてから、2時間後、私と人形は街の西側にある商店街に来ていた。露店が並んでいた東と違って家の一階を店にしている商店が多い。なぜこんなところに来ていたかというところ、あの事件の後テッドと話す機会があり、魔術師が持つ杖には魔術を補佐する恩寵技能が刻まれていると聞いて調査に来たのだった。

あんな業があふれているようじゃおちおちしてられない、まずは魔術について少しでも知らなければ。強迫観念に駆られる。

ちなみに足を切断された女性は貧しさのあまりスリを行おうとしたらしい。王国に故郷から追い出されたという恨みも込みで。しかし魔術師の取り巻きからスツてしまったために目をつけられたとか。そうであっても足切断は過剰防衛だと思うけどね。

テッド達冒険者が切断された足も拾って街にある病院につれていったが、足をもとに戻すには腕利きの良い医者 恩寵を持つか魔術が得意な医者 と莫大な費用が必要だそうなので、おそらくどうにもならないだろう。この先彼女がどうなるかは知りたくない。

問題なのは魔術師の一方的な断罪がまかり通っていることだろう。暴虐に巻き込まれないようにこちらも魔術をなんとか習熟するつもりではあるが、魔術師の特権の強さはこの王国限定なのか、大陸全体でそうなのかも知る必要がありそうだ。

一応実力のある魔術師は大きな力を持ちすぎているということに仕えて管理される。少数だが大国の高待遇を蹴って冒険者ギルド専有の魔術師となる剛の者もいる。ので、証拠を集めて国に訴えれば聞いてはくれるが、国としても魔術師に他国に逃れられたり反抗されるのは処理が大変なので、よほど横暴な事態にならない限りは注意だけで済まされる。

今回ののは両足を切断したといっても犯罪者であるし、王国民でないので全く聞き入れてももらえない。

「ご主人、様。武器屋、ついた」  
人形の声で通り過ぎかけていたのに気づく。

ここはこの街一番の品揃えを誇るといふ武器屋。横にも縦にも広い普通の家8つ分くらいある。二階建てで、両フロアともに武器があるというところでもない店だ。その量は王都近郊の武器屋にも匹敵するとはこの武器屋の店員談。

この店員は私たちが根源の大きい武器を探して奥に進むと表れて説明しながらついてきたのだ。

この武器屋には強力な武器がたくさんあり、恩寵技能が刻まれた武器すらあるということ。で店員が何人も歩いているし、武装した警備員までいる。

なぜここまでいるかというと、盗まれる心配だけじゃなく壊される心配もしてはならないからだ。上位原型世界の地球や他の下位世界では基本的に、武器や道具が店で壊されることは少ない。壊したらその武器や道具は壊れたら使えないのだし、破壊衝動のためだけに壊れやすいものじゃなく壊れにくい物を破壊しようなんて輩は

相当珍しい。

だが、アンダーワールドでは少し事情が違う。この世界には破壊した物や殺した者の恩寵技能やステータスを吸収するという仕組みがあるのだから。武器を壊してその恩寵技能やステータスを奪ってしまえという輩は枚挙に暇がない。

例えば、【熱波】を持つ武器と【衝撃】を持つ武器があったとして、使うときには片方しか用いれないので恩寵技能も使った武器のほうのだけ 当たり前 だ。そのときの解決策として仲間に片方を持たしてコンビネーションを発揮して攻撃するという考えにいたれば平和的なのだが、片方を壊して恩寵技能を吸収した上でもう片方の武器を用いれば両方の恩寵を一つの武器で一振りの元に再現できるという考え方に至るものが多い 絶対に恩寵技能を獲得できるというわけではないのだが 。

よって、武器を盗まれるでなく破壊されるという事件が相次ぐことになる。

ちなみに、武器を持って何かを破壊したり誰かを殺したときに、根源の吸収は持つてる根源総量が多い方に優先的に引き寄せられて吸収される。武器で壊してその武器に恩寵技能が吸収されるケースというのは、使用者の根源の容量がいっぱいの時くらいだ。

以上の事情があるので、私がいかに恩寵彫金武器のほうにまっすぐ進んだから念のために観察と牽制を兼ねて来たということだろう。

以上を結論するにいたった情報は、集めて統合するのは容易かつた。24時間肉体の疲労なしで動け、人が入れないところにも侵入できる人形の諜報力はかなりのものだし、私もただのんびりするだけ

ではなく、子供っぽい容姿を利用して油断を誘い情報を聞き出しているのだ。

さて、二階の奥の方、恩寵彫金武器のあるところにたどり着いた。一階は大きな武器が多かったが、二階は小回りのきく探検やロッドなどが多い。

今いるところの正面にも恩寵が刻まれた武器　やはり恩寵が刻まれる容量があるだけあって使われている素材も一目でいいものだとわかる　は店員に言わないと手が届かないという制限だけが、店員が詰めている部屋の扉付近には、ガラス代わりであるクリスタルのケースで手が直接触れられないようになっていた棚がある。おそらくそちらには本当の高級品が並べられているのだろう。

まずは小手調べと目の前にある長さ40cmほどのロッドを見てみる。

軸は何かしかの木できていて、紫色の金属　魔力伝導が高いミスリルだ　の蛇を模したような装飾が先のほうにあり、柄の一番下には赤い色をした宝石が埋め込まれている。

そして【根源管理】を発動。軸の木は『古樹の木片』、赤い宝石が『火炎のルビー』のようだ。『古樹の木片』が魔粒子を引き寄せ、『火炎のルビー』が火炎の力を与え、ミスリルからほとんど減衰することなく放出する。魔術の仕組みについて詳しくは知らない私には説明を見ても理解はできないけれど。

根源は『火炎のルビー』が最も大きく、恩寵もここにあった。刻まれた恩寵の名は【体外魔力操作　火炎】。中階クラスで、効果は『

火炎属性に限定して体外魔力の扱いがうまくなる』。

私にとっては体外魔力？ なにそれ？ なのですよいかどうかもわからないが、値段を見るにこの棚ではトップクラスで良いものだったようだ。杖一つに金貨100枚 日本円で1億円て……。持つだけで中階スキルが使えるのだから安いもんなのかね相場的に。

隣には劣化版である【体外魔力行使 火】が刻まれた杖もあるが値段は金貨10枚。だいぶ安くなった気はするけど、それでも今の稼ぎじゃ絶対買えない。

魔術のことを知るには使ってみるのが一番だと思って買ったかったのだけど。

この世界では日常で使う魔術を習得するために多感な子供の時から魔力に触れているために、魔力を使うのに意識なんてしていない。だから感覚を覚えてもらうことができないので恩寵技能によって無理やりつかう感覚を覚えようと思ったのだけど。

買えないし、さすがに売り物を壊すなんてことはできないからなあ。

地道に魔力を使う感覚を覚えるのと金を稼ぐしかないようだ。

先は長い。ひとまずは人形とともに恩寵集めに励むことにしよう。

ちなみにクリスタルの棚に飾られている方には記憶を失ってしまうほど仰天する価値の物がおいてあった。

生活費に比べて装備品高すぎてわらえない

それから十日が過ぎた。

街から日帰りで行けるところにいるEランクの弱い魔獣を狩り続けてDランクに上昇し、有用なスキルも大方回収できた。

途中で上位世界ナイフの扱い　血糊を拭くだけ　に激怒した鍛冶屋と仲良くなったり、夜の街に出没する幽霊の噂を聞きつけた少年たちに人形がつかまりそうになったり、無謀にもギルドに泊まっているのに強盗に来た輩を（人形が）返り討ちにしたり、といくつかイベントがあつた。魔術に関してはいまだに魔力を練ることもできない。

鍛冶屋は16歳くらいにしか見えない女の子なのに異常なほど物知りで人族と亜人の確執など、興味深い話を教えてもらった。少女の名前はグローリアというらしい。

襲ってきた強盗は私が特殊な道具を持っていると聞いてやってきたそうだ。どう考えても戦闘力のない、未だにギルドの荒くれどもから女と勘違いされている　面倒くさいので訂正してない　私が連日狩りをほぼ無傷で終えていたら、何かの道具でブーストしてると思うのは当たり前か。

受付嬢フアリシアさんによると『人形使いの少女冒険者』として物珍しさによって知られつつあるということだし、そろそろ他の街へ行ってもいいかもしれない。この世界は隣町への道すら危険に満ち溢れてるからなかなか踏ん切りがつかない。ギルドに泊まるのは危険が格段に少なかったしなあ。

ちなみに強盗さんの装備は回収し破壊して恩寵を吸収した。命をとらないだけ嘛だと思っしてほしい。得た恩寵技能は黒い靴から【無音】だけ。他の装備からはステータスのみで人形に壊させました。全装備のうち一つは恩寵彫金されてるのでそれなりに稼いでるか腕利きの強盗だったのかもしれない。人形の【犬嗅覚】発動中 アクティブスキルだけど、肉体的疲労のない人形にとって長時間発動させるのは容易い。精神的疲労のみなので に来たから音がでなくても気づけたけど、そうじゃなかったらやられてたかもわからないね。

さて、魔獣狩りで得た恩寵だが、蜘蛛がでかくなって甲殻をもった魔獣ジャイアントスパイダーからは【蜘蛛系作成】【糸繰り】、白色の芋虫の巨大化したようなホワイトキャタピラーからは【麻痺毒 弱】、中心に核があり他の部分を切っても壊しても再生するグリーンスライムからは【再生】【強酸生成】【打撃耐性】、少人数で固まっているところをしとめたゴブリンから 正確には持っていた一番良い武器から は【切断強化】、洞窟にいた蝙蝠、ウインドバット 群れだとCクラスなのだが、Bクラス魔獣の『ハンドレッドベア』の食い残しを仕留めた からは【発超音波】【蝙蝠聴覚】【風属性耐性】【吸血】、昼飯にとったフルーツのとりあいをしたアプモンキーからは【雑食】

【森林闊歩】、  
を得た。

【再生】はその名の通りだが、あまり人間が使うのはやめたほうがいいスキルだ。欠損した部分を埋め合わせるために周りからまわさなければならぬため、背が縮んだり、腕をなおすために内臓が持つていかれる恐れもあるためだ。人形には与えておいたが。

【強酸生成】も、手から出すと手が溶けてしまうために、生身の身体では使えない。人形なら酸にやられることはないから活用できるだろう。

【雑食】は肉食の獣がもつと草でも栄養がとれるようになるというもので元々雑食な人間には必要がない。アプモンキーがこれをもっていたということは、アプモンキーは身体的には肉食しか無理だが恩寵技能が受け継がれているのか？ それとも雑食を極めてど  
う極めるというのか…… 恩寵を得るに至ったのだろうか。

【森林闊歩】は森林内を移動するときに補正がかかるというもの。

これらの中では【蜘蛛糸作成】【糸繰り】【麻痺毒 弱】【強酸生成】が畏の作成に大きく役立ち、【蝙蝠聴覚】【発超音波】が【犬嗅覚】と共に索敵を磐石のものにしている。どれも低階なので私には使えず、あいも変わらず人形が駆使しているわけだが。

問題は蜘蛛糸や毒は全て使用者の身体の一部が使われるという点だ。人間なら生活をしていて新陳代謝により日々新しい身体ができてるので作りすぎない限り問題ではないのだが、人形は食事も排泄もしないために質量が全く変化しないため、身体の一部を用いて糸や酸を精製するほど体積が減っていつてしまう。

それを擬似的に解決したのが、以前私が使えないと嘆いていた【人形師】だ。固定観念により人形に【人形師】を与えていなかったの

だが、「人形であっても、人格をもち動く人形なのだから人形を使えて問題あるまい」と思い至り人形に【人形師】を与えてみたら、さすがの中階クラスの技能、材料を買ってあげたらもの見事になくなっていく部分を修復できた。

また、人形によると【吸血】の効果がすごいらしい。人形は肉体的疲労はなくとも、人格が存在する時点で精神的疲労はあるのだが、この恩寵を使うと生命力を吸い取ってだいぶ楽になるそうだ。ということであまに首筋を噛ませて血をすわせてあげている。

夕方に最初に会った冒険者四人組のうちの二人が長期依頼から帰ってきた。

私の前を通り過ぎようとする二人に声をかける

「ザルモンさん、お久しぶりです」

「おう久しぶりだあ。声聞くまでクロノの坊主だと気づかなかったぜ」

ガハハと笑うザルモンさんと苦笑するエメリーナさん。今の私は元々着ていたジャケットの上から灰色の大きいローブを頭からすっぽりとかぶっているの一目ではわからなかったようだ。

まずは二人の旅を慰労するために酒場に入って酒とそれなりにしっかりとした料理　とは言ってもこの世界の料理はシンプルなものが多い　を注文する。

私が何とか細々と依頼を受けてDランクに無事あがったことを報告

し、大きさに喜ばれる。どうもザルモンさんは私のことを息子と、エメリーナさんは弟と認識しているようで猫かわいがりしてくのはいかなものか。かわいがられるのは嫌ではないが、この殺伐とした世界にあつては純粋な好意は少しこそばゆい。

次に依頼の土産話をされる。もちろん依頼主や内容の詳しい部分は守秘義務によりぼかしてあるが。

今回の長期依頼は隣国ラーシアン帝国の南西のヴォルガー共和国

この世界で共和国があることに驚きだが、国の中心にはグルーミ海に流れる大きな川があり資源も豊富なため、帝国の庇護下にはいることで比較的安定した生活を国民が送れるらしい。への輸送護衛任務だったとのこと。馬車で片道4日ほどの距離で、ウクラインから一番近い国だ。

また、ザルモンさんたちのクラン名を『境の風』といい、その名の通り主に国境付近での依頼をうけているウクライン街での主要メンバーで、クランの人数は6人。

今回の依頼はテッドとカルロスさんを置いて残りの4人で行ってきたとのこと。カルロスさんは用事があつて王都に行っているらしい。

そして次は少し休んでからまた輸送護衛任務を受けるつもりで、久しぶりにエウルーパー王国の中央に向かうそうだ。それを聞いて私もついていきたいと言ってみる。

この街での情報はある程度集まったし、顔を知られてきたので新たな所へ行こうと思つたので護衛任務についていけるなら渡りに船だ。

しかしザルモンさんもエメリーナさんも少し渋い顔をした。

今回の依頼はランクB。輸送任務でランクが高いということはそれだけ重要視されている荷があるということ。失敗は許されず、Dランクである私ではCとBランクしかないクランのメンバーの助け

になるどころか足手まといになりかねない。  
二人とも熟練の冒険者だけあって公私をわきまえていて仕事に関してはシビアだ。

結局、任務を共同する他のクラン 『空翔る虎』といい、4人が参加する にも問い合わせ、新米冒険者に経験をつませることは重要であるという理由より、報酬は経費以外なしで絶対に邪魔にならないようにする つまりは助けてもらえないということ という条件の下に、私ともう一人、『空かける虎』の新人が任務に加えられることとなった。

そして輸送護衛任務までの三日間、情報収集は人形が継続し狩りや薬草集めをやる傍ら、私は野宿に必要な道具を揃えに道具店をまわっていた。

この世界の文化レベルでは現代のようなキャンプ道具などなく、見たことも使い方もわからない道具だらけなので、護衛に参加するほかのメンバーが野営準備の荷物を担当していたとしても自分で実際にチェックしとくのが、これから一人で旅をするときなどに役に立つだろうと考えたのだ。

野営用の道具として食事関連に鍋などがあるが、大きくて一人用には向かないので断念する。干し肉と硬いパンだけなのはつらいが4日くらいならなんとか我慢できるだろう。

だいたい道具にはやはり恩寵技能はついていないし、ついていたら高いのだが、店の端のほうにたたまれていた天幕が目に残る。

どうも気になったので『根源管理』でしっかりと視てみると、『疲

労軽減」という低階恩寵が刻まれていた。

【疲労軽減】はその名の通り疲労がたまるのを軽減するが、天幕がもっているのならその天幕が少し長持ちしやすいというだけだ。【疲労治癒】なら目が飛び出るほどに価格が跳ね上がったのだから、この天幕が【疲労軽減】という恩寵を持っているということ自体に気づかれなかったのだろう。恩寵を読み取れる【根源看破】は高階恩寵で所有者が少なく、わざわざ天幕を見てもらうのに金を払うわけがない。しかし恩寵を見れる私にとってはチャンスだ。

ということでも早速、この天幕を買い叩く。値切り交渉が普通な世界に二週間もいたら当たり前になり値切りができるようになってしまった。そして裏路地に入り、誰も見ていないことを確認して天幕を破壊する。布の部分は人形の服の補填や、簡易ベッドを作るのに使えるだろう。天幕が天幕でなくなり、根源がばらけゆらめくのが見える。その不安定な状態になった根源から恩寵を取り出すイメージ。浮かび上がってきた立体をクレーンで取り出し私の根源、海の中に放り込む。【疲労軽減】が私の中に染み込み溶け合うように一部となっていく。

【根源管理】によって根源が見える私には自分の好きな部分を切り取ることは容易い。この作業も10日間の間はずいぶんと手馴れ、硬直時間も短くなってきている。

しかし恩寵やステータスを得た瞬間の高揚感と陶酔感だけはいくら感じてても新鮮なままだ。この世界で血の気が多い人がたくさんいるのも、人や魔獣を殺した時の快感の中毒になっているせいではないだろうか。

そして護衛任務開始の日の朝、日が昇り始める頃にお世話になった

ギルドの受付嬢フィリシアさんに感謝の言葉を書いた置手紙をカウンターに部屋の鍵とともに置き、一週間もお世話になった冒険者ギルドウクライン支部を目に焼き付けてから、今日も暑くなりそうだと天気を予想しつつ集合場所に向かって歩いていった。

## 6話 武器屋 & 十日後（後書き）

早くNAISEIをやりたいです。内政ではありません。

できればどんどん巻いていきたいのですが

## 7話 護衛任務

集合場所につくと、最初の方に冒険者が揃えるオーソドックスな装備をした少年がいた。

あれが『空駆ける虎』の新人さんだろう。新人が先に来て先輩を迎えるという風潮は上位世界でもアンダーワールドでも同じということかな。

しっかしいかにも新米な冒険者オーラが漂っている。私は最低限必要な防具も付けていないので人のことをいえないし、あちらから見ると冒険者未満にしか見えないだろうけども。

その少年は身長175cmほどで耳にかかる黄髪碧眼、顔立ちは西洋風だが肌が黄色く、このあたりではみかけないタイプだ。軽い細剣とサブで便利なナイフを腰から下げ、防具は革でできた胸当てとを着込んでいる。うん、やはりオーソドックス、新米オブ新米な姿だ。

首からかけている額あてにはなにやら文様が刻まれている。その点が普通とは少し変わったところか。

「おはようございます。クロノ・タナカです、今日からよろしくお願いたしますね」

「ん、ああ。おまえが『境の風』の新人か。どうやっておまえみてえなひよろっこいやつが加入できたんだ？ まあいい、今日から邪

魔にならないようにしろよ」

……驚いた。同じ新人なのにここまで高圧的に出られるとは。それに私は『境の風』に入っていないぞ。

「何も言い返せないのかあ？　ほんとにたまついで」

「あほかっ！！」

私が黙っているのを見て勢いづいた少年がまた余計なことを言い出した時に、後ろに大柄な男が現れて少年の頭にげんこつを落とした。

「い、いたいです、ハーマンさん！」

「その程度で痛いなんて言っつとこの依頼につれてかねーぞ」

「ひ、ひどいですよあ」

少年が涙目になって訴える。いやね、あんた態度変わりすぎだと。性格まで変わっているんじゃない。

「悪かったな嬢ちゃん。こいつ初めての高ランク任務で昨日から浮き足立っててよ、憎まれ口聞いたのも強がってみて緊張を和らげようとしたのさ」

「いえ、大丈夫ですよ。私も緊張しているのでその気持ちはわかります。」

「ありがとよ。ほらっフラン！　嬢ちゃんの落ち着き具合を見習え」なるほどなるほど。お子様ならつい強がっちゃうこともあるだろう。

ハーマンさんと呼ばれていた大柄な男の言葉を聞き、ぐざぎざと擬音をならしながら私のほうを見るフランくん。しかし年齢的にかわいくないぞ。そういうのはシヨタだったときにやりたまえ。

まあわたしのことを最初から男と見破った慧眼に免じて気にしないであげようと思う。けっこうすごいと思うよ？　160cmの小ささ　王国の男性の慎重平均は175以上　でありロープで顔

を隠しながら人形を片手にもつ人物を男だとわかるってのは。

ちなみにハーマンさんは勘違いしているようだがいちいち訂正しないし、か弱い女だと見られていたほうが得することはいくらでもあるので黙っておくことにする。

「ご主人、様。やらなくて、いいん、です？」

物言わぬ人形のふりをしてくれていた人形、なぜ君が殺気立っているんだ……。

「やる」って「殺る」って意味か！？」

私の半身は存外に物騒なそうだった。魔獣や亜人を殺し続けてゆがんだのか？

そうこうするうちに両クランのメンバーが集まってきたようだ。『境の風』からはザルモンさん、エメリーナさん、テッド。『天駆ける虎』からはフランとハーマンさんとあと三人だ。

そして少し後れて商人がよく使う馬車　Bランク任務なので見た目よりもだいぶ丈夫だったりするのだろう　を引連れて男がやってくる。

「おはようございます、皆様方。今回の護衛の依頼を引き受けていただきありがとうございます。報酬は先に経費分、達成後に残り金額でよろしかったですね。」

物腰が随分柔らかいと思ったら、依頼主の代理らしい。おそらく依頼主が地方の貴族でこの人が執事や使用人頭ということだろう。

後は両クランのリーダーと執事さんが細かい日程などを最終確認し、ウクラインの西門を開け　早朝なので許可証を見せてあけてもらわなければならないのだ　、中央へ向かう街道を馬車が走り出した。

今、私は猛烈に気持ちが悪い。

すでに門をでて4時間ほど、特に何もなく平和に馬車は進んでいくのだが、私はウクラインの街から新たな拠点に移ることに頭がいっぱいで移動手段について失念していた。

そう、私は乗り物酔いしているのだ。

護衛の面々は一人で馬に乗って先に行き周辺警戒をしているものと、馬車に乗り込んでいるものがあるが、私やフラン、テッドのような若い面々は馬にうまく乗れないために馬車組みだ。

ちなみに、馬以外の獣に騎乗する人もいるかとおもったが今回のメンバーにはいなかった。魔獣を使役できる人は【獣支配】【獣使い】【獣通じ】のいずれかの恩寵をもっていないと厳しいとのこと。いつか魔獣や幻獣にも乗ってみたいものだ。私は呪いでそれらの恩寵を使えないので誰かと相乗りという形しか無理だろうけど。

ファンタジーの定番、馬車。たいていの小説で揺れが激しく尻が痛くなるというのを考えて、壊した天幕の布に少し詰め物をしてクッションとした。そこまでは見越していたのだ。

尻に敷いたクッションを恨めしげに眺めるフランにちょっとした優越感を感じること数十分。たわいない話を彼らとしていたときに突然それは訪れた。

「っぐっ！」

先ほど朝食として食べたものが胃から逆流しようとする感触にむせる、が吐くところがないためなんとか嘔吐感を押さえ込む。幸いその一瞬を彼らは見ていないようだった。年下の彼らにはあまり無様な姿は見せたくない。

自分が電車でも新幹線でも飛行機でも乗り物酔いする、三半規管おかしいんじゃないのかってくらい酔いに弱い人間なのを忘れていたとは不覚。

その後3時間、ずっと酔いながらも吐くことはせず、テッドとフランとの会話には相槌を打つだけになった。

元々饒舌に話すほうではないので特に不審に思われなかったようだ。

二人の会話によると、フランはテッドと同じ18歳で、出身はウクラインの近くの小さな村。肌が黄色いのは母親がアイスル教国の砂漠地帯の民族だからそうだ。つまりアイスル教国、地球でいうサウジアラビア辺りの人種は黄色人種ということか。父親の仕事につれられてたまにウクラインに来て憧れており、生まれた村は余所者の母に冷たかった生まれ村を母の死とともに飛び出してきて、戦闘を行う者として適正があったために『空駆ける虎』に目をつけてもらえた、というのがフランの経歴。

【根源管理】で見ると、【未来線予知】【攻撃強化】【切断強化】【危険察知】という戦闘系恩寵があった。これはまた便利な技能が揃っている。

中階【危険察知】で不意打ちを防ぎ、中階【未来線予知】で相手の動きを先読みし、低階【切断強化】【攻撃強化】で持っている力を超える攻撃を繰り出すことができる。

こんな有用な恩寵を持つって王国政府や貴族に知られたら、高待遇で召し上げられるだろうね。

細かい恩寵は普通の人にはわからないから、何か恩寵をもっているそれが戦いに役立つ、としか見られていないだろうが。

テッドは王都の近くで生まれたある程度裕福な家だったのだが、若いうちに旅したいということで家の反対を押し切って、冒険者が多いウクラインにまでやってきたらしい。

ちなみにテッドは戦闘系恩寵は【爪攻撃強化】【麻痺毒（弱）】という、人間にはほぼ意味がないか、使ったら自分が大変なことになるものくらいだった。

テッドもそれなりに魔獣は殺しているが、恩寵を吸収できないこともあるし、吸収したとしてもどんな恩寵かわからないので習得していることに気づかれない恩寵技能も多いのだ。

テッドは他にも【雑食】【毛皮硬化】なんて人族には意味のない恩寵をもっている。低階ばかりなので容量的にはそこまで逼迫していないが。

いつのまにか駄スキルばかりで埋まって才能限界に達してしまうこともあるこの世界はやはり怖いな。

夕方になって野営の準備が始まった。

ここまでの道のりは街から近いこともあり、道には魔獣は一匹も現れず、馬に乗って先行しているエメリーナさんたちが、野生動物を

食事をするために狩ったついでに追い払う程度だった。朝の食べたぶんは昼休憩で吐いたし、戻す危険性を考えて昼も食べていなかったなのでお腹はペコペコだ。

動物は狩ったのに魔獣は追い払ったことを根拠に、魔獣は食料にならないのかとエメリーナさんとザルモンさんに聞いてみた。

「そうねえ、魔獣は人に害をなす動物のことを言うから食べられるものもいるわよ」

「動物だも全部が全部食べられるわけじゃねえってのと同じことだ」  
確かにそうか。

なんとなく前の世界の影響で狼や熊は魔獣じゃなく動物って分類で考えてしまいが、この世界の基準で言えば熊や狼も人を襲う限りは魔獣に分類されるんだな。

夕飯を準備し終わる頃には暗くなってきていた。外では特に明かりが貴重なので19時くらいには活動を終えるように準備がされる。夕食は各自が持っている硬いライ麦パンと狩って来た兔の焼肉、少しずつだが鍋で食べられる野草と干し肉をちぎって入れたスープだ。顎に顎関節症を抱えている自分にとってはパンは固すぎて噛み切れない。だからスープに浸してふやかし食べる。行儀が悪いと思ってしまうが、こんな世界だ、贅沢はできない。

贅沢ができるようになるのはいつかお金を大量に稼いでどこかの街に住み着いてしまう時だろう。

いまはまだお金も少ないし、この世界の危険性を調べきっていない

ので安心して枕をたくして眠ることができない。  
まだ見ぬ恐怖があるかも思っているのだ。自分でも臆病だとは思  
う。

枕なんてここにはないのだが、と自嘲的に呟き、天幕の中で横にな  
る。今夜は不寝番でない。

ちなみに人形は外に座っている。この世界では寝るときも恩寵が刻  
まれた装備なら必ず手の届くところにおいて、壊されないようにす  
るのだが、私と人形の場合は人形の方が強いので抱いて寝る必要は  
ない。

朝、不寝番を交代でしていたものは若干疲れているようだ。特に昨  
日不寝番を何時間かやったフランの顔色がひどい。  
軟弱なやつめ。自分のことは棚にあげて呟く。

私の場合には睡眠を必要としない人形が常に不寝番をやっているからぐっすりと眠れるのだ。

人形の方が【犬嗅覚】と【蝙蝠聴覚】【発超音波】ではるかに広い索敵範囲を誇るのだから私がいても何も意味がない。人形に察せないなら私にもそうだからだ。

今夜の不寝番は仕事だし何事も経験ということでもじめにやるつもりではあるけどね。

ちなみにこの世界は朝ごはんは食べないものも多いとのこと。なぜなら動き出すのが朝5時から6時で、そのまま仕事を昼までやってしまっからだ。朝食を欠かさずに食べるなど貴族のすることらしい。

「うっせ。今から少し仮眠とるから有事になったら起こしてくれ」  
そういつて軽くかわし馬車に乗り込むフラン。君は【気配察知】があるから敵意を持った存在が近づけば自動的に気づいて起きるでしようよ。

さて、数時間後それが現実になった。

馬車に揺られている　　少しだけ慣れたが、しかし気持ち悪くてグロッキー状態　　私は何も感じなかったし、人形も特に何も言っ  
てこなかったのだが、

『ガバツ！』

と跳ね起きたと思ったら、フランは進行方向の右ななめ前方、北西の方角をじつと見つめたのだ。

私はポカンとしていたのだが他の馬車詰めメンバーは即座に武器を構え、フランの視線を追う。

「あそこの森、ここから100mに数人の気配がある。」  
馬車の周りにいたメンバーに聞こえるようにフランが注意を促す。

【気配察知】で勘付いたのだろうか、さすが中階、すさまじい効果だ。熟練度もかなり高いのだろうか。馬で先行しているザルモンさんや『空駆ける虎』のメンバーも気づいていないというのに。

各自身構えていたが、結局馬車がその近くを通り過ぎた時も何もなかった。

「この辺りでの盗賊情報ってあったっすっけ？」  
テッドがエメリーナさんに話しかける。

「いや、聞いたことはなかったはずよ。でも新しく住み着いた可能性もあるから今夜は気をつけましょう。」

時間があれば盗賊の拠点くらいは見つけておきたいが、最優先なのは荷物を守ることなので、天幕の周りにトラップを大量にしかけて敵襲に備え、夜陰に乗じて夜襲があれば返り討ちにすることをエメリーナさんが提案、周りも賛同したので私も同意する。

そして少し進行方向右側へ警戒を強めることを確認しあつて散らばる。

私も馬に乗る練習をしないとたほづがいかかもしれない。荷物番くらいしかできていないのはつらい。

『くいつくいつ』

突然ロープが横に引つ張られる。

「私も、気づいてた、もん」

……どうやら人形、私がフランのスキルの便利さに感嘆していたのを見てむくれたようです。

本人が言うには「自分もフランより先に気づいていたけど、脅威度が低いのでご主人様の耳に入れるまでもない雑事だと判断した」とのこと。

この子、最初に私が馬鹿にされたのにも怒っていたし、フランには敵愾心を燃やしているようです。

精神年齢は人間で言うなら6歳くらいか？ 自分のものをとられるというのを嫌がるという気持ちを持つようになったのか。

愛いやつめ。娘の成長をみているようでつい笑みがこぼれた。



## 7話 護衛任務（後書き）

盗賊編はあと二話、かな

読みにくいところとか教えてくれたら助かります。

自分的には会話を続けるがあまり好きもとい得意ではないので主人公のセリフは極力減らしています。

うまい掛け合いがぜんぜん浮かばないので。。。

## 8話 誤算と盗賊と

『ピーーーーー！』 「ぎゃあああああ」

警笛と悲鳴が鳴り響いたのは夕方に差し掛かる頃、そろそろ野営地を決めなければと速度を緩めた頃だった。

「なっ！ どういうこと！？ なぜ南から賊がやってきている！」  
エメリーナさんが叫ぶ。

南から、進行方向の左ななめ前から馬にのって襲来する盗賊は明らかに準備が整い統率されてこちらに向かってきている。  
たしかにおかしい。

こちらは馬なのだから相手が馬に乗ってアジトに知らせにいつても、夜になってこちらが野営しているときにしか追いつけないと考えて野営中に備えようとしていたのに、敵は盗賊がいると思っていた逆方向からやってきたのだ。

よって警戒が逆方向に向いていて接近を許してしまった。今の道の南には隠れやすいところが多くあったというのに、襲ってくるとしても北から来る想定をしていたために注意しておらず、すでに大きく接近を許している。

『ガキンツ、ガチャン！』

考えている時間はないようだ。ザルモンさんが馬に乗ったまま相手

と接敵し大剣を振り払うのが見える。

私たちの仕事は馬車の護衛、勝利条件は盗賊の追い払うか馬車が振り切るまで時間を稼ぐこと、敗北条件は荷物を奪われること。

今は逃げ切ることを主要として馬車を走らせ続けているため、馬に乗れない私やフランは馬車の上で荷物を守るしかない。逃げ切れないと判断した場合は降りて盗賊を追い払うまで戦い続ける。このあたりは事前に打ち合わせしてあるのであわてることはなく、敵を確認する。

道の左斜め前から迫ってきている盗賊は5人ほどだが、リーダーらしき男の根源は大きく、中階恩寵の【剣裁き】をもっていて、互角以上にザルモンさんと打ち合っている。ザルモンさんは下位互換である【剣使い】だから剣をもった正面からの戦いでは不利もちろん恩寵で優劣が全て決まるわけではないが　　だ。互角に打ち合い鏢迫り合いながら進撃を防いでいるのは、ザルモンさんの冒険者として修羅場を潜り抜けてきた経験と騎乗の上手さによるところが大きい。ほんの少しの変化でも一気に状況が傾いてしまいそうだ。

残りの盗賊4人はたいした腕でもなく、エメリーナさんや『空駆ける虎』のハマーンさんたち2人で押している。

エメリーナさんたちが盗賊を討伐するまでサルモンさんがもてば勝利は確定だ、と思っていたその時、

『シユンシユンッ!!』

暗くなり始めた空を飛来する銀の矢先が馬車の御者兼商人と、馬車周辺を守っていた『空駆ける虎』の一人に突き刺さる。手綱による

コントロールから解き放たれた馬は驚き走るのをやめてしまう。  
『空駆ける虎』の男には矢が頭に刺さっているのもう助からないだろう。遠くから数矢で直接狙えるような弓をもっているのか、相  
当に距離を詰められているのか、どちらにしても厳しい状況だ。

「どこから飛んできたんだ!？」

御者の安否を確認する手間も惜しく、明らかに南以外から飛んできた矢に警戒するテッド。馬車が止まったためにあわてて外にでるフ  
ラン。

「馬鹿野郎! 馬車から離れるな!！」

こちらの様子に気づいたハーマンさんが、南の戦線を少し離れ、フ  
ランを叱責する

「はやく索敵を!」

最近戦いを人形に任せばなしで久しく感じていなかった危機感に、  
馬車の中からあわてて人形に指示をだす。

だがすでに遅かったようだ。人形が発言するよりはやく状況が  
動いた。

『シユンシユンシユン!』

遠くからの牽制の矢と共にいつのまにか接近していた別働隊4人  
おそらく本命 によって息も絶え絶えの御者が突き落とされ、  
新たに乗った盗賊2人により馬を走らせられる。フランも個人の戦  
闘力が高くて馬には追いつけない。それをわかつているフランは  
馬が加速する前に飛び乗ろうとするが、他の接近していた盗賊に阻  
まれる。それと同時にテッドも押さえられる。

私が入形にある指示をした時に、フランとテッドが何かを叫ぶが、  
どンドン離れていく馬車からでは聞き取れない。

こうして私と人形と荷物の載った馬車は盗賊に率いられて盗賊の本  
拠地に運ばれていくのだった

夜です。笑いながら盗賊たちが乾杯してます、目の前で。

二時間ほど前。

馬車ごと連れ去られた私と人形。止まっしてしばらくしてから馬車を  
あけられるのを感じる。

人形の嗅覚と聴覚による索敵により人数的に打開することは不可能  
と判断したため、人形には動かないように指示し、あけられるのを  
待った。

人形は身体の欠けた部分を、非常事態ということで荷物の中の価値  
の低そうなものを【人形師】によって使い補修して荷物の山の中に  
隠れてもらっている。

そして馬車の扉が開錠されると、私がいたことに一瞬驚いた後即座に剣を突きつけられますが、私の姿を見て武装解除を求めてくる。ああ、やはり私を女だと勘違いしているんだな、と命をとられないことを理解して　それが狙いで馬車から怪我覚悟で飛び降りずにある小細工をしてきたのだからそうじゃないと困る　武器をもつてないことを示すと、乱暴に後ろでに縄で縛り上げられ、うつぶせに床に転がされる。

抗議の声をあげようと視線を上げると、盗賊にしてはこざっぱりとした家々が見える。

って盗賊が家！？　たしかに北のほうでは街や村が盗賊の根城になるといふ話は聞いたことあるけど、王国を東西に走る街道のすぐ近くにもあるとは……森の奥の山の裏にあるので見つかりにくいというのわかりますけど、それでもなぜこんなところに農村が……？

その光景に戸惑っていると軽々と持ち上げられて村の中心にの広場に運ばれる。ガラガラという音もするので馬車もこちらまで持つてこられているみたいだ。戦利品を全員で確認するということが？

しばらくすると馬車を襲ってきた盗賊たち　リーダーらしき大柄の男もいる　が順々に戻ってきている。様々な方向からバラバラに戻ってくるということは、ザルモンさんたちをうまく撒いてきたということだろうか。

リーダーが帰ってくるのと広場にいる全員が輪になって食事を運び、勝鬨をあげながら宴の始まりを告げる。

盗賊たちは自分がどんな働きをしたか武勇伝を語ったり、互いをねぎらいあう者が多い。酒量が増えるに従って盛り上がり完全に油断しきっているように見える。見張りも交代でいつているようだが、この余裕さは冒険者たちを撒きながらの逃走に余程自信があるのだろうか。まさかザルモンさんたちが全滅したということはあるまい、ないと信じたい。

盗賊たちは荒々しい雰囲気のもの少なく、運ばれてくる料理も質素ながらも丁寧に作られたものが多いように見え、食欲を誘うように耐えながら、腑に落ちない違和感を感じるのだった。

宴の間、私は縛られたまま馬車の近くに転がされていたが、いくばくかの水とパンをもらえた。

トイレは何とか一人で行かせてもらえた。武器をもっていないし逃げられないと思われたのだろう。実際反抗するきはないのだし今は。

そして宴が終わると楚々の家に戻っていく。

戦利品である荷物　ほとんどが武器や装備品だった　はなぜかほんの少ししかとらず、全くとっていない者もいた。大量の残りは山腹の洞窟にいれておくようだ。

私はなぜか今リーダーの家　山のきつい斜面の上にあって襲撃されにくく逃げにくい　に連れられていた。戦利品を分け合っている時に盗賊の一人が私をリーダーに見せたら、一瞬リーダーが呆けた

後に「俺が預かる」と言っただけで抱えられ連れてこられたのだ。

いつ犯されそうになって男だとバレルか　あまり猛々しいやつがいなかったからバレても殺されはしなかっただろうけど　戦々恐々していたのに一回も襲ってくる素振りを見せずに宴も終わってしまっただけ。

まさか、このリーダー、私に惚れたか？　不快なことこの上ないけどそうだとしたら生き残る目がでてくる。そしてその間にフランとテッドがアレに気づいてくれれば。

「楽にしる。俺はお前さんを犯す気はない」

身体がこわばってるのに気づいたのかこちらを慮るような声色で声をかけてきた。

ふーむ、ほんとによくわからない盗賊団だ、ここは。このリーダーの影響か？  
いつそ聞いてみるか。

「あなたたちは変な盗賊ですね。ほとんどが普通に田舎の村にいます。うな雰囲気の人ですし、このアジトもただの村にしか見えません。実際には通報されてもしここが発見されたとしても、男手しかいない。少し奇妙だけど平凡な村とみなされるんじゃないだろうか。」

「はっは、予想外に肝が据わってる嬢ちゃんだな。ここは盗賊じゃないのさ」

盗賊じゃない？　盗賊っぽくないのは認めるけど、紛れもなく私たちは荷物目的で襲われたと思うのだが。

「嬢ちゃんには何もしないから安心しな。明日にはここを移るから

長居はできないけど、くつろいでくれ」

そんな重要情報を渡すとはますますもって不気味。冥土の土産に教えてやるよっていわれたほうがまだ納得する。

それに手の戒めを緩めて前で縛るだけにするとはどういうことなんだろうか。たしかにこの男には逆立ちしても敵わないけど万が一を考えるものだろうに。

いすに座っていると、このリーダーが馬車から持ってきた戦利品が目に入る。

仰々しい大鎌だ。なぜ非効率な武器を選んだのだろうと一瞬思うが【根源管理】でみると納得し、絶句した。

柄には『世界樹の枝』が中心にはめられその周りをダマスカスでコーティングしてあり、刃の部分にはこの世界最強の金属とされているオリハルコン。どうやって薄くしたのだろうか。で、その他の部分にも純度の高い鋼鉄であるということにも、金貨何十枚するんだろうと目がくらむ感覚を覚えたのだが、刻まれている恩寵技能を見てさらに驚愕し、驚嘆することになった。

なんと高階クラスが刻まれていて、しかも二つなのだ！ 刻まれた恩寵もすさまじい効果のものだ。

一つは【戦乙女 ヴァルキュリエ】。効果は『戦闘時に全体ステータス大幅アップ』と『敵味方の血が流れれば流れるほど能力があがっていく』。両方ともにアクティブ。

二つ目は【豊穡の女神の加護 ラウニプロテ】。効果は『保有者がいる土地周辺の土壌を数段階良いものに変える』と『保有者が認識した植物の成長を数倍に早める』。前者がパッシブで後者がアク

タイプ。

【戦乙女】は素人であっても戦場の雄となるだろうし。【豊穰の女神の加護】は土地がやせているエウルーパー王国としてはのどから手がでるほど欲しいスキルだろう。国を順番にまわっていけばそれで飢饉がなくなるだろう。両スキルとも女性しかもてないことなどデメリットになりはしない、表舞台にできれば所有者を歴史に残す恩寵技能だ。

この二つを内包しているのだからあれだけの最高級素材で作られているのも納得する。

実際に、【根源管理】によると大鎌の根源ぎりぎりいっぱいに入っているし、

また、ステータス情報などがはいっている立方体が無理やり高階クラス恩寵二つに押しつぶされているので、この鎌はどれだけ刃を研いでも二度と物を切ることはできないだろう。下手な刺激があれば内からはじけ飛んでしまいかもしれない。

だがどうやってこんな不安定な、武器ともいえない武器ができあがったのだろうか。相性の悪い、しかも高階スキルが二つ刻まれていることから天然物ではありえない。

【戦乙女】と【豊穰の女神の加護】を持っていて且つ【恩寵彫金】を所有している人物がいたとしても、私の【恩寵刻印】じゃない限り高階恩寵は刻めないはずだし、そもそも前者二つをもっているものが他の物に与える行為  自分の希少性価値を減じる行為  などするわけではない。

「その大鎌の価値がわかるのか？」  
「いつのまにか近くにいるリーダーが、まじまじと見つめていたのに気づいて声をかけてくる。」  
と同時に桶とぬれたタオルを渡してきた。

身体を吹いていいのだろうか……？ 腕の戒めがゆるくなったことも、パンをもらえたことも驚いたが、ここまで待遇がいいといぶかしんでしまっ。

「そいつの中から泣き叫ぶ声が聞こえるだろうか？ 早いうちに解放してやらなきゃなんねえんだ」  
大鎌のほうに顔を向けながら焦点のあわない目をするリーダー。口から出た言葉は私に言っているようで独り言のようなものだろう。それにしても何をいつているのかわからない。根源が見える私でも根源が内から壊れそうになっていることがわかるだけで、根源に悲しみなどの感情は読み取れない。

『ト』  
『ト』

と机に少しだけ湯気をたてるスープと比較的新しいパンが置かれる。  
「宴会のときにはほとんど食べていないだろ？ これを食べな。明日は長時間動くからな」  
困惑している私に娘を慈しむような表情をして食事を勧めてくる。その笑顔につられて、食べないのは悪い気がし、少し温くなってい

る野菜入りのスープを飲みパンを咀嚼する。  
まったく、ここに着てから調子を狂わされ続けている。対人経験の  
不足が祟ったのかもしれない。

その後も寝る前まで他愛のない会話をしたり、身体の調子を気遣わ  
れたりしながら眠る頃合となった。

やさしく抱えられ違う部屋につれていかれてベッドに下ろされた。

このリーダーの細かい気遣いを見てみると、上位世界での家族や死  
んだ祖父を思い出してしまいセンチメンタリズムに沈む。

寝かされた部屋を見ていると 既に暗く、ろうそくの明かりしか  
ないためにぼんやりとしか見えない 盗賊には甚だ似つかわしく  
ないファンシーな部屋だった。現代の思春期の女の子の部屋ほど色  
とりどり自由に飾ってあるわけではないが、この世界では十分気合  
がはいった部屋といえるだろう。

一見して女の子の部屋なのかとも思ったが、それにしても飾り方も  
色合いのあわせ方も違和感がある。

と、ここまで観察してから栓のないことだと思い、近くに人形がい  
ないことをさみしく思いながら瞳を閉じた。



8話 誤算と盗賊と(後書き)

次シリアス？

はやくほのぼのまでいきたいです

## 9話 疑問と救出と(前書き)

長くなったので分けることになり、盗賊の話があともう一話だけあります。

## 9話 疑問と救出と

ストックホルム症候群（ストックホルムしょうこうぐん、Stockholm syndrome）は、精神医学用語の一つで、犯罪被害者が、犯人と一時的に時間や場所を共有することによって、過度の同情さらには好意等の特別な依存感情を抱くことをいう。

リマ症候群は、ストックホルム症候群とは逆に、監禁者が被監禁者に親近感を持って攻撃的態度が和らぐ現象のこと。

Wikipedia「ストックホルム症候群」より引用。

この気持ちはストックホルム症候群なのだろうか

私は今、人形とともに何とかリーダーを川から引きずり出し、近くの小さな自然洞窟ともいえないほどの小さな洞に寝かせる。人形がリーダーの身体を少し持ち上げてくれていて間に硬いゴツゴツした床に適当に取ってきたわらのような草を大量に敷き詰めた。

『ゴホッ』

口から血が混じった咳がでる。あまり猶予がなさそうだ。

急いで【根源管理】を全力で発動し、周辺を見渡す。無理な行使

それも本来の熟練度を越えるほどの　により肉体的にも精神的にも根源に引つ張られ軋むが、治療に使える薬草を見つけないければならぬ一心で耐える。遠くに痛み止めと治癒を助ける薬草が『視』える。行かなくては

なぜ私は盗賊のリーダーを助けようとしている？

人形はさつきから指示に従いながらも私のほうをチラチラと見ている。

表情が細かく読める私でなくてもその面様が表す情感を即座に理解できるだろう　私への憂えだ　。

従者からの、娘からの心配に、後ろ髪すら引かれずに身体に鞭打ち続けているのは何故か。

きつと、はつきりさせたいのだと思う。

リーダーの私への家族へ向けるような笑顔、大鎌に向けた空虚な瞳、アンバランスな部屋、盗賊にしては異常な本拠地、数々の不可解な発言、それらの理由を。

このまま聞かずに行ってしまっただけは、逝かれてしまっただけは、絶対にあとで悔やむ時がくると直感しているのだ。

重くて少し気を抜けば動けなくなってしまふ身体　無理もない、山腹を転がり落ちたあとに川で流されたのだ　を鞭打って進み、薬草を岩で削りエキスをリーダーの胸に大きく開いた傷跡に垂らし塗りこむ。応急処置にもならないが今できる全てだ。

こんなときに有用な恩寵技能も技術ももっていないことが悔しい。傷跡は人形の【蜘蛛糸作成】と【糸繰り】で少しでも塞ごうとするが、内臓自体を貫かれているためにほとんど意味がなく、シルクのような白く艶かしい輝きを放つ糸を赤黒い鮮血が妖しく染める。

『じゅっ、ひゅー、ひゅー……』

少しは効果があったのだろうか、リーダーの苦しそうな呼吸は変わらないものの、目を覚まして開口一番に声を発した。

「  
」

それは唐突だった。

朝起きると贅沢なことにすぐに食事をもらえた。水を汲んだ桶を渡され顔を洗う。

その後匂い消しの薬草までもらう。

昨日と同じように高待遇。今日も一日中ペースを崩されるんだろうな、という思いと共に始まった。

が、予想以上に早く不思議な平穩の終わりが来た。

今日は夕方から雨が降るぞということ、早めに出発という話を外の大人たちがしていて、実際に昼前に集団で村を出ようとしたのだった。

私はリーダーの家に路銀と共に置いていかれた。

ほんの数分で騒がしい音が聞こえ始め、家にもすごい速度で音が近づいてきてリーダーの家の扉を蹴り開けた。

「クロノ！ 大丈夫だったか！？」 「ご主人！ 様！」

息を切らして入ってきたのはフランと人形だった。即座に私の腕を前で縛っている縄を切る。

「なにがあつたの！？」

フランに思いつきりあきれ返った顔をされた。

「なにがあつたもなにも……お前が人形を使って俺たちを盗賊のアジトまで呼んだんじゃないか。急いで来たつてのによお」

心配の中に脱力が入っていくのを見て取れる。

「え、じゃあ今ザルモンさんたちは！？」

「もちろん逃げ出していた盗賊を追撃してるぞ。俺もまたすぐに行く。お前はここで待」

最後の言葉を聞かずに私は飛び出す。フランは虚を突かれたが、人形はすぐに私に並走する。

「どう、したん、です」

人形が私の鬼気迫る様子に遠慮がちに声をかけてくる

どうしたもこうしたもない。

彼らは盗賊じゃないのだ。いや、盗賊行為を一回でも働いたのは確かだし、仲間をやられた『空駆ける虎』のメンバー、ハーマンさん

達は絶対に盗賊を許さないのもわかる。

それでも、彼らはどうみても完全な悪人ではない。少なくとも理由を聞かずに殲滅していい相手ではない！

普段とは考えられない速度で地を駆ける。まだ山の中での下りだから馬車を馬で引くのはできないはず、つまりそう遠くに行っていない。行つてできれば戦闘をやめさせ仲裁を呼びかける。うまくいくとも思えないが、意味もなく消える命は減らせるはずだ。

数分後、血の臭いが濃くなり、物言わぬ死体となつて転がっている盗賊がちらほら見える。

私からみて手前側に、大鎌を背負つたリーダーが右手に剣をもち、血を流しつつも冒険者3人に対して奮闘しているのが見える。しかし少しずつ傷を食らい斜面の方、山道から外れそうになっている。盗賊の死体の数が少ない。残りには逃げる事ができたのだろうか、リーダーが時間を稼いでるようだが。しかしこのままではリーダーが殺されてしまう。

その時、今まで押していた3人が何故かバックステップで距離をとる。そこを戦闘を止める千載一遇の好機と捉え、

「やめて！ とまっ」

3人とリーダーの間に飛び込んだのだが、

『シュッ！』「馬鹿っ！」

この世界に召喚されてから聞きなれてしまった遠距離攻撃の音が聞

こえる。矢だ。迂闊だった。距離をとったのは矢で牽制するた  
めだったのか  
死ぬ直前だからか、私の意識が加速され周辺の時間が遅れ始めた時  
に、血相を変えて私のほうに飛び込んでくるリーダーが見える。

「ぐっ！ あああああああ！」

私を庇い矢を腹に受け苦悶の表情を浮かべるが、しかし私を力強く  
抱いたまま山腹を転げ落ちていく。

幾度も回転し身体が宙を浮き下にたどり着いたと思ったら冷たい感  
触。上下がわからぬまま流されていく。

少し流れが弱まったときに状況を確認する。

私を守り気絶しているリーダーを、今度は私が支えながら顔を水か  
ら出すことに成功。

やはり川に落ちて流されているようだ。

だが状況はまずい。私はカナヅチだ。最も苦手な運動が水泳だった。  
どうにか浮かぶだけでもしようと思えばたばたとさせるが、足がつか  
ないことを理解するだけで無情にも私とリーダーの身体が沈んで  
いく。

しかしその時私の身体に巻きつくものを感じた。

糸だ。それも何十にも重ねられた糸。

ブチブチと私とリーダーを支えられずに嫌な音をたてて切れていく  
傍らから補完されていく。いったい何が……

そこで見えたのは、深く埋まっている岩の裏からこちらに糸を出し

続けている人形だった！

人形は私たちから見て岩の裏に身体をいれ、その陶器の身体を軋ませながら踏ん張っているのだ、

しかしそれだけでは踏ん張れずに言わばの後ろにある木や地面にも糸を飛ばして自分の身体を固定しようとしている。狙いが外れて踏ん張りになるわけがない小さい石にまで糸がついてしまうことがあるのは 表情は物理的に見えないが 人形も相当必死でやってくれているのだろう。

ここまでされて努力の結果を踏みにじるようなら、私は頼りないダメ主から最低のクソ主になってしまう。

糸を片手で上手く手繰り寄せつつ岸に近づいていく。そして握力が完全になくなってしまいうぎりぎりですべての岩に手をひっかけることができた。爪も指も割れてささくれ血が出ている。

人形が最後に思いつきり引っ張って私たちの身体を地上にあげてくれた。

「ご無事、でよかつ、たです」  
荒い息を吐いていると人形がやってくるが、その姿に絶句してしまふ。

その左右対称完璧な黄金率でその美を発していた身体は右半身がほぼなくなり、私が純白と呼んでいた美しすぎる腰まで伸びていた髪も今では肩口にも満たない。

そんな状態でも私を気遣ってくれる健気な、できすぎた従者には最

大限の感謝と報酬を持って報いなければならぬが、何ももっていない私にはなんとか動く右腕で短くなつた髪とともに頭を撫でてやるくらいしかできなかった。

この子がここまでボロボロになつた原因に思い至る。

盗賊たちに馬車ごと連れられる寸前、この大陸でじゃ珍しい私の黒髪を目印に『蜘蛛の糸』とともにテッドとフランのほうにとばし、そこからは目立たないように 盗賊にばれないように 細い糸を木に沿って貼り付けていったのだ。

そうすることでテッドたちにアジトまでの道を教えるという、とっさに思いついた「ヘンゼルとグレーテル作戦」である。

荷物を落として目印にすると盗賊に気づかれる可能性が高いので、要所要所に私の黒髪を切つてはりつけることで対応した。

その後、村内に運ばれた時にはまだ盗賊たちに対して強い危機感をもっていたので、早めに援軍にくるように人形に直接案内するように支持したのだ。

そうすれば、透明に木々の間を伸びる蜘蛛の糸に気づかなくとも、黒い髪を目印を探っているうちに人形と会える可能性が高いという寸法だ。

それだけでも人形とはいえ精神的に相当疲労していただろうに、私とリーダーが斜面を転がり落ちた時も真っ先に追いかけてくれたのはこの子だったのだらう。その小さな身体を懸命に動かして追ってきたのだ。

そしてあの大規模な【蜘蛛糸生成】の行使。

私の想像する以上の量を生成しなければ人間二人は支えられなかつ

たのだろう　元々蜘蛛の糸は粘着性が強い代わりにばね係数がかなり低い　、糸を生成するために自慢の陶器の身体を惜しげもなく使っても無残な姿になってしまったのだ。

結局この子がやることは全て私のためで私のせいでポロポロになっている。

この半身にいつか報いることができる日が来るのだろうか。

さて、リーダーの状態を確認する。水を飲んでいるが、息はできている。

しかし転げ落ちたとき刺さったのであろう細い竹が背中から腹側に貫通している。まずは止血しながら抜かなければ。

腰に下げていた大鎌はなんとか身体から離れていなかった。少しは衝撃を和らげてくれていたかもしれない。

半壊している従者の手を借りて、無様な主は自分を庇った戦士をここから見える自然の洞に運んで治療することを決意するのだった。

目が覚めたリーダーが開口した。

「あなたは、天使……いや、死神か？」

「どうせ、どっちもろくでなしだよ」

何をねぼけているのだろうか、と思いつつも率直に浮かんだ言葉を返す。

「あ、ああ。お前か。無事だったか？」

「あんたが無事じゃないよ」

何をのんきに私の心配なんぞしてるんだと、矢から庇ってくれた恩人に理不尽な怒りを感じ、つい刺々しい口調になってしまう。それにしてもこのリーダー、案外意識がはっきりしているようで、弱弱しくもはきはきと話せている。死の淵にいるというのに。

「そう、か。痛みはだいぶました。残りは無駄だから自分に使え。あとその恩寵やめろ、お前が壊れるぞ」  
無駄……？ 何が無駄だというんだ？  
と無知に浸れたら楽だったのに。

【根源管理】。この便利で有能な恩寵技能、アンダーワールドで生きていく上で欠かせない私の要素・血肉となっているもの。

それが冷たい現実を無慈悲に無機質に教えてくる。先ほど使いすぎた結果暴走しているのか、オフにすることができない。

『残存 命力 0 %。減 向。 要血液 足。必  
ルギー 不足。残存生存 間 6 秒』

「う、ああ、うわああああああ！」

目を背けたいのに背けられない。薬草の効果で命が減っていくのを少しはゆるやかにしているが、大規模な治療魔術や技能を行使しないとどうにもならない、あっても血液が足りない、そもそも他者治癒系の技能を私も人形ももっていない、どうしようもない！

助からないとわかってしまう！ 物の本質である根源にはごまかしがきかないのだ！

「へ、へへ。そんなに慌てるなお前さんよ。ほんとに、普段すかしているのに大事なときには全力になって感情豊かになるところが、俺の娘とそっくりだ。すまなかった、な。家で娘であることを押し付けようと、してしまった。」

絶望している私に向かってリーダーが話しかける。

娘？ やはりあの笑顔は私を娘に見立てていたということなのか

「自分の身体の状況は、自分でわかる。最後に、俺の話聞いてくれない、か？ 娘がどんな表情をして笑って泣いていたかを、思い

出すことができたんだから、思い残すことはほとんどない。  
「  
そう言って微笑むリーダー。」

私が口を挟む前にリーダーは語り始めた。

10話 過去と天使の約束と名付け（前書き）

人は残酷なのです。

## 10話 過去と天使の約束と名付け

「もう3年ほど前に、なるかな。  
ここよりもさらに北の村に住んでいて、俺には目に入れても痛くないほど可愛がってた娘がいたんだ。」

娘はさ、生まれた時から不思議な威容を放っていて、物心ついたときには身から溢れる存在感に周りの全ての人がその畏怖を覚えるほどだった。この子は将来すごい子に、それこそ歴史に残るような大人物になるんじゃないかって気楽にまだ生きていた女房と喜んでた。

この頃は恩寵技能 グレイススキル ってもものにもあまり気を払っていなくて、たかだか人それぞれが持つ技能や才能を、王国の人間が名称付けて特別視してるだけだろって程度の認識だったのさ。

12歳の頃には、娘が村を歩くと人はその存在を無視できず、魂の大きさに恐怖するか、ただただ尊敬し平伏するか、誘蛾灯に集められる蛾のように娘み群がるものに別れ、

娘が畑の近くを通るとみるみるうちにやせた土は越え、植物を見つめると一年かかる植物が数日で生ってしまう。

ここまでいくとさすがに周りの人間が怖がる気持ちも理解できてきた、もちろん娘を怖がるなんて親失格だから恐怖はしなかったが、一個人、ただの人間には明らかに過ぎた力だ。

14歳の時には、娘のことを生き神と崇める者と化け物と恐怖する

者に二分され、どちらも娘を人間として見ていなかった。それに気づくと普段から感情を表に出さなかった娘は、親ですら見抜けないポーカーフェイスになって家から出なくなってしまうんだ。

『過ぎた力は人を不幸にする』とは誰の言葉だったか、自分の娘の不幸でなるほど金言だと理解したよ。

しかしこの時点でも俺は甘かった。過ぎた力を持った代償はこの程度じゃなかった、人間扱いされないだけじゃなかったんだ。

女房が亡くなるとともに、いい踏ん切りだと思つて娘と離れたところに引つ越して、娘を対等に見てくれるような人間が現れるまで、現れないなら俺が傍で見守ろうと考えていたのだが、さびれたところにも関わらず、どこからか『聖女様』の噂を聞きつけて押しかけてきた。娘の前にたつと娘の威圧感の前に怯んでしまうのだが、それでも瞳に欲をぎらつかせたやつは諦めなかった。

その後引つ越すこと数回、金も少なくなり、俺も娘も疲れてしまった時にそれは起こった。

すでに王国まで噂は届いていたらしく、寂れた家にわざわざ着飾った集団がやってきて、王都からの勅使だと言い張る。

なぜこんなところに来たかを聞くと、『王都に連れていってやる』と言つてくる。そして「それじゃ質問の答えになってない」と怒鳴つたら聞こえたんだよ、取り巻きの言葉が。

『神から与えられた恩寵の回収をしてやるというのに』って言葉がよ。

これには、娘に対する罵詈雑言を聞いてきた俺でも耳を疑ったね。人あらざる神や化け物という人格として扱うのですらなく、恩寵技能を宿した『入れ物』として見ていたのだから。

この日は実力行使する気はなかったようで、押し問答の末になんと

か押し返したが、最近勢力を北にも伸ばしているエウリーペ王国とはここまで狂っているのかと戦慄して、またすぐ人がいないほうへ引越したよ。

そうすると、こちらの逃げる意図を悟ったようで、暴力を専門とする集団を使い実力行使に出てきた。

何度も誘拐されそうになるが、同じような境遇の者　王国によると『恩寵保護』、俺らからしたら『ただの拉致』、を親族が受けた受けている者　が集まりあつて情報を交換し、娘を守りながら数週間は逃走できていた。

逃走が終わったのは『執行人』という『恩寵回収』を専門とする奴が出てきたときだった。

俺たちが命からがら包囲網を抜けた先にやつらはいて、罨にはめられたと気づいた時には、彼らは身に宿す恩寵と業物の武器で確実に仕留め、蹴散らせていき、とうとう娘のように恩寵回収の対象となつている子たちが集められているところにたどり着いた。

俺たちが死んだか、気絶したか、押さえつけられているか、恐怖で隠れたまま動けない状態になっているのを尻目に、『執行人』は部下から武器を受け取り、瞬きする間もなく一瞬で、あっけなく一人の子供の首を落とした。

これは想像の範囲外で一瞬何も考えられなくなった。

仲間と共に逃げ惑ううちに根源と恩寵について詳しく聞いていたから、『執行人』や部下が恩寵持ちを殺すと吸収してしまい、王やお偉いさんに渡すには自分を殺してももらわなくてはならなくなる。そんなことをするやつはいないだろうという話だったし、実際にこれまで逃げ延びられたのは相手が恩寵持ちを殺せず、誘拐されたのを輸送中に取り返すのができたというのが大きかったのだ。

しかし『執行人』はためらいもなく首を落とし恩寵を回収し、今度

は違う武器　これもまた相当高価な素材を使っていると遠目でもわかる　を部下から受け取って次の子の首をはねる。そしてまた武器を代えてははね、武器を代えてははね、と機械のように作業していく何もできずにほとんどが首を狩られた時点で、ようやっとカラクリに、悪魔の所業に気づけた。

『執行人』は根源に容量いっぱいまで恩寵技能を宿していたんだ！なぜ武器で殺しても武器に恩寵が宿らないかというところ、その武器を使った人間のほうがたくさん根源をもっているからそちらに引き寄せられ吸収されるからだ。では人間の根源にあきがないときは？自動的に持つている武器に吸収される。

そのために業物の武器をいくつも持参していたわけだ。」

……なんとということだ。

しかし、それなら王家や貴族もうまく恩寵を集められる。

人間は世話に手間と場所がかかり、また印象も悪いが、『執行人』が人間に宿る恩寵を武器に吸収して、それを買えば金は多くかかるが、汚名を背負うこともないし、他者への褒美や貢物にする場合も人間を渡すよりずっとずっと楽だ。壊して恩寵を得ないのならば倉庫にいれて何十年もとっておけるのだから。

ハキハキと喋り、自嘲気味に話すリーダー。彼はその相貌から流れ落ちる液体に気づいているのだろうか。

「そうして、恩寵もちの娘たちは首を狩られて、身に宿す恩寵を武器に吸収され打ち捨てられたというわけだ。

その時になんとか生き残ったのが、俺と盗賊団をやっていた10人ほど。俺らはその後、隠れ潜み、貴族や商人の情報を合法非合法あらゆる方法で集め、自分の娘たちの恩寵と無念が封された武器を回収する活動を始めた。

盗賊だけ盗賊じゃないって言ったのはそういうことだ。

輸送しているやつは完全に無関係なのも多くいるし、まあそういう人はできるだけ殺さないようにはしているが、盗賊行為などには間違いはないが、奪うものは俺たちの親族たちから奪われた恩寵が刻まれた物だけで、普段の生活は普通に農村をやっていた。あの山の裏にある村もそうだ。

今回の俺の娘の武器を回収するのが最後だったため、あの拠点は放棄することに決め、子供や女連中は先に新天地に移動させていたというわけさ。

俺の娘を奪った武器は、その能力の地方での有用さゆえになかなか王都に渡らず、また貴族のごたごたに巻き込まれていて情報を補足するのに3年もかかった。

それが普通の商人の荷物のように、大量の武器の中に隠して、しかも冒険者に依頼されたと聞いたときは千載一遇のチャンスだと思っただね。

どこかの護衛に任せると中身を見られて奪われてしまうと考えると、仕事については厳しい守秘義務を持ち、宙ぶらりんのために余計なことに首を突っ込まない冒険者に白羽の矢がたったところだろう。

そんな理由があったとは。しかしこれである村で感じた違和感にも得心が行く。そしてあの女の子らしさをいかにも不器用な人が真似

ようとなりました、と主張していた部屋は、リーダーが娘のことを懐かしんで再現しようとした部屋だったのか。

「あなたの、あなたたちの娘さんたちを襲った黒幕は、誰なんです？」

「該当するやつらが多すぎてわからなかったよ。強いていうならこの王国中央すべて、『恩寵技能は神から与えられたものでしかるべき高貴な身分の者が所有しなければならぬ』という風潮そのものだ。」

ここ数年、ハーヴェイからの王さんがおとなしいのをいいことに、アークライト王朝はその活動を活発にしている、噂だとハーヴェイ支配下の東部の犯罪者に影から支援して恩寵持ちをさらわせているってのうわさも聞く。

今回の輸送先も系列からするとアークライトの派閥へ届けられるものだったはずだ。」

予想以上にこの王国の闇は深そうだ。やはり王都にイカナケレバ。

「ふう、こんなもんかな。事情は。」

それで、思い残したことってのはよ、この、娘の恩寵と怨念が刻まれた大鎌を、王都のやつらにだけは渡したく、ないから、壊してもらえないか。

本当は、俺が落ち着いてから、壊すか、供養したかったん、だが…  
…あと数分しか意識も、持たない。

お前さんなら、恩寵の効果がでないし、娘と同じくらいの、歳に見

えるから個人的にも納得できる。最後の願いだ、売ったら凄まじい、大金になる宝だというのは理解してる、が、どうか壊してくれ！」

「わかり、ました。」

その悲しみの剣幕にほんの少し混じる気休め程度の希望、娘は帰ってこないがせめてものという気持ち。それを汲み取って拒否するという考えはなかった。息も絶え絶えになってきた彼とこれ以上議論するきもない。

そして同時に湧いてくるある思い。

『この世界の不幸をどうにか減らせないか。』

ただの大学生だった自分には過分な願いなのかもしれない。

しかし自分はこの悲しい世界、弱肉強食よりもひどい、強者の娯楽や見栄のために当たり前に弱者が潰される世界を作った人間と同じ出身地なのだ。幾ばくかの責任も感じるといふもの。自分だって様々な下位世界を生み出してしまったらどうから。

そもそも王国の暗いところを探ろうと思ったのはなぜだったのかを考える。

理不尽な暴力の存在などはウクラインにいても知ることではできず、冒険者ギルドに参加して、ある程度のランク　Dクラスから本登録扱いだったらしい　をもっていれば、そうそう王国にゴミのよっくに扱われることはない、ただ安寧に暮らすだけならば、ウクラインで冒険者家業を続けて金をため、王国でも帝国でもいいから市民権を獲得すればよかった

。それなのに、わざわざ王都、王国で最も繁栄しある意味最も後ろ暗く危険な王都に行こうとしているのは、『自分が上位世界の人間で特別な者』だという傲慢な認識があったからだ。

「歪みを正すために堕ちてきた天使、か」  
自嘲する。まさかあれだけ天使（仮）を憎み嫌悪していた私が、自分を天使のような存在だと、心の奥底で思っていたのだ。

でもそれでいいじゃないか。  
ただの大学生？

違う。上位世界から堕ちてきてこの世界の数倍の根源を持ち、天使（仮）から奪った、世界管理用と思われる恩寵を保持している。私の存在はジョーカー、下手したらバランスブレイカーとなるほどの。  
大きな力を持つ者は選択しなければならぬ。使うか使わないか。何も考えずに使おうとしないのは、最大限利用していないのは、ある意味罪だろう。大きな能力にはかかるものが、責任が大きい。  
だから、選択しよう。

「『俺』さ、天使なんだ。上の世界からやってきたんだ。」  
リーダーは、そうか、とだけ呟いた。

「俺はね、この世界から悲しみを取り除くために遣わされたんだ」  
リーダーは、おう、とだけ呟いた。少し笑みを湛えながら目を閉じる  
「約束するよ、弱い者が虐げられない国を造る。いつか必ず。」

リーダーからの返事はなかった。

「最後に一つ、あなたと娘さんの名前を教えて。  
リーダーの唇が動く。ハリス、ヘイゼル、と。」

手に大鎌をもって洞を出る。土砂降りの雨が降っていて川が増水している。涙は心の雨とは誰が言った表現だったか。人形があわててついてくる。

「ナイフを貸せ。」

一瞬俺の雰囲気戸惑い、逡巡するがおずおずと残った左手で渡してくる。

『キイイーン！キイイーン！』

ナイフを大鎌に打ち付ける。雨をつけて塗れた金属と金属がぶつか

り合う音が高く響き渡る。

上位世界からの持込ナイフのほうが根源量から考えてはるかに丈夫だ。いつか大鎌が壊れるだろう。

『カキイン！キイイン！』

金属音が鳴り響く。繰り返し繰り返し。

周囲がぼやけていて、大鎌を押さえてくれている人形の表情もわからなかった。

『ガアアアアーン！』

大鎌が壊れ、高揚感とともに【戦乙女 ヴァルキュリエ】と【豊穣の女神の加護 ラウニプロテ】が俺の根源に入ってくるのを感じる。

大雨で体温が低下する中、その快感にしばし浸っていたのだが、同時に恩寵技能【電心】【剣捌き】【錬金】【料理】【率いる者】と幾ばくかのステータスが入ってきていることに気づく。

少し考え、【剣捌き】を見て得心を得る。

ハリスが逝った。

致命傷は竹による内臓損傷。竹を食らったのは私を庇って飛び降りたときだから、私が殺したことになっているんだろう。明確にわかる、いじわるなシステムだ。

娘は別格ながらも、ハリス自信も相当な恩寵持ちだ。

【剣捌き】と【錬金】 娘さんの部屋にあつた小物類を作るのに役立つただろう。は中階クラスだし、【電心】は低階ながらも情報を遠くへ伝えるという、仕事に困らない超便利恩寵技能。

【電心】をもっていたから、必ず追いつけない距離であつたのに待ち伏せされていたのかと思ひ至るが、もはやどうでもいいことだろう。

そういえばハリスさんは、俺が男だといつからか気づいていたんだな。そのため、安心して【戦乙女】と【豊穰の女神の加護】を吸収させたのだろう。効果がでないのだから。

ふと気づくと、洞の中にいた。  
たくさん葉っぱと糸で毛布のようなものができ、俺の身体にかかっている。

「主人様、倒れた、です。」  
どうやら雨の中疲労で倒れた俺を洞まで運んでくれたらしい。  
その際にまた【蜘蛛糸生成】をつかったようで、陶器の部分が更に減っている。木や岩の色が混じっているのは、欠けた部分を埋め合わせるために【人形師】で補完したのだろう。

「ありがとうございます。」  
人形に感謝してふと気づく。

今までは、指示しなくても話さなくても考えていることを察し共有できていた、半身である人形に名前など必要ないと思っていたが、最近是人形に呼びかけ、相談することすらあるのだ。  
だから名前を贈ろうかと思いつく。

「今までの感謝の気持ちも兼ねて、お前に名前をつけようかと思う。  
なにか希望はあるか？」

「ご主人、様に、つけてもらえる、なら、何でも、良い、です。」

この子の名前は一番多く呼ぶことになるだろうから、真剣にかつ合っている名前をあげたい。

イメージは純白だ。まじりっけのない白。しかし『ホワイト』とか『パールホワイト』では安直にすぎるだろう。

彼女の、岩や木で補填した部分は茶色と灰色となっているが、その上から白い色が侵食して淡くなっている。その透き通るような白い髪は岩肌や周りにあるものの色をすら白っぽく写す。

たしか、上位世界にいたときにこのような、白を被せたような色合いがあったはずだ。美術をとっていたときにも使ったことが幾度がある。

そう、パステルカラーだ。

「パステル。今日からお前の名前はパステルだ。」

「謹んで、お受け、いたし、ますわ。」

パステルはその名の通り、さまざまな色彩をもった恩寵を自分の中に取り込んで、その純白で自分独自の色としていくのだろう。

10話 過去と天使の約束と名付け（後書き）

盗賊編終了です。

次からようやくと王都で、理想国家建国を目指してちょこちょこ動いていきます。

11話 純白の戦乙女と純白の美少女(前書き)

繋ぎ回かな

## 11話 純白の戦乙女と純白の美少女

後日談(?)。

ハリスさんが亡くなった次の日の朝、雨が止んだのでできるだけ堅い地盤を見つけて、ナイフと大鎌でせつせと穴を掘り、大鎌とともに埋葬しました。

この大陸、少なくとも王国では土葬ということがわかったので。

墓標には『ハリス 娘ヘイゼルの魂と共に眠る』って掘り込みました。この世界の墓をいまだに見ていないのでどう弔うのがこの世界の普通なのかわからないが。

大鎌はすでに根源もおかしくなっていてすぐにも壊れそうだったので持って帰ろうという気はおきなかった。

その後、ザルモンさんたち冒険者グループと合流し、盗賊に捕まっていた間はどうかだったかの説明と、人形についても聞かれた。確かにフランやハーマンさんたち『空駆ける虎』のメンバーはパステルのことをただの人形だと思っていたからね。

盗賊の理由については、少し同情そうな顔をしたがそれだけだった。シビアナな冒険者をやってるんだし、元々この世界で生まれて生きていけばドライにもなるのだろう。彼らは実際に盗賊の人となりを見ただけじゃないしね。

あ、あと俺の口調が『俺』に変わってることについても驚かれた。「どういう心境の変化だ」ってのと、「お前男だったのか」っての。『空駆ける虎』のフラン以外は知らなかったんだっただな。

そして隣街まで取り返した馬車でたどり着き、盗賊の被害届をだしたあとに、証人として御者を連れ冒険者ギルドへ。荷物がいくつか紛失してしまったので、最初の契約どおりに弁償金をギルドが払う代わりにクランはランクの降格処分や、次の緊急依頼の強制受注を約束させられていた。

今回の輸送は、大鎌を隠して届けるために書類上は高価なものがほとんどなかったの、弁償金もごく小額で済んだそう。

御者に証人となってもらうのは、この世界では武器や道具を破壊して吸収するのがよくあるので、冒険者が盗賊に襲われたふりをして武器を奪い破壊して地面に埋めた、と疑われたらたまらないからだ。

そんなこんなで、王都までは馬車で8日の距離であります。

今の街から次の街までの輸送任務を探して相乗りさせてもらつつもりなので、今はこの街ルーマンで休息中。もちろん情報集めは俺とパステルでしてます。

そうそう、身体のところどころに土色と緑色が混じった人形もといパステルですが、あの日雨で洞からでられず手持ち無沙汰だったので、【戦乙女 ヴァルキュリエ】を刻んだのだけど、効

果がほんとにやばいです。

元々無尽蔵の体力を生かして狩りを続けていたパステルは、その莫大な根分量も相まってBランクの冒険者ほどの実力が元々あったのだけど、【戦乙女】が加わることでA以上には確実になってるっぽい。

それが証明されたのは4日前、あの約束の日の次の日のこと

人気がない場所にいるからにはもちろん魔獣やゴブリンのような亜人がどこからか沸いてくる。しかもこのあたりにオークの巣があったように、集団で襲い掛かってきた。

それを見て、一応追い返せるかなあ、と思っていたら、【戦乙女】を発動させたパステルが、攻撃にきていた小部隊を瞬く間に一太刀も振るわすこともなく、食らうこともなく、ではなく相手に振らせずらしなかった。殲滅し、そのまま巣ごと全滅させちゃいました。

「気持ち、いい」

これを語るは血の雨を自分で降らせて浴びるパステル談。【人形師】で血を身体の一部として取り込んだため、全体的に紅くなっております。

【戦乙女】怖いな……血が流れるほど強くなるという話だったが、それだけでなく戦闘狂になる効果もあるんじゃないか。

とりあえず、高揚感に身をゆだねているパステルの胸に手を当てて【根源管理】を発動。

パステルの中に新鮮な恩寵技能が浮き沈みをしながら根源に入っていこうと張り付いているイメージを捉える。

ふむ、【精力強化】【媚薬生成】【肉体旨化】【棍棒使い】が種族全体が持っている恩寵のようだ。種族にメスがいないオークの根源は女を求める欲望でいっぱいだった。ちょっと怖かったです。

つか【肉体旨化】って……。『肉が旨み成分を多く含むようになる』。オークは食べたらいいってことか？ たしかに豚っぽい頭してるけど。俺は豚肉はあまり好きじゃないし、魔獣ならともかく亜人を食べるのには抵抗があるのでやめておく。

他に手に入れた個人の恩寵が、【魔獣通じ】【思考強化】【集中力強化】。後ろ二つは頭がいいオークがいたということだろう。

そして低階【魔獣通じ】は『魔獣と心を通じ合わせることができる』とのこと。これで魔獣と気が合えば乗せてもらえるし、熟練度をあげれば【魔獣使い（ビーストテイマー）】になれる。

ちなみになぜオークが魔獣をと思ったのだが、おそらく以前にそのオークが人族で【魔獣通じ】を持った者を殺した時に吸収したんだ

ろう。

根源のそこまで多くないオークでは恩寵の吸収力はそこまで高くないはず　恩寵の吸収性効率については詳しくはわかっていない  
なので運がいいやつだ。

朝食は食べられる野草　栄養があるかどうかは【根源管理】で見ると　俺が採取して、人形が【錬金】で作った鍋でスープにしたものと、増水した川に蜘蛛の糸で罫をつくり、【発超音波】で水中にいる生物の感覚を狂わせて魚をゲット。アジみたいな味でおいしかった。

【錬金】はどうも質量保存則か等価交換の法則だか知らないが、何かしらの保存則は働いているようで、鉄の鍋を作るのに同じ量の石や岩が消えた。  
結構時間かかったし、できた直後に鍋から熱を発していて鍋が自分の熱で溶けかけた。原子の配列が変わったときに熱がでたのか？  
熟練度が上がれば何か変わるかもしれない。  
それでもかなりすごいけどね。上位世界では成し遂げられていないことだし。

そして仲間のもとに戻ろうと、川に沿って歩いてみると、リザードマン数人に遭遇。

今日は亜人に縁がある日だな。もっと上流の綺麗なところに巣を作っていて、滅多に出てこないと聞いていたのだが……もしかして増水で流された？　水中の生き物のくせに。

そんなことを考えていたら、気が立っていたのかこちらに襲い掛かってきた。遠距離からの水を圧縮したものを牽制で飛ばしてくるが、それは牽制用なので流石に俺でも避けれる。その隙に水を潜り近づいてきたリザードマンが何やらとかげっぽい声を発しながら手に持った槍を振るってくる。

『ガキイイン』

しかし【戦乙女】を発動しているパステルがうつとりとした笑顔を湛えながらナイフで刃先を逸らす、どころかそのまま破壊した。ほんと神器化　神器というのは人では作れないようなすごいものの総称とのこと　している気がするよ、上位世界からの持込ナイフ。

何か良い銘はないものか……パステルが使う仕込みナイフだから『白隠』にしよう。

あ、戦闘終わりました。

リザードマンが3体倒れていて1体は逃げていく。遠距離攻撃が未だにないからでは追撃できない。パステルが蜘蛛の糸を飛ばしても届かないとこまで行かれたらどうしようもないからね。これからの課題だ。

え、魔術を使えって？　未だに俺もパステルも魔力を練るという感覚を理解していないのですよ？

魔獣から恩寵技能を得ようにも、ゴブリンメイジみたいにあまり強くなって、且つ【体外魔力行使】をもってる魔獣はほとんどいないし、もしこの中央に近いところを出たら、即座に狩られてお上の人間に謙讓される。

ということでは王都に着いたら魔術の師匠を探してみるつもりだ。全くもって魔術が使えない人族は珍しいので、世俗とあまり係わり合いになってない魔術師がいたら良いのだが。

さて、リザードマンの恩寵やステータスを人形が吸収し終わったよ  
うなので、次は俺がもらいましょう。

快感を感じている女の子の胸に手を当てる、ってエロいな。パステルが人形ボディでなければ役得なのだが。

得たのは【魚鱗生成】 【水泳】 【水中呼吸】 【槍使い】。三匹のだしこんなものだろう。

【魚鱗生成】は防御時には便利かな？ 攻撃された箇所だけ魚鱗化させれば。

【水泳】はカナヅチの俺には念願のスキル！ だが低階のアクティ  
ブなので使用できず。

その代わりとっては何だが、【水中呼吸】は中階パッシブなので使えます。風呂でおぼれる心配がなくなるね。この国に風呂はないけど。

そして仲間の下にたどり着く道程の最後に出てきたのは、タイミン  
グを計ったかのようにラスボス級。  
ジャイアントワームだ。

全長は25mほどで芋虫のような形をしているが、身体の直径とほ  
ぼ同じ大きさの口からは、堅い地面を掘り進むことができる巨大な  
牙伸びている。

本来は人族を積極的に襲うことはないが、この度の大雨で地盤がゆ

るみでてきたのだらう。こちらに攻撃の意思を向けているのは寝不足でイライラしているからかもしれない。

「パステル、やれ」

先手必勝だ。こちらに殺気を向けている相手に配慮などしなくてはいいだらう。

動物をみだりに殺生してはいけませんという倫理観は、この世界に来てそうそうに取っ払われましたよ？ 俺の場合は直接手を下していないから、いまいち実感が無いというのも大きそうだがね。

『グアアアア！』

あちらさんもこちらの攻撃の意図を悟って、口を開き牙を輝かせる。既にパステルはその小さな身体からは考えられない速度でジャイアントワームの胴体部分に近づき、ナイフ『白隠』で銀光を閃かせる。ジャイアントワームは首を上げたまま悲鳴を発し、胴体部分を動かしてパステルを押しつぶそうとするが、パステルはすでに反対側に飛んで白隠で切り裂く。

無駄を悟ったのか今度は首を下げ、パステルを牙で突き刺さんとする。しかしそれが狙いだ。

口を大きく開けたところを、パステルは前転して口のなかに入り込む。突然の愚行としか思えない行動 自分から餌になりしてきた

によつて、ワームの思考に一瞬の空白ができる。その隙にパステルの白隠が口の中で舞う。

堅い外殻を捨て内側からの破壊を試みたのだ。小さく、少々の酸では溶けない身体を持つがゆえの戦術。逆に【強酸生成】で口の中から器官を溶かしていく。

その後もしばらく暴れていたジャイアントワームの頭頂部から脳漿とともに白隠が突き出て戦闘の終わりを告げた。

体液と血液でベトベトになっていたパステルだが、血は【吸血】や【人形師】で生命力に変換したり身体の一部とした。体液はすぐ傍に川があるので問題ない。少し壊れた部分は【人形師】で材料を補填し、【再生】によって整える。

ここまですが戦闘後の流れだ。

俺と違ってパステルは俺が与えた全ての恩寵技能を使えるので、使い方も堂に入っている。最初は人形が【人形師】を使えるのに違和感をもったものだが。

さてと、またパステルに手をあてて吸収。

これからやることにはいくら力があっても足りないくらいなのだ。

金も人脈もない者が虐げられる人々を救おうと考えているのだから。

ちなみに【錬金】を使わせての金貨銀貨造りはかなり難しい、いや効率が悪すぎる。熟練度があがればまた変わるのかもしれないが……。

そこの石ころから金に変えるのが大変なのはわかりやすいが、細かい作業　つまりは彫金　には向いていない。建造物など大雑把に作る時には重宝しそうなので、熟練度をあげておくようにパステルに指示する。

新たに得たのは【鑑定 鉱石】【鑑定 宝石】【鉱脈探索】。

鑑定系二種は【根源管理】がある俺には無用の長物だが、【鉱脈探

【索】は相当有益なものになるだろう。

とことごと歩いてくるパステル。未だに恩寵を刻まれた高揚感から顔が赤い。敵を殺したときと、私が回収して刻む時、一度の恩寵で二度おいしい！ のかもしれない。

「ジャイアントワーム、A、です。」

まじで！？

とうとう才能ある人の到着点であるAランクまで来てしまいましたかパステルさん。

主の俺はいまだに戦闘力Eですけどねー。

実際肉体疲労が人間よりはるかに少なく、自由に改造できる人形は人族をはるかに越えていくだろう。ということはこの世界では人族よりも無生物が人格もったほうが強いってことか。

やはり上位世界でもそうだったが、人族は身体的にもろいなあ。上では科学力、この世界では繁殖力で栄えているけども。

俺も身体を人外化してみるか？

これからやろうとすることで数年で終わるとは思っていないし、維持するとなれば数十年かかるだろう。その間に老いて能力が下がるのは少し拙い。不安定な組織を作ろうとしているのだから。

それに上位世界での俺の専攻は生物工学、バイオテクノロジーで、人側に偏っていたので、人類究極の夢である不老不死には大いに興

味がある。

分野的には生命医学とでも言うべきで、大学受験の時に医学部か理学部かで多いに悩んだ。結局研究に入れるのが早い理学部に進むことにしたが。

まあ興味があつて将来研究してみたいというだけで、所詮二回生まで終えた程度の知識。うちの大学では二年で学部を決め、三年から進む。しかないので、科学的なアプローチでの不老不死は達成できそうもないが。実際に科学的な研究をできるようになるには、実験道具の作成から始まるので十年は最低でもかかるだろうし、上位世界の最先端レベルの研究ができるようになるまで、どれだけの時をかければいいのか想像もつかない。ただの大学三回生が一から科学者を育てなければならぬのだ。

そう考えると不老化はそのうちやっておきたい。この世界には魔粒子が存在し、物理法則を超えた恩寵技能があるファンタジー世界だ。上位世界よりはやりようがあるんじゃないかと思っている。

そうこうしてるうちに、十日間のルーマン滞在も終わり、王都への旅路が始まったのです。

今乗っている馬車　馬は鞍もないので乗れなかった　はレンタ  
ルしたもの。レンタカーみたいなものですね。

王都につくと同じ系列の商人に貸し出され、荷物を載せて帰ってくるのだとか。

ちなみにジャイアントワーム討伐後に持ち帰れた極少ない素材  
牙や腹にたまっていた宝石　で金貨3枚になりました。素材に3  
00万つて……。今までちょこちょこ稼いだのがばかばかしく感じ  
ます。

さて、なぜいきなり丁寧な物腰になっているのかと申しますと、  
御者が超絶に美少女なんですよ！　しかも17歳くらいの！

服は薄い桃色のノースリーブドレスで汚れないように下を縛ってい  
て、腕には肘まで覆い隠すロンググローブ、頭には貴族の婦人が被  
るような帽子。

ドレスの上からでもスタイルの良さが伺え、帽子の下の髪は透き通  
った純白。肝心の顔は人形のような完璧な配置、幼さが少し残るが、  
計算されて作られたとしかいえない美貌！　紅い瞳も妖しい魅力を  
感じさせ、少女っぽさと成熟した身体と瞳による大人らしさの奇跡  
のアンバランス！

この美少女は誰なんでしょうか!? ぜひお近づきになりたいものです。

「ご主人様、なにをやって、おられるので。」

ちよつと現実逃避に走ってました。もう王都に向けて馬車が出てから数時間。

しかし未だに目の前の光景になれません。

そう、美少女の御者はパステルだったのです。

十日間の滞在中、姿を見ない日が多く、「とうとう親からの独り立ちがあさびしいな」なんて思っていたら、出発の日の朝早くに純白の美少女が現れて、

「ご主人様、お待たせ、しました。」

と言ってドレスの端をちよこんともってあいさつをしてきたのです。その恥らうような笑顔がまぶしくてまぶしくて、こんな良い子にご主人様と呼ばせているうらやま、もとい鬼畜な野郎はこのどいつだ! と柄にもなく興奮してしまって、

いたずらを成功させたような笑顔を徐々に慌てた顔にシフトさせた美少女 もといパステルによって事情を説明されたのです。

まさか自力でボディを全体改造するとは。

たしかに身体体温は人よりいささか冷たいし、間接部分は未だに不自然さが残る。球体間接が入っているからだ。けど、顔についてはまんまそのまま人間です。

顔は人形の顔の表面を使って、人間っぽく調整したとのこと。体温を感じるし、口の中は人間のをほぼ再現。まばたきもします。まだ食道と胃がなかったり、するそうだけどこれで十分な気がします。

「性交は、まだできま、せん」と、普段の口調で区切って喋っているのか、羞恥心で言葉が区切れてしまっているのか。パステルの言。これを聞いた時には悶絶ですよ。『まだ』っていうところがかわいすぎます。

もうこの子はただの人形じゃない、一個の人格をもった生き物なのだし、抱いてもいいよね？  
この世界じゃ児童ポルノとか関係ないし。20歳と17歳じゃむしろ妥当でしょう。

それに俺の外見は呪いによる身長縮小で16歳くらいに見えるそうですし、よりノーマルになります。

ちなみに作成方法を聞いたらかかなりスプラッタでした。  
自分がどこまで切って根源がばらけないかを調べて、核となる部分  
を手探りで推定したって……。  
生身の身体じゃ絶対できないな。

さすがファンタジー。

俺の不老化もここなら実現できるかもしれない。  
という希望がもてたのだった。

11話 純白の戦乙女と純白の美少女（後書き）

次回からやっとう王都だー

とうとうメインヒロインの一人が出てきます。多分。

今までは男がちょっと多かったかな。

## 12話 王都と雷少女

エウリーペ王国の王都スウィザード。

王城を中心として城砦都市で、遠くからでも見上げるほどの城門をくぐると、外の街道よりも数倍に広い、中世ヨーロッパレベルの文化の割りには格段に整備されたといえる大通りが、はるか遠くに見える王城までまっすぐ通っている。

砦を突破されて壁の中に入られると、簡単に王城までたどりつけてしまふ構造なのは、常勝を謳う王国の驕りなのか、余程自信があるのか。

実際に王国から攻め込むことがあっても攻め込まれることは少なく、主要道路にはいくつもの砦があるので、常に内部で割れている帝国や、砂漠地帯にあるがゆえに貧しくて、侵攻などする余裕がなく、自分たちの聖地を唯一無二の聖域として宗教で心を保っているアイスル教国では攻めてこれないだろう。

正直、エウリーペ王国に攻め入るメリットも少ないのだ。長年の軍功を裏打ちする、恩寵技能を多く持つ精鋭部隊は厄介な相手だし、撃破しても手に入るのは痩せた土地と先住民族の反発くらいなのだから。

さて、人通りも活発で明るい、名実ともに王国の一番の都市であるスウィザードだが、やはり裏通りは別世界だった。

王都に入って宿をとり、少し探索をしようと思えば外に出ると、パス

テルが【蝙蝠聴覚】で悲鳴を感じ取り、その方向に向かおうと裏路地にでて、予想通り嫌な光景に出くわした。  
14くらいに見える少女　汚い身なりをしている　が後ろ向きに首輪をはめられそうになっていたところだったのだ。

「パステルッ！」

俺が指示を出すと同時に一瞬で加速し膝蹴りを男に浴びせ飛ばすパステル。

そのまま泡をふく男を組み敷く。

「大丈夫か？」

首輪を拾いながら少女に手を伸ばす。

「あ、あ、いやっ！　それいやっ！」

悲鳴交じりに拒絶される。ショックだ。どうやら右手にもった首輪を恐れているらしい。

【根源管理】でみると【屈従】という低階スキルが刻まれていた。効果は『つけたものの命令に逆らえなくなる』というもので、首輪という形を考えても奴隷にするためのものなのだろう。

ちなみに【屈従】【従属】【隷属】の順で効果が強くなっていく。

「いや、君を奴隷にするつもりはないよ。怖いなら壊しちゃおうか。」

と言いつつ、パステルに投げると右手を男から離し、出てきた仕込ナイフ『白隠』で一閃、切り裂いた。これで首輪は壊れると共にパステルに恩寵が吸収された。

恐怖の象徴がなくなったことで少女はぺたんと路地に座り込んでしまふ。

俺は次に男に目を向け近づき、ほほを叩いて無理やり起こす。

「ひっ、あんたたちなにもんだ。」

「こつちが聞きたい。状況を教えれば命は助けてやる。」

できるだけ恐ろしく見えるように凄んでみるが、こちらの姿を見て侮った表情をしたので首元にナイフをつきつける。

さすがにそうされては話さずにはいられず、事情を聞いた。

そこに座り込んでいる少女はなんとということはない、見目が整っていて、且つ恩寵を使った瞬間を目撃されて目をつけられ狙われたとのこと。

親類縁者が貧乏な兄だけだったために、兄をさくつと殺した後、捕まえようとした恩寵を使って逃げられてしまい、仕方なく高価な【屈従】が刻まれた首輪をもって追いかけた。予想外に逃げ続けられるが、少女が疲れたところを人海戦術で追い詰めたところに俺たちが通りがかった。

よくもまあ……一応王国民に対して軽く殺人なんてできるものだな。それほど貪欲に恩寵を求めているのか。

【根源管理】で見ると、戦闘系では【敏捷強化】【魔力性質変換 雷】をもっていた。

たしかにこれは狙われるだろうな、と思う。

両方低階とはいえ、後者のは『魔力に雷の性質が付与される』という効果のパッシブスキル。

【体外魔力行使 火】がついた武器がかなり高かったことから、魔術系は価値があるのだろう。……ウクラインの街で見た魔術の破格さを直接目撃しているので理解できる。

魔術師が必ずといっていいほど国に仕えるのは、待遇がいいという

他にも身を守ってもらおうというのが大きいんだろう。そうしないとこの少女のように捕まってしまう。

この少女も早めに自分の恩寵の価値を理解して先に王国や帝国に売り込んでいれば、安定した生活が保障されただろうに。

もちろん不快だが、いちいちこの程度の商人を誅していれば、この街だけでもかなりの数を屠らなくてはならなくなってしまふので、正直扱いに困る。

買ってもいいけど、金はあまりないし、ここの商人たちに目をつけられてしまうと、これから諜報活動をするうえで障害となってくるだろうからなあ。それはまずい。

かといって得たばかりのスキル【屈従】は実際にはどれほどの効果があるのか、持続時間や記憶の保持があるかどうかすらわからないし、ましてや奴隷の首輪に恐れていた少女の前で使うのは避けたい。といってもあまりじっとしていると、他の場所に人海戦術していたやつが来てしまふかもしれない。荒事が得意なやつだと対処に時間がかかりまた援軍が現れてと、悪循環になりかねない。

『ヤク』

砂場にスコップが落ちるような軽い音が聞こえ、男は一瞬口から血を吐いた後心臓へ刺された白隠が致命傷となつて死んだ

結局殺させることにした。こいつらはこの少女が殺されることが前提だと知った上で奴隷にしようとしたのだから、殺されても文句は言えないだろう。

ジュツという音を立てながら【強酸生成】でできた酸で溶かしていく。その間に土を掘り穴をあける。半分ほどとけた死体を埋めて土をかけ、【錬金】によって路地のこの辺りを堅い土で舗装させる。

これで見つからないだろうし、血も消せた。もし見つかったも半分溶けていれば身元もわからないだろう。

これほどためらいもなく一人の人生を終わらせる命令を下せたのは、この奴隷商人　弱者が奴隷になることは当たり前で、恩寵を得ているのなら尚更だと考えている奴ら　にハリスさんに聞いたことを思い出したからかもしれない。

この腐った風潮をどうにかできないものか。そういうのはこの世界に最初からいる人じゃ難しいのだろう、それを当然だと、自然界の法則だとあきらめてしまうから。

アンダーワールドには新しい風が必要なのだ。

この後少女を解放したが、とことと俺らの後ろをついてくるので、泊まる宿まで連れて行った。

今は宿の前だ。パステルには服を買いに行かせている。汚い身なりそのままでは宿にいれてもらえないだろうし、初日に目をつけられるなんてことはしたくないのだ。

やがてパステルが帰ってきて、着替えさせてから宿の部屋に入る。王都だからか宿泊料が少し高い。

パステルが紅茶を入れて俺と少女に渡してくれる。

あまり質のいいものはないが、この世界に着てから毎日お茶を入れてくれていたパステルが入れると、大抵おいしいものになる。

「君の名前は？」  
落ち着いた頃を見計らって聞いてみる。そろそろおびえずに反応してくれるとありがたいのだが。こちらの精神的にも。

「アイリス、です。」  
返事をしてくれたアイリスちゃん。身なりを整え顔を洗ったので先ほどよりも可憐さが増して見える。髪は紫色で瞳は藍色、髪は肩口まで伸びるショートカットで、耳元の髪が後ろよりも長い。スタイル的には……うん、未成熟。14歳だから仕方ないのかもしれないけど。貧困層らしく全体的に肉がついていない。

この少女の待遇をどうするかが問題だ。一度商人に目をつけられているから王都内を自由に歩くことはできないが、俺とパステルはこれからこの街に一ヶ月ほどは滞在する予定なのだ。その間宿から一歩もでないなど耐えられないだろう。

しかし今更身寄りのないこの子をポイッと放り出すわけにもいかない。人情的に。

どうせパステルに聞いても「ご主人、様に従う、です」って言われるだけだ。パステルは俺以外には合理的な性格をしているので、どちらかというのと捨てることに賛成だろうな。さっきから俺と少女を冷たい眼で見ていることから伺える。というかその瞳はきつすぎませんかね、威嚇みたいになっちゃってますよアイリスちゃん震えてるって！

結果、とりあえず匿うことに。外出するときは俺かパステルということとローブを深くかぶることを約束させる。

代わりに魔術を見せてもらうことにした。彼女は魔術は日常魔術程

度しか使えないそうだが、俺たちが知りたいたいのはその以前の感覚のことなのだ。【魔力性質変換 雷】の能力を見させてもらいたいという打算もある。

ということでも早速【魔力性質変換】を見せてもらう。

できるだけ出力を控える 外に彼女の青い魔力光が漏れると厄介だ ように言い含めて発動してもらう。そうすると彼女の周辺の空気が震えたと同時にバチバチと紫電を発する。彼女がやるということからタイムラグはほぼ0。それだけで放電を起こすような電圧を生じさせるとは。

【魔力性質変換 雷】はその名の通り魔力に雷の性質を与えているわけだから、実際に雷を起こしているわけではないんだろうけど。

そして彼女の魔術講義が始まる 知識については知っているのだが、彼女が嬉しそうに先生役をやるのでのってみたい ことになった。

「だからこう！　ぎゅーってしてぱつと放つ感じですよ！」  
信じられるか？　これで、アイリスちゃんも魔粒子を集めて魔力を  
練り、一気に放つという基礎を説明してるつもりなんだぜ。

簡潔に魔術行使の講義を受けてから、実践に移ったもとい移らされ  
た。よほど先生役が　誰かに頼られるというのが　楽しかった  
ようだ。

しかし今となつては、楽しいな雰囲気は俺たちとアイリスちゃん、  
双方の表情にはなかった。

予想できていたことではあったが、やはり感覚的すぎるのだ彼女た  
ちの魔術は。

こちらら本で理論をしても一ヶ月間何も進歩が得られなかったの  
である。小娘一人に手伝ってもらっても感覚の糸口さえ掴めないの  
は当然といえよう。

やはり金をためて魔術系の恩寵彫金武器を買って、魔力という俺た  
ちには未知の感覚を、スキルを行使することで荒業で得てしまっし  
かなさそうだ。

今日はここまでとする。

夕飯を追加料金をはらって部屋まで二人分　俺とアイリスちゃん  
の分だ　運んでもらい、食べた後は身体をお湯で塗らしたタオル  
で拭いて寝ることにした。

俺たちと話すことでだいぶましになり、一時的に他のことに思考を  
占有させて、兄が殺されたことも奴隷にされかけた経験も忘れてい  
るが、整理することは必要だろう。

少なくとも数日はこの話題に触れるつもりはない。

「おやすみ、なさいませ」

パステルの声を背後から聞きながらベッドに入る。まがりなりにも  
王都の宿だ、安宿のわりに清潔だし調度品も悪いものではない。

これからパステルは黒いローブを着て情報収集に行ってくれるのだ。  
身体が大きくなったので小さいところにははいりこめなくなるが、  
どうどうと夜の街を歩くことができる。

あとは信頼する従者に任せて、ただの人間な俺は眠るとしよう。

おやすみなさい。

ブラックアウトとともに王都の夜は更けていく。

12話 王都と雷少女（後書き）

予想外に進まなかったです。

はやく物語を加速したい。

### 13話 情報集めな一日と変わり種魔術師

王都では派閥争いをみる。

今日もまだ早朝だというのに、アークライト王朝の精鋭部隊『聖王の栄光』というまんまな名前の部隊が王城から出て、周りをきらびやかな服装をした王城専属の音楽隊が行進を取り囲みながら、国家アークライト王朝ようのもらしいや、この世界の行進曲を奏で、『聖王の栄光』の門出を称えながら、周囲の国民や他の派閥の貴族に対して示威している。

王城からはかなり離れた宿から出た時にはその音が聞こえていたのだから、どれほどの迷惑となっているのだろうか。

まあこの世界に騒音関連の法律などあるわけがなく 普通の法律も杜撰なものだった、文句を言うものなら平民なら消され、貴族なら爪弾きにあっってしまうことから迷惑だと思っている人間は部屋で我慢するのだろうか。

実際に表に出てきている人間はみんな尊敬やあこがれ、そして自身のことであるかのように誇っている。英雄や有名人が同郷である時に自分のことであるかのように誇りに感じることに 同一視

は、上位世界でもよくあることだ。オリンピックなどが良い例だろう。もちろんそれを心が弱い、自分に自信がないなどといって批

判する気はないが。

さて、表通りには示威しあっている軍に、宮廷魔術氏たち。

彼らは仕立てのいい、傍目には実用性よりも修飾に重きを置いた服を着ているように見える。が実際には上着やその下に着ているものに恩寵 【防御強化】、【魔力不可侵】 【守護】 が刻まれているものが多い。持っている武器にも有用な 【切断強化】や【不可壊】など 恩寵が彫金されている。さすが精鋭部隊が揃う王城、この王国の富が集う場所。日々繰り広げられる派閥闘争の中で得た賄賂や恩寵彫金武器を存分に下賜されているのだろう。本当にきらびやかだ。

逆に、光に対しての間、裏通りはウクラインやルーマンよりもはるかにひどい。

一週間前の裏路地で目撃して少女アイリスを保護したのが昔に思えるほど、同じような光景が散見された。奴隷狩りはまだ目立たないところでやっているが、奴隷の売買は普通にやっている。この国では奴隷の売買は合法だから当たり前前の光景なのだろうが……慣れない者、すなわち俺には人間や亜人が商品として店先に首輪と手錠をされて繋がれているのにひどい違和感がある。嫌悪感の前に先に違和感が。

あとこの王都でやっと、初めて亜人を見た。ああ、亜人といっても、知能が低いゴブリンやコボルトとは別な。人族じゃない時点で『亜人』とひとくくりになされているから。

俺が見たのは奴隷オークションに行って見た時だ。入場料だけでもかなり高くて買う金なんて残らなかったので買われていくのを見送

るだけだったが。奴隷オークシヨンは不定期に行われている。奴隷売買は合法だが、大規模なオークシヨンはトラブルも多いことから、地下で数商人合同で行われる。合法といっても周りからの印象が悪いというのも大きいだろう。

オークシヨンもたけなわとなった時、本日のメインとして司会が紹介したのが獣人族の娘だ。

兎耳を白い髪の上からびよこんと立てて、ほとんど裸のような格好をしていて見える尻からは白くて短いもこもこした尻尾が見える。

司会によると、この王国からはだいたいなくなり、北の方に村が点在する程度となった珍しい獣人族、兎族だそうだ。戦闘力は獣人にしては低いが、逃げ足は人族より遥かに早い。また大きな特徴としては雌しかおらず、他の種族の精液を使ってしか繁殖できない。子供は全て兎族となる。このことから種族が増えることがなかなか難しいので少数派となっているし、どこからか男を調達する必要があるので周りと孤絶した場所に隠れ住むこともできないのだ。

大抵の獣人は人族と同じく短命種で寿命は60年くらいだが、人族よりも若い時間が長いので美しさもそうそう衰えない。また魔術を使える個体が人族と比べて圧倒的に少ないことから、物理的な拘束をされて、性奴隷として扱われるか、労働奴隷として扱われることが多い。

兎族の少女も十中八九性奴隷目的で買われたのだろう。

この一週間は王都の地理を覚えることと情報収集に専念した。

パステルの【電心】の有効距離が1キロに伸びたので情報交換もやりやすくなってきている。

ちなみに俺は【電心】で受信することはできるが、低階クラスなためアクティブに発動しなければならぬこちらから言葉を送ることができない。受けるだけの一方通行だ。

それを解決するために、最近「お兄さん」と俺のことを呼んでくれている。兄を失った悲しみを俺を兄としてみる依存心に変えて精神を安定させているのだろう。紫髪の少女アイリスに【恩寵刻印】で【電心】を刻むことにした。

いつもパステルにやるように何も言わずに徐にアイリスの胸あたりに手を置いてしまつてから「しまった。男への恐怖が蘇つてしまうだろうか」と考えて肩に手をあてて【恩寵刻印】を使うことにしたが、しかし最初から常に胸に手を当ててやってきた。パステルも最初は人形でつるべただったし気にしていなかった。ために、肩ではうまく根源に刻むイメージができないのだ。これは偏に俺が心は身体を中心の心臓あたりにあるという非科学的印象を抱いているからであろう。

結局事情を説明して胸に手を当ててやらせてもらった。不可抗力だ。嫌がってないようだからいいだろう。

顔を真っ赤にして照れていたのはかわいいと思うが、いくらなんでも会って一週間の他人の男に心を開きすぎではないだろうか。いくら兄代わりとして見てるといっても、依存しすぎでよくない傾向だ。

さて、情報収集は朝から始まる。

ほとんどの朝は宿で食事をとらずに敢えて外に出、大通りで朝食を買いながら店の人と会話をする。一般市民だからこそ王都での噂についてもただの話のネタとして気軽に喋ってしまう。噂の中には真相がもれ出ているものや、外れていても煙の元には何らかの火種が転がっているもんだ。

その後昼までは王都の冒険者ギルド 王城から離れたところにある。さすがに王都では、他国に本部がある冒険者ギルドの扱いがよくない によって簡単な依頼を受けるか、知り合った受付や職員と世間話をする。日常の話でも信頼関係を築くことができるし、俺は今ではランクの冒険者認定をうけ、ギルド推奨の依頼を受けているのである程度有難がれているだろう。まあ俺の実力はEランクにも満たないが人形がいろいろと集めてきてくれるので。ただ俺の見た目が160cmとこの世界の男性平均より15cmも低く、女性平均と同じくらいなので、同じ冒険者にはどうしてもなめられてまともに会話してくれないか、下卑た視線を向けるだけだ。その場合は灰色ローブを深く被りなおしてさっさと去る。

昼食を食べる 大体ここでパステルとアイリスちゃんと合流 時に午後の予定を話し会う。パステルと依頼にいつてアイリスちゃんを置いていくこともあれば、みんなで街の店 王都だから数が

すごい！　をひやかして周ったり、王国一の蔵書量を誇る国営図書館に行ったりだ。やはり紙は羊皮紙くらいしかないらしく、一冊一冊が電話帳のように厚い。また、現代の紙になれている俺には獣くさい臭いが一番つらかった。

禁書は見られないが、そうでなくても王国の様々な場所で書かれた本や、帝国や教国で書かれた本もあった。……重要そうな本を奪ってきてる臭いがプンプンするぜ。

図書館では極東の情報はほとんど見られない。言葉が大陸と違うのと、海を越えた島国であり固有の魔獣である妖怪が跋扈しているらしいことくらいだ。

一番図書館で知りたい情報はこの世界の農業や建築物の知識だ。やはり全体的に効率が悪いが、魔術や恩寵技能のおかげでめちやくちやなやり方でなんとかなっていることもあり、これが科学が進歩しない理由かと思う。例えば、王城も地下を走る龍脈　魔粒子が自然に魔力に練られている　の魔力を利用して地属性と金属性の魔術『固定化』によって無理やり支えているらしい。

どうやってこの世界で高さ50mもある城を建てられるのか、疑問だったのだけど、力技かあ。

ドワーフの夢技術か！？　なんて思ってた自分が恥ずかしい。

そして一番の収穫は王国西海岸から海峡を越えた先に無人島があるというのを古い文献で発見したことだ。人が住んでおらず魔獣が跋扈していた上に土地が痩せ、鉱山も発見できなかったために放置されたという記録が200年ほど前にある。土地はいくらでも余っているし、200年前は暗黒大陸を発見した頃だったのですぐに情報が埋もれてしまったのだろう。

そこなら王国も手を出しづらいし出す利点も少ない。

俺とパステルで恩寵技能を十全に行使すれば、最低限の住宅環境をそろえることもできるだろう。農業に関しては「豊穰の女神の加護

「ラウニプロテ」を発動すればいいのだし。そしてゆくゆくは虐げられる人々の逃げ場になれればいいのだが。

ちなみに【豊穣の女神の加護】はアクティブでした。ハリスさんの娘ヘイゼルは常に発動してみたいけど……もしかしてこの世界の住人は、恩寵にアクティブなものとパッシブなものがあるってことに気づいてないのだろうか。恩寵はわかっていないことが多いので、そういうものとして感覚的に捉えてる限り、ありえるかもしれない。

こうして閉館時間まで図書館にいて帰り、夕飯は宿の部屋でとる。得た情報をまとめたり、アイリスちゃんに授業をしているのだ。パステルには地上の科学知識を主に教えているが、アイリスにはまずこの世界レベルの教養を教えている。計算や文字などだ。文字がしっかり読めないと図書館でも絵本や図鑑の絵しか楽しめない。

そして夜9時くらいには蠟燭の火を消して、就寝。二人部屋なのでベッドが二つだが、パステルは大抵夜中も姿を隠しながら【無音】による隠密行動。【犬嗅覚】、【初超音波】と【蝙蝠聴覚】の合わせ技により暗い闇でも人に会わずに動ける。情報収集をしてもらうので、俺とアイリスちゃんですつで足りる。

まあ朝になる前に俺のベッドに忍び込んでくるのだが……夜にうなされることのあるのを知っているので特に咎めることはない。むしろ妹のような歳の少女が信頼を寄せてくれるのだから役得というものだろう。紫のさらさらとしたショートカットに包まれた寝顔は庇護欲を掻き立てられる。この世界には男の朝の生理現象がないようなのでこちらが恥ずかしがることもない。

こうして一日が終わり、次の日が始まる。

ある日、魔獣討伐の依頼をクリアしたあと冒険者ギルドに来ると、冒険者ギルドに所属の魔術師が王都に帰ってきたらしいという話を聞いた。

これはチャンスだろう。

国に仕えていない魔術師がまれで、いても存在を隠して人が来ないところで少数の弟子をとり研究にふけっているのがデフォルトなのに、その魔術師は冒険者ギルドに所属しているという。

人とあまり話さないシャイな性格をしているらしいが、害意を見せなければ話くらいは聞いてくれるだろう。魔術のことも教えてもらえるかもしれない。

住んでいる場所を聞いて向かってみることにした。

王都スウィザードは王国全体と同じように、東西に大きな通り

『王道』というらしい　　が伸びていて、その中央に絢爛華美な修飾がされている城がある。

東西の通りのいくつもの場所から、北と南に大小様々な通りができていて、大きな道路によって円形の王都をブロックに分けている。

まずは王城から北東はハーヴェイ王朝の派閥の貴族が多く住む区画、逆に北西はアークライト王朝の手のものの区画。その他大商人などの裕福な家も『王道』の北側にあり、豪邸が並んでいる。高級娼館も『王道』の北側だ。

『王道』から少し南にいった先には『王道』に面していないながらも立地がよく、大きな店が所せましと密集している。

小さな店や貧困街があるのは南東側で、南西には一般市民の閑静な住宅街が広がっている。

そして今回訪問したギルド所属の魔術師の家は南西の中でも目立た

ない家だった。この世界で一般的な石づくりの家だ。

「ごめんくださーい！」

ドアを叩いても反応がないので声を張り上げる。

と、中からドタドタした音が聞こえ、

「どなたですか？」

と少し警戒した声で尋ねられる。

シャイな性格をしていると言われてたからこの態度にも納得できる。そもそもアポをとっていない見知らぬ人が来た時点で警戒しないほうが珍しいだろう。

「あの、ギルドに所属している魔術師の方ですよ？ 私たち冒険者ギルドの新しいメンバーでして、あいさつをしたいと思ひまして。」

「……………どうぞ。」

覗き穴でこちらの姿を視認した後、少し警戒を解いた様子でドアを開けてくれる。

中に入れてもらいすぐあつたりリビングにつく。

すぐにお茶を入れてくれようとするが、いきなり悪いのでパステルも手伝った。俺は持ってきていたお茶請けをテーブルに置く。

「初めまして新人さん、私レンっていいます。」  
先ほどのドアでの警戒と打って変わって友好的なレンさん。アイボリー色のローブを被っているために顔は見えないが、薄緑の長い髪が前に出てきている。身長は俺と同じくらいだ。年齢はよくわからない。

「私はクロノ。こちらがパステルです。」

「よろしく、お願いしま、す。」

こちらも笑顔で自己紹介。敬語を使うときには口調が戻ってしまうことが多い。

相手は家の中でローブを被ったままだが、俺もそうすることが多いので特段気にならない。視線を狭くするのはある意味安心感がある。

「ご用件は？ あいさつだけではないでしょう？」

ほわほわした雰囲気似合わず、意外と鋭い人なのかもしれない。

「はい。実は魔術の使い方を教えてほしくて……。」

「どうしてです？ 魔術系の恩寵を持っているのですか？」

「いえ、実は私たちは極東の生まれでして、日常魔術すらも習ったことがなく、魔力を練るといのがよくわからないのです。それで専門家に教えて頂きたいと思ひまして。」

その言葉に目を丸くするレンさん。

彼女は魔術系の恩寵をもっていなければ、日常魔術以外は使い物にならないのにどうして知りたいのだろう、という意味で聞いてきたのに、俺たちは日常魔術どころか子供でもできる魔力を練れないというのだから驚くのも無理はないだろう。

一応事情を説明　困ったときの極東押し。なぜか人族と亜人や妖怪の関係やらについて喰いつかれて焦った　するとわかってくれたみたいだ。  
軽くいいなら同業のよしみで教えてくれるとのこと。

レンさんは今日は帰ってきたばかりでギルドへの報告や物資の買い替えなど、やることが多いそうなので、早々にお暇させていただく。

また二日後に訪ねることになった。

## 14話 魔術

二日後の約束の日。

楽しみだったので行く準備を整えたあと、しがみついてくるアイリスちゃんを振り払って一時間ほど早く宿をでた。

レンさんの家の前にたどり着き、ちょっと早すぎたかと反省していると、

『ドガアーン！』

という音が家の中から聞こえた。

何事かと想い、すでに見つけていた鍵が開いた窓から入り、パステルと共に駆けつける。

「けほっ、けほっ。どうしてこんな目に……もうこんなところにいたくないよお。それにこんな実験死ねって言ってるようなもん、じゃないですかあ。」

もくもくと黒い煙と煤で汚れた部屋に踏み入れた俺たちを迎えたのは、俺と同じような頭をすっぽり隠すローブが一部やぶれて肌が露

出したレンさんの姿だった。最初から涙目で、独り言をぶつぶつと言っている。

「え、あ、きやつ!」

何と声をかけていいか迷っていると、レンさんがこちらに気づき短い悲鳴をあげる。

「すみません勝手に入って。なにやら大きな音が聞こえたので無事かと思ひまして……。」

「あ、そうでしたか。はい、えと、一応だいじょぶでしゅ。」  
最後に噛んで顔を真っ赤にするレンさん。

「魔力の練り方についてでしたよね。ちょっと待ってくださいね今片付けをしますから。」  
そういつて他の部屋に通される俺とパステル。レンさんは部屋の掃除をするようだ。

数分後、急いでくれたのか、息を少し荒げたレンさんがいつもきているローブではなく、その豊満な身体を強調する白いシャツと青いハーフパンツをはいて現れた。

……いくら部屋とはいえ、楽な格好すぎないだろうか。異性もいるというのに。

髪は長めで少し癖が入っている薄い緑色、瞳は濃いめの緑だ。顔は相当整って　パステルほどじゃないが　美人といえる造形をしている。そしてその耳が少し尖っているのを見て理解した。

エルフだから美形なのも当たり前か、と。

この世界のエルフを見たのは初めてなのだが、他のファンタジー世界の例に漏れず美形なのだろうと思っていたので驚きは少なかった。種族的に美女美男子だらけってのには懂れてしまう。

「お待たせしました。魔術の基礎知識はあるんでしたよね？」

ならばまずは魔力に包まれて実際に感じ取ってもらいます。目をつぶって五感を働かせないようにしてリラックスしてください。」

言われた通りに視界をなくし全身の筋肉の緊張をとく。毎日パステルにマッサージしてもらっていても、日々気を張って生活していると凝る筋肉がある。

数分ほど薄い緑に輝く魔力をあててくれていたらしい。

魔力があたっている肌と脳がチリチリする感覚を覚える。脳までチリチリしているのは、肌にあたっているのを感じるのが触覚ではないからだろう。

そのあと、魔粒子を集めて魔力を練ろうとする。

が、やはりだめだった。まず魔粒子というものが存在するといつてもどついうものか近くできないのだから、それを集めて練る感覚などわからない。

結局この日は、専門家のレンさんによって魔術についての講義をおこなってもらうことにした。

本に書いていないこともあるし、より理解すれば使う一助になるはずだ。

『魔術』

曰く、神が哀れで弱い生命に与えた奇跡の技。

曰く、日常生活に欠かせない技術。

曰く、一方的な虐殺を可能とする持つ者が選ばれるべき物。

発祥は世界ができたと同時に生命が生まれた瞬間からあったという。最初は今でいう日常魔術しかおぼつかなかったが、大陸歴1年からの千年単位の積み重ねによって今の殲滅魔法や空間魔法に至った、人類の叡智の結晶。

恩寵技能は神から突然渡される恩恵だが、魔術は最初に神から与えられた点では同じくも、人類の努力によってここまで来たとして、誇りに思う魔術師が多い。

その発展の仕方上、学者の大半は魔術師となっている。

一般に魔術を使うにはいくつかの要素と手順がある。

第一に『魔粒子』。

世界中どこにでも 大気中にも海にも地中にも人体にも 遍く存在し、魔術を使う際に媒介となる世界の最小単位と考えられている粒子。

魔術に使っても消耗されず、形を魔粒子に戻して世界を循環する。魔粒子を放出する特別な樹を『世界樹』と呼び、シークリッド大陸ではアイスル教国の聖地にあるとされる。アイスル教国では『世界樹』を維持するために砂漠での貴重な水を大量に使っている。また、魔粒子を吸収する土地もあり、その周りの土地は枯れ果てるという。

230

第二に『魔力』。

魔粒子を把握、支配、収束することを『魔力を練る』といい、その状態を自分の『魔力』という。髪と同じく、根源に影響される形で、全ての生物の魔力にはそのもの固有の魔力色が存在する。

第三に『概念』

魔力を使い魔術を発言させるkeyとなるのは、『ある現象が起きるイメージ』であり、イメージを浮かべて魔力にそれを実現させようとすることを『概念を注ぐ』と言う。

以上の三つが最低限必要なものだ。

一般的な魔術の行使の手順は簡単に言えば、  
身体の周りに漂う魔粒子を、存在を認識し、支配して自分の魔力

この時点で体外魔力と呼ぶ　とし、概念を注いで魔力を用いて  
現象を起こす。

これだけだ。

あとは魔力を練る速さや維持できる距離、そしていかようにして概念を注ぐのを補助するか、だ。

一般人で日常魔術くらいしか習っていないものは、魔力を練れる広さ、つまり魔粒子を支配できる空間が小さい。身体の内周りを均等に纏わせると数mmほど、また、たとえば指先からだけだと数cmほどしか魔力として魔粒子を維持できない。

こうなると、攻撃魔術を覚えても接近戦をすることになり、魔術のアドバンテージがだいぶ消えてしまうので、指先数cmでも役に立つ『凝縮』や『光源』、『発火』などの日常魔術だけ覚える。

それも【体外魔力行使】という低階恩寵を持つだけで次元が変わる。このスキルで熟練度を伸ばすと、把握できる魔粒子の量が劇的に変わるために、射程も威力も桁違いのものになる。（【体外魔力行使水】のように後ろに得意な属性がつく。この恩寵をもつ者を殺し

ても自分の生来の属性とあっていないと使えない)

国に仕える魔術師はほぼ全員が【体外魔力行使】をもっていて、自分を中心とした球状に魔粒子を把握、魔力を練ったときに半径が5mはある。その半径5mの球形の中ではどこからでも魔術を行使できるために、相手が入ってきたら後ろから首を断つこともできる。まさに自分の魔力を練った空間内では魔術師は無敵なのだ。ただ、魔粒子をかき集めて支配するまで 把握範囲を広げるのに 少し時間がかかる。

外に向けて魔術を打つ場合は、手から10mほど魔力を棒状に練ってその先から魔術を行使すれば射程がその分だけ伸びる。ちなみに魔術を発動するときには魔力を消費するので、糸状のようにしてめいっぱい伸ばしても魔力が足りないために何もできない。

特に恐ろしいのは、ウクラインで見た魔術の隠密性だ。

魔力色はすべての人にあるが、訓練すれば魔術を行使する直前まで無色にしておけるのだ。これは正確には、魔力を練り切っていない、魔粒子を8割ほど支配した状態にしておいて、魔術を行使する直前に10割支配することによって、直前まで魔力光を発しない技術だ。

さらに上位互換の恩寵【体外魔力操作】【体外魔力支配】となると効果が増大する。

【体外魔力操作】をもっていると、問答無用で精鋭部隊に入れるほどだ。周囲10mほどの空間を一瞬で支配できるようになり、並大抵の方法では殺せなくなるし、20mほど先の相手に空間から『氷弾』や『風斬』で一方向的に攻撃できてしまう。

伝説の魔法使い 熟練した魔術師が自称や他称で魔法使いと呼ぶになると、文献によると周囲40mに入った敵兵を尽く瞬殺し

たという話もでてくる。それほど一方的なのだ恩龍に後押された魔術とは。

倒すには魔力切れを待つしかないだろう。

魔粒子はどこにでもあるが、一度魔力として使うと魔術行使後に行使者の支配から逃れてしまうので、魔力を消費した穴埋めを他の空間から持ってこなければならず、魔粒子を集めて魔力を補填する速度を上回るほど魔力を消費させるか、そのあたりの魔粒子が少なくなれば魔術師は何もできなくなる。

また、魔術系恩龍にはほかに種類がある。【体内魔力行使】系と【魔力性質変換】系、【魔力貯蔵】にそして【結界魔術】、【治癒魔術】だ。

まず【体内魔力行使】 【体内魔力操作】 【体内魔力支配】だが、魔力を体内で使うことに長けるようになるのがこの恩龍技能だ。

【体外魔力行使】のように派手さはないが、魔力によって体内の動きを活性化したり、自分の体限定だから治癒もできる。

最たるところでは若さが保て、寿命が大幅に伸びるところだろうか。【操作】にもなれば、90年ほどは生きるといふ。この世界の人族の寿命が60歳ちょっとであることを考えると相当だ。

体内を把握できるということは、筋力を魔粒子で疑似的に増強や補強をしたり、最適に動かして肉体疲労を極端に減らすことができるため、長い間戦い続けられる。けがをしても止まらないタフネスな戦士の誕生だ。

次に【魔力性質変換】。

これもかなりのレア度を誇る魔術系恩寵で、アイリスがもっている【魔力性質変換 雷】は低階スキルだ。この恩寵の場合は、「雷 雷電 雷神」という順番に階があがっていく。

効果は『魔力に属性が付与される』でパッシブスキルだ。ちなみに魔力を練れる範囲も【体外魔力操作】と同じくらいはある。

アイリスの場合は熟練度を上げれば半径10mほどの範囲では魔粒子を把握しただけで雷が進る空間をつくることができるというわけだ。

また雷属性に限り、【体外魔力操作】により魔力をこねた魔術よりも威力が高い。

長所はその威力の高さと、概念を注ぐ手間が必要ないから魔術発動までのラグ 2、3秒あるのが普通 がないこと。

短所は射程があまり伸びないことだ。【魔力性質変換 雷】と【魔力性質変換 雷神】でもそこまで把握できる空間の量は変わらない。

もちろん雷を帯びた魔力であっても普通の魔力のように魔術は発動できるし、雷属性については大幅に威力が高まるので、遠距離魔術を打てばいいだけの話なのだが。

以上をまとめて比べる。また、火炎属性の基本攻撃魔術『火球』で比べることにする。

『火球』の出力は【魔力性質変換 業火】>>【魔力性質変換 火炎】>>【体外魔力支配】ありで魔術>>【魔力性質変換 火】>>【体外魔力操作】ありで魔術>>【体外魔力行使】ありで魔術。

射程は【体外魔力支配】ありで魔術>>【体外魔力操作】ありで魔術 【魔力性質変換 業火】 【魔力性質変換 火炎】 【魔力性質変換 火炎】 【魔力性質変換 火炎】 【魔力性質変換 火炎】 【魔力性質変換 火炎】

質変換 火】>【体外魔力行使】ありで魔術。

【魔力貯蔵】はそこまでレアじゃなく、魔術師じゃなくとも持つてる人は多い。

効果は『魔力を長時間保存できること』でパステルが所有している。魔術を行使するときには、大気や地中から魔粒子を集めなくて支配していかねばならないが、この恩寵があれば身体の表面や内部に溜めた魔力を使つて魔術を発動できる。【体外魔力行使】系と【魔力貯蔵】の両方をもつていれば、常に周囲5mほどを把握できるために奇襲が通じなくなる。

【結界魔術】はほとんど持っていない恩寵。結界を張るという特殊な魔術を使用できる。

結界とは物理的障壁だけでなく、魔力を通さない障壁を張ることができる。

普通の魔術師の防御は、魔術によって逸らすのが常なので、守りにおいてかなりの有利にたてる。

高階恩寵技能【結界】と違って、人払いや悪意弾きなどの概念的な結界は張れないし、張れても効果は薄い。

【治癒魔術】は魔術師の中にたまに持っている人がいる。魔術で他人を治癒できるのはこの恩寵をもつ者くらいだ。

なぜなら、普通の魔術は行使は一瞬か数秒だけなので、傷を魔術で塞いでもすぐに魔粒子にばらけて元通りになってしまうが、【治癒

【魔術】なら長い期間魔力を固定しておけるので、傷を身体が傷を塞ぐまで魔術で固定しておけるからだ。

次は『概念を注ぐ』ことについて。

魔術を完成させるキーとなるこの操作は、イメージを頭の中で浮かべるだけでもいいが、それを補助すればもつと強固な魔術が行えると考えられるのも不思議じゃないだろう。

そこで2000年近い歴史を持つ魔術の研究の過程で生み出されたのは、『詠唱』『魔法陣』『魔導具』だ。

『詠唱』は言葉によって自分の中にある概念を強化していく。よって詠唱文句は個人で自由だが、大抵は師匠からのをそのまま受け継ぐ。誰だつて近くで見てる人が魔術を使ったときに唱えているのを同時に聞けば自動的にイメージと言葉がくつつくだろう。

『魔法陣』は描くことによって使用者に概念をわからせるもの。自分がどんな現象が起こるのかを知らなくても、その魔法陣を使うことによつて強制的に理解させて概念を注がせる。魔道具の大半に魔法陣が刻まれているのも納得だろう。誰もが使えて汎用性が高いのだ。魔法陣を描くのが大きな手間であるのが弱点だが。計算して上手い魔法陣を考案できる人は滅多にいないので、失われた技術もある。500年ほど前には天才魔法使いが『立体魔法陣』なるものを使い、数キロ先を狙撃したという、この世界の魔術の射程では不可能に近い技術だ。

『魔導具』は『魔道具』のように魔法陣が刻まれているものと、素

材がもつ属性や恩寵を活かすものの二種類がある。

前者は魔法陣を描きこんでおくことで、一つの魔導具に付き二つくらいしか魔術を使えないが、魔法陣を使った魔術をすばやく行使できる。

後者は以前ウクラインの武器屋で見たような、「体外魔力操作」が刻まれていた杖のように魔術系恩寵を宿したものと、魔力を通しやすいミスリルや、火の属性と融和性の高いルビーなどで、魔力を練りやすくしたり、火属性について概念を注ぎやすくするものがある。

これらは組み合わせられるので、その場その場で臨機応変に使い分けるのが重要だ。

最後に属性について。

【体外魔力操作】や【魔力性質変換】には後ろに属性の名がつく。風属性が得意なものは基本的に風系統の恩寵が刻まれていて、違う属性を何等かの方法で手に入れても意味がないために、自分の属性を理解することが重要になる。

属性は全部で11属性。

基本が「火」「水」「風」「地」の4大属性で、その4つの発展とも亜種とも言われるのが「核」「氷」「雷」「金」で、「水」属性を持つ者は「氷」を、「氷」属性をもつものは「水」をある程度使える。補間属性はどちらの方がより得意かという話でしかない。

それに加えて「光」「闇」「無」がある。

対属性として「火（核）」と「水（氷）」、「風（雷）」と「地（金）」、「光」と「闇」という関係になっていて、片方を持つ者はもう片方の属性を最も苦手とする。

「無」属性はこれらのどれにもあてはまらない。

属性としてわかりにくいものを説明すると、「核」はエネルギー関係を扱い、「金」は金属を、「光」は光関係　幻影などを、「闇」は浸蝕性を司る。

また、「無」を除く10種のうち大抵二つ以下が得意属性となる。無属性になる場合は無属性だけだ。

魔術系恩寵をもつものは自分の属性を知るのが最重要となるので、属性を調べられる魔道具で調べてもらうことになる。

魔法や魔導とは、魔術を自称他称で呼ぶという分類。魔法使いは特に強大なすごいと認識される魔術を使う魔術師で、導師はある魔術の流派の総帥をそうよぶ傾向がある。つまり分類はあいまいなもので、全部魔術でも問題はない。

以上が魔術講義でした。

「きゃあああああっ！」

属性を調べる魔道具で属性を調べてもらっている 【根源管理】  
で見れたけど内緒にしているので と、いきなりレンさんが悲鳴  
をあげた。

あ、俺が闇と氷で、パステルが光と風らしい。

「耳っ！ 耳でてるっ！」

ローブを脱いだからエルフの証である尖った耳がでていることに今  
更ながら気づいたらしい。

「お願い！ 人には伝えないでっ！ じゃないとじゃないと私」

始末されてしまう

「ちよつと、顔青ざめてますよ？ 大丈夫ですか！？」

その言葉と慌てようにごちらも慌てて声をかける。

「私たちは言いふらしたりしませんよ。落ち着いてください。」

「…………ふう。そう…………よね。あなたたちは、耳を見てもそのまま接

してくれていたんですものね。」「  
少しして落ち着いたようだ。」

「でも珍しいですよ？ エルフを見て怯えたり欲望の視線をぶつけてこない人族は。」

「そう……ですかね？ 私的には人族と会話もできますし知的生命体として優劣はないと思っっているのですけど。」

「私も変わり者の魔術師だって言われてるみたいですけど、クロノさんも大概ですね。」

すこし呆れた感情と安堵を包んだ表情をするレンさん。

「いいですか？ この王国の人間は、他の獣人と同じようにエルフも見つけ次第奴隷にしようとするんです。エルフは種族の特性として美美女ですし、ほとんどが魔術系恩寵を身に宿して生まれてくるのですから、良い商売になるみたいですよ。」

最近兎人族が奴隷として売られていたのを思い出して苦い顔になる。たしかにエルフも同じような目にあっていると予想できたはずだ。

そしてふと気付く。

「どうしてレンさんは王都にいるのですか？」

レンさんは一転してまた慌てだし、すぐに真剣な表情に戻った

「……私、潜入工員なのです。」

……えっ？

14話 魔術（後書き）

レンさんは見た目20歳くらいです。

巻いていきたいのにー  
王都編いつにおわるのやら。

## 15話 ハーフエルフ

「……私、潜入工員なのです。」

いきなりな告白に時間が止まる。

ここはファンタジーな世界、だからこんなことを聞いても「厨二病乙」なんて笑い飛ばせないのだけでも。

レンさんが潜入工員で……似合わない過ぎる。  
というか適性があってないでしょ。

この人、自分がエルフの証である長耳を出していることを数十分も気づかなかつたんだぜ？  
俺たち以外に見られてたらどうしてたんだ？  
今までバレてなかったほうが驚きだよ！

それに工作員っていうのなら、どうして冒険者所属の魔術師なんていう、レアもレア、いやがおうにも目立つポジションについてんだよ！

よほどエルフってのは人材不足なのか……？

色々とツッコみたいところがあるけど、語ってくれるみたいだから落ち付いて話を聞くことにしようか。

罪を告解・共有して仲間意識や同族意識によって安心感を持つのはよくある精神の動きだろう。

レンさんはポツポツと喋りだした。

「私の母親は元々この王国の北に住んでいるエルフ一族、『白森の一族』と呼ばれている一族の出だったのです。その一族は王都に近いエルフの集落のうちでも『一門』の名を持つ有数な大きさの集落で、王国の中では発言力が大きく、王国の南に住む『青霧の一門』と競っていました。

二十年ほど前に大規模なエルフ狩りをされたときに、王国の人族によって、知らぬ間に洗脳されていたエルフが、集落の場所についての情報を王国に与えたゆえに、エルフの多くの村が大打撃を受けました。

それ以降、エルフも人族のように情報収集にも力を入れねばならないとして、王国に諜報員を送り込もうという話が集落の代表会議でましました。その時にも『白森の一門』と『青霧の一門』はどちらが

より重要な任務、王都に忍び込ませるかで争いあい、結果として、代々光属性魔法を得意とする『白森の一門』の中でも有数の使い手、幻影を使って自らの耳を隠せるほど　幻影を自分の動きに合わせ、しかも掛け続けるなど普通はできません　の実力者であった母を王都に送り込むことになりました。最初は彼女のみで、徐々に姿を隠して人数を増やす予定だったので。」

ここで一旦、一息をつくレンさん。

俺とパステルは無言のままだった。これから重要なところに入るだろうから。

「しかし誤算が起きました。彼女、私の母親はあろうことに王国の人族の騎士に恋をしてしまったのです。その騎士は人族でありながらも優秀な風魔術の使い手で、母とは王宮内で彼がけがをしたのを母が見たのをきっかけで恋に落ちました。

時間間隔に疎いエルフたちがそれを知った時には、彼女と彼は既に深い仲となっていて、私も生まれていました。

エルフのような長命種が短命種と恋愛する場合、寿命が違いすぎて『一緒に老いて添い遂げる』という考え方はありません。大抵が激しく燃えるような恋を20年くらいの短期間　人族にとっては長いかも知れませんが　するのが普通で、もう恋愛に陥った母はエルフの集落に定期連絡もせず、諜報するしなくなっており、そのことに気づいたエルフの集落が文句を言ってきたもどこ吹く風。彼と私だけを愛して、三人だけで世界が完結していました。しかし、終わりは唐突に訪れます。

私の不注意で、母と父の知り合いがパーティをやつてるところに紛れ込んでしまい、私がエルフの耳を持っていることで、母がエルフだということがすぐにバレて、父は国家転覆罪として処刑され、母は私を逃がす途中に捕まり奴隷となったそうです。

私はというと、他に忍び込んでいた小さなエルフの集落の諜報員に拾われ、何とか保護されました。

そして一年が経ち、両親を亡くした悲しみから立ち直れずにいた頃に、一度は故郷に戻ったほうがいいと言われて、『白森の一門』の集落に行きました。

そこで私が目撃したのは、王国によって蹂躪された集落の姿と、どこかに避難していたエルフ　偶然戻ってきていた　が私を見る冷たい視線でした。

曰く、『裏切りの混じり物』『一門の汚れ』『淫売の血』は去れと。同族殺しは禁忌だが、お前の母親を恨む奴はたくさんいると。

おそらく彼らは良いエルフたちだったのでしよう、忠告してくれたのですから。

幼い私には理解できず、母の故郷にあり続けようとし、集落の片隅で生かされていたのですが、3年前に集落の破棄と引っ越しが決まった時に、『次も売られたら困る』と言われて、王都へ送り込まれることとなりました。

自分の耳を隠す手段も持たずに、です。

そして何とか耳をローブで隠し、人と関わり合いにならないようにこの寂れた区画にある家で過ごしてきました。

しかし、一門も他のエルフの集落も私に諜報能力は期待しておらず、冒険者ギルドにはいつて、特定の魔獣を殺害し、とある部位を剥ぎ取れたとか、危険な実験をやって報告しろだとか、完全に使いつぶしの駒。

ハーフエルフであることを知られたら自害して、せめてもの矜持を示せと致死性の毒薬すら渡されています。つまりはそういうことなんです。

死んでもいい、特に必要ないんです私は。」

……ハーフエルフか。エルフはプライドが高い一族だから根が深そうだ。

それにレンさんの母親の行動は褒められるものじゃない。

「エルフからすれば興味の埒外の駒で『混じり物』、人族からすれば『亜人』と言われて狩りの対象。」

そんなこととづくに理解していたはずなんです。この三年間、冒険者ギルド所属であるのを聞いて話しかけてくる人はいましたけど、依頼を終えても労ってくれるような知り合いもいませんし、本当にさびしかったです。

だから、集落の命令で、遠くまで行かされる依頼を終えて帰ってきた必要道具だけ私のカバンから回収をした、私の顔すら見なかったエルフの男が去った後、そのタイミングで訪れたあなたたちの存在がありがたかったです。ギルドや酒場でたまに見る、『久しぶりに帰ってきたんだ？ お疲れ。良いお酒が入ったから飲もうよ。お土産話を肴にさ。』という風な雰囲気、距離感に憧れていた私にはだからつい気が緩んで家の中に入れてしまい、調子にのって他の日の約束までしてしまったのです。

二回目に来た時もうれしかったんですよ？ 約束守ってくれたんだって。集落にいた時も遊んでくれる人すらいませんでしたから……。直前まで、ほんとに危険な、部屋が黒焦げになるところか家が吹っ飛ばかもしれないような調査をさせられていたんですが、案の定失敗して爆発した時もあなたとパステルさんはすぐ心配して駆けつけてくれました。最初は悲鳴をあげてしまいましたけど、掃除して着替える時にはうれしくてうれしくて……。ついローブを置いてきてし

まっただみたいです。」

「それに気づいた時、『ああ、この人達との関係も終わってしまっ  
んだ、私は自殺しなければならんだ。』って悲しくなって動転  
してしまいました。」

「俺たちはレンさんの秘密を他人に漏らさないから、そんな必要は  
ないよ。」

「クロノさんたちはエルフであることに気づいていても普通に接し  
てくれていました。そんな人族がいるとは思いませんでしたよ、母  
がエルフであるのを父に話したのも恋愛に落ちてしばらくしてから  
なのですから。」

私、自分の正体を話し始めた時は、最悪な気持ちだったです。けど  
！話してる途中にクロノさんたちなら大丈夫だと、わたしの側に  
いてくれると、告白して思考が落ちていくうちに確信しました  
！

私と、お友達になつて、くれませんか？」

最初の悲壮な表情が嘘のよう。まなじりに水滴が残っているが、目  
も口も笑っていた。

「もちろんだ。」

この女性、自分で立ち直れたよ。強いね。  
俺は特に彼女に慰めも励ましもしていない。

自分が何か言うまでもない。  
自分で話してゐるうちに冷静になり思考を整理して結論を修正する。  
カウンセリングは聞くのが仕事というのはそういうことだ。

こうしてハーフェルフの少女、レンは俺たちの魔術の師匠兼最初の友達になった。

目を開けて何も無い空間を凝視、そこに手をかざし、脳がピリピリと震える感覚を思い出しつつ、魔粒子を掌握。  
細かすぎて人体すら通り抜ける魔粒子を押しとどめて圧縮。  
持っている魔粒子を俺の物だと認識して魔力として支配。  
黒く光る魔力を見ながら左手にもつ葉っぱを凍らせるイメージをする。  
そして「氷結！」詠唱によって概念を注ぎ込む！

するとパキパキという音がして、葉っぱの氷漬けができた。

上位世界になかった魔術、ほんとに楽しいです。

なぜ魔術を使えるようになってるかって？

それはですね、レンさんが友達になった&お互いの秘密を共有した記念として、【体外魔力行使 氷】と【体外魔力行使 風】の刻まれた恩寵調金武器をくれたからです。

友達になった後、こちらも隠し事はなしということで、俺とパステルについて大体全部話しました。

上位世界からやってきたとか、天階恩寵技能をもっているとか。彼女に低階【電心】を刻んだら信じてくれましたよ。真っ赤な顔をして喜んでくれました。真っ赤になったのは胸を触られたからかもしれないがね。

それで恩寵調金武器をくれたときに、破壊させていただきました。もちろん許可をとって。闇と氷属性の俺は氷の魔術を、光と風のパステルは風の魔術を使えるようになりました。ちなみに光属性と闇属性の恩寵調金武器はめったにでまわらないらしい。そもそも珍しい属性だからだと。

レンさんは光と風でパステルと同じ。光は『白森の一門』の母から、風は緑色の髪をしていた父から。そして薄い緑の髪と魔力光の彼女は光と風。魔力光は魔術の得意属性にも影響するみたいです。

しばらくは夜は少し長めに起きて魔術の練習をすることにしました。  
【体外魔力操作】を手に入れたとはいえ、熟練度が最低の今だと魔  
粒子を把握できる最高距離は20cmくらいだけです。

夜の光源は、レンさんにもらった【光源】つきの恩寵武器をもらい  
ました。パステルの光魔法『光源』を練習させてもいいかもしれない  
い。俺も閻属性の反対とはいえ、超基本魔術の『光源』は覚えてお  
きたいところ。  
いまだに補間属性である水もうまく使えないからそれも練習しなく  
てはならない。

あと、パステルが興味があるようで、魔法陣についての本をレンさ  
んから借りてました。高そうだから大事にしなれば。

そして早めの夕飯をもらい、宿に帰りました。  
お留守番してたアイリスちゃんには露店で甘いものを少し奮発して  
買ってきました。予想以上に長々と話し込んだからなあ。

なんとか機嫌を直してもらい、今日あったことを話し、俺たちの正  
体についても語っておく。

だからなに？ みたいな反応されたけどね。  
魔術についてはアイリスちゃんも先生となってくれると意気込んで  
いた。レンさん比べるとかわいそうだから比べない。

それに雷一辺倒のアイリスちゃんじゃあ、雷は風と補間属性といえども、両方の得意属性がかぶっているレンさんとパステルの間には入り込めなさそうだな。

ということであんなに俺がアイリスちゃんの感覚的な授業を聞くのだけど。

うん、全然わからん。

説明にいちいち「バチバチ」って雷の効果音を口にするんだけど、俺は【魔力性質変換】もってないので、魔力に性質が付加される感覚が理解できないしな。

そもそも魔力が雷や炎の性質をもっていたら扱いきれるのかと。

そんなこんなで、魔術の危険性に気づいてだいぶ経ってからだけど、

『クロノはまじゆつをてにいれた！』

## 15話 ハーフエルフ（後書き）

締めりのない回だったかな。

次がシリアスちよっとはいいり、本格的に準備していきますよー。

意見感想等お待ちしております。

書き溜めがあと5話しかなく、また、リアルが忙しくなりそうなため、一日一話更新となります。

## 16話 恩龍が刻まれた『もの』の扱い

以前に武器を破壊して恩龍を自分のものにするのができ事件が絶えないといったが、この性質を利用して、王家や貴族などの富裕層は金に飽かせて恩龍技能が刻印された武器や道具や防具を買い漁り、自分で壊して恩龍を吸収したり、自分の傘下に入る報酬として与えたりする。そうすることで王家や貴族の暴力がさらに大きくなり

この時代は特に力が正義だ 集権化にもつながる。

エウルーペ王国では代々二つの王朝が恩龍彫金武器の回収、つまり恩龍技能の収集を競っている。弱い王家など潰されてしまうのだ。今代の王オリヴァー・ハーヴェイ自身は強さも興味がないため珍しい恩龍を集めるのみで、しかも相手から奪うこともしない 確率で吸収されずに失われることもあるからだとか という珍しい王だがハーヴェイ王朝は違う。いつもものようにアークライト王朝との権力争いとして恩龍を集めている。利益を独占するために、強い恩龍が刻まれた物が発見される度に王に徴収されることが多い。重要な神の恩龍遺産なので国が保護する、なんて建前を白々しく通告して。

そして最もこの世界の闇を端的に表しているのが、「恩龍が刻まれた『物』」に『者』も含まれることがあるということだ。これには以前武器屋で恩龍が刻まれた物について考えたときに気づいておく

べきだった。

貴重な恩寵が刻まれた者が弱者としてあるときどうなるか

殺すことを前提として所有されるのだ。その身に宿す『神が与えたもつた恩寵』のせいだ。

王国民で且つある程度の地位があればそう簡単に手を出されることはないが、弱い身分だとさらわれることもあるし、貧しい場合は親が奴隷商に売る場合もある、……殺されるとわかっていてもだ。中世ヨーロッパパレルの文明だと口減らしも当たり前だからそこまで抵抗もないのかもしれないが。

どんな恩寵をもっているのかは【根源看破】で除かれるか、使用しないと本人にもわからないので、レアな恩寵を持つ弱い立場のものは恩寵を隠しとやすことが多い。恩寵など得たくなかった、などと神と親を恨みながら

このような立場にあったハリスさんの娘ヘイゼル 【戦乙女】と【豊穰の女神の加護】の持ち主だった も、父親想いのいい娘だとハリスさんは言っていたが、心の底では何を思っていたのだろうか。もう答えを知る人はいない……。

この世界を想像して創造したやつはここまで考えていたのだろうか。ただきれいなところ、楽しいところ　魔術の設定や恩寵技能について　だけを考えてあとは放置していたのかもしれない。

その結果として神の恵みとしての恩寵技能が逆に得たことを本人が恨む、という皮肉な事態に陥ってしまったっている。考えて書いたなら「迷惑な疫病神め！」と叩き付けたい。考えていなかったなら「この考えなしめ！」と感情にまかせて叫んでしまいたい。

書いた本人は地球の下位世界群で具現化されるなんて思ってもいいから責めるのはお門違いだとわかっている、もつと幸せな世界を創造しようと、叱責したくなる。

おそらく私は下位世界の生物など所詮は玩具だといっていた天使（仮）の態度思想がよぎってしまうから、ここまで熱くなってしまうのだろう。

天使（仮）はなぜ玩具だと30年の間も考え続けられたのか。人と話せばその人が紛れもなく生きてそこに存在していると自明のようにわかるというのに……。

そして、国民でも貧しければ奪われるのであれば況や魔獣や亜人は……。

魔獣と定義されている中には、人間に害を与えないのにも関わらず、身に宿す貴重な恩寵のために敵対動物として狩られる魔獣もいて、一部の魔獣があたりで全滅するというのもそう少なくない。聖なる獣とされるユニコーンなどを狩る組織もあるというのだから人族の欲深さにはある意味平伏する。

亜人は人族からすると狩りの対象　同じかそれ以上の知能を宿すエルフやドワーフ、獣人などであっても　となる。

長命種には優秀な個体も多く、有用なスキルをもつてることが多いからだ。

種族の傾向として見目麗しいエルフは性奴隷や魔術を使わせる奴隷としても使え、また、エルフを孕ませて優秀な恩寵をもつた子を産ませるといふ外道な行いもされている。

ドワーフの長年で培われた技術の一部と恩寵も殺すことで奪うことができる。

長命種は優秀ゆえに世界のバランスとして繁殖率が低いため、個体の能力では人族を圧倒しても物量で追い詰められる。遂には人族が多く住む地域から秘境と呼ばれる場所へ移り住まなくてはならなくなり、最も人族が栄えているシークリッド大陸から各地に集落や村単位を残して居なくなってきたのだ。

もちろん村同士の交流レベルなら人族と亜人がうまく共存している例はいくつもあるのだが。

人族と同じく短命種ではあるものの、獣人も 様々な種族がいるが 大抵どこか人族よりも優れているところがあり、優秀な恩寵の苗床、きれいなものは性奴隷、筋力のあるものが労働奴隷とされる。

体外魔術関係はほぼ全滅だが、【体内魔力行使】をもっている個体は多く、セレブに若さを保つためにと殺害されるのが後を絶たない。

そしてなぜか人族は魔獣や亜人と比べて恩寵の吸収率が高く、それを『やはり人族は神に愛されているのだ』という理論として広まってしまうている。

これが人族による正統なる狩りが横行しているのだ。

生存本能に突き動かされ魔獣が大移動した先が、王国の南の海を越えた先にある暗黒大陸。

エルフなどは新大陸にうつっているのではないかといわれている。

また、帝国の更に東の砂漠を越えた先にエルフやドワーフの国があると言われているが真偽は謎。本来エルフとドワーフは仲が悪いが、それでも近くに国家を作っているというのだから、事態の逼迫さを表しているのだろう。

レンさんの一族『白森の一族』や『青霧の一族』のようにできるだけ故郷から離れたくないとしていまだに王国や帝国に住むエルフも多いようだが。

以上がレンさんとの話と、図書館や、路地裏で情報収集した結果だ。

俺の理想国家建設の草案をレンさんに伝えると協力すると約束してくれた。

元々は人族で虐げられている民の逃げる先を用意する作戦だったが、亜人も含めることにした。ゴブリンなどもこちらとコミュニケーションがとれるなら共存したい。

その結論には何回か見た聖女パレードも原因だ。

外見は16歳くらいのかわいらしい少女で、ベールのようなものを被り、神秘的な雰囲気醸し出しているが、どこか幽鬼的な少女が『風の精霊に遣わされた聖女』だと紹介されているのを、数回は『王の道』で見た。

レンさんによると、彼女はシルフと呼ばれる、風精霊の化身と言われるほど格式の高い生物であり、滅多に生まれず滅多に発見されない種族の子供なのだそうだ。

それがなぜ王国にいて、しかも祭り上げられているかというところうことに首にチョーカーで隠した『隷属の首輪』が嵌められているとのことだ。

王国では亜人は人でないという風潮が蔓延しているといっても、まだ喋れもしないような子供を高階【隷属】で無理やり従わせ利用しているというのは、許されないだろうと俺は思う。

ここで亜人にも人にも貴賤はないだろうと、そんなの認めたくないと思ったのだ。

レンさんはエルフにも人族にも良い印象を持っていないが、それでも亜人と蔑まされている状況は嫌で、俺のことは信用してくれるとのこと。

力強い味方ができた。彼女は3年も王都に暮らしているので情勢にも詳しい。

アイリスは子供だし詳しい人は大歓迎だ。

もう国家をつくる場所は決めた。

必要なものは道具と人手と食糧。

そのためには何はともあれ金が必要だ。

もうレンさんと会ってから三か月。依頼を消化することでお金は溜まってきたが、それでも桁が違うものが必要だ。

そこに以前ウクライン郊外で助けてくれた4人組『境の風』の一人、カルロスさんが俺に接触してきた。

この人は俺と初めて会ったときに動く人形　パステルのことだ  
に異常に反応を示していたが、その後ほかに仕事があるといつてどこかにいってしまったので、俺の中でも忘れかけていた。

しかしこの人の提案には渡りに船だった。

カルロスさんには冒険者ギルドのメンバーとしての顔以外に、今代の王、変わり者として有名なオリヴァー・ハーヴェイが各地にはなつた密偵というのがある。密偵といっても後ろ暗いことをするわけではなく、珍しいものを発見しては報告してオリヴァー王の耳を楽し

ませるといふ程度だが。

そこで、俺と会ったあと、一度報告や土産をもって王都に戻ってきて王に伝えると、大層人形に興味をもたれた。

どうにか会えないか、王都に来てもらえないかと思っていたところ、いつのまにか俺が王都に來ているではないか！ 人形が手元にならないようだが、一度王にあつてもらおう、と想い近づいてきたのだそうだ。

今代の王が乱暴な手段をとらないタイプなのに少し安堵し、だがハ―ヴェイ王朝に媚を売る輩が暴走しないと限らない。

なのでこちらから出向くことに決める。

珍しい恩寵に興味津々だという話なので、交渉次第では無人島での国家建設を援助してもらえるかもしれない。

などと心に想い、身なりを整えたあとにパステルとカルロスさんと王城へ向かった。

魔術を使えるようになってから早いもので三か月。

俺は水系はだいぶ練習して【体外魔力行使 氷】の熟練度もあがってきて、球状把握なら半径4m、棒状なら最高8mくらいは魔力を練れるようになった。

他の属性も使えなくないが、氷の魔術の美しさは他と一線を画すと俺は思っている。

氷の彫像って最高だろ！

クリスタルも作れないかなーって思ったたら、地属性の分野らしい…相性悪くはないからいつかきつと……。

いまだに魔獣を氷漬けするほどには魔粒子の把握、魔力の練れる量が足りないが、範囲内で氷の槍を空中からだす『アイスニードル』で大抵の魔獣は狩れるから問題ない。

Eランクの実力だった俺が魔術を手に入れた途端に、Bランクの魔獣を狩れるんだから、魔術とはげにおそろしき。

不満があるとすれば、【魔力性質変換】の展開力には絶対に勝てないところだろう。

アイリスもレンさんにしっかりと魔術を教わって腕をあげているのだが、『概念を注ぐ』という一番大事で繊細な作業をしなくても雷属性の攻撃ができてしまうわけで……。同じ間合いにいたらこちら

がイメージする前に感電します。

まあ詠唱にもロマンがあつていいんだけどね。

いつか『エターナルフォースブリザード』を完成させたいと思つて  
る。

もちろん効果は『相手は死ぬ』。

大気ごと凍らして相手を殺す魔術はこの世界では見つからない。一  
子相伝という感じで伝えられてるかもしれないが。

相手を殺すのに周りまで凍らせなくてもいいもんなあ。

でも男のロマンだからやりたい。

魔粒子を支配できる量が少なすぎるとか、低階の【体外魔力行使】  
ではそもそも無理というのはおいといて  いつか【体外魔力操作】  
を持つ武器からもらえばよいし  、間合いが問題だ。

相手がこちらの魔力が直接届く範囲にいれば如何様にでもできるが、  
それより遠い場合、こちらの間合いぎりぎりのところで、遠距離用  
の魔術を組んで発動しなくてはならない。となると、氷魔術では氷  
の弾丸を飛ばすくらいしかなくなってしまふのだが……。この世界  
の魔術は遠距離魔術に乏しいのだ。

弾丸を飛ばすとして、その弾丸にあたつたところから凍っていくよ  
うな概念を注ぐことができるのだろうか。それに氷弾を飛ばしてそ  
れを当てて氷漬けにしただけでは、大魔法『エターナルフォースブ  
リザード』は名乗れないだろう。

パステルは日に日に人間に近づいている。

王都はやはり良い材料がたくさんあるらしく、ギルドでの依頼の報酬金のパステルの分の大部分を、身体の素材に使っているようだ。

それに既に消化器官 エネルギーを取り出せるようにしたとかがあるのに驚きだ。しかもエネルギー吸収率ほぼ100%。パステル曰く、人間の身体は無駄が多すぎるんだとさ。

レンさんに借りていた魔法陣の本は読み終わり、他にも図書館で読み漁っているらしい。二か月前には魔法陣を描きやすくするための魔道具『魔ペン』を買って実戦に入っている。

パステルは【速読】【思考強化】【集中力強化】も持っているし、学習効率が半端ないのだ。肉体疲労はないし、あってもパーツを換装すれば治る彼女の問題は精神的疲労くらいで、それも【吸血】によって血 特に俺の血が極上らしい を吸えばある程度回復できる彼女は、一週間くらいならずっと起きていられるので、活動時間も俺と比べ物にならないので差が開くのは当然といえよう。

そんなこんなでパステルは中階【体外魔力操作 颯風】にランクアップした。熟練度が満タンになっても次のスキルになるのにはかなりの壁があるって聞いてたのだけど……このメイド 最近地上にいたときの俺がメイドさんの服が好きだったのを覚えていて、侍女服を改造して作ったらしい さんはいとも簡単に……。

【錬金】や【魔獣通じ】の熟練度もあげさせているから活動時間が多いとは言っても忙しいはずなんだがなあ。

あと、光も幻影魔法を覚えられたらしい。まだまだ制御が甘いし範囲も狭いが。アイリスがふたりいたのには驚いたよ！ ちよつとでも動くとすぐ崩れたけど。ドロツて。子供が見たらトラウマになりそうだ。

幻影魔法を覚えてくれたレンさんは、ハーフといえどもさすがエルフで、【体外魔力操作 颯風】と【体外魔力行使 光】をもっている。

この三か月の過ごし方は、俺とレンさんで依頼を受けて、パステルとアイリスを加えて魔獣狩りで金稼ぎが主に。

レンさん以外が魔術を使えるのは隠しているので、この4人以外にはメンバーは加えないようにしている。

前に、どこかの冒険者が隠れてついできたのだが、レンさんが発見するやいなや風魔術『風砲』で吹き飛ばした。『風砲』ってのは風の塊を使って相手を吹っ飛ばす魔術だ。殺傷力はほぼないが、面での攻撃なので相手との間合いをとったりバランスを崩させるために用いられる。

吹き飛ばすときに一切の躊躇がなかったのは、一応レンさんも普段から隠匿すべき秘密を守りながら暮らしてきたのだというのを感じさせた。

報酬は戦闘に応じてわける。

俺はほとんど使わないが、アイリスは女の子らしく服や小物を買ひ、パステルはボディの素材、レンさんは実験の道具などを買うのに使っている。

4人で狩るから、殲滅効率もいいが、同時に恩寵回収効率もなかなかだ。といっても最近はダブリばかりとなってしまうのだが。

王都から数日も行けば秘境のような場所も見受けられ、身体が紫で常に帯電していた熊 何体か倒すと【魔力性質変換 雷】を手に入れられたが、元々持つてるアイリス以外うまく使えない や、4mくらいあって足が16本ある蜘蛛ならざる蜘蛛や、人の身体を毛むくじやらにしたような身体に狼の頭の魔獣 獣人族の狼人族に似ているが、別物らしい や、だれが使役してるのかもわからない体長5mもあるゴーレム、翼を広げたら8mもある怪鳥 倒すのに三日かかった など、これだけの戦力があればそこの村って消滅するよね? って言えるような魔獣が出てくる。

王都の壁には魔獣を寄せ付けけない結界みたいなのが塗られてるから大丈夫なんだろうけど。

概念的な結界を張れるということは、大昔に城壁を作った人は魔術『結界』ではなく、恩寵技能の【結界】を使ったのだろう。

そんなこんなで、【威圧】【爪攻撃強化】【牙攻撃強化】【魔術耐性 雷】【鬼蜘蛛系生成】【麻痺毒 強】【捕食者】【狼の王】【夜目】【換装】【自動修復】【魔術耐性 火】【風読み】【軽量化】【怪鳥の翼】、などの新しい恩寵技能を手にいれることができた。人間じゃ使えないのもあるけれど、有用なものも多い。

【鬼蜘蛛系生成】のできる糸は【蜘蛛系生成】の糸よりも太くて頑丈。だが粘性がかなり低い。また、少し作るだけでも多くの材料が必要なので、生身の生物が使うと一気に身体が物理的に削られて死ぬ。よってパステル用だ。

【捕食者】は相手の肉を食らうことによってステータスを奪える。殺した時にも奪えるので二倍お得だ。食べる勇気のでない魔獣もいるけどね。

【狼の王】は狼たちに指示できるようになる。ただ熟練度が低いと弱い個体だけだ。【魔獣通じ】と併用していききたい。

【換装】。ゴーレムは腕と脚というパーツを入れ替えて間合いを変えてきたことがあった。人間でそれをやるとたぶんやばい。

【自動修復】は【再生】の自動版だ。もちろん生身の人間が使うと死ぬ。

【軽量化】はその名の通り。これは魔粒子が関係していないタイプのスキルだ。怪鳥の巨体はこれがあつて空を飛べていたようだ。

【怪鳥の翼】は翼を作れる。怪鳥と戦つてるとき、翼を壊しても切り落としても生えてきたのはこれの能力だったみたいだ。人間でも一応魔粒子を集めて翼とすることはできる。しかし少し揚力を発生させ、後はグライダーのように風に乗るのが精いっぱいだ。要練習である。

そしてパステルはこれらのスキルを全て使うことができる。身体の一部を材料にされても補充すればいいだけだしな……

俺の天階の恩寵技能2つありきとはいえ、俺は呪いで使えないのに全部使えるとか……真のチートはパステルだったのだ。

アイリスとレンさんはこの世界の人なので、根源量には限界があるから【電心】くらいしかまだ刻んでいない。

【電心】があるところくらい距離なら会話できるのでとても便利だが……。

彼女たちに刻むときはよく考えてからやらないといけないうら。

以上が、王城へ向かう日まで、3カ月の行動。

## 16話 恩寵が刻まれた『もの』の扱い（後書き）

前半少しシリアスに世界背景。後半は淡々と。

次回から物語が加速する！ かな…？

建国準備編は21話までになりました。

物語に彩りを添える、厨二な武器や魔導具を、「神器」として無期限で募集します。強いスキルが刻まれているものなどを名前とセツトで。

出てくるのはだいぶ後になるので、気長に読者様が増えるのを待つ所存ではありますが。

もしよろしければ、考えて頂けると幸いです。

## 17話 交渉と新たな仲間と

「ふむ、クロノ・ツアナーク殿、パステル殿、面を上げよ。」

「はっ。」

俺の正面、段差によって高くなったところにおわしますは、今代の王オリヴァー・ハーヴェイ陛下。

そう、この場所は王城の中にある謁見の間だ。

一応の客人ということで人力エレベーターで運ばれた先の部屋をいくつか通り抜けてたどり着いたのがここだ。

謁見する場ということで、それまでの道のりにも多くの家臣がこちらを警戒するような目で見たり、身だしなみを整え直してくれたりした。

今のこの部屋にも衛兵が王座の段差下横と、部屋に入ってきた入り口にも詰めている。他にも、こちらからは見えない場所から警戒や観察をしているものもいるのかもしれない。

王城の中はどこも華美だったが、この謁見の間はそれらと比べても特に輝きを放っている。富に興味が無い王といえども、歴史ある王

国の王としての見栄が必須なのだろう。【根源管理】で視ると恩寵が調金された武器や道具がそこかしこに、ただ部屋のインテリアとして存在している。

「そう固くならずとも良い。そなたは面白い物を持っていたそうで、我を楽しませてくれるだろう客人だ。」

そういわれても、雲の上の身分の人になど会ったことがない小市民だった俺には難しいことである。上位世界地球の日本にいた時の最も高貴なる身分といえば天皇家のことだろう。彼らとの接点など、祖母が年配に多い皇室ファンだったことと、祖父の祖父がある大学で首席をとったために、昭和天皇から下賜された銀時計を、今は俺が上位世界から持ちこんでいることくらいだ。

正直礼儀作法は全くわからん。とにかく王が許可するまでは発言してはいけないんだったかな。

「今日の謁見は貴殿らが最後だ。存分に語って我を楽しませてくれ。」

そして俺は口を開く。

「我々は天使として上の世界から降りてまいりました。」

最初は「はあ？」と呆ける人や「天使を語るとは神への侮辱！」といきりたつ人が周りにいたのだが、それには取り合わずに間髪入れて上から降りてきた時からの話をした。

といっても、天使（仮）を殺害したことは言っていない。

パステルが人形だったところに動いていたのを説明するには根源量のことから話した。

王国では根源量で人格を持つかがどうかが決まるといのは知らなかったようで、大層驚いていた。

天使であるといったのは、この後にする提案をスムーズに行うためだ。

「であるからにして、上から降りてきました。」

そして、私が神より預かった任務は、貴重な恩寵がこの世界から消えてしまうのを防ぐことです。相手を殺した時に恩寵が手に入られるのは絶対ではありません。この方法だと、確実にこの世界から貴重な恩寵が減ってしまいますので。

よって、私が保護したく思います。」

恩寵を集めるのはこのエウリーペ王国の政策。天使が言ってきたからといって方針をいきなり変えれば混乱は必至で、そもそも二つの王朝がある時点で変えられないでしょうから。」

ここまで言い切り、王の反応を待つ。

「天使を騙るとは！」「よくもずけずけと！」「この神聖なる王国をなんと心得る！」

と外野がうるさいが、王が目で制すとすぐに黙る。

二つの王朝があるといっても、謁見の間にいるのはハーヴェイ王朝の手のものばかりのようだ。

「たしかに、恩寵が失われていくのは我も問題と思っている。」

しかし、貴殿が天使である証と、どのように保護するというのかを示さねば誰も納得せぬ。」

前評判通りからの、この王は珍しい恩寵を集めても壊しも殺しもしないことから、恩寵が消えるのをもつたいたなく思っているのだろうという予想が当たったようだ。

意見自体には好意的だ。

「はい、おっしゃる通りでございます。では天使の証ですが……誰か、【根源看破】を持っている人がいらっしやったら、私の根源量を見ていただくとよろしいかと。」

この場にレアな高階【根源看破】を持っている者が一人いるのは確認済みだ。

王が一人の男に指示し、俺に【根源看破】を発動する。

「ぐはっ！」

と同時に頭と胸を押さえながら大理石の床に倒れた。

「はあ……はあ……信じられません……根源量が、多いという、レベルではありません！ 我々の、数億倍です！」

息も絶え絶えに王に向かって叫ぶ男。

それを見ての王の言。

「うむ。天使である、少なくとも我々は違う存在であるということは認めよう。」

してその保護方法とは？ どこでするといふのかね。」

「はい、王国の西の端から北に行ったところにある、無人島ブリトニアに保護区を作りたく存じます。強いてはその援助をお願いしたく……」

「ふうむ。あそこは確か土地も王国より荒れ果て魔獣や亜人の巣窟だったはずだが？」

「私の天使の力を使ってある程度は改善しましょう。王国内でやる  
と迷惑でしょうし、表向きは私が勝手にやったということでもいいの  
で、援助をしていただけないとも黙認をお願いします。」

「はっはっは、正直なやつよのう。よかろう。援助をしてやろう。  
もちろん裏だからあまり出せぬがな。いやなに、それで貴重な恩  
寵を見られる機会が増えるのならば、今やっている道楽と変わらん  
よ。その分を貴殿にやる予算にまわそう。」

「はっ、ありがたき幸せ。隠れながらですが、貴重な恩寵を持った  
ものを王都に連れて、王に見ていただくのを数か月に一度ほど、や  
らせていただきます。」

一応、成功なのかな？

今夜のパーティーにも出て行けと言われたが固辞させてもらった。アークライト王朝の手の者には「天使」であることを知られないほうがいいだろうから。

その代りに支度金を大目にいただいた。見てみると金貨200枚。これだけの量を簡単に出すとはさすが王というべきなのか。

個人的にはあの王は嫌いじゃないが、国にとって良い王じゃないことは確かだろう。

自ら戦争を起こしはしないが、他の者がやる分には見逃していて、恩寵を保護する方針であつても、恩寵狩りをする輩を潰さない。

もちろん王朝同士の間係でやろうにもできていないというのはあるだろうが、王なのだ、責任は重い。

援助してもらつ以上、ぐちぐちと言つても仕方ないだろう。俺のほうで遥かに力がないのだから。

それに、人族同士や人族と亜人の確執を聞いて、自分が解決しようと思つたのもただのエゴかもしれないし。

上位世界の人間としての責任。

自分だつて絶望的な世界を生み出してきたかもしれないのだからせめてもの償い。

単純にそんな不幸があることが許せない。

っていう思い込みなのかもしれないのだ。

あとはちよっかいにも気を付けなければならぬ。

ハーヴェイ側の偵察ならまだかわいい方で、アークライト側から暗殺者が来る可能性もあるのだから。

まずは支度金で大量の食糧と、居住区を作るための資材や道具、そして下見に行ったパステル 空を【怪鳥の翼】で飛べる によると、王国とブリトニア島の海峡は荒れ狂うことが多く、普段から潮も早いとのことなので、ある程度丈夫な船も用意しなくてはならない。

俺たち4人ならパステルによって運んでもらえばいいが、これから人や亜人を受け入れるつもりなのだ。船がないと輸送なんてやってられない。

宿に帰り、【電心】で呼んでいたレンさんとアイリスに王城でのことを話し、今後の計画を立てる。

船は中古で買うのが一番安いらしいが、『固定化』の魔術をかけてもらうと一気に費用があがる。新品を買うよりはましなのだが……。俺たちには地属性魔術を使える人がいないのは、身近な生活環境をやりにくいということ、のちのちにも困るだろう。

まず、レンさんにはエルフ関係の中でも小さく潰れそうな集落から、移りたいと思っっている子をスカウトしてもらおう。

パステルは先にブリトニア島にまた行ってもらって、資材の運び込みを少しと、島の測量を任せ、最初どこに拠点を築くかを選んでもらう。

島の南に入った後も、居住区を広げるために北進していく過程で魔獣や亜人と接触する可能性が高いので、そのことについても調べてもらう予定だ。彼女の【魔獣通じ】により共存できるものもいるかもしれない。

アイリスはローブで顔を隠しつつの情報収集くらいだろうか。あと魔術の練習。

「もっとお兄さんの役に立ちたいです！」って言うてくれるのはうれしいのだが…。

そして俺は、余った金で少しずつ奴隷を解放しようと思う。いきなりたくさんは無理だけど。

あと無人島に来てくれない人もダメだ。

できれば買ってそのまま好きなのところに行きたいという子は路銀を渡してあげる、というところまでしたいのだが、正直そこまで余裕はない。

それに加えて、オリヴァー・ハーヴェイ王にも「貴重な恩寵を保護」という名目で援助されているのだから、最初はできるだけ良い恩寵を持ち、かつ無人島ブリトニアに来てくれる子を優先させてもらう。それが一番多くを救えるのだ、と自分の心に言い聞かせて。

それと亜人はエルフ以外も手に入れたいところだ。他の亜人を勧誘する時にやりやすいだろう。

宿に戻ってきて新たに部屋を一つとなりに取る。  
ぶるぶると震える住人が3人増えたからだ。

この三か月、奴隷市場の相場も調べているので、足元を見られること  
となく商談をすることができる。  
大抵、それなりの恩寵もちの奴隷は金貨5枚はする。もちろん恩寵  
の種類で大きく変わるが。

今回買ったのは、青髪の兎人族の少女フラン、と赤髪の猫人族の少  
女ミア、茶髪の人族の少女ステラ。

フランは【魅了】を、ミアは【魔獣使い】、ステラは【体内魔力  
行使】を主に所有していた。【根源管理】で視ながらだったので、  
さぞ高いかと思ったら、これらの恩寵をもっていることを奴隷商人  
に知られていないようで、美しい少女の相場である金貨3〜5枚で  
買うことができた。やはり亜人のほうが珍しいから高いようだ。

よほど奴隷にされたのが怖かったのか、名前を聞き出すのにも苦勞  
した。

身体が汚された形跡もないのだが。

ちなみに奴隷の首輪や手錠はすでに破壊した。恩寵もちだっと思われてなかったから、【隷属】【従属】【屈従】のどれも刻まれていなかった。まあ高価だろうしね。

そのうえで優しく話しかけているのだが、返事は一応返してくれてもなかなか怯えは消えないようだ。

結局アイリスを呼んで、3人と話してもらったことにした。元奴隷という同じ立場な上に、同性でほぼ同年齢なのだから馴染みやすいだろう。

俺は食糧を買うルートで信頼できる場所を探していくことにする。無人島ですぐに自給自足ができるようになるなんて思っていないからね。

夜になる。

今日はレンさんも宿に来て朝までいるようだ。

男と一緒の部屋はどうかと思うが、他の女の子もいるし今更だな。

それに俺は興奮しても身体が反応しにくいタイプなので大丈夫だろう。

今日はお酒をもってきてくれていたようだ。

友達と飲み明かすのが夢だったらしい。なんてさびしくて健気な夢……こつというのは遠慮なく叶えてあげたいと思う。

だが、完全に酔いきるわけにはいかない。

無人島の開発をどのようにやるかについて、話しても話したりないからだ。

以前パステルにいつてもらった調査では、無人島といってもかなり大きいので人数が増える分には気にしなくていいと言われた。

だがそれも、土地が余っているという話で、その人数分の食糧生産をしなくてはならない。

また、奴隷として捕まっているのを買うために、何かあの島の特産品 食物でも鉱石でもいいので を見つけて、輸入だけでなく輸出もしなくてはならないだろう。

奴隷商人を襲うというのをやりたい気持ちはあるが、奴隷の売買自体は合法。違法なのは無理やり奴隷に落とすことだけだ。だからその場を押さえられなかった場合はどうしようもない。

武力もなにもない島では、あまり大きく王国にたてつくわけにはいかないのだ。

そして農業をやるにも漁業をやるにも鉱山を開くにも人手が足りない。

その人手を増やすにも、先立つ物、お金がない。

そこで一つ浮かんだことがある。  
労働力がないなら、作ればいいのではないか？  
地属性や金属性の魔術である『ゴレム』。あれは術者が魔力で操っている、生命ともいえないものだが、大目に魔力を込めて命令しておけば、その通りに動くという話だ。

前提条件として地属性の魔術師がいなくてはならないが、今日買ったステラは髪色からもおそらくそのどちらかの属性だろう。となると、明日の朝には【体外魔力行使 地】の刻まれた武器を買うことにするか。おそらく金貨15枚くらいで買えるはずだ。

これくらいは、地属性の魔術が俺たちにもたらす恩恵に比べたら安いものだろう。

それに一度手に入れて俺が壊せば100%吸収できるし、他に地属性に適性のある子が現れたときに、自由に刻むことができるのだから。

あともう一つ。数百年前にとある大魔術師がやったことに、死体に魂を宿らせるものがあるらしい。

レンさんのエルフの里にそんなことを書いた本があったそうだ。死体をもてあそぶとされて禁術の中の禁術だそうだが、エルフの集落を周るときに見てきてくれるとのこと。

闇属性の魔術だそうなので、闇属性であり【根源管理】で根源を見れる俺には合っているだろう。死んだら終わりだ、と思っっている倫理観なので死体を使うのにそこまで忌避感はない。医者の見学とかもしたことがあるしね。死んだばかりの健康な肉体を使う実験とかさ。殺人囚を殺した後売ってもらった契約を持ちかければ喜んで売って

くれるだろう。埋葬の手間が省けるのだから。  
実際には疫病が蔓延しないためにこちらがちゃんと処理したか確認  
しなくてはならないが、この世界の人にまだそんな知識はないはず  
だ。

いつのまにか酒にまどろんだまま眠ってしまっ。

そして夜が明けると、レンさんも俺も床に転がって寝てた。

パステルがもう出てるのマッサージしてもらえないから身体が痛い  
のを治してくれる人がいない。

彼女は夜も休まずに空を飛び続けているのだろう。  
ふと最近、彼女とあまり一緒に行動していないのを思い出す。俺た  
ちが休憩しているときも何かしらの仕事をしてきているのだ。

帰ってきたら労いとして抱きしめて頭を撫でてあげよう、あの愛し  
い娘のような存在を。

それまでにこちらも準備を進めなければ。



17話 交渉と新たな仲間と（後書き）

王さんのことは覚えておいてくださいな。後でもでてきますから。  
この王様は、優しいけど有能ではありません。

眠い時に書くと後で大幅に修正しなくてはならなくなる……。

## 18話 プリトニア島視察

皆さん初めまして、またはこんにちは。パステルと申します。

まずは自己紹介からですよ。

従者が失礼な態度をとってしまつと、ご主人様の評判にまで影響してしまいます。

仕える者としてはそんなこと許されません。

主人の命令は絶対で主人が全て。それが従者というものです。それが存在意義です。

私の名前はパステル。苗字はありませんが、心の中ではタナカを名乗っています。

この「タナカ」という苗字、この世界の共通語は日本語のくせに、人名は英語風ですので「ツアナク」「ツアナーク」「テアナク」なんて呼ばれてしまいます。

誠に遺憾な事態ですが、うまく発音できないように『設定』されているので我慢しています。

なぜ私の一人称で書かれているのか、なぜ私がいつもの舌足らずな調子ではないのか、そう疑問に思われる方もいらっしゃると思うので、この場で説明をさせていただきます。

まず一つ目。これは簡単です。

ご主人様から無人島ブリトニアの視察の命令を拝命したので、今現在、一人で海の上の空を飛んでいるからです。

正直他の雌いん 失礼、もとい女性陣を置いて来たのは不安になります。なぜかご主人様は私やレン様が誘惑しても欲情してくれないので大丈夫でしょう。

図書館でご主人様に内緒で男と女の生態について調べ、性交渉をする器官も、性的に欲情しやすい身体のバランスや普段からのしぐさなども、片端からインプットして、情報を元にバージョンアップしているのですが、いまだに成果が現れません。

何か足りないのでしょうか？ 顔も今はほぼ完全に人間ですし、身体に間接の人形らしい継ぎ目など存在せず、この世界にいる誰よりも肌をきれいにしているつもりなのですが……。

それともご主人様に異常に抵抗があるということでしょうか。

私は生まれてから家では常に一緒にいたので、ご主人様は肉体的な男女経験は一度もなく、思春期相応の興味はあったことを覚えています。その分析結果からすると、女性に馴れる時などなかったはずなのですが。実際に誘惑すると目移りはしてまずし。身体が反応するまでいかないだけで。

二つ目。

生まれてたばかりといつても、人格が芽生える段階に最初からあったのですから、流暢に言葉を話せるようになるのに数か月もかかるわけがないじゃないですか。ましてや、人格が芽生えるまでの20年間の記憶もあるのですから。

ではなぜに舌足らずな口調を続けているか、ですけど、簡単に言えば引っ込みがつかなくなったというところでしょうか。

ご主人様はその容姿の良さと身長の高さ　身長を縮める呪いは結果的に良かった気がします　から人に極めて好かれやすく、アイリス様もハーフェルフのレン様も、依存とはいえ、驚くほどの速さでなついてしまいました。その後も依存が好意に変わるのにそこまで時間がかかることもなく。

あの二人をご主人様が見る目は、アイリス様には妹を見る目も含まれています、実質的には女子、女性を見る目です。

その時に私は思ったのです。私だけが違う感じ方をしてきていると。それが娘を見る目であっても、特別は特別、オンリーワンです。それが妙に優越感を得ることになり、そのまま『娘を見る目』のきっかけとなっている『舌足らず』な口調を続けることにしました。それが今も舌足らずな口調を続けている理由です。

ただ、最近は娘として見られるのは他の雌い、もとい女性陣に比べて不利だと感じてきましたので、どうしようか迷っています。なにかきっかけがあればいいのですが。

ブリトニア島が見えてきました。

ここに来るのは二回目ですが、相変わらず痩せた土地に、魔獣の多さゆえの暗い雰囲気が見えませんが、見ているだけで陰鬱になる人も多いでしょう。黒い樹も気になりますし。

ここからだと言都に【電心】は全くもって届かない距離で、ご主人様の声も指示も聞けないのが残念ですが、私を信頼してくれたのですから応えねばなりません。

それにしても空を飛べるのは便利すぎます。

鳥以外の生物も全て空を飛べるように進化してきたらよかったです、なんて考えが浮かんできませんが、それくらい飛ぶという行為は気持ちがいいんです。

もちろん風を切って進むのが涼しいというのもあるのですが、それ以上に、下に見える障害物を全て無視して突き切ることができるのが快感です。

ご主人様の行く手を阻む愚かな魔物を一太刀のもとに切り捨てる時の快感に似ています。

図書館で読んだ『従者道』理想の従者になるためには『』という本には、「主人が不快なものを認識した後には排除するのが三流」「主人が不快なものを目にとめる前に排除するのが二流」「主人の不快なもの世界から全て排除するのが一流」とのこと。

私はまだまだということですね。先はとてつもなく厳しいです。

空を飛ぶという話題に戻りましょう。

私が空を飛んでいるのは、背中に翼を模した銀板を付けて、【怪鳥の翼】を発動し銀板を使って翼をととのえ、私は【軽量化】を発動させてから、翼をはためかせて飛びます。

銀を使っているのは適当な安い金属の中では魔力伝導がよかつたため、元々翼を模しているのは【怪鳥の翼】が解けてもそのままバランスを崩さないため、翼に【軽量化】をかけないのは、あまりにも軽いと風に流され過ぎてしまうため、です。

銀板を背中につけるというのも、翼をはためかすというのも、私が人形であるからこそできるのです。普通の人間が同じことをやるうとしても、そもそも翼を背中筋肉で動かすというのも難しいですし、人間の筋肉強度では空に飛んでも背中皮膚がとれるというスプラッタなことになりかねません。だからご主人様たちがやる時は、金属性の翼をしっかりと身体に固定して、【風読み】で風に乗ることだけを意識するのです。

ちなみに魔術でも空を飛ぶことはできません。一応方法はいくつもあるのです。

しかし、元々作られた翼を魔術で無理やりパタパタさせるか、空中に足場を作り続ける魔術を使うか、足の裏など身体の一部からエネルギーを噴出する形で推進力を得るか、どの方法をとっても、人の身体を支えるのは難しいですし、使う魔力も膨大なものとなります。まいます。

そして致命的なのが、どの魔術で再現しても、大抵の魔術師は同時に一つの魔術しか使えないということです。

一つの魔術を発動させ続けている間に、他の魔術の『概念を注ぐ』など、並大抵のことではありません。よって、魔術師は主にその攻撃力で持て囃されているのに、制空権をとっても攻撃できないなどということになるのです。

これでは嫌がられるのもわかりますね。今でも研究は続けられているようですが。

いつのまにか島の南海岸に着きました。

まずは持っていた荷物を降ろします。

持ってきているのは、主に農具と種です。ここは一から開墾しなくてはいけませんから。

私をご主人様より【豊穰の女神の加護 ラウニプロテ】を刻印して頂いているとはいえ、土地を肥沃にすることができても、何も生えてない土のままでは意味がありません。

この島の調査より先に、肉体的疲労がないこの身体でせつせと耕してしましましょう。

精神的疲労はどうなのかと思われる方がいらっしやるかもしれませんが、実は特に問題はありません。

ご主人様に【吸血】して精神的に活力を回復しているのは事実ですが、そもそも精神的疲労自体ほとんどしていないので、アレはスキップ、儀式みたいなものですよ。ご主人様には聞かれてないのと言ってませんが。

いつも身を粉にして働いているのですから、役得があってもいいは

ずです。

「風よ、三十の弾丸となりて、土を返しなさい、範囲指定前方正方形<sup>エアフレット</sup>20m、風弾！」  
魔粒子を収束、支配し、練った魔力を前に出した右手の先30cmほどに大きく纏め、詠唱を鍵として概念を注ぎ、最後の魔術名とともに魔術を解き放ちます。

風が唸るゴウツという音の後に

『ドンツ！ドンツ！ドン！』

と風の弾丸が前方の地に突き刺さります。

砂煙が舞い上がり、視界が閉ざされます。もうちょっと遠くに向けてやるべきでした、少しの間何も見えません。戦闘でやったら最悪だったでしょう。少し気が緩んでいたのかもしれませんが。

砂煙が消えた地面はといいますと、  
ある程度は土を掘り返し柔らかくできたようです。

土や金属といった、質量をもつものと相性がものすごく悪い風属性の魔術にはうまくやれたほうだと思えます。地属性の魔法は、  
風と光を得意とする私にはほとんど使えないのがつらいです。

このまま魔術の練習ついでに『<sup>エアカッター</sup>風斬』や『風弾』で地道に耕しても

いいのですが、時間はかからないならその方がいいでしょう。

よって【錬金】によって無理やり土を掘り上げてしましましょう。手を両手の平でパチンツと合わせて、地面に触れ【錬金】を発動させ、前方5mくらいの土を上に向かってほぐします。

ちなみに合掌してから【錬金】するのがご主人様によると『浪漫』らしく、私もそれになっています。

あとですね、『風弾』の詠唱は完全にオリジナルです。

レン様には風情がない、伝統がどうのこうのと不評でしたが、『概念を注ぐ』にはより強固なイメージが必要とのこと。でしたら効果範囲や実際に起こす現象を詠唱した方が合理的だと思いませんか？レン様によると、一般的な『風弾』の詠唱は『風よ、精霊の風よ、その身を貫くものとして顕現せよ、エアブレット！』だそうです。こんな詠唱だから、同じ『風弾』といっても、個人個人で形が変わってしまうのです。『貫くもの』では個人のイメージで、針や槍、刺殺剣のような形状まで幅広く、効率の悪い形になってしまいます。

私とご主人様は『弾丸』の形をしていますから、『弾丸として』という詠唱で銃に使われる弾丸 スパイラル回転をするようにライフリングが刻まれた物 を思い浮かべることができますが、他の人が使ってもできません。まずは効率のいい形状を知ってもらわなくては。

私の『風弾』はレン様が驚き、信じられないと眩くほどの威力をしているのも、全てご主人様から得た上位世界の知識のおかげです。最初この世界に来たときは、よく泣き言を仰られていて、聞き役に

徹していた私には、元素記号や兵器についての知識を頂けたのです。これは他の女性陣に対する圧倒的なメリットと言えましょう。この世界の常識に染まっていると新しく理解するのは難しいでしょうから。

ちなみに、ご主人様は非合理的な詠唱も「これも嗜みだよ。」といい笑顔で仰ってました。できる男は劣った方法であっても受け入れてあげる度量があるんですね。感服です。

『中二病』がどうこうと言っていたのには首をかしげましたが。

さてさて、単純作業で耕すのが終わりました。

【錬金】で土をひっくり返したあとは、農具でせつせと耕しました。いつのまにか日が暮れていましたが、【夜目】を持つ私にはあまり関係ありません。

朝、海の近くですので東の日の出がよく見えます。

長方形に横2km縦3kmの畑ができました。邪魔な木は『風刃』でなぎ倒し、【錬金】で根っこごと掘り出して処分しました。

速度重視でやったので粗いですが、私の恩寵技能で後は十分でしょう。

【豊穡の女神の加護】を発動。

私が畑を歩き、見るだけで土が歓喜の声をあげ植物が貪欲に育ち始めるのが見えます。  
いまから種まきです。

これは力技をやるわけにはいかないので時間がかかります。

ここに来てちょうど一日が経った夕方。大方第一陣の農作業が終了したころ、【鬼蜘蛛糸生成】と板で作った鳴子にひっかかる音が聞こえてきました。

【鬼蜘蛛糸生成】は弾性が低いので罨をつくりやすいです。

【犬嗅覚】と【蝙蝠聴覚】を発動させ、索敵を開始。

……すぐ見つかりました。背の高さから考えて四足歩行の動物が8体。

雑魚ですが、せっかく作った畑に入られるのも業腹なので、早めに狩りにいくとしましょう。

ちよつと離れているので【電心】【魔獣通じ】でメッセージを送りますが無反応。持っていないのが普通なのですが、やはり相手の魔獣は【電心】をもっていないようです。

次にある程度近づいてから「その獣、ここから先は通しません。引き返しなさい！」と声を出しながら【魔獣通じ】を使います。これによって相手が人語を介さなくても意味は伝わります。

『エサ。腹減った。喰う。』  
どうやらコミュニケーションする気はなさそうなので一瞬で葬ってあげることになりました。飼うにしても今はエサがありませんし。

何で殺そうか、などと考えていると8匹のハイウルフが陣形も何もなく闇雲に飛びかかってきました。

私の魔力支配空間は全方位だと6mほど。間合いに入ってくるのを待っていると撃ち漏らしの攻撃を食らって、服が汚されるのもいやですね。

#### 【戦乙女 ヴァルキュリエ】 【換装】 発動

普段使う仕込みナイフではなく、身体の内部に入れている鋼鉄製のソードを【換装】で右手の先と入れ替えます。これで剣をもったことにより【剣捌き】が発動。【戦乙女】の効果で身体が血を求めて興奮します。

相手との距離は最短で10m、向上した身体能力でバネのように蹴りだしソードで頭を突き刺し、そのまま空中を飛ぶ数瞬に『風壁』を目の前に発動、足で空中の『風壁』に着地し、身体をひねって次の目標に向かって弾丸のように飛ぶ。今度は三匹ほど固まっていたので目にもとまらぬ速度で剣閃が光り首を落とす。

後も同じ。血が流れるほどに身体能力があがる【戦乙女】により本気で逃げようとするハイウルフに追いつき首を刎ねる。

わずか15秒。少し開けた広場には転がる物言わぬ亡骸8つと、中央にてソードを死んだハイウルフに突き刺しながら持ち上げて血を浴びている、純白の髪が紅く染まった妖しい美少女。そんな光景を残すのみとなった。

「ふふ、ふふふ、あははははっ！ 素晴らしい！ この身体は！  
Gがかかっても気持ち悪くならず、切り裂かれても痛みでひるむこ  
となく、足がちぎれたならその辺の石を足にすればいい！ 劣等な  
人族や亜人など比較にならない！ あははははっ！」

ご主人様は別ですけど。

「【戦乙女】は使いすぎるとまずいかもかもしれません……気分が高揚  
しすぎてしまいます。ご主人様にはこんな戦闘狂のような姿を見せ  
るわけにはいきません。制御できるようにならなくては。」

つい独り言がでてしまいました。

まあこの場はもういいでしょう。

即刻、農場に侵入されないように柵、いや壁を作ることにしましょ  
う。

私をご主人様の元に戻ってる時も荒らされたら嫌ですもの。

既にブリトニア島にきて二週間が経ちます。

それなりに開拓できました。空から見ると6分の1くらいは切り開けたと思います。

森は極力そのままにしたので、やりにくい作業が多かったです。

まずは南の海岸　　上陸したところです。王国に一番近い場所の港。

とはいうものの、発着場が伸びているだけです。最初に大きな船で来ることもないでしょうから、海が深いところにまで伸ばしていません。

森の木をあまり使えなかったので、落ちてる葉っぱや枝などを【錬金】して木材に変えて補いました。後は石や大量にある砂を【錬金】で岩にして補強しました。【錬金】で原子配列を変えるのには時間がかかりかかってしまいましたが、上位世界では不可能なことなので我慢します。

失敗してもすぐに直せるので突貫工事です。この世界では魔術や恩寵で気軽にできるから、細かい科学技術が進まなかったのでしょうね。このアンダーワールドに来てからご主人様も物ぐさになっ  
てきている気がします。

海から砂浜を越えると高い壁があります。

薄いので防御力はありませんが、風で砂が飛んでくるのが嫌だったので作りました。木を砂浜の近くにもつと残しておけばよかったです……失敗でした、さすがの【豊穰の女神の加護】で木の苗を見ても、数週間では大人の木にはなりません。

木でできた門をあけると、そこには広場があり、左手には居住区用の空き地、右手には公共施設を置くための空き地があり、奥には広大な農場が広まっています。家畜用の放牧地帯なんかも、柵で囲んで作ってありますが、ご主人様たちが来てからの完成になるでしょう。

広場には、魔獣から剥ぎ取った様々な腐りにくい部位と、探索中に見つけた石なんかを置いています。【ルートマスター根源管理】をもつご主人様ならば、恩寵が刻まれているものや、貴重な鉱石がすぐにわかりますから。私の熟練度の低い【鑑定 鉱石】ではそんなに貴重なものはなかったと思いますが。

そして農場の奥には、切り開かれていない森との境に、厚い壁が横に長くそびえ立っています。

これが森からやってくる不逞の輩、魔獣対策です。あれから二週間、魔獣が沸いてくることこの上ないです。一匹見たら10匹はいましたよ。恩寵をもっていない魔獣が多かったので瞬殺でしたが。あまりステータスも上がらなかつたです。

ちなみにこの壁は研究中の魔法陣を使いました。立体魔法陣は自分で作るには5年ほどかかりそうですが、平面魔法陣は大体理解し、オリジナルを作れるようになりました。これでご主人様に教えて差し上げることができません、手取り足取り密着して。

魔法陣のしくみは、描くことによって、詠唱による言葉よりもより強固なイメージを浮かべて『概念を注ぐ』ことができるようにする、というのは当たっていたのですが、ある現象を知らない人が魔法陣を使えばその現象を起こすことができるのはなぜか、その解析に時間がかかってしまいました。

答えはなんのことはない、現象が細かく魔法陣内で説明されていたということ。不思議なのは、魔法陣を使って未知の現象を起こす時に、魔術を発動する時には術者は知らないのだからもちろんその現象をイメージしていないのに発動していることです。つまり現象の知識が魔法陣から術者にフィードバックしないのです。それなのに『概念を注い』だことになっているのです……世界を誤認させるということでしょうか？ 魔術には私もご主人様もたどり着けていない裏がある気がひしひしとします。

私達はイメージをするのが、イコール『概念を注ぐ』ことだと思つてましたが、おそらく一つの手段に過ぎないということでしょう。

詠唱の例でもわかると思いますが、魔法陣に弾丸をイメージしろと書かれていても、弾丸を知らない人は弾丸を生成できない。しかし魔法陣に弾丸の形状を説明してあれば使えるようになります。この点で詠唱よりも優秀ですね。

デメリットは応用性のなさでしょう。直前に書き換えることなどで

きませんから。詠唱や無詠唱なら、発動直前に効果範囲を変えることもイメージを上書きすればいいので可能ですが、魔法陣は書くのに時間がかかってしまうので。よって魔法陣は大魔術向きといえるでしょう。

あとですね、魔法陣を描ければ人の体内に描くこともできるみたいです。ご主人様のように強く根源に刻むことは無理ですが、ご主人様が気づいておられるかはわかりませんが、ご主人様に刻まれた呪いもおそらく魔法陣みたいなものです。天使（仮）だったので根源に直接刻まれてしまったようですが。

まだ魔法陣を物に描くくらいしか一般にやられていないようですが、奴隷化の魔法陣 命令に従えないなど が人に魔法陣を描ける事実と共に広まったら大変なことになるかもしれません。

横一面に広がる壁を作った魔法陣は基本的に詠唱と同じで、属性、性質、現象、結果、範囲を合理的に入れこんだものです。小さい文字を並べて線と見立てて、その線で図形を描きます。この図形は一般的な六芒星を円で囲んだもの。何でも魔力同士が反発せず、むしろ力を増幅しあう書き方もあるのだとか。要研究でしょう。増幅を高めるのが立体だと細かい計算が必要になるから、立体魔法陣は作るのが難しいのだそうです。

他にも、壁に近づかれないように、森の中に大量の獣避けトラップを張り巡らしています。

これはご主人様たちと本格的に移住してきた時には注意してもらわねばなりません。

以上を終えて、今は帰路も終盤にさしかかっています。  
早く帰ってご主人様に報告しなくては。

そして二週間の間、考えました。舌足らずな口調を続けるべきか否か。

結論。止めます。やはり娘と認識されている間は一步負けているでしょう。私も一応ご主人様と同じ二十歳、子供でないのですから。

こうして王都の近くの森に降り立ち、逸る気持ちを何とか押さえつけ、優雅さを失わないようにご主人様がいる宿へ向かいました。

なぜか胸騒ぎがしたので、走り出します。ご主人様に危機が迫っているのかもしれない。

……果たしてその予想は当たることになったのです。悪い方に。



## 18話 プリトニア島視察（後書き）

パステル視点楽しかったです。

パステルの現時点での保有恩寵技能を手に入れた順に列挙。

【傳く者 サーヴァント】 【紅茶淹れ】 【短剣使い】 【魔力貯蔵】  
【体外魔力操作 颯風】 【人形師】 【速読】 【ひとり狼】 【犬嗅覚】  
【目利き 果実】 【鑑定】 【熱波】 【衝撃】 【無音】 【蜘蛛糸作成】  
【糸繰り】 【麻痺毒 弱】 【再生】 【強酸生成】 【打撃耐性】 【発  
超音波】 【蝙蝠聴覚】 【風属性耐性】 【吸血】 【雑食】 【森林闊歩】  
【疲労軽減】 【剣裁き】 【戦乙女 ヴアルキュリエ】 【豊穰の女  
神の加護 ラウニプロテ】 【電心】 【錬金】 【料理】 【率いる者】  
【媚薬生成】 【棍棒使い】 【魔獣通じ】 【思考強化】 【集中力強化】  
【魚鱗生成】 【水泳】 【水中呼吸】 【槍使い】 【鑑定 鉱石】 【鑑  
定 宝石】 【鉱脈探索】 【屈従】 【体外魔力行使 氷】 【体外魔  
力行使 風】 【体外魔力操作 颯風】 【魔力性質変換 雷】 【威圧】  
【爪攻撃強化】 【牙攻撃強化】 【魔術耐性 雷】 【鬼蜘蛛糸生成】  
【麻痺毒 強】 【捕食者】 【狼の王】 【夜目】 【換装】 【自動修復】  
【魔術耐性 火】 【風読み】 【軽量化】 【怪鳥の翼】

19話 王都での最終準備とミリア（前書き）

王都での準備編が3話ほど

## 19話 王都での最終準備とミア

今日は王都最終日の予定。

パステルが出てから二週間だ。

すでにブリトニア島への陸路で食糧を手配してあるし、船は中古のものを【固定化】して使うことにし、ブリトニアから一番近い港街パリスで着水している。俺たちが乗る馬車はレンタルしており、気性の荒い馬型魔獣ケンタウルスを捕まえてきて、ミアナの【魔獣使い】で引いてもらうことにしている。

もうそろそろパリスに、一緒に先行してくれるエルフ族十数人や、フランの兎人族の村のもの、他にはミアの猫人族の集落のもの、ステラの村の人族が30人ほど集まってきたはず。

準備は万端。

あとはパステルを待ってから、王城に着ているカルロスさんに挨拶をして出発だ。

というのだが……

「クロノ様あ、今日は私と一緒に魔術の練習しましょうね？」  
「だめよ！ クロノとはあたしが昨日から約束してたもの！」  
「あわわ、二人ともご主人様がつぶれてますよ」

どうしてこうなった。

発言はステラ、ミア、フランの順だ。

いま俺はベッドから降りようとしたところをステラとミアにのしかから「えいつ」ってフランも増えたよ！

俺の身体は160cm…ミアとステラのが大きいのに上に乗られると身動きできない……  
体重は決して重くないんだろうが、俺が筋力なさすぎて状況を覆せない。

この二週間前に買った奴隷三人娘に異様なほどに懐かれましたが……  
頼られることは嬉しいが、こんなにベタベタしてくると、奴隷にされたときの影響が残ってるんじゃないかとか、そんなことを気にしてしまっ。

ドアを叩いて「クロノさんー？ 入りますよー」と言って部屋に入ってくるのはスタイル抜群ハーフェルフのレンさん。一応4歳年上なのだが、全然そんなふうには見えない、しぐさが子供っぽい人だ。

「……セルヴィ、あの三人をどかしなさい。」

レンさんはこちらを見て、いつもの無邪気な様子からは想像できない底冷えした声で、傍らに立つ黒髪の少女に指示を出す。

侍女服を着たその少女は表情を変えずにトコトコと近寄ってきて、遠慮容赦なく三人を俺の上から取り払った。

「ありがとう、セルヴィ。」

いきなりの行動に悲鳴を上げて抗議する三人娘を横目に、俺を救ってくれた少女の黒い頭を撫でる。

そうすると少女は少しうれしそうな表情をした後に、礼をして後ろに身を引いた。

「クロノさん。私は家から魔道具を持ってきてあげたといいますが、随分と良いご身分ではなくて？」

何やら口調がかわっているレンさん。俺の目はその腕組みして強調された胸に行ってしまう。

「ちょっとちょっと！ クロノは悪くないわ！」

そこで般若を背負っているレンさんに、啖呵を切るミアの姿が！

しかし口調ははつきりしていても猫耳は萎れて尻尾は丸まっているので迫力が半減だ。

「それに若くない人はお呼びじゃないです。」

びきっ。

空間が凍りつく音が聞こえる。

「誰が年増ですってー!?!」

余計なことを言ったのは。三人娘の中でもっとも積極的なステラだ。そのきれいな茶眼を細くして言い切ったのだ。

そしてそれに言われてもいないことを幻聴していかるレンさん。

レンさんは26歳だから確かにここにいる誰よりも年齢は高いけど、エルフは20歳くらいには成長がしばらく止まるといっし、ハーフェルフも同じようなものだろうから、気にしなくてもいいと思うのだが。

「レンさんは若々しいし、きれいだから大丈夫だって。」  
パステルの次にスタイルが良くて、パステルは自分で自由にできるのである意味反則だが、胸に関しては一番大きいのだ。身長は156cmで、三人組で一番低い14歳のフランと同じくらいの身長であるにも関わらず。

しかし年齢を気にしてしまうのが女性の性なのだろう。

「実際に若いです! それにナチュラルに口説かないでください!」

顔を真っ赤にしながら未だに肩をいからせるレンさん。

落ち着いて話を聞くと、そろそろパステルも帰ってくるだろうから、渡しきつてなかった魔道具を持ってきてくれたとのこと。

あの王都の家は撤去してしまうと言っていた。元々思い入れがあったわけでもなく、むしろ悪い思い出ばかりなので、のちにブリトニア島から王都に来る時には新しく家を買うか作るかしようだとき。

それと、この二週間で15人ほどのエルフは誘えたそうだ。王国に残っていたのは、二つの名門である『白森の一門』『青霧の一門』の下で肩身の狭い集落が多かったそうで、様子見も多く、島がうまくいけばすぐ来てくれるだろうとのこと。

持ってきた魔道具のうち、便利な恩寵が刻まれたものは壊して吸収させてもらった。

得たのは【農業】【拡声】【光源】【鍛冶師】だ。

とくに【鍛冶師】は重宝しそうな気がする。

さて、二週間で変わりすぎた状況について説明しよう。  
侍女服少女セルヴィは後で説明するとして、

奴隸三人娘については手っ取り早く記憶をひっぱりだすことにする。

最初の日は隣の部屋でアイリスと共に三人は疲れたのかぐっすり眠ってしまった。

次の日の朝、いまだに恐怖しているようだったので時間が必要かと思い、またもアイリスに話し相手になるように頼んで、俺は【体外魔力行使 地】の刻まれた恩寵武器を買いに行くことにする。

王都一番の武器屋で金貨28枚で目当ての品と【体外魔力行使 闇】を買ったあと、東西に走る大通り『王の道』で露店市をやっていることに気づく。

普段は邪魔になるから露店はないのだが、今日は特別の日らしい。

こういう場には、恩寵が刻まれていることを知られていない掘り出し物が安くでていることがあるので、覗いてみることにした。

……やはり【根源管理】で恩寵が見れるというのは圧倒的アドバンテージだ。【根源看破】をもった人間の給料が大商人を超えるというのも頷ける。その物についている恩寵技能に気づくかどうかで価値が大きく変わるのだから。

手に入れたのは【固定化】がついた銀の腕輪と、【体外魔力行使火】だ。さすがにこれだけレアな恩寵が刻まれているとなると物自体もいいものでできていて、それなりに値が張ったが、武器屋で買うより全然安かった。

普段めつたに出回らない【体外魔力行使】を三つも手に入れることができた。運を一か月分くらいつかってしまったかもしれない。

【体外魔力行使 闇】は火や地よりもはるかにレアであるし。実際に金貨19枚もした。

その後、三人娘に似合いそうな小物を探してあげることにした、あとでプレゼントしよう。

昼に、5人分の昼食を買って、【軽量化】を自分ごと発動して持って帰る。

男と女が逆かもしれないが、まずは胃袋をつかむのが重要かと思っただのだ。

「アイリス、フラン、ミア、ステラ、おとなしくしてたか？ 昼ごはん買ってきたから一緒に食べよう。」

「お兄さんっ、子供扱いはやめてくださいって言うてるじゃないですか。」

アイリスが返事。他は無言だが身体が震えている様子はないな。

そしてみんなで卓を囲んで昼食 肉まんのようなものを食べる。無言で。

ある時ミアが口を開いた、猫耳をピコピコさせて。

「ご主人様……買う時に言ったことは本当なんですか？」

「俺の呼び方は好きな呼び方でいいよ。そしてその質問の答えはYESだ。」

「でも、ほんとにできるんですか？」

次に発言したのは茶髪の人族ステラだ。

「そのために動いているよ。そして今は移住する島の視察に行かせている。俺の従者パステルが帰ってきたら俺たちも全員ブリトニア島に行くつもりだ。」

「あの……それって、私の知り合いも誘っていいですか？」  
今度は14歳で最年少の兎人族の青髪少女フラン。

「ああ、もちろんだよ。俺が構想する国家は最初は小さいけれど、  
貧しい人や虐げられた人を受け入れる。でも最初の方はあまり派手に  
動くわけにはいかないから、信用できる人にだけ話してね。」

この子たちも俺が奴隷を買った時にした話は気になってたみたいだ。  
そりゃそうだかもな、こんな世界で弱者を救おうとするなんて、よ  
ほどの善人かバカくらいだろう。

俺の場合はおそらく後者だ。それもエゴでの救済。

昼食の後、少し休憩した後、買ってきた彼女たちの新しい服を着て  
もらい、まだ説明していなかったことを説明する。根源なんかにつ  
いても十分知ってる子と知ってない子がいるからね。

なぜこんな酔狂なことをするかは、俺が天使みたいな存在だからと  
いうことにしといた。違う世界からやってきたから正義感に駆られ  
ました、よりはまだ納得できるんじゃないかなろうか。

そして俺特有の恩寵技能の説明の後、今日買ってきた【体外魔力行  
使】などの刻まれた道具を壊して吸収するところを見せ、次は彼女  
たちに刻印することを伝える。

ちよっと怖がる三人娘。それも胸を触られないとダメだというのだ

から思春期の女の子には厳しいだろう。しかしここは我慢してもらうことにする。

誰からやると聞いたらステラが手をあげたので、地属性のステラには【体外魔力行使 地】と【電心】を刻むことを伝え、右手を伸ばす。

相手もこちらも妙に緊張しているのを感じ取る。

平常心平常心。

そう呟きながらステラの三人娘では最も大きい胸に手を伸ばす。

「んっ。」

即座に平常心が崩れ去った、ステラの不意打ちの喘ぎ声によって。

いままでは意識せずに触れて怒られるパターンだったが、今回は最初に説明しているために無駄に意識してしまっただけでやりにくい。

眼をつぶり、ステラの根源と自分の根源を見ようとすると、緊張のせいか霞がかかる。

なんとか集中しようとして、

「あんっ！」

いつのまにかぎゅーっと強く掴んでしまっていた。

アイリスは静かに怒りを放っているし、他の二人は目をちらっちらつと向けながら顔を赤くしている。

もう勘弁してください。

俺は土下座した。

お互いに馴れるまで【恩寵刻印】はやらないことにした。

この日はきまらずいまままで一日が終わってしまった。

次の日の朝、早い時間にミアアが着替えて宿の外にでていくのを感じた。いつもは遅いのだが今日は昨日の影響か、眠りが浅かったのだった。

逃げられるなんて思っではいないが、一応見に行くことにする。猫人族らしいバネの強さでどんどん距離を離されていくが、追いかけることができた。王都の外に出て、森の方に向かっている。そこには魔獣がいるかもしれないのに。

案の定、ハイウルフがでてくる。ミアアも剣をさげているが、弱いとはいえ魔物に18歳の女の子が勝てるのだろうか。

と想い、俺も逃がす時間稼ぎくらいはできるように、パステルが生成した麻痺毒を塗った投げナイフを右手に持つ。

しかし最初は唸っていたハイウルフが、ミアが近づくとつれておとなしくなり、触られてしばらくすると、ミアと会話をしだしたのだ。ハイウルフは声をだしていないが、ミアの言葉に対して反応しているようにみえる。

そこでミアのもっていた中階恩寵【魔獣使い】の存在を思い出した。【魔獣通じ】の上位技能で、魔獣と意思を交わすだけでなく、命令を利かすことができるスキル。それがあからここまで大した武器を持たずに来たのか。

その後、ミアが何かを囁き、ハイウルフがうなづいて、お互い数m離れて向かい合い、どちらかともなく襲いかかった。

どうやら模擬戦をしているように見える。

やはりミアはそのしなやかな筋肉とバネの強さを活かして縦横無尽に飛び回り翻弄する。ハイウルフは殴られても大きなダメージはうけてはいないが、ミアにあてられないでいる。

次に剣をもつて挑むミア。素手と違ってなれていないようで、剣の重心に振り回され、ハイウルフの腕がしなると簡単に地面に沈んだ。手加減はしてあるようだが、もう戦闘が行えないだろう。

ここまで、と想いミアの元へ向かう。

ミアはぎょっと驚いた。

「ど、どうしてクロノ、様、がここに!？」

「クロノ、でいいよ。つい起きちゃってね。ところでなぜ剣を？」

「はい……元々獣人族は素手で戦う人が多いのですが、他の武器も使えたほうがいいかと思ひまして。特にブリトニアって魔獣がたくさんいるところに行くって話ですし。でもあだし、剣は才能全然な

「いみたいです……。」

たしかに俺よりも剣の扱いに関しては下手だったかもしれない。

しかし俺には、決められた才能を覆す型外れの札ジョーカーがある。

「強くなりたい？ それが他人に与えられた物を元にしたとしても、

」

「はい……強くないと奴隷にされたって殺されたって文句言えないんです。下手なプライドなんてあつたつて意味がない……。」  
「そこまで言った彼女の眼を至近距離で合わせながら、確認をとる。  
昨日俺の【恩寵刻印】についても根源量についても説明したから、何をやるのかはわかっているはず。」

これからするのを才能を得るかわりに、他の才能を得られる機会を捨てるということ。

人の内包する根源量に限界があるがゆえに。ここでもらった才能が不必要になつて他のが欲しくなつても、その時には容量がなくて手に入れられないのかもしれない。二度と戻れないのだ。

だから昨日、ステラにすっかり意思を確認せずにやろうとしたのは失敗してよかつたのだろう。

同じ身長なのでまっすぐ目があう。その目には迷いはなかった。

そのことに感服し、目を合わせたまま、右手をミアの胸にあてて、  
【恩寵刻印】を発動した。

「……うん……」

すこしだけ反射反応してしまうミア。俺はただ只管ある恩寵をイ

メージし、ミアの赤い根源の海面に具現化する。

「これで終わり。ミア、君の根源には中階恩寵【剣捌き】が刻まれた。すでに君の才能となったよ。後は磨くだけだ。他にも【体外魔力行使 火】と【電心】を刻んでほしいけど、それは後で考えて答えを出そう。」

そう言って、頭を撫でながら、昨日露店市でかった、炎を模した髪留めを猫耳の手前につけてあげる。

そうして、恩寵を得た時の一時的な高揚感ゆえか、顔を赤くして拳動不審なミアを連れて宿に戻った。

## 20話 王都での最終準備とフランクとステラ

宿に帰ってくると、ちょうど朝食が運ばれた直後だったようだ。湯気のでる料理を眺める。小麦の白いパンに肉と野菜が入ったスープだ。

以前にこの世界では朝食は貴族くらいしか食べないといったが、今となっては俺は三食食べるようにしている。まともに明かりを持てなかったから、早くねて5時前に起きて活動していたときは、朝食の時間などなかったのであつて、光の低位魔術『光源』や『発火』など、日常魔術を一通り覚えた時から、上位世界にいたときのような生活に逆戻りしていき、いまは7時に起きて1時に寝るといふ生活となっている。

今朝の朝食が少し豪華なのは、三人娘の歓迎という意思を表わして、だ。普段は食事の質には気を使っていないのだが、奴隷から解放されたばかりで少しやせている彼女たちには、良いものを食べて健康に戻ってほしいと思う。

やはり女性は健康的な美しさが一番だと俺は思うのだよ。No 痩せすぎ。

朝食中、茶髪のロングストレートをいじりながら、ミアの方に意味ありげな視線を送っていたステラを横目に見つつも、わざわざ聞く必要もないかと思いい、スルーした。

そして朝食後、ミアがちょっと俯きつつ話しかけてきた。

「残りの恩寵、あたしに刻んでください。欲しい、です。」

会話の内容をちゃんと聞けば何のことだかわかるとは思うが、勘違いされそうなことをいう奴だ。

「いいよ、すぐやろうか。」

ミアのやせ気味の胸に手を当てる。彼女はスレンダーという感じだ。最も今は栄養状態がよくなかったためか、痩せすぎだが。

こうして【体外魔力行使 火】と【電心】を刻んだ。

恩寵を得た直後の甘い痺れに身をもたえ、尻尾をすごい勢いで動かしているミアを抱き上げて、部屋を移る。まずは刻んだ恩寵の説明と、熟練度をあげることの指示、魔術の指導をしなくてはならない。

本格的な指導は三人全員に刻んだ後にするつもりだが。

……そのつもりだったのだが、こちらの話を聞いているかわからない朦朧とした状態のまま、寝入ってしまった。

恩寵を刻む負担をもう少し考えたほうがよかったか……。いつも刻

印する対象がパステルだからつい手軽にやってしまった。

仕方ないのでもたれかかっているミアをベッドの上に寝かしてあげることにする。と、その時に非力故か身体のバランスが崩れ、ミアをベッドの上に放り出してしまっただけで自分も倒れこんでしまった。幸いミアは起きなかつたようだ。疲れて寝ている子を無理やり起こすのはよくないだろう。

『ガタッ』

どうやら最悪のタイミングで出歯亀がいたようである

果たして少し開いた扉からは兎の白い耳は見える。青髪をツインテールにしている兎人族の少女フランのようだ。

「フラン、どうしたんだ？」

「え、えと……私の村の人たちのところにいつ行っていいか聞こうと思ひましてご主人様のところに来たんです。」  
なるほど、昨日言っていたな。しかし村か……距離にもよるが、女の子をただ送り出すには危険だな。また奴隷に逆戻りなんてことになりかねないが、どうにかいい方法がないだろうか。

「だめですか……？」

フランの頼みなら仕方ないな。

「でも一人旅は危険だよ。ということで恩寵技能をたくさん刻んであげるよ。」

そういつて近づく俺。フランの青い目が魅力的だ。

「えと、少な目をお願いしたいです。」

「むう、仕方ないな。フランがそういうならば。ではベッドに横になつてごらん。恩寵刻印はする方もされる方も大変な労力を使つてしまふからね。ミアがいい例だろう？」

そしてためらうフランをお姫様抱っこしてミアがいるのとは違うベッドに降ろし、そのまま青色の髪を指で梳く。サラサラとしていて素敵だ。

そのまま手が白くのびる耳にたどり着く。人も獣人もエルフも耳はけっこう弱かつたりする、といいなあという願望。

いつのまにか甘噛みしてしまつていた。そのままペロリとなめる。「ひゃあっ」という声上がるがその声も俺の興奮を増長されるものでしかない。今のフランは俺には極上のフルコース料理にしか見えない。好んで着ている兎人族の民族衣装がふと目に入る。ふむ、これを脱がすまでは前菜か。変な納得の仕方をしたところで、早速着物のような構造の民族衣装の腰にある紐に手をかけはずした。あとは布をはだけてしまえば、ブラジャーなどないこの世界では女性の胸が直で見れる。愛しいフランの柔肌は今までに感じたほどもないくらい蠱惑的だ。こんな気持ちパステルにもレンさんにも抱くことがなかったのに。下にいるフランは涙目で何か言っているようだが、その涙の輝きすら幻想的で耽美だ。もつと泣かしたくなる、この少女はどんな声で鳴いて泣いてくれるのだろう。征服したい蹂躪したい手に入れたいこの魅力的な少女を。そして俺はフランの民族衣装を一気に

「クロノさん何をやってるんです！」

……誰だ、邪魔するのは。

「レンさんどうしたんです？ 顔を真っ赤にして。落ち着いてください。」

「そちらが落ち着いて正気に戻ってください！」

正気……？

ふと、フランの方を見て、  
涙を流して震えるフランに気づき、

現実に戻った。

1時間後。

俺は宿を出ている。

しばらくフランはレンさんが見てくれるそうだ。

今回の俺の暴走の原因はフランの【魅了】の無意識での発動。  
熟練度が引くかったがために自分の魅力だけ高めてしまい、本来の  
効果である、相手を自由自在に操るほうが出なかったということだ  
ろう。

それが原因とはいえ、自制できなかった自分には嫌悪が先立つ。

俺にあんな願望があるとは思わなかった。もちろん男としての欲望  
はあるが、年端のいかぬ少女であるフランに対して、無理やり征服  
しようという気持ちがあると。サディストな傾向はなかったと思

うのだが。

あれだけ強力な恩寵だ、今までも異性相手に発動してしまっただけのように大変なことにあったこともあっただろう。そのトラウマを決ってしまったのだ。彼女との関係は修復不可能になるのかもしれない。

しかし、陰鬱な気分ですらに時間を潰し、宿にもどってきた俺を迎えたのは頭を下げたフランだった。

「迷惑かけてごめんなさい。」

俺は一瞬ポカンと呆けるも、即座に謝り返す。

「こつちがごめん！ フランには責任なんてないよ。」

「あー、クロノくん？ フランちゃんの話聞いてあげてくれる？ クロノくん、勘違いしてると思うから。」

何のことかわからなかったが、ひとまずフランちゃんと先ほどの部屋に入った。ミアはまだ寝ている。

「実はですね、【魅了】でご主人様を操ってしまっていたようなんです。」

恥ずかしがりながら彼女が言うには、【魅了】をいつのまにか発動してしまい、彼女の願望というか妄想をそのまま俺に反映させてしまい、操ってしまったとのこと。

つまりだ、彼女は元々妄想癖をもつ少女で、直前にミアをベッドの運び、不慮の事故とはいえ覆いかぶさってしまった俺を見た時から、妄想が広がってしまい、俺がミアを招き入れた時に無意識に【魅了】を発動し、俺の意識を彼女の妄想まで誘導していった。

ちなみに最後に涙を流して震えていたのは、自分がやったこと奴隷が主人を操った　　が許されないだろうという恐怖と、操ってしまったことへの後悔、もう捨てられるんじゃないかという恐れの結果らしい。

まあ……思春期なのだから妄想もいいけど、恩寵の制御だけはしっかりと教えないとだめだな。  
もしくは魔眼殺してみたいなメガネでも作るかね。

精神に作用する恩寵技能はほんとに強力だから気を付けないといけないなあ。  
最強の肉体をもっているでも精神を掌握されたらどうしようもないのだし。

いつか問題になるかもしれないし、対策を考えたほうがいいかも。

この後、仲直りした俺らは昼食を仲良くとり、宿に帰ってきてから恩寵技能を刻印するかどうか、根源には総量があるから、ひとつ才能を刻むということはひとつの才能をあきらめることになる、というのを確認し、フランに【体外魔力行使 氷】と【電心】を刻むことになる。

フランの属性は水らしいが、氷は補完属性なので問題なく扱えるだろう。

ちなみに、フランには珍しい真珠を使ったブレスレットを贈った。

残りはステラのみだ。

ステラだったが、こちらから何もアクションすることなく解決した。

ミアとフランが次々と陥落したのを見た後、元々魔術に興味があった体内魔術行使を持っているのに気付いていないステラは恩寵を刻印してもらうことを決意してくれた。

ステラの魔術属性は地属性で、生活改善に有用なので助かった。二週間だけで習熟してもらいたいと思う。

夕飯の後、ステラの胸に手を当て意識を身体内部の心臓のあたりに集め根源を見、【体外魔力行使 地】を刻印した。

恩寵を刻印された余韻でへたり込んでしまったステラを尻目に、ミアとフランを呼んで、魔術についてレクチャーする。

彼女たちもこの世界の常識として日常魔術は使えるので、魔力を練る過程までは問題なく、魔力を練れる範囲が練習することに増えていくのに驚いていた。スキルなしでは周囲50cmほどが限界だったそう。やはり恩寵のあるなしは大きすぎるなあとしみじみ。

あとは魔術の使い方だ。日常魔術は詠唱も短かったり詠唱破棄が当たり前で、効果にもほとんど違いがないのでそのままにするとして、中規模以上の魔術は俺とパステル式を教えてしまう。

レンさんがいると古き良き魔術を教えられてしまうので……いや、悪くはないんだけどね、どうしても効率が違う。

俺とパステルの詠唱の基本は、まず属性を呼び、使う魔術の属性を認識させ、次にどのような形状となるか、そしてどのような結果を起すか、最後に範囲指定、という順番だ。ちなみに一番最後の魔術名は詠唱の中には入っておらず、『概念を注ぐ』スイッチみたいなもの、それを叫ぶまでは魔術は発動しないので、いくらでもイメージを変えることができる。

詠唱の例としては、

『氷よ、十の槍となりて、中空より降り、指定目線、アイススピア氷槍！』

『地よ、金よ、媒介となりて、変形させよ、前方3m、モールド形成！』  
などなど。

どれかを省略することもできるし、逆に何十語という単語で説明しつくしてもいい。それで、イメージがより強固になるのなら、だが。高速戦闘中は詠唱破棄どころか無詠唱で打つのが普通だ。

範囲指定も細かく指定してもいいし、目線の先という指定でもいい。とにかく詠唱してる本人の問題だ。

俺はできるだけ言葉でイメージできるようになれば、他の魔術に応用するときも、詠唱の単語を入れ替えるなどして臨機応変に使えるようになると思っっている。

よって、『媒介となりて』や『中空より降れ』という言葉と、現象を関連させて覚えさせるのが目的だ。

レンさんと違って、この世界の一般的な詠唱を知らない彼女たちは、素直に俺ら式の詠唱を覚えてくれて、今は練習中だ。

小さい魔術であれば宿の中で壊さないようにやり、効果が大きい魔術を練習するときは王都の外にでて、他人に見つからないようにやる。

もし発見されて、野良の魔術師だとバレたら報告されてめんどろなことになるだろう。その時はレンさんのように冒険者ギルドに魔術師として登録してしまえば、手を出されることはなくなると思うが、どちらにしる変に目立ってしまうのは否めないし、奴隷商人も売った奴隷が魔術を使っていれば、俺は怪しまれるかもしれない。魔術が使えるかどうか、つまり【体外魔術行使】をもっているかどうかは、捕まえる前に確かめるからだ。というよりは魔術師だと捕まえられるわけがないからというべきか。もし捕まえても【屈従】などが調金された首輪がないと抑えれないわけだし。

ステラの地属性もミアの火属性も、パステルと俺、そしてレンさんとアイリスにとっても、苦手な属性 対属性 なために教えられることが少ない。よって本の絵や、もしくはは地面に絵を描き、口で説明して現象を教える。

俺は上位世界で暇な時間に少し嗜んでいたオタク文化が浅いとはいえあるし、オタクでなくてもファンタジーな魔術は飽きるほど見ているために、さまざまな魔術が思い浮かぶのだが、普通に村で生活していたものにとっては、空中や地面から槍が飛び出したり、何も無い空間が氷漬けになるのは非現実な光景 元の世界での俺にとってもそうだが で、なかなか現実に起こせるものとしてイメージできない。

だから俺やアイリスが手本を見せあっていたのだが、お互い魔術を使いあうのが楽しくて、ついヒートアップして調子に乗ってしまった。

「行くぞ！ 氷の17矢！」  
アイスアロー

「こつちも！ 雷の17矢！」  
サンダーアロー

「氷盾！」  
アイスシールド

ちなみに戦いあってるわけじゃなく、森の中で木に向かって放っている。

「雷よ来れ、巨神を滅ぼす燃え立つ雷霆。百重千重と重なりて、走れ稲妻、千の雷！」

「氷の女王よ来れ、とこしえの間、えいえんのひょうが！ そして

おわるせかい！」  
大技として、某子供魔法先生の漫画の超上級魔法を叫ぶ俺たち。

ズガン！と木々は簡単に倒れるが、もちろん未熟な俺たちでは大した威力も射程もない。

俺なんて範囲内にあつた、8m先の木を周りの大気を凍らせて氷漬けにただけだ。木自身は凍っていない。よつて『おわるせかい』でも周りについていた氷が飛び散っただけという湿気たもの。

アイリスは俺よりもだいぶみしたが、それでも雷に変換された魔力を、無属性魔術『魔弾』でたくさん前に飛ばしているだけ。『魔弾』は【魔力性質変換】をもっている、かなりの威力を誇るようになる。

ちなみにアイリスには俺が教えました。

深いオタクになる時間がなかったので詠唱もうろ覚えだが……。

えいえんのひょうがとおわるせかいは、エターナルロリ吸血鬼と同じ属性と知ってから、いつかやってみたいと思つてたんだよね。

範囲も威力も足りな過ぎるけど。

魔力が練れる範囲なら割かし思い通りに魔術を使えるんだが、遠距離広範囲となると魔力が足りな過ぎる。何等かの方法を使つて魔力が届く場所を何倍にも伸ばすか、いまパステルが研究している魔法陣でしっかりと術式を組むかしないといけないだろう。

魔力を練る範囲を増やす方法としては、王都の精鋭たちが相性のいい者同士で魔力を練つてつなげて、全員で全員の魔力を使えるというのがあつたから、魔術を使う範囲を並んで囲えば魔力量的にも射程的にもできるかもしれない。

魔術を自分の肉体に取り込んで、肉体にその魔術の性質を負荷はたぶん無理……そんなことしたら身体が先にバラバラになりそうです

し。

それにこの世界では、熟練した魔術師なら接近戦でも戦士を瞬殺できちゃうから、肉体を強くする意味がなんですよ。固定砲台とはいえ、近距離となったら術式も簡易なもので攻撃できちゃうので。固定砲台といったのは、その場にある魔粒子をいちいち支配しないといけないので、動きながら魔術を使う場合は、その場その場で魔力の練り直しとなるので強くないです。そうでなければ魔術師が強くなりすぎてしまう。魔術師が騎馬に乗りながら迫ってきて、半径10mにはいった瞬間に首を刎ねられるなんてされたら、どんな無双だよって話になりますよ。

よって固定砲台。魔術師との戦いの鉄則は、近づくな、相手が魔力を練れる範囲を見極めろ、全方位から遠距離攻撃して魔力を消費させろ、といったところ。間合いの中に入っても遠距離魔術が飛んでくるのでそう簡単には倒せませんが。もし近距離戦士しかいなければ、剣や装備を間合い外から投げて気をそらして誰かが一瞬の隙をつく、くらいしか勝機がありません。魔術師一人を倒すために戦士20人くらいは必要でしょうが。

そんなこんなで、俺たちがやる見た目が良い魔術や、彼女たちにとってはかつこよく聞こえる魔術名　基本的に英語で、この世界での英語は魔術発祥とされる極東の言葉　に黄色い歓声をあげて、年ごろの少女らしく騒いでいたミア、ステラ、フランの三人娘。

特にステラが魔術について積極的で、どんどん上達していた。逆にフランとミアは、日常魔術も覚束ない獣人族なのでかなり苦労していた。

それでも精いっぱいとりくんでくれて、この日は森がひどい惨状に  
なっているのを、やってきたレンさんに叱られるまで続いたのだっ  
た。

こうして、仲良くなり、この後も二週間、三人娘の起きているとき  
は魔術の練習をすることとなった。

20話 王都での最終準備とフリオンとステラ（後書き）

次回がセルヴィ生誕の話。

21話 王都での最終準備とセルヴィ（前書き）

この辺りから【根源管理】チートの片鱗が。

## 21話 王都での最終準備とセルヴィ

フラン、ミア、ステラの三人娘とアイリスが外へ魔術の練習行っている間、俺とレンさんはやることがあった。今は久しぶりにこちらからレンさんの家にやってきている。もうだいぶ物がなくなってきたている。

今日ここに来たのは、エルフの集落から闇属性魔術の禁書をもらってこれたからだ。本当は持ち出し禁止だが、その集落でブリトニアに行ってくれる人とグルになり、必要だからという名目でもらってきたのだ。

一応置手紙はしてきたとのこと。埃の山に埋もれていたので多分誰も見ることがないだろうが、とも言っていたが。

持ってきた方、依頼した方としては文句は言っていられない。すぐに読んで解析に入らせてもらおう。

これからやるのは、魔術によるアンデッド作成、特にゾンビとスケルトンの作成だ。

そのためにこの家の一部屋に、死刑囚の殺したばかりの死体をいくつか買い受け、腐らないように部屋の壁を凍らせている。もうすぐ廃棄するのだから部屋をボロボロにしてもかまわない、とのお墨付

きをレンさん本人にもらえたので。

闇の禁書は、一見何の魔獣の皮だかわからない、光沢のない黒色の分厚い皮をしていて、これまた黒いベルトでぐるぐる巻きに本が閉じられている。本全体に魔法陣が刻まれていて、闇属性の持ち主じゃないと開けられないようになっていて。

本の最初の方には注意書きが書いてある。

『根源を魔術で扱おうとするゆえに禁術とされた。生者を用いるために、使う時は見られないように気をつける。』といったことがずらずらと書かれているが飛ばす。

それよりも『根源を魔術で扱う』という部分が気になる。【恩寵刻印】【根源管理】によってこの世界の誰よりも根源に身近な俺には相性が抜群の魔術なんじゃないだろうか。

……果たしてそれは正解だった。

ゾンビ作成とは、死体が持つ根源 人だったのでそこらにある物よりも多い に必要な情報を刻むことによつてできる。

人格がなく、命令を聞くだけのゾンビを作りたければ、闇属性の浸蝕性をもってして、人格がない人間の根源の情報をうつし、血によつて創造主を認識させるだけでいい。動くためのエネルギーは死体に残っているエネルギーや、生命力が詰まっている血を吸うことで補つて動き続けることができる。

禁術となつた主な理由は、傀儡となるゾンビをつくるために、人格がほばない赤ん坊が薬などで精神的に壊した人間が必要で、根源を切り取つて移植するとき殺すことになってしまふからだ。根源の

内部の細かい状況がわからないがゆえに、大雑把に根源を切り取って移してしまうために死んでしまうし、うまくいかないときも多々ある。

大昔に大魔法使いがアンデッド千人の疲れ知らずの軍勢を使ったという表記が残っていたが、一体いくつの亡骸と生者を犠牲にしたのか想像もつかない。

根源を移すなどと簡単にいったが、実際には超上級魔術、魔法でも大魔法と呼ばれるほどの難易度のものだ。天階の恩寵でなくてはできないことを魔術で再現するのだから。よってただ根源を移す作業以外にもさまざま　根源を身体から遊離しやすしたり、定着しやすくしたり　なことを闇魔術でサポートする必要がある、大きく細かい魔法陣を作成しなくてはならない。

しかしこれらの条件は、闇属性に親和性を持ち、極めつけの【根源管理】と【恩寵刻印】をもつ俺には、比較的楽にできそうだ。

第一に、俺は人の根源の状況を誰よりも詳しく見れ、見てきたのでどこにその人物の人格が入っているかも、人間を人間足らしめる要素がどれなのかもわかっている。よって無駄なところを切り取ってしまう心配もないし、そもそもどんな形状をしているのかがわかっている。なので人から切り取る必要などない。観察させてもらえば十分だ。

第二に、根源を移すなどしなくても、【恩寵刻印】によって恩寵を刻むのと同様に、情報を書き込むことができる。……おそらく生きている者にやろうとすると、人格が二つできて壊れるなんてことになるのだろうが。

以上より、ほぼノーリスクだ。

高度な闇魔術による補助と、血液を渡すのと、恩寵を入れ込むのと

は比べものにならないほど繊細な作業が必要になるだろうが、相応の根拠量を持った物質があれば付喪神化もできてしまうし、パステルのように人形に人格を入れることもできる。

一番の問題は、人格を受け居られる根拠量を持った物を用意しなくてはならない。上位世界から持ち込んだものはいけるだろうけど、ところだ。これは実験してみるしかないだろう。

自我が目覚める前の赤ん坊の根拠は見たことがないので、後日【根拠管理】で覗かしてもらうことにして、今日は死体に俺の根拠を真似て情報を入れることにする。

まず一人の男の死体の根拠を見て、足りない物を探す。

生命の停止、ほぼ全器官の停止、そして記憶や知識の記録や、性格、人格もない。

しかし、死体の根拠には、死体が二足歩行であること、人型であることについての情報は残っていた。

死体の根拠に【恩寵刻印】と【根拠管理】を同時発動して覗き込み、人格などの人間であるための情報が入るべき場所を探す。

のっけからつまづく。人格や記憶をいれる場所。普通の人間だと直方体の箱状。が壊れていたのだ。

仕方ないので、自分の根拠にあるその場所を視て頭の中でコピーし、死体の根拠にその箱を模写するように形作る。そして俺の根拠と同じ黒色の箱ができあがると、そこに俺の、人であるための情報のうち人格を除いた情報を、真似て刻みこむ。魔法陣を描き、魔術を発動。そして指を持っていたペーパーナイフで薄く切り、血を落とす。

きづけばいつのまにか二時間もたっていて、身体がフラフラし、レンさんに支えられていた。

繊細な作業故に集中して時間の感覚が遅くなっていたようだ。

人格を刻んだ死体は起き上がった状態で待っている。これが待機状態なのだろうか。

「手を上げる。」

命令しても動かない。

失敗かという思いがよぎったが、心当たりに気づく。

「右手を上げる。」

ゾンビは右手を上げた。

やはり、命令をちゃんと指示しないために誤作動を起こしたのだろう。

ちなみにゾンビは言語を理解しているわけではない。

血のつながりを闇魔術によって強くしたので、俺とのラインがつかがり、俺の命令を理解できるのだ。だから言葉を出す必要は本来ない。

これで人格がないゾンビは成功といえるだろう。

あとは人格があるゾンビを作れるのだろうか、それは一つの知的生命体を自らの手で作り出してしまうということで、上位世界の倫理観により拒絶してしまった。

パステルも同じような存在なのだが、彼女は落ちてきて自然と人格が目覚めたので、話は別だ。

上位世界での、もしもロボットに人格が備わったなら、というSFの多くでは、ロボットは苦しんでいて、人間と敵対するに至っていた。地球にいたときはそんなことありえないと、創作として楽しめたが、実際に自分ができるとなると、生み出された命が自分を恨むようになるのではないか、という恐怖を夢想してしまふ。

新しく生命を作り出す禁忌感はこの世界ではあまりないのか、レンさんはしきりに「やりましようよー。」と言っている。実験大好きっ子だからマッドサイエンティストの気があるだけかもしれないが、ゴーレムを使役したり、魔獣からキメラを作り出すことができるこの世界では、生命への冒涇という考え方はないのかもしれない。レンさんも、「生きている人を犠牲にしてやるんじゃないから良いと思いますけど」という感じだ。

とりあえずこの日は、骨だけのスケルトンを一体作って終わった。

スケルトンは、肉をはがすのに一番手間取うことになった。火で燃やすと骨まで燃えてしまうことがあるし、臭いが大変なことになる。結局氷魔術『氷刀』で削っていった。レンさんはさすがに触りたがらなかった。

心臓や脳もそうだが、頭蓋骨や脊椎などにも大きく根源量が偏っていることがわかった。

ちなみにゾンビは腐らないように『氷棺』で氷漬けにしてある。

俺は直接宿に帰ったが、レンさんはまた死刑囚を殺した直後の死体を買いに行った。

前はエルフに無理やり危険な実験をさせられて嫌だったが、今では好きな、しかも目的がある研究ができるので楽しいのだとか。

美人、しかもハーフェルフでロリ巨乳なレンさんの笑顔は素敵だが、このままではブリトニア島にいたら実験室を作って、ゆくゆくはマッドサイエンティストになってしまうのではないかと、一抹の不安がある。

三日後、レンさんと赤ん坊を見せてもらってまわることにした。俺とレンさんで新婚夫婦を演じ、「かわいい赤ちゃんですね！ 私たちもこんな子がほしいなあ」という感じで、レンさんが赤ん坊の母親と話している間に俺が【根源管理】で見るといふ作戦だ。

ステラやミアも行きたいと言ってきたが、妹にしては雰囲気も種族も違うので断り、いつも通り王都の外の森で魔術の練習をさせる。最近はいリスに頼らずとも魔獣を狩れるようになってきたらしい。ミアは【魔獣使い】で機動力のある魔獣に乗れるので、4人の中でもトップクラスの討伐数だ。

火属性の魔術は、他と違って、ただそこに存在しているだけで熱量により攻撃を加えられるので、ダメージディーラーとしては随一だろう。

さて、果たして作戦は成功した。それはもう恙なく終わってしまった。

レンさんもほとんど顔を動かさないようにすれば、耳に駆けた幻影を見破られることもない。近づくときに耳に幻影をかけながら、口を外して笑顔になれば、特に怪しまれなかった。

これであとはレンさんの言うままにアンデッド作りだ。

俺も知的生命を作るのを、宿で他の子たちに聞くと問題ないと言われたのもあって決意したのだが、やはり死刑囚の身体のままではかわいそうだと思った。

放っておけば腐っていくのだし、闇魔術を使った部分が表にでていると、太陽の下にでたときに動きが鈍くなってしまう。

よって、根源量が多い頭蓋骨と脊髄をそのまま、そして全身の骨を砕いて使うことにした。

人形の素体を作り　人形といってもパステルが研究して自らなった、人間的な機能もあり、外見は人間　、その中に骨をいれ、骨の中に人格を刻むことにする。こうすることによって、骨が直接日光に触れないので、昼にも活動ができるようになるし、外見もパステルにならって好きなように変えられるだろう。

人格を持たすだけで、根源はほぼいっぱいになってしまいが、肉体部分に根源量が多い素材を使うことで、恩寵も刻めるようになる。もちろんパステルの容量と比べたら数億倍以上少ないわけだが。改造についてはパステルに指導してもらおうことにしよう。

刻む人格については、俺やレンさん、アイリスなどの人格部分を見た後に、赤ん坊の人格部分を見ることによって成長していくとどの部分が増えているかを大まかに知ることができたので、16歳くらいの女子の人格を元にするに決めた。記憶は入れず、性格はままらな状態にするので、生まれてからの環境でさまざまな個性を得てくれると思う。

こうして準備をして、作業には5時間ほどかけて初めての人造知的生命体が完成した。以後ホームンクルスと呼ぶことにする。

できた少女は人格部分は16歳なので泣き出すことはなかったが、すぐに俺の方に来た。俺の血での繋がりに感じているのだろう。

頭で左手をあげてと念じると彼女は左手を上げた。  
言葉についても常識についても一から教えていなくてはならない  
だろう。俺と血で直接つながっているために、教えやすいと思っ  
たが。

「名前は どうします？ クロノさん。」  
レンさんが問いかける。人間にしか見えない生命の誕生にまだ興奮  
しているようだ。

うーん、どうするか：仕えてくれる者だから「サーヴァント」だけ  
ど、もじるのが難しいな。  
フランス語の セルヴィトゥール *serviteur* からとることにするか。

「セルヴィ。お前の名前はセルヴィだ。俺の名前はクロノ・タナカ。  
これから宜しく頼む。」

主人らしい態度で挨拶をした。

余談だが、残った死刑囚は肉を剥ぎ取って骨だけ 肉はどうして  
も腐るので にし、その骨も洗って消毒、保存することにした。

次のホムンクルスを作るとしたら、セルヴィが致命的な欠陥をもつことなく、普通に人間らしく思考できるようになってからだ。その時には上位世界から持ち込んだ扇子や銀時計にも人格を与えようかと思う。

ホムンクルスを作らない場合や余った場合は、夜間作業用のスケルトンとして使う予定となっている。

22話 新天地へ(前書き)

新章です

## 22話 新天地へ

「死にたい恥ずかしいもうだめですキャラが崩れた終わりです」

とぶつぶつ呟いているパステル。

小さい声で言っているが、周りがもつと静かなので聞こえてしまっているよ……？

今はパリスに到着するちょっと前。

東西にのびる大通りを外れて、少し狭くなっていた道が港町パリスに近づくにつれて広くなっていく。

俺とパステルとレンさんとアイリスが乗る馬車の前には、ミアがケンタウロス二頭を指示して馬車を引いている。後ろには、セルヴィ、フラン、ステラを載せた馬車が連結していて、更に後ろには食

糧などや個々の荷物      レンさんの実験道具が多い      を載せた馬車。

なぜこんな無茶ができるかというところ、ケンタウロスの並外れた体力が一つ。もう一つは【軽量化】のおかげだ。

他人の馬車を勝手に軽くしていいのかわかる？ 多分したら喜ばれるだろうけど、噂が広まるのもいやなので、【軽量化】を刻んで、運んでもらい、定着する24時間以内に吸収して、また刻印し直している。これによって効果がありつつも馬車の重量は借りた時と変わらない状態で返せる。

数日前に王都でカルロスさんと会い、その時に暇だったということ、なぜか王にも謁見できてしまい、3カ月後に珍しい恩寵を持た人を連れてくるという約束をしっかりとさせられる。

この日は昼に聖女のパレード      シルフの子供が【隷属】の首輪で無理やり担がれているやつ      が王城前であるということ、立食しながら王城の中から見せてもらった。……正直どこともしれない人間である俺を簡単に招き入れていいのだろうかと思う。

その後は王都から馬車で出発し、いくつかの街を経由しつつ、パリスの直前の街で食糧と、既にパリス入りしている人が多いという情報を受け取って、少し急ぎ気味に走っているのが現在だ。

なぜ数日経ってもパステルが壊れているかというところ、一旦収まったのに、今朝にまたもやセルヴィに『口撃』されて落ち込んでしまったのだ。

あの時のパステルの壊れぶりを、無駄にうまい口真似で再現するところで……。

パステルが忘れようとした黒歴史を掘り返してしまったということだ。

さすがにキレかけたよ、パステルも。しかし事実だから口を慎むしかない。

俺が、子供の言うことに気にするな、とセルヴィを擁護したのもパステルには衝撃だったらしい。一の従者が云々で争っているし、アイデンティティの崩壊をしていないか心配。

「クロノ、あまり気にしないほうが良いですよ。子供じゃないんだから自力で復活できるでしょう。」

胸のあたりから声が聞こえる。

以前少し触れた、上位世界から持ち込んだ銀時計に人格を目覚めさせたキヨウさんだ。

セルヴィのように人格をいれようかと思って根源をいじろうとしたらその拍子に人格が目覚めた人（？）。たしかにパステルほどではないにせよ、上位世界の物なんだから根源量的に、人格目覚めても

おかしくなかったね。

ネーミングは、銀杏の「杏」という漢字を音読みして「キヨウ」である。

突然だがこの銀時計キヨウさんは、年齢的に大先輩である。

祖父の祖父が天皇陛下より下賜されたのが100年ほど前だといふのだから驚きだ。100歳ってお姉さんってレベルじゃない……でもおばさん扱いしたら怒られそうだからやめておく。

実際にキヨウさんから見たら俺が孫の孫みたいな存在なはずで……既に亡くなった祖父も、祖父の父も子供時代を見ていたのだから、不思議な感覚だ。人間にとっての100年とはいかに長い時間かわかる。

祖父の死を乗り越えられていない、心の弱い自分は少し感傷に浸ってしまったようだ。

時の天皇陛下の御手から下賜された由緒正しい銀時計であり、幾度もの戦火を耐えきった100年の時を越えて現存するキヨウさんには、この世界ではキヨウさんしかもっていないだろう、貴重な恩寵も刻印されているのが発覚した。

天階恩寵として、【現人神の祝詞】 【明治天皇の加護】 【帝国の英霊の想い】

高階として【守護霊】 【火属性無効化】 【体外魔力支配 雷神】 【体外魔力支配 水瀑】 【大器晩成】 【水属性無効化】

中階として【危険察知】 【不可壊】。

最初の三つが天階となっているのは、上位世界に強く関わっているからだろうね。アンダーワールドから見るとまさに天上なんだから。

【現人神の祝詞】 【明治天皇の加護】 【帝国の英霊の想い】は全部日本人だと大幅な補正がかかるもの。しかし、こちらの世界と上の世界の関連性が薄いために、少し幸運になる程度。【帝国の英霊の

想い】はデメリットとして黒髪以外に好戦的になるので、オフにしてもらう。

現人神とはおそらく今上天皇のことを言っているのだろうな。人間だけど、ある意味神みたいなものか？

【守護霊】 【不可壊】 【火属性無効化】 【危険察知】 は、戦争を乗り切ったからついたと思われる。かなり便利だ。【守護霊】を發動すると、身長180cmくらいの長身の女性がでてきた。キョウさんが自由に姿を変えられるとのこと。いざという時に助かりそうだ。【火属性無効化】も相当便利。焼夷弾とかから逃れきった経緯が見える。

【体外魔力支配 雷神】 【体外魔力支配 水瀑】 【大器晩成】 【水属性無効化】 は銀杏関係だと思われる。雷属性と水属性なのは大学のイメージカラーが黄と淡青の銀杏だからで、【大器晩成】は銀杏が長寿でかなり大きくなることに由来、【水属性無効化】は銀杏を使った木材の水はけがいいことからついたのだろう。

キョウさんレベルの品でこれなら、上位世界での神器と呼ばれる物がこの世界に降りてきたら大変なことになりそうだ。由緒や逸話がありすぎて。

ちなみにほかに上位世界から持ち込んだライターと扇子とパスポートとペーパーカッターと万年筆はまだ人格を芽生えさせていない。そのうちパスポート以外はするかもしれない。自分の写真が貼つてあるパスポートが人格をもつのはちょっと嫌だ。

キョウさんの根源量も俺やパステルほどではないが、この世界全体と同じか少し少ないくらいなので【怪鳥の翼】 【風読み】 【再生】

を刻印させてもらった。

なぜかという、空を飛ぶため。今まで、【怪鳥の翼】が人間にあつても身体が思いつきり損傷してしまい、かつ自由に動かせないの  
で意味がなかったのだが、キョウさんが翼になって飛んでくれれば  
いいことに気づいた。【再生】で簡単に元の姿に戻れるし、【不可  
壊】があるから損傷して壊れる心配もない。

それでもうまく飛べない分は、キョウさん自身が魔術を使えるのだ  
から、風魔術なんかで調整してもらうことにする。

これなら飛んでいる間も俺は両手も思考も空く。

なんでこんなことを突然言ったかという、落ち込んでるパステル  
を慰めようと、抱えて馬車から空へ飛び出したからだ。

「……………ぐすん。」

無言で瞳を伏せるパステル。  
相変わらず人形のように整った顔に白い肌、白い透き通るような髪。  
妖しく光る赤い目。身体はモデルや美の感じ方を計算された上で作  
られた完璧なスタイル。俺が飛ぶとわかった瞬間に自分に【軽量化】  
を発動させるほどの気遣い。

これだけ最高の従者を堕ち込ませておくのは許されないだろう。  
主としても、男としても。

空は気持ちがいい。

青というキャンパスに白い絵具で描かれる絵の群れ。遠くに見える  
海からは潮風の匂い、きらきらと輝く透明の水。巨大な山でも森で  
も全体を見渡すことができる。

大空を支配した鳥は何を考えて飛んでいるのだろうか。当たり前になりすぎて何も感じないのだろうか。それなら勿体ないことだ。

ほんの少しの空の旅。久しぶりの二人きり　正確にはキョウさん  
もいるけど　だが、何も話すことなく終わってしまった。  
そろそろ街からも見えるので堂々と空を飛ぶわけにはいかないだろ  
う。

馬車の上に着地した時にはパステルの顔も戻っていたような気がする。  
俺よりも何十倍も強い従者なのだ、大丈夫だろう。

「……………がとつ……………います。」

王国北西部の港町パリス。

100年くらい前に建設された街で比較的新しく、主に王国東部から西部へ荷物を運ぶ時の中継地点として用いられるため、人はあまり多くなく、寂れたとも人気があるともいえない街だ。

こんなところを攻める人などいないためか、街には簡単な魔獣よけの壁しかなく、開きっぱなしになっている門から街に入る。

家は石造りが基本で、煉瓦の家も多い。コンクリートに煉瓦を張り付けた似非煉瓦の家じゃなくて、全部煉瓦の家なんて初めてみた。地震が多い日本じゃ不可能だからね。となるとここは地震が起きないのかな。地上の世界地図で言えばフランス北部なわけだけど、ヨーロッパは震度3くらいでびっくりするくらい耐性ないんだっかな、地理は高校二年からやっていないのでほとんど覚えてない。

「クロノ・テアナーク様ですね？ 初めましてわたくしは王国の南部にいたエルフ族代表のトミーと申します。このたびはどうも。お世話になる集落の代表として挨拶に参りました。」

馬車を置き、待ち合わせに指定していた宿に行くと、その外にエルフ耳をした長身の優男が経っていた。おそらくこの外見でも相当年上なんだろう。

宿の一階の酒場は貸し切られていて、明日ブリトニア島に行くための待ち合わせ場所になっているのだ。店の女将に上の宿に泊まる代金まで先払いしたら、喜んで貸切にしてくれた。

「初めまして、トミーさん。丁寧にどうも。今回の試みが良い方向に向かうことを祈りましょう。まだ来ていない人はいますか？」

無闇にへりくだりすぎないように気をつける。一応代表となっているのだから。トップが揺らぐとダメだ。

「ええ、来た人からチェックしていますが、全員既にきているようです。最も、今は自由時間としてますので夕方まで帰ってこないでしょう。」

これだけ誠実な人がエルフ族のリーダーなら、人族や他の住人との折り合いも何とかつけられるかもしれない。最初は居住区をくっつけすぎないようにするけども。

交流が大事といってもそれはゆっくりでいい。最初のガタついている時に問題を起こされるとたまらないからね。

「では我々も夕方まで休憩させていただくとしましょう。明日からは暫し、宴会とはお別れでしょうからね。」

最後に微笑みあうと、トミーさんはエルフ族が固まっている方へ、俺はみんなの方へそれぞれ戻る。

「本日は夕方まで自由だ。夕方からは宴会があるので極力参加すること。以上だ。」

そういうとフランもステラもミーアもアイリスも、自分の村や集落のメンバーのところへ駆けて行った。久しぶりに親戚や家族に会うのだから楽しみにしていたのだろう。

これからは同じところで、奴隷にされる心配なく暮らせるのだ。いや、暮らさせてみせる。

そして時間は進み、宴会で豪華な料理が出され、明日動けなくなっ  
てしまわない程度に酒が振る舞われる。

みんなも今日はできるだけ着飾っているので色とりどりで美しい。  
ささやかな祝宴にも明日の門出への期待、幸せの予感に満ち溢れて  
いる。もちろん不安はいくらでもあるだろう。でも前を向いてくれ  
ているのだ。

「レンさん、楽しめてる？」

一人で端で飲んでいるレンさんに声をかける。

「あゝクロニヨさんですかあ。楽しいですよあ。」

……完全に酔っているよこの人。  
ハーフエルフという立場はここでも重くのしかかってきたのだろう、  
酒に逃げたくなるほどに。

ここにいるエルフたちは、レンさん自らが周って説明して集めてき  
たにもかかわらず、必要以上に関わり合いにならないのだ、他の  
エルフにどんな扱いをされて20年を過ごしてきたのか。心の闇は  
想像もできないほど深いのかもしれない。

その闇を埋めようとするか、忘却の彼方にやってしまおうとするか  
はレンさんの問題なので、下手に口を挟むのはやめておこう。

その後も他愛のない話をして、酔い潰れかけたレンさんを担ぎ、二  
階の適当な部屋に連れて行った。

……寝顔を見ても26歳とは到底思えない。エルフは神秘だ。

子が母にしがみつくようにまわされている腕を外して部屋から出る。

「ご主人様。」

廊下に立っていたのはパステル。

「明日の朝までには戻ってまいります。」

「頼んだ、パステル。」

こちらが命令しようとしていたことを先に察してくれる。  
言うべきか迷う命令は俺が言うより先に行ってくれ。

主に少しでも不快な思いをさせないように振る舞ってくれるパステル。

『バサッ』

という音がしてパステルの背中から大きな銀色の翼が生え、窓から飛び去って行った。

一番の従者は彼女以外いないだろう。

「いよいよ今日はブリトニア島に入る！　ブリトニア島に私が建設する国家は、弱者が虐げられない国家だ！　共存の精神を持つ者にはいつでも門戸を開く！　国家といえないほど小さな国家なれど、国の理念は大国にも劣らない大きなものだ！　この世界で初の種族混合国家となつて歴史に名を刻もう！　国家の名はレスト　翼休む刻　と名付ける！」

代表者としての慣れない演説を終え、順番に船に乗り込む。3つの船でぎりぎりだ。すべて【固定化】をかけたから大丈夫だとは思つが……。

何はともあれ、あのハリスさんの約束から早数か月、国家を立ち上げるには異例の速さだろうが、俺自身の印象としては『やっと』だ。

見ていてくれ。

身分の低さや種族の違いで差別されることのない場所を、日々  
危機を感じることなく幸せに生きられる地を、作ってみせるから。

22話 新天地へ(後書き)

そろそろ更新が遅くなる…かも。

23話 上陸（前書き）

10/11 誤字やおかしな改行、言葉遣いを訂正。

## 23話 上陸

「ブリトニア島が見えたぞー！！」

そう騒ぐ声が聞こえてくる。

見えるのは横に十数キロもある海岸線、そしてもつとも開けている浜にあるのが、簡易波止場だ。

そしてその奥に壁が見える。パステルが造った街のひな形だ。

「まだ戸籍を書いていない人は、上陸するまでに書くように！」  
叫ぶ。

戸籍を作ってもまだ管理ができるとは思っていないが、簡単に書いてもらっている。

名前と種族、出身地、髪の色、できること、やりたいこと、などだ。こちらから仕事を頼むときに参考にすると、俺が珍しい恩寵を持っている人を見つけた時に、名前を整理しやすくするために使うことになるだろう。

大陸歴1843年、9月のとある日昼前、まだ夏の残滓が残る中。

三隻の船がたどり着いた。

上陸したのは、人族25名、エルフ族18名、兎人族35名、猫人族26名、ホムンクルス2名の総計104名。

小さな国家、しかし歴史で長く伝えられることになる国家の始まりだった。

上陸して3日経つ。

ただの大学生に処理できる限界を超えていた。

まず持ち上がったのが水問題。

人族とエルフ族は日常魔術『凝縮』で空気中から水を作れるので、獣人族が日常魔術も覚束ないというのを忘れていたために水不足が起こった。

ちなみに水魔術で水を出して飲んでも意味がない。魔粒子でできているために、魔術を解くと魔粒子となつて霧散するからだ。『凝縮』はあくまでも水蒸気を水にしているだけなのだから原理が違う。

海水の濾過装置は作っていないし、蒸留させてきれいな水を作れるということくらいしかわからない。日常魔術では自分の分を作るのが関の山のために、水確保は急務となり、俺とパステルが空から搜索。居住区から森を越えた先に川が流れているのを発見。きれいな水だったが、居住区まで遠すぎるので、魔術や道具を総動員して川を引いてくることにした。

ここで大活躍するのが地属性の魔術師たち。エルフは【体外魔術行使】などの魔術系恩寵を持っている人が多いので、どんどん活躍してもらった。

他にも髪が茶色系統で地属性の人族や獣人には、許可をもらって【体外魔術行使 地】を刻印した。すぐには戦力にならないだろうが、手伝うくらいはできるだろう。一応恩寵を刻印できることは口止めはしといた。いつまで漏れないかはわからないけども。

この作業中に、ほぼ全員に魔術系の刻印を刻むことにする。すごい

時間がかかったが、小さい子以外は何とか魔術師になった。

それだけで、非力な女性でも木を氷魔術で斬り倒し、風魔術で運んでゆけ、土魔術で畑を開拓し、火魔術で魔獣を追い払う。

魔術のでたらめさがわかるというものだ。

森方面への防壁はパステルが作ってくれたので、魔獣に荒らされなかつたが、壁や罫はところどころ破壊されている。

また、今は持ってきた食糧で2週間はもつが、これからも人数が増えていく一方なのが予想される。実際に明日パリスへ行く船の帰りは十数人はあらたに連れてくるだろう。ので、居住区と農業区域を広げるために開拓班を作ることにした。

元から魔術が得意なエルフたちのうち、地属性じゃない魔術師を引き連れたセルヴィに行ってもらう。彼女の魔術はなかなかの腕前だし、代表者たる俺が直々に創った人造生命体なので、ハーフエルフのレンや獣人族のミアなどよりは、エルフとの衝突も少ないだろう。セルヴィもそんなこと歯牙にもかけないであろうし。

そして従者ふやすことにした。手がまわらないので……。

トウール。セルヴィの妹だ。

いつのまにかレンさんが、種族ごとの居住区の間さびれたところに研究所を建てていたのでその中で創造した。

材料は持ってきていた頭蓋骨。少女の身体に入れるのでいくつかに割って仕込む。そしてセルヴィを創ったときのように、禁術を精緻に書き込まれた魔法陣を用いて発動、その間に頭蓋骨にある根源に女性型の人格　精神年齢は16歳頃に設定して　を刻みこむ。黒い俺の根源が少し流れていき、頭蓋骨の中の根源も黒く染まっていく。

最後に指を少し切って出てきた血を落とす。赤い球体が少女のボディに落ちた時、彼女の身体がピクリと動き、頭蓋骨に刻まれた根源と、パステル謹製のセルヴィと似たボディが同調していく。

「おはよう、お前の名はトウールだ。俺の名はクロノ。お前の創造主だ。」

『理解』

頭に直接理解したのという念が伝わってくる。これでは俺だけしか

意思疎通ができないので、言葉を教えていかなければならない。

まずは身体に【体外魔力行使 闇】を刻印した。彼女は黒髪紅瞳から想像できるように、属性は闇と、火の発展属性である核属性だ。

核属性は、エネルギーそのものを扱うことができ、高温高圧状態を支配する。

固体液体気体を操るのがそれぞれ土水風だとしたら、核属性は液体でも気体でもない超臨界流体を操ることができる。超臨界水になると、腐食しにくいといわれる金を腐食させることができ、安定で分解しにくいダイオキシンスらも分解することができる。

しかしそれも高温高圧下であつての話。

核魔術師はその強大すぎる力を扱いきれず、エネルギー弾を作り『火球』のようにぶつけるといふ使い方ぐらいしかできないものが大半だ。なんせ、無理に扱おうとして制御に失敗すると、自分を中心としてクレーターができてしまう。

よつて核属性魔術を使いこなせる人は人材の多い王国でも一人だけたはずだ。確実に王国トップの魔術師を名乗ることができるほどの実力。

超高温では他の魔術は制御を失うためにどんな攻撃も届かず、その空間の支配者となるのだから強いのも納得できるだろう。ちよつとでも精神が緩めば自分ごと消滅する危険性もあるので、絶対に向かい合いたくない相手だ。

トウルはセルヴィよりも攻撃に秀でた魔術師となるだろうが、核属性については限りなく慎重にやってもらおう。セルヴィに教えたウォータージェットも水に高圧をかけるために暴発すると危険だったが、核魔術はその比ではないのだから。

トウルは俺の屋敷に連れて帰り、近くで掃除をしていた娘たちに預ける。

俺としてはみんなと同じ規模の家でよかったのだが、客人が来ないとも限らないし、何よりも示しがないということで大き目の屋敷を急ピッチで作ってもらった。

そして屋敷の管理はパステルが居れば、あの完璧従者のことだ、恙なく瀟洒にやるだろうと思っていて、実際そうなのだが、他の仕事が入ってない場合だけだ。

彼女は有能さゆえに他の現場に行ってもらうことが多い。むしろ俺の世話なんか本来は優先順位を下げるべきなのだ。それでもパステルは甲斐甲斐しく世話をしていたのだが、現場から空を飛んで戻ってきて、俺に紅茶をいれて身だしなみを整えてくれたあと、すぐにまた違う現場に飛んでいくのを見て、さすがに精神的に疲れてしまっただろうし、非効率だと考えた。

俺と同じことを思っていた人が予想以上にいたそうで、魔術を覚え

たばかりの少女たちなど、農作業もやれない娘たちを屋敷の管理に派遣してくれたのだ。それも15人も……。

ここブリトニア島に来てくれる集落は大抵が潰れかけ、廃村寸前だったために男手が少なく、またご老人は故郷から離れたがらなかつたから、この島の人口比率は10代後半の少女とそれ以下の男女の子供たちがかなり多い。

15人はこちらにやりすぎだと思ったのだが、魔術の練習はレスト翼休む刻 ではどこでもできるから無駄でもないとのこと。

実際に屋敷は突貫工事とはいえ、船着き場から入った街 始まりの港アステップと名付けた の一等地にかなり大きく作られたので、15人の使用人も交代制なら人員がだぶることがなかつたりする。

大きいだけで殺風景なのは仕方ないといったところか。

それにしても侍女15人を働かせられるような屋敷を作るなよと言いたい。

作ってもらった側だから何も言わないけどさ。

せめて先に作る旨を教えて頂きたかつたもんだ。

びっくりしたよ？

朝起きたら街の中心にいきなり洋風の煉瓦屋敷ができていて、なんだこれはと屋敷前にいた猫人族の少女に聞くと、「テアナーク様の屋敷ですわ。どうぞこちらに」と、門から入ると、屋敷の玄関まで横の道をズラつと左右に少女たちが並んでいて頭を下げているのを見てさつをしてくるではないか。

これは何の冗談だと思ったのだが、そのまま俺は玄関まで連れて行かれた。

そして玄関のドアの前にパステルとセルヴィが居たのを見て、事情を察知した。

二人はすっごく良い笑顔、良い仕事ができでご主人様が喜ぶのが目に浮かぶよう、とでも言っているかのような顔をしていたのだ。本当に俺のために屋敷が造られたのだと知った瞬間だった。

ついでに猫人族代表の男性が、「きれいどころを集めやしたよ。」と野性味あふれる笑顔でこっそりと耳打ちしてきたので、この屋敷と侍女にはそういう意味もあるのかと納得した。したくなかったけど。

この世界にきて一度も女性と交わっていないし、自分でもしていない。娼館も考えたが病気が怖いし、周りに女性がいるのだから失礼だとも思った。

しかし周りの女性には少女が多いので手を出す気にはなれなかった。それに上位世界でも禁欲の方針だったのでまあいいか、という想いも強かった。

……この三日間、【体外魔力行使】をみんなに刻印したのが影響で、尊敬度が高くなりすぎてきてるんだ。

「こんなことができるなんて神以外にはクロノ・テアナーク様以外にはできないだろう、本当に救世主になのかも」って感じに。

最初はどこも今の生活よりは多少ましになるかもという感じだったらしいんだ。オリヴァー・ハーヴェイ王から許可をもらったと聞いた時には期待感が若干膨らんだらしいが、所詮それくらいだった。もちろんこつちも何か功績を建てたわけでもないのでそれが当たり前だと思っけどさ。

しかし状況はすぐに変わった。

「少しましになるかも？」から「本物の天使なんだ！ 救世主となる方だ！」と。尊敬を越えて崇拜になりそうだよ。

殺さずに恩寵を吸収でき、また失うことなく他人に刻印できる俺の恩寵技能は、本当に異常だったみたい。

ここまで大変なものならもう少し口止めをした方がよかったか？

この調子だとすぐに王国にまで広まりそうな気がする。

しかし覆水盆に戻らず、今はプラスに働いたことだけを喜ぶか。どうやって代表として求心力を得、まとめていくかは重大な問題だったことだしね。

さて屋敷に戻って、侍女に頭を下げられながら奥の部屋を目指す。仕事をする執務室のようなものがあるのだが、屋敷が広いためにどうしても歩く距離が長くなってしまふ。

今向かっているのは宝物庫という名の、物置だ。

【豊穰の女神の加護】があるとはいえ、成長速度が劇的に伸びるわけでもない。よって食糧はしばらくはパリスから買い続けなければならず、『金策』が必要になった。

俺は無人島なのだから、めずらしい薬草や鉱石が簡単に見つかるだろうと、気楽に思っていたのだがそこまで甘くはなく……。

薬草もあるにはあるが、採りすぎるとすぐになくなってしまふし、高級なものであってもパリスから王都の方へ運んで捌いてもらうがために安く買いたたかれてしまふ。

鉱石も落ちてるものはすぐ手に入れられるが、検討がついている鉱山はあっても、採掘するためには大掛かりな装置や道具を買うか作らなくてはならない。

魔術でやっても魔術には持久力はないので安定して産出させることは不可能。ならば鉱山採掘用の魔法陣を使って、魔力を注ぐだけでできるようにしたくとも、そんな魔法陣はだれも見たことがない。しかしーから描いて実用化レベルまで持っていくとすると、どれだ

け時間がかかるのか想像もつかない。

ということ、お金のために、俺は自分の恩寵技能を活用することにした。

以前にパステルが狩った魔獣の素材と、現段階で継続的に開拓しつつ魔獣を狩っている開拓班が手に入れてくるだろう素材、そして露出していて採掘が用意だつたいくつかの金属。

これらで恩寵刻印武器を作るつもりだ。

### 【根源管理】発動。

まずは素材の良しあしを見ていく。同じ素材であつても根源量にはバラつきがあり、稀に恩寵が刻まれていることもある。

このうち、恩寵が刻まれていて俺がもっていないものは壊して吸収する。オリハルコンのような固い物を壊すのは、パステルが置いて行ってくれた上位世界からの持ち出しナイフを用いる。このナイフ、やたら丈夫だと思ってたら【不可壊】が刻まれてましたからね。パステルの一部だと思って、個別に根源を覗いて見なかったから最近まで気づかなかつた。

そして【変形】【切断強化】【治癒魔術】【獣使い】【液化】【槌使い】【乱魔】が手に入れた中でも有用そうなものだ。

数百あるうちの数個しか恩寵が刻まれないのだが、刻まれている恩寵技能の無節操さにあきれてしまう。

【変形】がミスリルに刻まれていたし、狼のような魔獣の素材に【液化】が刻まれていたり……特に後者なんて、知的好奇心から使用した瞬間に死亡するじゃないか！

しかし、無生物には関係ない。

特に高階恩寵の【変型】はレンさんには有用ではないだろうか。銀時計の姿のままだと、守護霊を出さない限りは何もできないが、【変型】を使えば武器となることもできるだろう。変型武器って男の子の憧れだよな？　すでに面白い案が思いついた。ヒントとして、モチーフを桜にするか銀杏にするかでキョウさんと燃え、いつもなら必ず言い負かされる俺が「桜だろ！　日本人の心は！」と叫び続けて勝利した。モチーフは桜の花びら、そして【変型】。ついでに【鬼蜘蛛系生成】と【系繰り】【切断強化】【不可壊】の合わせ技。某死神漫画のオサレな武器を真似させていただこ。刀身が消えるのではなく銀時計が桜吹雪になるのだけだね。いや、先に刀状態になれば問題ないか。

【治癒魔術】は魔獣の胃の中にあつた腕輪から得られた。業物だがかなり昔の物のようでポロポロだった。おそらく根源量に惹かれて魔獣が食べて、しかし消化できなくて吐いて、他の魔獣が食べる、を繰り返したのだろう。

これはかなりうれしい収穫だ。【治癒魔術】は中階なので根源に刻める人は多くないが、数人治癒魔術師がいれば大きな違いだろう。

中階【乱魔】は魔力に干渉し攪乱する効果がある魔術師泣かせの恩寵だ。上位互換としてあらゆる魔力を無効化する【破魔】がある。

この恩寵はごく少量だけとれた『ヒビイロノカネ』というこの世界最高の鉱石から得られた。ごく少量でもすさまじい価格がするのだが、【乱魔】のほうをとって破壊した。

パステルのナイフで15分くらいかかったのだから、オリハルコンと比べても圧倒的に丈夫だ。

しかし【乱魔】をつけた装備を着ると、自分も魔術使いにくくなるから困る。【乱魔】の場合は【破魔】と違って、魔術発動を邪魔して暴発させるタイプなので使用するのがためらわれてしまう。

さて、素材の厳選はだいたい終わった。オリハルコンやミスリル、アダマントナイトなんかのファンタジー金属や、希少金属になるにつれて根源量が大きくなる。

だから恩寵調金武器はたいしたことのない恩寵であっても高くなるわけなのだけど。

作る恩寵調金武器は、王国に売るわけだからあまり物騒な恩寵を刻みたくない。かといって誰も見向きしないような恩寵を刻むのなら素材がもつたいない。根源量は有限なのだから。

結局、銀のインゴットに低階恩寵【電心】を刻印することにする。極めて便利な恩寵で、王国の大きな機関しかもっていないので高く売れるだろう。何度も使って熟練度をあげないと距離は伸びないが、ついでに言うと、今の俺とパステルの【電心】の有効範囲は8kmで、そろそろ【通心】にランクアップするんじゃないだろうかと思

っている。

他には、【槍使い】をつけたアメジスト、【体外魔術行使 光】を刻んだミスリルなどを少し。

また、魔法陣を刻んだ魔導具や魔道具、魔術礼装も作る。魔法陣を物体に描くのは時間がかかり、集中力も大きく消費するのでおいそれとできるものではないのだが、俺が上位世界から持ち込んだ万年筆に高階【魔法陣刻印】があつたことに気づいたおかげで解決した。描く時間が大幅に短縮され、一度描いた刻印ならすぐに出せるという効果。俺の魔術使用の時にもすぐに魔法陣を描けるので重宝している。

それによつて『光源』や『発火』を刻んだ日常に仕える魔道具と、魔術の効果をあげる魔法陣を描いた魔導具。そして試作品だが、起動すると自動で魔粒子を吸収して魔力に変える効果のある魔術礼装を用意した。

最後の一つは王都から出る準備をしながら考えていたものだ。もし完成したらオートメーションが進むだろう。今はスズメの涙ほども出力がでないのだが……。しかし『光源』くらいなら夜の間は起動できる。【光源】付きの魔道具ならば術者が何もしなくていいが、『光源』だとずっと意識して魔力を注がなくてはならないから便利なはずだ。

欠点は刻印されている物に負担をかけてしまっているところか。それも『固定化』や『修復』で直せられればいいが、そっちに魔力を使うとさらに出力が下がってしまうというジレンマ。

あとは商人をどうするかだが、最初はパリスやその周辺にいる商人を頼ることにする。村人ばかりで商人の経験がある人がおらず、いまは文字と計算を教える段階の者ばかりだからだ。

そのうちこのレスト 翼休む刻 からも商人を排出したいのだが……当分先になるだろう。

高級品を扱っていると護衛が必要になるから、その育成もある。できればこの国以外で攻撃魔術を使うのは避けてもらおう予定だから武器の鍛錬もしなくては。

何人も野良魔術師がいたら余計に怪しまれるだろうからね。国が落ち着くまでちょっかいを出されたくない。

そしてこの日から四日後、パリスから食糧と共に人を20人ほど乗せてやってきた船と入れ違いに、『錬金』などで素人ながらも、刻印済み素材を腕輪や槍の柄なんかに形を整えて完成した、恩寵調金武器や道具を送った。

俺が恩寵を刻むものには『刻』と一文字いれてある。恩寵や魔法陣を『刻む』のエキスパートである俺には相応しいだろう、というのがパステル達に言った表向きの理由だ。

『クロノ クロノス 時の神 時間 刻』というくだらない連想ゲームで思いついたのは内緒である。

さらに三日後に戻ってきて、大量の武器や道具を持って帰ってきた。なんでも俺が刻印した物がとても高く売れて、この程度大した出費ではなかったらしい。

いくら儲かったか？

金貨1000枚。

……俺の恩寵技能ってチートだったのか！

それを実感した数日間だった……。

23話 上陸(後書き)

10億円ゲット

24話 レスト 翼休む刻 の日常(前) (前書き)

予約投稿の設定ミスってました；

毎日投稿はこれが最後となります。

## 24話 レスト 翼休む刻 の日常(前)

ブリトニア島に上陸し、国家レスト 翼休む刻 を建国してから1か月がたった朝。初期のゴタゴタも少し落ち着いたこの日も、いつも通り黒乃の部屋に忍び込む白い影から始まる。

音をたてないように恩寵技能【無音】を発動させて入ってくる人影は、いつもクールに澄ましている顔 親しい人でないと鉄面皮に思える を、黒乃がベッドに転がっている姿を見とめると同時に崩した。

ニヤツと。赤い瞳が細まる。

美人ゆえに下品な笑い方とはならないのだが、間違っても上品とは言えない表情。黒乃ですら見たことがない笑顔で、主に黒乃を独り占めしたときにだけ顔に出てくる表情だ。

彼女はそのままベッドの側に近づく。黒乃が肩身離さずにもっている銀時計キヨウは、ハーフェルフのレンの研究所に昨日から行っているのを確認済みだ。

つまり、今の彼女を邪魔するものはいない。そして黒乃の被っている毛布を捲って、あわよくば自分も入ってしまったおと彼女が明るい

未来を夢想した。

しかし彼女はいつも先手を打たれるのだった。忌々しい雌ホムンクルス（彼女視点）に。

「うにゆ……？ 創造主<sup>マスター</sup>あ、寒いです。」  
寝言を言っつて黒乃に抱き着こうとする、黒いミディアムショート<sup>ホムンクルス</sup>の髪に水色の綺麗な瞳を持つ、黒乃により創られた最初の人造人間のセルヴィ。

この少女が彼女      お分かりかと思うがパステルだ      の天敵なのである。

そしてセルヴィもパステルに対抗意識をもっているようで、尽く邪魔をしてくるのだ。

二人の仲の悪さは、出会いが最悪だったからだろう。

パステルにとっては、自分が主の命令で仕事を終えて帰り、褒めてもらおうと思っつたら主の膝を独占していた泥棒猫がセルヴィ。

セルヴィにとっては、絶対の創造主たる黒乃にいきなり外から入っつてきて突進し、しかもセルヴィを膝から落とした無体を働く輩がパステル。

その後、黒乃からボディについての改造や魔術の講義をするように指示されたパステルは、表向きは好意的に接するのだが、それも黒乃の目が届く場所でのみ。その裏ではお互いに自分の優位性を主張し、どちらが黒乃にとって一番の従者なのかを争いあっている。

パステルは、自分は黒乃と生まれた時から一緒であり、片時も離れなかった自分たちの絆は横から入ってきた小娘にケチ付けられるものではなく、一番彼のことを知っている自分が一番の従者だと主張。

セルヴィは、自分は黒乃の御手自ら創り出された一番最初の人間であり、他の人間の穢れた手で作られた年増女には、黒乃の隣はふさわしくないとして一番の従者を主張。

当然黒乃がそれに結論を出すわけもなく、日本人らしい優柔不断で草食系な人間なのだ、終わりもしない闘争が続いているのだ。

時には言葉で、時には自分のボディを磨いたのを自慢して、時にはこうやって相手のたくらみを阻んで。

クールさを被った激情家のパステルとのらりくらりと泰然と躲すセルヴィ。そりが合わないのも当然だったのだ。

ちなみにパステルは人形で人造人間ではない。人形に人格が宿った存在であり、人間を素体として使ったわけではないからだ。素体にしたといっても、セルヴィもトゥールも頭蓋骨だけなのだが。

「な、なぜあなたがご主人様のベッドに！ でなさい！」

セルヴィが敬愛する主人に添い寝している状況を見て、「そこは私の場所だ」と物理的な重さがありそうな視線を向ける。もちろん声が黒乃を起こさないように最小だ。

「んー。あなたには関係ないでしょお？」

寝起きだからか眠そうなセルヴィ。すでに舌足らずな口調は卒業している。彼女もパステルに続いて、舌足らず口調ではいつまでも娘としてしか見られないと気付いたのだ。

……卒業しても娘扱いは変わらないのだが、言わぬが華か。

その返事にプルプルと震えるパステル。

屋敷の外、いや、屋敷の内側にいる人たちでも滅多に見ないくらい感情を出している。

セルヴィは基本的に策略家なのだ。天然なのか計算なのかかわからないが、いつもうまくパステルの黒乃接近作戦の妨害をしてくる。

今回もいつのまにか先回りしていた　トラップを置いていたのに！　し、今寝ころんでいる位置も黒乃を挟んでパステルと逆

側。無理やり引きずり出そうにも黒乃が起きてしまいかもしれない。

行動を責めようにも、自分がふとんを巻くって入ろうとしたのを目撃されているために強く出れない。それにまだ朝の5時。黒乃は低血圧なのでこの世界では遅い7時までは起きないので、黒乃を起すために部屋に来たという言い訳が使えないのだ。

「いつまでもこのままだと思っていては大間違いよ！」  
完全に自分の敗北を悟ったパステルはせめてもの捨て台詞　黒乃の前では絶対に使わないような言葉遣いだ　を残して部屋をでようとする。

「パステルさんも入れればいいのに！」  
セルヴィの天然か策略かわからない悪魔の誘い。

誘惑に乗れば、セルヴィにいいようにされたという敗北感の上乗せ。乗らなければ、残り二時間弱の間、黒乃をセルヴィに取られ続ける。

「これも従者の務めこれも従者の務めこれも従者の務め　」

何やら自分の行動を正当化する言葉を呟きつつ、近づいてくるパステル。

結局彼女が選んだのは前者、悪魔セルヴィの誘惑に乗る方だった。

黒乃の胸に隠れて、微笑むセルヴィ。

……ニヤリとした口で、彼女が天然なのか腹黒なのか、結論は出た  
だろう。

その一瞬の表情を見逃したパステルは、やはりまだまだ勝てないの  
だった。

午前7時。10月に入り、少し肌寒くなってきたと感じる黒乃。  
そんな彼を起こしたのはトウールだった。

トウールは彼が造った二番目の人造人間だ

ホームソックス

黒いミディアムショートのは髪はセルヴィと同じく光を反射して輝い  
ていて、顔もそっくりなためにセルヴィとは姉妹のように見え、実  
際に姉妹としての意識がある。

外見で違うのはその紅の瞳と、身長が5cmほど低いことくらいだろうか。

……性格は全然違うのだが。

まっさらな人格から個性がでるのはいいことなのだと思乃は心から思うが、たいして環境も違わなかったはずなのに、どうしてここまですべて性格が違うのか、神秘を感じる黒乃であった。

「もうっ、はやく起きてください！ まったくこの創造主はいつもいつも……」

ブツブツと愚痴るトゥール。一か月前まで無口だったのが信じられないくらいだ。

トゥールは6時半くらいに早めに着ていたのだが、黒乃のベッドに潜り込むパステルと姉セルヴィを発見。部屋から追い出してしまつ。その後は7時までベッドの横に座り、黒乃の寝顔を眺めながら、普段の強気な様子からは想像もできないニコニコとした顔で佇み、それに気づいて顔を赤らめてすぐにまじめな表情に戻り、しかし次第に頬が緩んで、と繰り返していた。

……ここまでで大体性格を把握できただろうか。

そう、トゥールは誰の影響を受けたのか、ツンデレ少女になったのだ。

パステルの分析では姉セルヴィが黒乃にベタベタしすぎた反動で、素直に甘えられなくなったとみている。甘えん坊の姉にすっかりした妹という組み合わせだ。

「ああ、トウールか。おはよう。」

トウールは今日も朝から機嫌がよろしくないみたいだなあ、と思いつつ重い身体をあげる黒乃。

照れ隠しが入っていることにはなんとなくだが気づいてはいるのだが、うまく距離感を掴めておらず無難な返事を返す。

「朝食はできてます。メニューは小麦の白パンと野菜のスープ、そして創造主が好きと言っていた魚を一尾、開いて焼いたものです。」  
「淡々と今日の朝食を言い渡すトウール。総勢250人ほどとはいえ、小国の主である黒乃はそれなりにいいものを食べている。領主の務めには、ある程度の贅沢をして、民に国の余裕についての安心感をもたせ、民自体も少しの贅沢をしやすいものがあるのだ。」

ちなみに朝食は屋敷に詰めている侍女の中で、料理がうまかったものに作ってもらっている。

彼女たちに黒乃が【料理】を刻印してあげると、彼女たちはものすごく感謝し感激していた。

黒乃本人としては余計な事をしたかも思っていたのだが、彼女た

ちからすれば才能の限界を部分的にとはいえ容易く越えさせる黒乃の能力は、まさに神にも等しいもので、恩寵を持たないがゆえに虐げられてきた者からすれば神の救済にも思えるのだ。

朝食は黒乃一人だけが座り、後ろにはトウールが控え、侍女が食事の世話をしてくれる。至れり尽くせりだ。

最初は同じテーブルでみんなと食べたいと思ったのだが、一応とはいえ立場と身分の違いがあるのでと固辞された。黒乃は少しさびしく感じたが、気を使って同じテーブルで座って食べてもらおうとするのが逆に緊張や負担を強いてしまうのなら本末転倒だとあきらめた。

どうしても他人と食べたいときは、友人の立場であるレンさんや、アイリス、フラン、ミア、ステラなどを呼んで一緒に食べることになっている。

朝食を食べ終わる頃にまたトウールが口を開いて、今日の予定を黒乃に伝える。

トウールやパステル、セルヴィはたまに一緒に食べてくれる時があるが、今日はパステルもセルヴィもすでに仕事に出ていない。トウールは二人きりで食べるのが恥ずかしいと考えて先に食べてしまった。

この三人は人間ではないので食事よりも黒乃の血液数滴のほうがエネルギーになるので、特段食事をする必要はなく、最初にパステルが消化器官をつけたのは、主人である黒乃と一緒に食事するのが一

つのささやかな夢だったからだ。

さて、朝食が食べ終わったあとは、身だしなみを整えて仕事をはじめ。午前中は書類整理だ。代表者となっている黒乃しか処理できない書類も多いので、午前中は執務室に缶詰することになる。一か月経って、執務室モドキもようやく、上品ながらも実用的なセンスで部屋が彩られて執務室と呼べるところになった。

今黒乃が見ている書類は、新しい住人と古い住人との衝突についてだ。

人というのは本当に弱い。種族間差別のみならず、自分たちの中でも区切って争いの種を作るのだから。

今回の問題は、あらたにきた人族の集団が猫人族を差別したという話だった。

立地的に、移住する意思のある弱者勧誘も、まだ王国の外へでいてないために、どんなに貧しかった人でも多かれ少なかれ、亜人種全般に対しての差別を恐怖が残っているものなのだ。

猫人族も煽ったところがあったので、人族と猫人族で7対3で罰を与えたようだ。

罰と言ってもたいしたことのないものだが。ちょっとした重労働や、人がやりたがらない仕事に少しの間まわされる程度だ。

全種族共存、知的生命体に貴賤なしと謳い、レスト全体に浸透させてはいるが、新参ものとの対立は後を絶たない。あまりにも目が余るようだ。強制的にでてもらうことになる。

他に、【体外魔術行使】などの恩寵を刻印するか否かの問題もできてくる。

たしかに中規模な魔術が使えるようになれば仕事の効率が上がるのだが、レストで生活したあとにやっぱり合わずに王国に戻る人もたまにいたため、刻印目的で来られるとたまらない。

結局、ある程度貢献して信頼できたら刻むことにする。魔術系恩寵を持つているのは、初期の120人ほどだ。そのうち子供以外で満足に使えている人は60人。正直250人の村規模の国を守るのにも、開拓するにもいまのままですら十分すぎる数だ。

最後に戸籍情報にばらばらと目を通す。正直誰がスパイだとか全然見当もつかない。相手はプロなのだから当たり前だが。黒乃の得意分野ではないのでセルヴィに投げている状態だ。

昼食をとったあとは、各地の視察をする。

まずは、ブリトニア島の南中央から扇状に北に伸びていく大農場だ。今は【豊穣の女神の加護 ラウニプロテ】での土質の改善と、秋に植える野菜、秋ジャガイモなどを育てている。暖かいところでは冬小麦ができないかなあ、と思っただけの実験中となっている。

黒乃の乏しい農業知識では、春と冬となぜ二回小麦が収穫されていたか、という基本知識すら残っていない。アメリカの広い国土を利用して、冬に暖かい地方で作っているだけなのだ。黒乃がやろうとしているみたいに、イギリスの十分の一程度ではそこまで気候に差がでるはずもなく、失敗に終わるだろう。

連作や二期作、二毛作、ノーフォークについての概念は覚えているが、どの植物の組み合わせがいかなどについては未知数で、結局実験農場でやっている段階だ。連作でも土を肥えさせることができる【豊穣の女神の加護】があればなんとかなるかなあ、と悠長に構えているので、トップがそれでは末端もしっかりできないものだ。

まあ何事も実験と失敗の繰り返しだ。

そんなこんなで隣の家畜の放牧場に目を向ける。広大な土地と端に

畜舎が見える。家畜を制御するのは犬でなく魔獣だ。そう、中階【獣使い】を手に入れたので、希望者には刻印してあげることになり、魔獣を使って家畜がはぐれたり敵に襲われたりしないようにしているのだ。

それらの魔獣を操る魔獣使いの中にはミアの姿もある。最初のほうは開拓班に参加していたのだが、攻撃魔術を使えるものが増えてきたというのあり、その恩寵技能【獣使い】を生かして家畜を育てるのに精を出している。

最近では魔獣の中でおいしいと評判の種も家畜化できないか悩んでいるそうだ。根本的に人や動物を襲う魔獣は常に【魔獣使い】でおとなしくさせなくてはダメだから難しいとの話で、実現化の目処は立っていない。

その後は森に隣接する壁までいき、空を飛んで何やら指示を出しているパステルを眺める黒乃。パステルの白く長い透き通る髪が、そよ風で波打っていて天使のよう。透き通りすぎて背景にある空の青色を映し出す髪はパステルという名の由縁だけあって際立っていた。

そしてパステルが黒乃の視線に気づいて、最も美しく見える角度やポーズを計算して視線に合わせているのは余談であった。

最高といえる角度タイミングでのチラリズムまで、黒乃にだけお見舞いしているというのに、黒乃には「淑女としては……」。後で注意しておこう。「としか思われていないのは、もっともっと余談である。

24話 レスト 翼休む刻 の日常(前) (後書き)

パステルはまだ娘なのです。クロノにとって

週二回くらいの更新を目指したいと思います。

タイトル変更しました。じっくりくるのが見つからない…

## 25話 レスト 翼休む刻 の日常（後）

アステップに戻り、少し大通りにそって歩くと、かろうじて学校のように見える大きな煉瓦造りの建物が見え、黒乃はそこにはいつていった。ここは学校だ。

ここでは昼までは子供たちに、夕方からは大人たちに文字と計算を教えている。

この時間、中学生くらいの子たちの前で教べんを振るうのは16歳のステラだ。きりりとした茶色の瞳は大人びて見え、教えている姿も様になっていた。

既にステラ、フラン、ミア、アイリスには文字や計算を、黒乃とパステルで教えてある。四則演算までだけだが。

正直村人の教育レベルはかなり低い。

現代日本人の感覚だと、四則演算を知らずに一生を終えられるのが想像もつかないだろう。黒乃はファンタジーな世界ということに覚悟していたがそれでも衝撃を受けることとなった。

四則演算以降の数学は商人などで必要になったら黒乃が教えるつもりだが、黒乃自身、経済学でどこまで数学を使うのか、果たしてそれを教えてこの世界での商売に活かせるかの目算が出来ていない。よって、高等数学に関しては、今までの努力の結果を忘れるのは忍

びないがために、パステルに教えているくらいに留まっているのが現状だ。

魔術の訓練についてはレンさんやステラが気が向いたときに特別講義としてやっている。

レンさんは魔術について詳しいのでその講義を、ステラは地属性魔術師として建設に便利な『錬金』や『形成』『固定化』を教え込んでもらう。

魔術を新しく覚えさせた者には、俺とパステル式の魔術 一つのままにか黒時式と呼ばれていた。「黒」乃と、黒乃が刻印した武器についている「刻」という字からの連想で誰かが思いついたのだろう。を教えるために、エルフの元々攻撃魔術を使えた人達の手を借りていない。

黒乃とレンの間で、伝統の問題で大いにもめたが、効率の良さにおいては黒時式を見とめざるを得ないということで、どうにか教えるのを認めさせた。

講義中にはミアアやアイリスが飛び込んできて模擬戦を行うこともあるようだ。

未だに弱い組織なので、ある程度の年齢以上であれば攻撃魔術を覚えることは推奨している。少なくとも自分の身を守るくらいにはなっほほしいという黒乃の方針である。

模擬戦においては、ミアアも新人程度は軽くひねってしまうが、【

魔力性質変換 雷】を持つアイリスには敵わない。

まず第一に【体外魔力行使】と【魔力性質変換】だと魔力を練られる空間が後者の方が広い。【体外魔力操作】になれば範囲に関しては追いつけるのだが、ミアの熟練度ではまだまだ 黒乃は最近無事【体外魔力操作 氷華】【体外魔力操作 影闇】になった。ちなみに恩寵がランクアップすると、同時に根源もその分増えることになる。 といったところだ。

第二に魔術の展開速度。ミアが『概念を注ぐ』2秒の間にアイリスは、雷属性ならば2回は魔術を行使できる。

雷はその性質が自分の移動速度を速めるものも多く、二秒の間に自分の間合いまで飛び込み先手の魔力弾 本来無属性だが、アイリスは雷属性になる を打ちこみ勝負が決まる。

もっと一瞬で決めるなら魔力弾すら作らずに、魔粒子を支配した空間にある魔力をすべて雷に変えれば、不可避の一撃を放つことすら可能である。

正直アイリスに模擬戦で勝てるのは、遠距離魔術が得意なセルヴィや雷属性に耐性をもつパステルやレンくらいである。それも近距離から始まる遭遇戦ならかなり厳しくなる。

近距離だとアイリスの雷になったかのような速度に勝てないというのもあるし、最近黒乃が教えた現代知識を基にした魔術が原因だ。

『電磁波索敵』と名付けたそれは、電磁波で辺りを探るといふ魔術で、アイリスだけしか今のところ上手く使えない。

その理由としては、常時展開をできるのが片手間で魔力を電気に変えられるのがアイリスしかないというのと、黒乃たちがなんとか電磁波を出しても、戻ってきた電磁波を感じるができないのだ

が、アイリスだけでは電磁波の発生の仕組みを知らなくてもその存在を感覚で理解できるということだ  
そして電磁波がどの方向から返ってきたかの情報を読み取り、広範囲の索敵をすることができる。その有効範囲はパステルの超音波による索敵よりも広い。

これほどまでに【魔力性質変換】は凶悪なのだ。

だから【魔力性質変換】が見ついた物がないか、黒乃も目を皿にして探しているのだが、そのレア度ゆえに滅多に見つからない。

発見したのは【魔力性質変換 氷】だけで、トゥールが海の底で見つけた大剣に調金されていた。元々トゥールは黒乃の呟いた「サザエが食べたい……。」という言葉を聞き、海にあると聞いて潜っていたら偶然見つけたのだった。

「別にマスターのためじゃないし！」と可愛く赤くなるトゥールだったが、黒乃は【魔力性質変換 氷】が手に入ったことに喜びすぎている。失礼な奴である。

こうして黒乃は【魔力性質変換 氷】を吸収し、魔力範囲内を『概念を注ぐ』手間をかけることもなく凍らせることができるようになった。秋とはいえ、まだ食べ物が腐ってしまう今の季節にはありがたい人力冷凍庫だ。

学校の視察を終了し、人数がまた増えたので学校の教室も建て増したほうがいいかな、などと思いつながら黒乃は玄関から出て、校庭  
ただの空き地にしか見えない　で遊ぶ子供たちを横目に見ながら、次の目的地に向かう。

次にやってきたのは、兎人族の居住区だ。

兎人族の代表となっている、フランの母親の元で要望などを聞く。自ら現場にでてこないとわからないことも多いので、黒乃は週に一回はそれぞれの居住区を訪れている。人数もさほど多くないので大変ではないが、これからも増えていくことを見越して計画的に発展していかねければならないので、しっかりとした打ち合わせが必要なのだ。

兎人族では今のところ大きな不便はないという。

しかし最後に爆弾が落とされた。次の年の初めくらいから発情期に入る娘がでてくるので、覚悟しといてくれと言われて真っ赤になる黒乃とフラン。周りには微笑ましそうに見ている者と、兎なのに獲物を狙う肉食獣の目をした者と、黒乃の呪いの噂を知っていて心配する者がいた。

フランはまだ14歳　来月に15歳　だが、この世界での結婚や妊娠はありえない年齢だ。

それに今の黒乃の身長は160程度。その童顔も相まって周囲からは16歳くらいだと思われるので、現代であってもロリコンの誹りを受けることはない。

お土産をいくつかもらった後は、新しくできた居住区の方に行く。

一週間ほど前に狐人族　狐耳に金色や銀色の髪、そしてもふもふな尻尾が1本から9本まで生えている　が30人ほどでレストに入ってきたのだ。

彼女たちは光魔術の、特に『幻影』や『幻術』が得意なものが多い。王国で集落を幻影結界で隠しながら生きてきたらしいのだが、その噂を聞きつけたアークライト王朝の手の者により風潰しに探られてしまい、戦闘能力に乏しい彼女たちは早めに逃げてきたとのこと。

もちろん黒乃は無条件で受け入れるつもりだったがし、隠れ集落にもレストの良い噂が広まっていることへの喜びで即刻歓迎した。実際には田舎にはまだ伝わっておらず、さらには王都にすら知られていないのだが、黒乃はそれを知らない。『幻影』が得意な狐人族は人に紛れての情報収集を、常に行なっているためにレストのことを聞いていたのだ。

先ほどから「彼女たち」と言っているのは、狐人族は兎人族と同じく女性しかいないからである。このアンダーワールドでは男女一方

しかない種族というのが存外に多いようだ。

こちらでの生活へ慣れたかどうか、何か不満はないかを聞く黒乃。彼女たちが言うには自分たちにあった仕事がありませんのが不安とのこと。種族全体でほぼ光属性ばかりな狐人族には力仕事は向いていない。書類仕事や雑用にしても、彼女たちの特性を活かしているとは言いがたい。つまりは自分たちが役に立っているという認識がないと不安だというのだ。

よって黒乃と族長で話し合い、順番に王国へ情報集めをしに行ってもらうことに決めた。『幻影』による諜報活動は、エルフたちよりも一日の長があるので期待ができるだろう。

後は、他の種族同様に数人を黒乃の屋敷に侍女として派遣することになった。

どの種族も挙って最高権力者　つまりは黒乃　に見目麗しい少女を差し出すのが習慣になりそうで、既になつてきている。人という生き物である以上、権力者の近くに人を置きたがるのは仕方ないのだろう。上位世界の歴史でもそうであつたし、さまざまな種族あふれるこの世界でも精神構造に大きな違いはない。

黒乃自身も狐人族の尻尾をもふもふしてみたいという思いがあつたので、遠慮するように口では言いながらもまんざらではないようだった。

こうして夕方になり屋敷に帰ってきた黒乃は、一旦戻ったパステル

に迎えられ、風呂場に向かう。

この世界には水浴びくらいしかなかったが、レストを作って一か月経ち、少し落ち着いた途端にとつともなく風呂に入りたくなったために風呂を作ったのだ。作ったといっても、石を練りぬき、魔術でお湯をつくって入れただけだ。

風呂一杯になるほどの水を用意するのは大変だし、水不足でこの前まで悩んでいたのだから、本物の水を沸かすことは断念した。

代わりに魔術で魔粒子をお湯にすることにしたのだ。自分の身体に取り込むわけではないのだから、魔粒子でできたお湯でも何ら問題はない。

風呂にはいつの間、魔術を発動し続けなければならぬが、セルヴィヤパステルがやってくれている。黒乃は悪いと思ったのだが、この世界に来てから一回もできなかったお風呂を目の前にして耐えることはできなかつたし、パステルやセルヴィヤは、見られても気にしていない黒乃の裸を見ることができるので喜んでやっている。ウインウインの関係というやつだ。

ちなみに、自動で魔粒子を取り込み魔術を発動する魔法陣は未だに出力不足のままである。

この後着替えた後に夕食を取る。黒乃は夕飯と風呂だと夕飯を後にするタイプなのだ。

この日はパステルとセルヴィとトゥールと共に、黒乃の私室近くの部屋でとる。他の侍女たちは食事を運んでくるか、後ろに立っている。さつそく今日から仕えてきた狐人族の娘の姿が見える。3尾の金髪少女だ。

夕飯が一番豪華で、だが贅沢はしないために家庭料理とも呼べるものが並んでいる。

たわいない会話をする4人。黒乃は自分の可愛い従者たちとの食事を純粹に楽しんでいるが、3人は常に周りをうかがっている。

ヒットマンに警戒しているわけではなく、黒乃を寵愛的な意味で狙っている『敵』を黒乃をエサにして炙り出しているのだ。

特に黒乃が視線をやった『新入りの狐娘』には3人も、はたまた他の侍女たちも要注意人物としてチェックをいれた。

目を付けられた哀れな新人は全くもって気づいていない、しかしこれからこの屋敷のルールを身体をもって覚えていくのだろう。

夕飯が下げられた後は私室に戻る。

私室とひとくくりに行っても、寝室と軽食ができるテーブル、そして仕事や研究、勉強をするための簡易執務室がある。

最初に兎人族と狐人族からの要望をまとめる。明日の朝にくる、宰相のような立場にたってくれている、エルフ族代表の男トミーに見せて黒乃と検討するのだ。

それが終わっても時間はまだ8時半、これから夜の12時までには黒乃が自由にできる時間だ

早速、開発途中の、魔術によるオートメーション化の研究にのりだす。恩寵技能は確かにすごいが、応用性という意味で魔術に一步も二歩も劣るので、魔術の研究には精を出すようにしている。

効率よく魔粒子を魔力に変換する魔法陣については、パステルがずっと研究していた立体魔法陣ならうまくいけそうだと見ている。効率化と、同時に魔道具に負担を少なく、且つ修復するように魔法陣を組むのは骨が折れる。あまりいろいろと組み込もうとすると魔法陣が巨大になってしまう。ここらへんは初期のコンピュータが巨大だったのと似ている。昔のアメリカのように、プログラムが動けばごちゃごちゃしていてもいいだろう、という考え方では、処理力の低い段階では話にならないのだ。

そして残った2時間、黒乃は本気の研究をする。

他の研究がお遊びというわけではないが、真剣度が違う。いつもだらしなくゆるんでいる表情がこのときになって今日一番の凛々しさを見せる。

何の研究かというと、天使（仮）に残された最後の、三つ目の呪いの解呪である。

呪いの一つ目が身長が縮むこと、二つ目が高階以下のアクティブな恩寵が使えなくなることで、三つ目はずっと謎のままだったのだ。

黒乃自身の根源を覗いたときに見える、三つ目の呪いに込められた

怨念の強さから、相当きついものかと思っていたのだが、ある意味その通りだった。

この呪いの解呪にはパステルどころか、屋敷に詰めている従者ですら血眼になって研究を手伝ってくれている。彼女たちにとっても碎かれたと感じていた女の尊厳を取り戻し、そして解呪の後に誰が一番最初になるかのレースなのだ。

最後の呪いが判明したのは、一週間前、パステルとセルヴィの警戒網を奇跡的に潜り抜けて、黒乃の部屋までたどり着いた兎人族の少女が夜這いをかけたときだった。

彼女は初期から侍女として働き、何度も黒乃にモーションをかけていながら、一度も部屋に呼ばれず、また三人の従者以外一人も呼ばれていないのに焦れたのだ。

彼女は黒乃の布団に潜り込んで、驚いている黒乃に甘く囁き、女性に対してあまり免疫がない黒乃を少しその気にさせたまではよかったのだが、黒乃の精神が反応しても、身体はピクリとも反応しなかったのだ。訝しく思い、あの手この手を尽くしても何も変わらなかった。

この時黒乃はようやく現実を認めた。

はるか前から、この世界に降りてきた時から、薄々感づいてはいたのだ。自分の身体の違和感に。なぜ生理現象すら起きないのか、パステルやレンさんにドキドキしても身体は正常でいられたのか。元々上位世界でも禁欲を主としてきた黒乃にとって、ある意味身体が反応しないのは歓迎することであつたし、自分が精神的に成長したのだと思つて、異常を忘れようと努めてきた。

……しかし限界だと黒乃は悟る。最後の、あのくそつたれな、似非天使が残してくれやがったのは、確かにこれは天使からすれば最悪の呪いだらう、

性的不能だつたのだ。

26話 久しぶりの王都と解呪と(前書き)

11/10/22 誤字訂正

## 26話 久しぶりの王都と解呪と

今はレスト 翼休む刻 を建国して三か月が経ち、12月の暮れだとなった。

馬車の外に見える景色には雪が積もり、また今も継続して積もり続けていて、4日後から始まる年始祭りでも、雪が残って白い化粧された家と王城が見れるかもしれない。

今、黒乃たち一行はエウルーペ王国の王都スイザードの城門にいる。

この時期は年始の祭りに集まるため、人が増えるから検問も大変だろうに、「よく頑張っているなあ」と一人語散る黒乃に対して、「だったら検問なんて受けずに城壁を飛び越えればいいじゃない。」と少し険のある口調で口を挟むは、4人乗りの馬車で黒乃の隣に座る黒髪紅瞳の少女トゥールだ。

トゥールは屋敷で生まれて初めての年越えを、せっかく黒乃たち家族みんなと迎えられると楽しみにしていたので、少しお冠のようだ。

「こつちの年始祭りだってすごいから、そんなに拗ねないでくれよ。」

既にトゥールは黒乃から目を離しツーンと馬車の外に顔を向けている。まだしばらくは許してくれなさそうだと苦笑する黒乃。

パステルやセルヴィには頭を撫でればすぐに解決するのだが、トゥールにはそれが効かず、顔を赤くして逆に怒ってくるので対応に困っているのだ。

……もちろん、トゥールは恥ずかしくて跳ね返っているだけであるが。

さて。

何故12月の終わりに黒乃たちが王都にまで来ているかと言うと、

亜人保護の援助をしてくれたオリヴァー・ハーヴェイとの約束

珍しい恩寵を見せる　　を守るためだ。

よって黒乃一行にはほかに5人　途中までは商人見習いが4人いたのだが、途中の街で商品を売るためにおろしてきた　が同伴している。全員が珍しい恩寵持ちだ。【竜殺し】や【母なる海の恵み】という高階スキルを持つ者が二人もいて、残りの三人も滅多にお目にかからない恩寵を持っている。

やはり人族にはなかなか宿らない恩寵技能であっても、亜人があつさり持っていることはあり得る。逆に人族にくらいしかつかない恩寵もあるのだが。

この五人は黒乃が、王の目にかなう恩寵を持つ者をリストアップした中で、王都まで来てくれることを承諾してくれた者たちだ。

なんせレストには、初めて王都に行くものもいるし、王都の悪い噂ばかりを聞いて完全に委縮するものすらいる。一応、狐人族に学んだ幻術の魔法陣を、上位世界の万年筆で精緻に刻んだピアスをつけて、亜人の特徴を隠してはいるが。

これから何度か通って王都への道のりや、王城での扱いが明らかになれば来てくれる者も増えるだろうが、一番最初になるというのは勇気がいるものなのだ。

これから一行は城下町で過ごし、王城にいるカルロスさん 冒険者ギルドのクラン『境の風』のメンバーだが、最近王都での仕事が多いらしい に連絡をとって王に謁見できる日を調節してもらおう予定だ。おそらく年始の前に謁見がかなうとの話だったので、その後は年始を王都で過ごし、シークリッド大陸でもっとも栄えてると豪語する王都での祭りを見してみるつもりだ。

「もう、こんなところ来なければよかった。」

そう黒乃に聞こえるように独り言をいうトゥール。彼女はブリトニア島生まれなので王都は初めてだ。つまりところ不安でそわそわしていて黒乃に構ってほしいのだろう。先ほどから手に持っている紅茶のカップも所在なさげに指の間で揺れている。

「王都の中に入ったら珍しいものがたくさんあって楽しいと思うよ？」

「別に薄汚いプライドで汚れた王都になんて興味ない。」  
彼女は人一倍王国を嫌っている。強くあろうとあるばかりに正義感も肥大してしまっている節がある。王国でひどい目にあわされたという村の人の話を聞いて、そのまま受け取って憤ってしまいうくらい純粹な子なのだ。

天然　あくまでも黒乃視点で　で何事にも動じないセルヴィヤ、そもそも黒乃以外にまったく興味がないパステルと比べて危ういかもしれないな、と娘のようなトゥールを案じる黒乃であった。

そして、そんなに嫌う王都になぜ来たんだという話だが、それは最近のレストの屋敷での生活が原因だ。

最初はセルヴィヤやパステル、他の侍女たちも黒乃について着たがったが、トゥールが無理やり却下して自分ひとりをお付としたのだった。

周りに迷惑をかけることや強引なことを嫌うトゥールが、そんなことをした理由はただ一つ、あまりにも屋敷での生活が目には余ると感じただからだ。

……ピンク色なのである。屋敷のどこもかしこも、霽困氣的に。

屋敷の中の雰囲気が変わることとなったのは、二週間ほど前の夜だ。トウルルにはその情報が周ってくるのは遅く、既に多くの侍女達が黒乃の私室に行ったり、または外の居住区に祝いの準備だと知らせに行っていた。

そう、黒乃の不能の呪いが解呪できたとの知らせだった。

たった2カ月で解呪できたと侮るなかれ。その期間には多くの血と汗と涙が流れ、多くのツワモノどもが夢と散った戦場があったのだ。……血眼になった魔術師数十人が力を合わせたのだから、その作業量は舐めてはいけない。

こうしてレスト建国三か月で、すでに天使や生き神の称号      こん

な仰々しい称号を得たのは、【恩寵刻印】【根源管理】の凄まじさもあるが、【豊穰の女神の加護】の効果がすぎて国民が熱狂したのも大きな理由だろう。今までの収穫の2倍になったのだから。

を手にしてしまっている黒乃の寵愛を受けようと、虎視眈々と狙っていた侍女達が一気に私室におしかけていったのだった。今はパステルとセルヴィと、最近黒乃が気に入っていた狐人族のわっちっ娘少女クスノハが黒乃の私室の前の廊下を守っているが、お互いに抜け駆けをしようと牽制しあい、足を引っ張り合っているので、突破されるのも時間の問題といえた。

黒乃はというと、集まってくる少女たちにやっと事態を把握し、どうすればいいのかと頭を抱えるのみである。優柔不断な現代ジャパニーズのスペックは、性関連には弱いのだ。20歳まで未だに女を知らぬ身とあっては納得もいくだらう。

そうして数分後、決壊した。

原因は茶髪人族少女ステラ　黒乃へのアプローチは未だに積極的で、侍女たちに一目置かれる存在だった　が、「全員で同時に情けをかけてもらえばいいじゃない。」などと、黒乃が耳にしたら真っ青な発言をしたからだだった。

その発言を聞いて妨害しあっていた侍女達も一気にドアに詰め寄り、セルヴィとクスノハも「自分が後回しになるよりはそれでもいいか」と諦め、（パステルからすると）裏切って防衛を解いてしまったために、「ご主人様の最初は私がお相手を　」と最後まで頑なにファーストとなるのを拘っていたパステルは、哀れ人の波に押され呑み込まれて端のほうに追いやられてしまったのだった。人の波にぼろくそにされながらも身体が無事だったのはその人形ボディのおかげ

げだろう。

そして部屋の隅で隠れる黒乃は即座に発見され、無駄に広い寝室に運ばれた。その寝室には建てた人たちのおせつかいや陰謀で、いくつかベッドがあったのもこの場合は不幸　侍女総勢25人が収納できてしまった　にしかならなかった。そのための複数の巨大なベッドだったともいえるのだが。

最初は人体の限界を述べる黒乃。その姿は追い詰められた小動物のようであり、嗜虐趣味のないものでもゴクリと喉を鳴らしてしまう。黒乃は身長160センチで童顔であり、同じ年くらいの男子が好き  
な少女的にも、年下のシヨタ風味の少年が好きな女性的にも、幅広く受け入れられてしまう存在だったのだ。特にレスト　虐げられた者が集う国　には、男らしいが乱暴で粗野なタイプの男が好きな娘は少なく、清潔できれいな騎士を望む少女が多いのも大きい。

そうしてどうにか人間ではこの人数では無理というのを盾に、せめて人数を絞ろうとする黒乃。その言葉に侍女たちはお互いをみて牽制しだす。これはもしかして内部分裂の間に逃げれるのでは？　パステルと共に逃げれば大丈夫ではないか、パステルなら無理に自分のいやがることをしないだろうし、と淡い希望を持ち始める黒乃。

しかして希望を打ち砕くは自分と最も血でつながっている者だった。

「……創造主は高階恩寵【絶倫】を以前手に入れていたはず。なので体力が続く限り問題はないかと思われます。」

この言葉に色めいた侍女の突撃を交わすすべは黒乃にはなかった。せめて「いや体力もないから！ おいやめっ、ちよっ、いつのまに服脱がされたんだっ!?」などと、肉食獣に仕留められる直前の可愛そうな獲物のように泣き叫び悲鳴をあげるのが精いっぱいだった。

トウールが黒乃の私室の前までやってきたのは噂を聞きつけた一時間後、屋敷の一部屋以外からとつくに侍女が消え去り、屋敷の外では宴を始める住人が出はじめた頃だった。

この一時間、

「いや私は興味ないし」「でも祝いにいくくらいなら」「いや勘違いされたらやだし」「でも他の皆にとられたら……」「って何を言ってるんだ私は。落ち着け」

などとぐだぐだ悩んでいたのもであった。トウールは慌てっていると魔術を無意識に暴発させることがあり、実際に今もトウールがいた廊下はポロポロになっている。核属性魔術の基本、純粋なエネルギーが周りを軋ませていた。

よし、と意を決して寝室に向かうトゥール。

先ほどまでは意識的にシャットアウトしていた嬌声や艶のある声が、奔流となって迫ってくる。

……一体どれだけ相手にしているのだろうか、彼女は想像もできなかった。

姉であるセルヴィによって、『従者の心得』という本の「ご寵愛を受けるためには！ どうすれば喜んでいただけるか」という、どうにも間違っている感のあるページを読まされて、どんな行為が男女間に存在するのか、文章の知識としては知っていたトゥールだったが、寝室の扉を開けて目に入ってきた光景には悪い意味でクラツときた。

まずは熱気。冬に入ったたということでしたっかりと閉じられた窓

ガラスなど滅多にないので板をあてがっている　のせいで循環せず、発せられたままに部屋に溜めこまれる熱気が彼女に変な匂いと共に迫る。その匂いは臭いと感じる類であるにも関わらず、なぜか不快に思わずもっと嗅いでいたいと思ってしまう　セルヴィがそのように身体を改造しているからなのだが、トゥールは知る由もない　、身体は心から熱くなってきた。外の熱気による暑さではない、身体の内側からくる暑さだ。

ふらりと身体が揺れたトゥールを誰かが気づいて支え、すぐ近くにあるベッドに寝かせてくれた。

感謝の言葉を言う間もなく、水を口に「んんっ!?!」……水っぱいと思っただけの変な味　とてつもなく甘く、喉にひっかかる　の液体を飲まされる。

「ケホッ、ケホッ。」

咽ていると数人の肌色の影が見える。スルスルりと、彼女のセル

ヴィと同じ特注の侍女服が自分の肌から離れていくのを感じる。

ぼーっとした頭のトゥールには抵抗しようという気も起きず、周りで湧き上がる嬌声と、少し疲れたような開き直ったような、いつもよく聞いているはずの声を聞き流した。声色がいつもと違うのでうまく認識できないというのもあったが。

いつのまにか身体がとても軽いのに気づく。それに先ほどよりもだいぶ涼しくなった、開放的な気すらして気持ちがいいとすら思うトゥール。

トゥールのきらめく陶磁のような肌は、身体が16歳ほどの少女といえる肉体であっても大人の色気をだし、周りにいた娘たちを唸らせる。その柔肌を自分のものにしてもいいのか、肌を舐め、軽く抓り、強めに吸い付く少女が現れ、他の近くにいた少女も加わっていく。トゥールは朦朧とした頭で、彼女が味わったことのない母親の胎内にいる時の安心感、原初の安心と呼べるような不思議な心地よさに浸っていた。なんだか視界に肌色の女性がいて、何人かが身体に触れているようだが、今のトゥールには大した問題とは思えない。

そうこうするうちに昂ぶりが一気に強まってくるのを感じる。身体の芯から、心臓へ、そしてとうとう下腹部へ、熱さの塊がやってきたかのように感じられ、収まらない切なさに狂う。

そしてそのまま意識を失った。

トウールが目覚めたのは次の日の朝だった。  
自分が見慣れない天井の下にいることに気づく。ベッドもいつも使  
っているものよりふかふかで上等だ。

やけに暑く、喉が渴いた気がして水を飲もうと、水差しに手を伸ば  
す。しかし手は宙を掻き、やっとここが自分の部屋でないことに気  
づく。

「姉さん……ここ、どこ……？」  
少し不安になって、いたずら好きだが優しい姉を呼ぼうとするトウ  
ール。しかしその声に答えたのは

「お嬢ちゃん、起きたんだ。一番だよ。」  
そういうのは今この部屋に入ってきたばかりの、30代くらいに見  
える兎人族 レストに初期からいた の女性だった。さっぱり  
としたイメージが好感を抱かせる。

「他の娘たちは昼すぎまでは起きないだろう。全く派手にやっちゃ  
ってまあ。若いっていいねえ。」  
そう感心とも呆れともとれる声を出す女性。トウールにはまったく  
状況が把握できなかつた。いや、状況を把握しないようにしていた  
というべきか。うぶな少女にはあまりにも非現実的すぎて……。

「洗濯物が多そうだからさ、今のうちに回収できるものは先に洗っちゃまうわね。お嬢ちゃんも昨夜は疲れただろうから、まだゆっくりしときなさいな。屋敷の外でも、昨夜の宴会で酔いつぶれたやつらが転がっていることだしね。」

「宴会……?」

そういえば、と昨日のことを思い出すトウール。  
創造主の呪いが解呪されて、それは不能の呪いで侍女達が押しかけて……そして自分の身体が一糸まとわぬ姿であることに気づく。  
と同時に視界の端や正面にある肌色をしたかたまりの連なりがなんであるか理解した。

そして情報の量と非現実さと自分がどうなったかとのことを考えて、しかしあえなくパンク。

「きゃあああああああああああああああああ！」

もう一度意識を手放すのだった。

こうして初心で純粋な少女にはトラウマが残り、自分が汚されていないと知った後でもあの日のことを思い出すことを身体は拒否するのだった。

媚薬を飲まされ、感じやすいようなボディになっているとはいっても、潔癖症な彼女にとっては許されざることなのだ、自分が気をやっってしまったなど。

あの日の昼からも、少し落ち着いたとはいっても、あまりにも手が出されず、女としての尊厳が傷つけられ、また禁欲生活となっていた彼女たちは、屋敷内のそこかしこで黒乃にアプローチをかけるようになってしまったのだ。兎人族の少女たちは、発情期が近づいてきていることもあって抑えが効かなかった。

黒乃にとっては屋敷外へ視察に周るとき　しかしいろんな人にか  
らかわれる　と、私室にパステルと居る時だけが安全となった。

ちなみに部屋のすみに追いやられ、しかも呪縛する魔術を数人から受けて動けなくなったパステルは、黒乃の初めてをセルヴィがとる瞬間には修羅のような恐ろしくおぞましい表情をしていたが、次第に冷静になり、余裕すらもつようになっていった。

黒乃の上で勝ち誇っていたセルヴィも、時間が経つにつれて悲壮さがなくなるパステルに訝しんだが、諦めたかおかしくなったかのどちらかかな、と思考を放棄し、愛しき創造主の愛を受け止めることに専念した。

他の侍女達も抵抗がまったくなくなったパステルに疑問をもっていったのだが、黒乃と交じり合ったものから忘れていった。【絶倫】は高階恩寵だけあって効果も半端ないのである。【媚薬生成】もいつものまにか身体が勝手に含ませていたために陥落するものが続出、朝方とうとう黒乃の体力に限界が来た。何度も治癒魔術で無理やり回復させられた。ときには部屋に死屍累々と表現できるほどの数の少女たちが転がっていた。

そしてここでとうとう動き出したのはパステルである。

彼女は侍女たちの前でクールな仮面をかなぐり捨て、憎きライバルで天敵のセルヴィの勝ち誇った顔にも耐えてきたのは、この時のためである。

最初は悲壮さに死にたくなかったものだが、必ずこの瞬間が訪れると予期して待っていた甲斐があった。

カリスマブレイクしてしまっても完璧従者の名はまだ捨てていない、転んでもただでは起きぬのだ。

彼女は黒乃の側に行き、優しく抱きしめながら一言二言囁き、違う部屋に連れて行く。黒乃は体力が尽きてほとんど意識もない。空き部屋のベッドに寝かせて、新しい寝具に着替えさせる。そして黒乃が寝るのを慈愛の笑顔で見ている。

そう、彼女がやったのは「つらくて落ち込んで追い込まれているときに、優しく接して自分に依存させてしまおう作戦」だ。

単純がゆえに効果が高いといえよう。昼過ぎに起きた黒乃　疲れすぎて少し精神が一時的に後退している　をあやし、なだめ、ぐちを聞き、自分は害を及ぼさない存在と心に刻みつけた。

そうして空が暗くなってきた頃には黒乃はコロっと陥落して、パステルが待ち望む行為に及んでいた。

こうやってパステルは他の侍女やセルヴィが成し遂げていない、心がこもり、かつ二人きりで、という状態でやり遂げたのだった。

次の日にセルヴィ達が黒乃とパステルの仲睦まじさが一気にあがっていることに気づいても後の祭り。黒乃はパステルを明らかに頼っている。このままでは夜もずっと独占されるのではないかと、焦燥に駆られる彼女たちは性的でない女の武器を用いることにした。

「女の涙は卑怯だよ」作戦である。

これを5日ほど侍女全員で続けることにより　最も、演技でなくて本気で泣いている娘ばかりだったが　、パステルの独り占めは

終わった。

しかしパステルの比重が高く、屋敷内のあちこちでいちゃいちゃと見せつけてくれている。セルヴィや侍女側はなんとか四分くらいまで持ち直した程度だ。

最初を奪ったのはセルヴィなので、セルヴィとパステルの個人戦だと未だに五部というところか。

こうして黒乃はパステルと昼から甘えあい、侍女たちも黒乃に甘えるという桃色空間が形成されている。適度に甘えることによって蠱惑的な空間を作るのを抑制しているのだからまだましと言えるのかもしれないが、唯一手を出されなかったトゥールの心情はとても複雑だ。

自分だけというのは女としての沽券に係わるし、しかし自分から誘うのは黒乃のことが好きみたいでいやだ、というわけである。実に少女らしい悩みだ。

この鬱屈した想いは、黒乃が王都にいくとなったときに爆発した。パステルやセルヴィや侍女たちはいつも黒乃と仲良くやっているんだから、たまにはいいだろうと。直接的に言っではないがニュアンスは大差なかった。

初めて見る激しい剣幕に、姉であるセルヴィですらたじたじとなり、結果的に黒乃の王都行き身の回りの世話をするお供はトゥールだけになったのであった。



## 26話 久しぶりの王都と解呪と（後書き）

知り合いに構成が良くないと言われました。

プロローグにあった魔王化後の話、42話以降の話のある程度進めてから過去編を回想でやったほうがマシだとか。

今更書き直せるわけでもないのですけどね……

## 27話 謁見と年始祭りとの再会と

エウルーペ王国王都スイザードの王城、謁見の間、その王座に君臨するは、オリヴァー・ハーヴェイ王。老いた身であつても王としての最低限の威厳を持ち合わせた好々爺然とした男だ。

対して跪くは黒髪を梳いて垂らした中世的な美少年。王国では見かけることのない吸い込まれそうな黒い瞳を持っているこの少年はクロノ・テアナクといい、人の数億倍以上というとんでもない根源をもっていて、オリヴァー王の取り巻きの話だと、数十年に一度異世界から堕ちてくる『勇者』だと言われていた。

勇者とは、曰く、魔王や魔獣、外敵を屠り人族を栄光に導く者。曰く、莫大な根源量と貴重で強力な恩寵技能を持つ者。曰く、恩寵吸収率が100%に近く、恩寵とステータスを吸い無限に成長していく者。

そして勇者は例外なく黒い瞳をしていたという。

実際に20年ほど前にも、莫大な根源量を持つ者が現れたという。それがこのクロノという少年なのかは不明だが、少なくとも最大限に注意しなければと、取り巻きたちは注意している。

クロノが亜人保護という、この国の常識では信じられないことを許されたのは、天使だと豪語し、その根拠量を見せつけたというものもあるが、勇者としてこの国に反逆されることを恐れたというのが一番の理由だったのだ。

オリヴァー王自身は昨今の恩寵回収という名の奴隷狩り・亜人狩りには頭を痛めていて、黒乃の保護により多数の貴重な恩寵が発見されれば、どれだけの確率で恩寵が吸収されずに消滅してしまうかの論文と共に、王権争いに恩寵を集めるといふ風潮をやめたいと思っている。

そのために良識的な研究者を集めたり、根回しをしているところだ。簡単に変えられるとは思っていないが、恩寵が失われていくという意見を王自らが発すれば、両王朝の『神から与えられた恩寵を最も愛されている人族が回収する』という理論を少しでも陰らせることができるだろう。

貴重な恩寵を集めるためだけに、殺させず壊させないように恩寵持ち人材を集めた　つまり民衆救済の意は元々なかった　のに、時たま「恩寵などというものがなければ」などと考えてしまうようになったことを王は自嘲した。矛盾しているようだ、と。

黒乃は王がそこまでの考えに至ったとは思っていない。恩寵狂い

で変人で、民にも国にも興味の無い、王になるべきでなかった人との認識だ。今の王朝の中では一番ましだとは思っているが。

王も黒乃を頼ろうとはあまり思っていない。勇者の力を使って暴れられたら困るので好きにやらせているという部分が大きい。

お互いへの信頼の無さが、後に大きな悲劇を巻き起こすことになるのだとも知らずに。

「以上がこの度保護した亜人から発見されました恩寵技能です。こちらが、連れてきてはいませんが発見された貴重な恩寵の目録です。」

「そうか、ご苦労だったな。褒美を与える。我は引き続き良い結果を待っているぞ。」

王の近くにいた家臣が金貨が入っているであろう皮袋をもってくる。重量から考えて金貨200枚ほどだろうか。

「はっ。お忙しい中謁見の許可を与えて頂き、誠にありがとうございます。」

いました。」

「うむ。ところで、貴殿の地では鉱物にも珍しい恩寵が宿りやすいのか？」

「それもありますが、大半が冒険者稼業で溜めていた物でございます。あまり貴重であったり珍しい恩寵の物は輸出できていないと思うのですが。」

「そうか、そうだったな。では下がってよいぞ。」

こうしてお互いに思うところがあり、少しの探り合いをした謁見は終了した。最後に探られたのは恩寵調金されたものについてだ。

「うわぁー。」

……つい感嘆の言葉が漏れているのにトウルは気づいているのだろうか。

気づいたらきつとすぐに照れ隠しをするのだろうか、たまに手が飛んでくることもあるので黒乃も指摘するのをやめた。

新年になり、王都の東西に走る大通り『王の道』では、いつもよりも遥かに人で賑わっていて、王都中の人間を全て集めたとして今道路を歩いている人々の数よりは少ないだろう。

街の家の屋根屋根には白い雪が薄く積もり、年始祭を彩る赤、青、黄の原色のランプを優しく照り返している。

そのあり方を見て、黒乃はブリトニア島で年始祭を取り仕切ってくれているパステルの長い髪を思い出す。彼女の純白の髪は透過度の高さゆえに背景や周りの色を映し、優しい白の混ざった「パステルカラー」に変えてしまうのだ。

最近の生活でパステルに依存気味になっている黒乃は、この年始祭が終われば彼女と共に、極東に旅行に行くのだからと気をとりなした。

レストは建国三か月で未だにゴタゴタしているが、それでも黒乃が一か月ほどいなくらいは大丈夫だ。まだ規模が小さいからこそ余裕なのだが、今のうちということで極東の島国、ジャポンに行く予定となっている。

「トウル、これを夕ごはんにしよう。」

黒乃はきよるきよると見渡しているトウルに声をかける。黒乃が買ったのは、祭りということで少し豪勢にトッピングされたタコスのようなものだ。元々小食の黒乃に、そもそもエネルギー補給は黒乃の血で賄えるトウルだ、食事は軽食程度でも十分である。

トウルは声をかけられ、はっとして一転ぶすつとした顔に戻り受け取る。王都に来る前は帰りたいと連呼していたトウルだが、珍しいものと、熱気ある年始祭は気に入ったようだ。姉のセルヴィと違って落ち着きが足りない。

その後、『王の道』をしばらく歩きまわりながら買い食いをしていくと、

「よっ少年！ 元気だった？」

16歳ほどに見える少女がいた。

「誰？」

いきなり現れた少女に警戒の色を見せるトウール。

「えっと、おひさしぶりですね。グローリア、さんだっけ？」

黒乃が思い出すように名前を言った。

「そうそう！ ウクラインで、あの信じられないくらい業物のナイフを研いだグローリアさ。」

この少女グローリアは、ウクラインで黒乃と会った鍛冶師なのだが、若くせして王国や帝国の知識まで持っている不思議少女なのであった。鍛冶師の腕前もかなり高い。他の親方レベルだ。

「ほんとに久しぶりですね。グローリアさんはお変わりなく？ こちらは知り合いの妹のトウールです。」

余所行きの表情と口調を張り付けながら、トウールのことを隠す黒乃。そういえばトウールやセルヴィの正体を王国で言ったら、禁術使ったとして死刑にされそうだと今更ながらに戦々恐々する。

「ふうーん？ かわいい子ね。わたしはグローリア、よろしくね！」

「……トウールです。よろしく。」

「トウールは人見知りですが良い子なので気にしないでくださいね。ところで王都で会うとは思いませんでしたよ。やはりグローリアさんも年始祭に？」

トゥールの無愛想な態度にフォローを入れる黒乃。人見知りはいつか直してもらわなければと考える。

「そうそう、同郷の人たちと集まるうと思ってね。それと最近王都で出回っている、噂の『刻』印の武具を拝ませてもらおうと思っ  
た。」

黒乃は「ウクラインにまで話が伸びているのか」とげんなりしたようなうれしいうな、微妙な感情を抱く。

しかし黒乃が調金した武具や道具が有名にならないはずがないのだ。低階【電心】であってもそれほど出回らないはずが、安定して供給されるようになり、王国の東西に延びる大通りに幾つも中継地点が造られたほどだ。

そこらをわかつていない黒乃はやはりうかつなのだろう。最もお金を手っ取り早く稼ぐためには仕方ないことだとも言えるのだが。

「でいいよね？」

「う、うん。あ、いや、はい。」

「本当に聞いてたの？ まあいいけど。じゃあ今日の7時にあそこに見える宿に来てね。約束だよ、じゃ！」

……少しぼーっと突っ立っている間に彼女達の宿に御呼ばれする約束が締結されたようである。

「……ばか。」

トゥールのもつともな指摘は、白い息とともに空にとけていく。

黒乃も自分のうかつさに雪と共に溶けてしまいたかった。トゥールの目が冷たく突き刺さって怖かったのだ。

時刻は夜の6時50分ほど、といってもこの世界の住人は時計を持っていない。せいぜい鐘がなるのを聞くくらいだ。黒乃が時間を把握できるのは銀時計のキョウに時間を毎日調整してもらっているからである。

発言していないが、銀時計キョウはいつものように黒乃の胸内ポケットに収納されている。

キョウは滅多に喋らず、寝ているのではないかと思うくらいだ。彼女によると、若い者たちに余計な事を言うつもりはないとのこと。若い世代の会話についていけないだけじゃ……と黒乃が考えると胸

元で抗議してき、ひどいときはいつのまにか空の旅をジェットコースターのようにやらされてしまう。

そんな彼女だが、黒乃が不老不死化の研究をするときは珍しく強めに反対した。「生命は寿命があるからこそ」「輝きを失ってはならない」という、現代の高校の国語のディベートで言われるようなよく聞く意見から始まり、最後の方には「大和の民は〜」「帝国の兵士たちは最後まで命を燃やして〜」と、彼女の本音が思いつきりである意見が飛び出した。

彼女にとっての理想の男というのは、昔の潔く勇敢な義士なのだろう、生まれた時が明治時代なのだからそのような傾向になるのもむべなるかなとは思うが、黒乃には理解できなかった。

彼には生まれた国のために命をかけるという発想はない。それに彼にとっての所属している国は、今ではもう日本ではなく、『レスト

翼休む刻』なのだ。

不老不死自体が人類の決して叶わぬだろう夢であり、それに届きそうなのこの世界で挑戦したいという気持ち。

尊敬していた祖父が亡くなり、祖父のすごさだった多種の経験や交友関係すらも徐々に消えていくのを見ている黒乃にとって、死は悪であるという思い。

そして造ったレストを恒久的に発展させ安定させるために、との考えがあるので、黒乃は不老不死の研究を止めはしない。

結局ぐだぐだと悩んだ末に宿に入ることにした。トゥールには取っ替えている宿から蹴りだされた後だ。もちろん絶対零度と侮蔑の視線と

セツトで。

彼女は、黒乃が屋敷で爛れた生活をするのが嫌で、パステルやセルヴィ、侍女たちから引き離れたというのに、また女性がいるであろうところに、黒乃がお邪魔することに歓迎できるはずがなかった。特に今は冬の7時、真つ暗な夜だ。

黒乃もその予想をしていて悩んでいたのだ。この二週間で黒乃の、異世界に来てから抑制されていた男が解放され、未経験だった上位世界では無頓着で純粋なままでいられた頃とは違い、のこのこと夜に訪ねて、そんなことをするつもりじゃなかったと後で言っても許されないのだ。わかって行ったのだろう、と。

グローリアは美しい少女と言えども、彼と彼女はそこまで親交が深かったわけでもない。世間話をする程度だ。ので、彼女がそんなつもりではないだろうと思っではいるのだが……。

果たして宿に入ったら、宿の一番大きな部屋がとられていて、男女が20人ほどいた。誰も彼も若い少年少女たちばかりだ。フードを被っているものが半分ほどいる。男女両方いるから黒乃の悪い想像は外れたことをしり、人知れずためいきをつく。しかしグローリアが、見たことのないような真剣な表情をしていたので、黒乃も真面目な顔をする。大事な話だから一室を借りきったようだ、と。

「レストに私たちを入れてくれない？」

いきなり単刀直入に切り出すグローリア。黒乃にはなぜ彼女が自分が造ったことをしているのかが気になったが、一番重要なのはそこじゃないと思ひ直す。

「えっと……もちろん歓迎しますけど、人族で鍛冶師というまともな職についているのにどうしてです？」

そう、レストについて黒乃が建設したことを知っているなら、どんな者たちが集められているかも知っているはず。王国でまともに生活できている人なら絶対に忌避する環境である。「亜人と一緒などおぞましい」と。

その時、グローリアが目で数人に指示する。同時にローブで顔を隠していた者たちがローブを取っ払った。

「っー！」

エルフほどではないが、尖って長い耳、男は年齢の割にひげがおお  
い。

しかし黒乃が驚いたのは、一人の少年の顔が『崩れていた』からだ。

「私達は全員ドワーフだ。といってもみんな里からでてきたものたちで、私のように混血も多いけどね。ちなみに私はクォーターだから耳はほとんど尖ってないし、髪で隠せる。」

ドンツドンツ！

大通りの方から人が隊列を組んで行進する音と、何かを鳴らしている音が聞こえてくる。

カーテンを開けて見えるのは、真つ暗な夜だが、『王の道』はそうではない。夜の間ずっと光り続けるのだろう。黒乃が調金した『光源』や【光源】付きの明かりも無数の光の中にはあると思われる。

「あの音が聞こえるかい？ あれは聖女様の神輿さ。加護をくださる風の精霊だなんて王城は発表しているが、あの聖女様の正体はね

「シルフの子供が【隷属】の首輪を嵌められて無理やり従わさせられている。」

少し驚いたように黒乃を見るグローリア。先ほどまでの品調べするような視線は消えていた。

「へえ、知っていたのか。」

あれを見てほとんどの王国人は疑いもしないんだよ、『王国はやはり神に選ばれているのだな』と納得するのみだ。

そんな王国の歪みを端的に表しているあれが、私は、大っ嫌いだよ。

「そこで一度言葉を区切る。」

黒乃は思考する、この国での亜人の扱いを。かといって帝国や教国も亜人にやさしいわけではない。表向きの差別は少なくなるが、道具扱いから奴隷扱いに変わるだけだ、大差がない。彼がやりたいこと、やっていることは何のためだったか。

「昔はね、亜人たちも人族と上手く付き合えないかと、悪戦苦闘してきたらしいよ。亜人には血の気が多い連中が少ないというのもあってさ。しかし人族の欲望には限りがなく、今では亜人の数は減り、別の大陸でまで狩られている。もはや亜人たちに人族に対抗する術はなく、人族から逃げ続けるのみだ。

ただね、亜人たち本人ですら諦めた、亜人と人族の共存を、しかも王国の近くで実現しようとする黒乃には期待している亜人が多いんだよ。長年降り積もった恨みもあるが、このまま座しているといつか亜人が世界から消えてしまうのは目に見えているから、いまだに人族と仲良くしたいと考える亜人は多い。まあ傲慢なエルフたちは違っただろうけどさ。」

これを聞いた黒乃の双肩にかかる期待と責任は、小さな身体を潰してしまうほどのものになっているだろう。

エゴで始めた　不幸を、汚いものを視たくないと　理想の国づくりも最早黒乃のわがままで勝手する段階ではなくなっている。気づいていたが、大きな責任を今まで背負ったことのない黒乃は、無意識のうちに思考の外へおいやっていたのだろう。

グローリアがエルフのことを悪く言ってしまうのは、長年仲が悪いエルフとドワーフの対立があるので仕方ないともいえる。

「とまあ、いろいろと含むところがあるわけだ。それでもドワーフの種族柄の職業鍛冶師として人族が住む方に着ていたわけだが、お兄さんが建国したっていうし、何やら『刻』もレスト発って話だからね、興味が出たわけだ。  
これからよろしく。敬語はお互いなしでいこうね。」

わかった、と黒乃が返すころには外でのパレードは終わっていた。聖女は助けたくても今は手が出せない。【隷属】の首輪なんて馬鹿高い値段がするものを使っているし、世にも珍しいシルフの子供だ、次に手に入るのは100年単位の年月が経っているだろうから当然警備も固いだろう。

いまは新たに迎えたドワーフたちのことを考えることにしたのだった。

ドワーフは総じて鍛冶師の技能が高く、長命種なために経験の蓄積が大きい。俺が調金する武器もよりいいものになるだろう。

……余談だが、クォータードワーフのグローリアさん、実年齢は60歳越えてました。



## 28話 ジャパンと唐傘

冬の風は冷たい。地上にあっても身を切るような寒さを感じるのだから上空では尚更だ。

「キョウさん、暖房の機能って翼につけられないかな」

「クロノ、私は何でもできるわけじゃないんですよ？ どうしてもというなら苦手な火系統の魔術でも使ってみますけど。」

「火達磨になるオチが見えるから遠慮したいな。保温や断熱の恩龍技能ってないんだろうか。」

「今のところ発見されておりませんわ、ご主人様。最もこの世界はファンタジー、とてつもない恩龍が都合主義的に手に入っても何の問題ありません。」

ここでパステルが参加してくる。既に人間と質感や触感も体温ですら区別がつかない彼女のボディは、冷たい風をうけて頬や耳が赤くなっていた。

「恩龍技能は応用性に欠けているというのはわかっていたでしょうに。魔術に頼りましょう。それに私の中で、私を放ってお茶するのはやめなさい。」

「といつてもキヨウさんは既に飛行するために魔術で調整してくれているから使えないし、俺だと時間がもたないでしょう。パステルが用意してくれたのを無碍にするわけにはいきませんよ。」

「時間といえば、そろそろご到着の時間です。　こちらは蒸らし方を変えてみましたわ。」

「そうだったな。海ばかり続くので忘れていた。とうとう帰って（？）来たぞ……日本に。　ありがとう。」

「正確にはジャポンと名付けられた島国ですね。しかし上位世界の日本と類似する文化もあるために、ご主人様も大きく楽しめるかと。　ん、お口の周りにクツキーの粉が少しついてましたわ。」

「俺が上位世界に置いて来てしまった物はほしいなあ。浴衣や唐傘……。　気が利くな、パステル。」

「ご主人様はお爺さまの影響で和風かぶれでしたものね。人形は西洋に偏っていましたが。　いえ、当然ですわ、黒乃様。」

見渡すがきりの碧い海の先に島が見えてくる。島といつても視界に収まらない広さはあるのだが。

シークリッド大陸の東の果て、極東と呼ばれる地域の更に東の島国ジャポンの、鎖国中唯一の出入口であるデジーマへ向かって黒乃とパステルは飛んでいる。

道中は帝国や教国の上空を、見つからないように来たので暇なもの

である。

キヨウは【変型】【怪鳥の翼】により鳥のような姿をとり、その内部に黒乃とパステルを乗せている。戦闘機を鳥の姿にしていると考えればいいだろう。船体や翼に銀杏と桜と日章旗の模様があるのは「帝国大学」「日本」「大日本帝国」の象徴としてキヨウが譲らなかつたのだ。黒乃はシンプルなのがよかつたのだが、キヨウはどうやってか色まで変えていて目立つことこの上ない。

パステルは自分で飛ぶこともできるが黒乃と一緒に狭い室内（キヨウ内）に座って、黒乃のティータイムの給仕をしている。

キヨウが何やら文句を言っているがパステルにはどこ吹く風。彼女にセルヴィ以外の苦手な者は存在しないのだ。

「まったく人の内部でいちやいちゃと……最近の若者は……」「らんでぶー」とはもつとおしとやかに……」などと愚痴をこぼすキヨウはキヨウで、若い人に毒されてきているようだ。

言動にもハイカラ　キヨウ風にいうと　な単語が混ざってきている。らんでぶーって文明開化した頃の人間かよ！　と黒乃は突っ込んだが、キヨウはまさしくその世代であつた。人間だつた時代は一度もないが。

明治時代のキヨウでも黒乃と価値観や考え方も違つたのだから、戦国時代やもつと昔の武器などが付喪神化したらどのような性格になるのだろうか、と黒乃は考えてしまつたのだ。

デジーマはもう近い。

「Freeze! Hand up!」

上陸すると即座に囲まれた黒乃一行。遠くから見えていたようで、警戒されていたらしい。

「桃色空間を人の中で形成しているからこんな目に会ったんですよ、クロノ。」

「いやキヨウさん人ではないでしょ。気づいてたなら教えてくれてもよかったのに。」

「申し訳ありません……私もついすっかりしていました。」

キヨウは既に銀時計の姿に戻って黒乃の胸元だ。

英語で怪しいものではないと叫び、両手をあげながら状況を把握する黒乃。

ちよんまげを結った男たち 完全に日本人系の顔つきだ が英語でこちらに声をかけてくるのはなぜか、その理由はすぐに思い出した。

この世界を想像し創造した上位世界のやつがそのように作ったからだ。明らかに英語圏の文化な大陸では共通語として日本語が使われ、魔術の一部や武器の名前として用いられる英語は、極東語とされている。

今更ながらに馬鹿げた設定を思い出し、ミスマッチさに呆れる黒乃だった。

異世界で日本語が通じるのは漫画などでよく見たので許容できるが、なにが悲しくて日本人顔のちよんまげ着流し連中にネイティブな英語 留学する黒乃はとてつもなく苦労したのに で話しかけれなければならんだ、と。上位世界で英語に悩んでいる日本人たちはこの状況を涙して望むかもしれないが。

こうして黒乃たちは不審者として捕えられた。どうやら港に入るには特定の国から許可証がいるらしい。それを持たず、しかも空から直接壁を越えて入ってきた黒乃たちが疑われるのは当たり前だ。

黒乃とパステルに交戦や害意がないことはわかってくれたのか、拘束はされなかったが、監視の下に警備員の駐屯所のような木造の建物に連れて行かれる。

「Welcome！」

……なぜか歓迎された。

以下英語で意思疎通をすると

「いやー部下がはやとちってしまっただけで申し訳ありません。この前不審な生物がここを襲った影響で、どこもかしこもピリピリとしてしまっているんですよ。その生物を連れてきたのが怪しいローブを被った男でね、行方を追おうとしたのですが、空を飛ばれて逃げられてしまいました……。いつもはもっと賑やかなんですが。」

署長らしき人によると、どうやら廠戒態勢が敷かれているようだ。

「迷惑なやつだな……」とそのローブ男に思いを馳せる黒乃と、その後ろで剣呑な色を瞳にぎらつかせているパステル。ローブ男はパステルに見つかるのだけは絶対にだめだろう、自分が主の小動物然とした姿に夢中で主人に諫言　目立つから早めに着水して上陸し

ようと　　するのを忘れていたという汚点を、やつあたりぎみに灌ぐために八つ裂きにされるだろうから。

空を飛べる時点でかなりの魔術の使い手ということになるのだが、自身もパステルも飛べる黒乃は気にしていなかった。

この時にはその男が連れてきた生物については忘れていた。もし覚えていてもどうしようもなかっただろうが。

署長さんはお詫びということで案内役に着物美人を黒乃たちに紹介してくれた。

「Could you come this way, please?  
」

着物美人がnativeな英語を話すのはなんとという違和感だろうか。

着物美人で九州に値する島なんだから博多弁で話してえーや！と実は関西で生まれた黒乃の心の声が世界に響いたので、英語は関西弁 京都弁が混ざる似非で で表すことにする。

「あんさんたち、こっちへ来ておくれやす。このデジーマー一番の食処ですわあ。」

「あ、はい、わかりましたわ。」  
語尾の「わ」は女言葉ではなく関西弁である。後のは黒乃の発言だ。

果たして紹介された店は、広い平屋で、木造に瓦張りを見ると上位世界の日本を思い出してしんみりとしてしまう黒乃であった。

「いらっしやいませ。空いてる席へどうぞ。」

給仕の着物少女に案内されて木造のイスに座る。黒乃は文系科目、特に歴史には疎いために鎖国したいたころの日本の文化の細かいところは全く知らない。よって木造ばかりなのが普通なのかどうかも判断できなかった。

……そもそもこの世界は創造者の知識レベルに基づいてできている

ので、上位世界の歴史と比べて意味があるかどうかも疑問だが。

さて、メニューだが、英語で「スシ」や「マグロ丼」と書かれている。「Sushi」「Maguro Don」とそのままだが。これだけでも創造した者の知能がうかがい知れるというものだ。マグロは「tuna」だとひとりがちる黒乃。

結局黒乃とパステルはありきたりな魚定食を二人で頼んだ。

はしを上手く使ってパステルが魚をほぐしていき、それを黒乃が食べさせてもらう。「あーん」と言うまでもない自然な動作だ。キヨウは「このバカップルめ」と言いたそうな雰囲気を発している。パステルはあの酒池肉林に敗北した後に逆転を図り、結果として黒乃を絡め捕ったので、これくらいは二人の日常だった。

トウールはそれを見ていられなくてパステルから引つ剥がしたわけであるが、年始祭のあとのジャポン行は妨げることができなかつた。トウールとセルヴィはまだ上手く飛べないので時間がかかりすぎると創造主黒乃自ら断られてはどのようなもなかつた。

実はパステルと二人のホムンクルスの間には学習効率において隔絶とされている。理由としては稼働時間と、根源量の差、経験の差だ

元々人形であるパステルと違い、人の頭蓋骨の周りにパーツをつけた人造人間の二人では、元の人族という種の残滓で睡眠時間をとるうという意識があるために、徹夜もあまりできない。そして拒否反応を起こすパーツがあるので、無茶な改造もできない。

人族としての意識より、大けがを追うとパーツを変えてもしばらくは動けないし、ボディを丸ごと変えると慣れるまでかなり時間がかかり、その間も動けなくなってしまう。これは他の付喪神化したものと違い、人族の根源を用いて人族として造ったことになっているというのが原因だと思われる。

パステルの場合、元から人形なのでボディやパーツを変えることにも抵抗がなく、疑似内臓の位置も自由に変えることができる。刀が付喪神化した場合は、刀という物の概念に沿う改変以外はやりにくくなる。

結局、彼女たちはホムンクルスという新種としての意識を持たせて造ることができればよかったわけだが……目下どうにか根源をいじってできないか試行中である。しかし、少しでも変なところをいじると二度とセルヴィとトゥールの人格が戻ってこないということになりかねないので、遅々として進んでいない。

根源量の差はそのままだ。

経験の差とは、上位世界での経験が主である。パステルには20年間の上位世界での記憶　人格をもっていなかったために鮮明に覚えているわけではないが　があり、黒乃の考え方、概念がすぐ理解でき、教えられることも即吸収してさらに自分で発展することができる。

一方セルヴィとトゥールは、16歳の人格をもったまま真つ新たな状

態にして造られたとはいえ、この世界の人族がベースとなっており、思考回路を黒乃たちと一緒にできない。よって吸収にワンクッション置く必要があったりと、パステルには追いつけないのだ。

「おお！ この傘は！」

「あんさんお目が高いなあ。それはジャポンの古都キョートでも有名な傘職人、御剣由良子という女性職人が造ったものなんよ！」

……重くて誰もつかわへんのやけどな。なぜ売れっ子がこんな作っただかって言われてここまで流れてきおってん。」

「いいっ！ これはほしい！ いくらであつても買うよ！」

なぜこんなに黒乃が興奮しているかというと、三つも理由がある。

一つには、この唐傘が和風マニアだった黒乃のお目に適う美しい品だったこと。全体的に紫を基調としていて、桜の花びらをもした模様が桜吹雪のようだ。キョウの武器形態にも合うこと間違いない。

二つには、この唐傘が武器としてできていることに気づいたことだ。紙や竹でできた傘の裏には、細かくオリハルコンの糸で防御障壁を張る魔法陣が編み込まれており、紙や傘もその物質の平均根源量をはるかに超えていて丈夫そうだ。柄から傘の先まではミスリルが通

つていて、魔力を練るのを大きく補助してくれるだろう。魔力を圧縮して放つ『レーザー』の魔法陣も描きこまれている。

傘を開いたときには正面からの攻撃からは、傘の防御力と障壁で守り、傘の中央から魔術による砲撃を放つ。傘を閉じたときには殴打型の剣として役立つてくれるだろう。

ちなみに魔法陣 ジャポんだからか、大陸で見る物とは様式が大きく違う。は見えないところに描かれていて、黒乃がわかるのは【根源管理】のおかげである。

三つには、この唐傘に高階【重力魔術】が刻印されていたことだ。紙と竹でできている骨子がこの唐傘元来のものらしく、その莫大な根源に刻まれていた。

重力を操る魔術を黒乃は闇属性だと思っていたのだが、書物の中では無属性となっていて詳細は不明だったのだ。無属性魔術とは、文字通り属性がないものもあるが、重力魔術や結界魔術、治癒魔術のように特殊なものも多く分類されている。【結界魔術】や【治癒魔術】があるなら【重力魔術】もあるのでは？ と黒乃は思ったが正解だったようである。

ちなみに、二つ目三つ目からわかるように、この唐傘の骨子の部分は明らかに上位世界のものである。ただの紙と竹が持つにはは根原量が多すぎるのだ。おそらくキヨウのようにこの傘にも歴史があり、降りてきた時に、その何等かの由来や由縁から【重力魔術】が刻まれたのであろう。

そしてこの傘が降りてきた年代だが、相当昔の物なのかもしれない。現代的な技術がまったく見られないのだ。【不可壊】があるために降りてきてからも壊れずに存続し、いつのまにかジャポンにたどり着き、御剣由良子という女性が改造して売りに出したというのが真相と思われる。

業物だろうと言われていても、だれも扱えずに売れていなかったの  
で、安く売ってもらえた。

銘は根源によると『キヌガサ』。付喪神化できるほどの根源量を誇  
る唐傘。キヌガサが付喪神かしたら唐傘小僧みたいの一つ目と舌が  
生えてくるんだろうか、と予想してみた黒乃であった。

その後、男物と女物を数着ずつ、めずらしい鉄扇を買ったりと、お  
土産として和風な　この世界的には「極東風」　物品を買いあ  
さる。

旅行の最初にお土産を買うのは下策なのだが、黒乃はなつかしさに  
駆られ、パステルはそんな黒乃をとめることができず、キョウも  
キョウが生きていた時代よりも前の文化レベルの品々を見て、「こ  
れが江戸時代の日本の心！」なんてことを言ってみる。買い物を煽  
っていた。

夜は旅館にとまり、大陸と何から何まで違う文化を堪能しながら旅  
行の初夜は過ぎていった。



## 28話 ジャパンと唐傘（後書き）

書き溜め終わってる43話まで、のんびり投稿していいこうと思っていたのですが、方向転換して早めに出してしまふことになりました。

29話 妖怪(前書き)

今回短め。4500文字也

## 29話 妖怪

「うーらーめーしーや〜……」

ジャポンでデジーマに旅行にきて数日が経ち、他のところにも行ってみたくなったため、黒乃が留学のために培った似非ネイティブ英語で関所をどうにか突破して、古都キョートにやってきた。

そして今度は見つからないように飛び、キョートが見えた頃に森に降りた頃には夜に差し掛かっていた。

早めにキョートに入らなければ門が閉まってしまうと急ごうと動き出し、キョートにあと少しとなったときだった。

見かけたことのない鳥のような生物、そして唐傘お化けに塗り壁らしきものというカオスな組み合わせが目の前に現れて襲ってきたのは。

鳥は正確には襲ってこず、上空を旋回しているだけだが、唐傘お化けと塗り壁はさっきからこっちに向かってくる。

今の黒乃とパステルの能力だと瞬殺できるはずなのだが、黒乃が【体外魔力操作 氷華】と【魔力性質変換 氷】の組み合わせにより凍らせても、パステルが風を纏った体術で真つ二つにしても、時間が経つと再び無傷の姿に戻っているのだ。

あちらの攻撃は脅威ではない 何か酸のような唾液を吐いてきて

も唐傘『キヌガサ』を回転させて弾き飛ばせるし、別方向からの体当たりもキヨウが【守護霊】で霊体化して切り落とすし、そもそもパステルが近づけさせない　ので一度倒した後起き上がってくる前にキョートの方に逃げてしまってもいいのだが、なぜ復活するのかに興味湧いているので、何回も殺して観察をすることにした黒乃。

どうやら、壊されても一度バラバラになってから何も無い空間から現れるので、空中にある何等かの物質　最有力は魔粒子。……このジャポンでは魔粒子から変な感じを受ける　により身体が構成されているようだ。

ここで一つ、仮説に従って対応策を考える。

魔粒子がある限り復活するというのなら、恩寵技能【乱魔】とオートメーション魔法陣を研究していて思いついた魔術がある。その名も『無魔空間』。

機構はそう複雑なものではなく、相手の周りに、外向きの大規模な砲撃をする魔術の自動魔法陣を展開するだけだ。

この時に使う魔法陣は、実験中に失敗したときにできたもので、莫大な魔粒子を吸って魔力を練るくせに、一切その魔力を魔術に使えず、即座に魔粒子にもどしていくのである。黒乃がこれをやったときは実験室の魔粒子が根こそぎ奪われ、他に起動させていた自動魔法陣が全部ダメになって焦っていた。

つまりは相手魔術師の周りの魔粒子を根こそぎ魔力に変えてまた魔粒子に戻すことによって使えなくしてしまうのだ。この世界の魔粒

子は一度魔力として練られると、また魔粒子に戻った時には魔力として使えなくなるために有効な手段だ。

自動魔法陣を描くだけなら、魔力を細く細く練ってはるかに遠くまで伸ばしてできる。遠くに魔法陣を描いても、その発動に必要な魔力を届けられないために今まで注目されていなかったが、自動魔法陣なら術者が魔力を注ぐ必要がない。

もちろん欠点もある。まず第一に魔術師にその空間から動かれたら意味がない点。次に魔法陣の持続時間の問題。

後者は自動魔法陣でもずっと解決できていない弱点で、媒体に負担をかけすぎてしまうので魔法陣が発動できる時間が短いということ。特に空中に描くならその発動時間は10秒程度しかない。

この二つを鑑みて、設置型の罫として扱うのが関の山かと黒乃は結論づけた。

密室に魔法陣を刻むか、広い範囲を覆うように展開し、相手がそこに踏み入ってきたときに発動させて魔術自慢の魔術師が虚を突かれた時に倒す。

刻んだ後すぐに発動させないならば、魔法陣にスイッチ機構を仕込んで、細く練った魔力で回路を閉じたり、時限式にする必要があった。ひと手間がかかるが。

この魔術を弱体化させる研究は続けていこうと黒乃はパステルに指示を出している。

黒乃の国レスト 翼休む刻 は魔術の力で外敵から守っていて、おおいにその力を借りているが、この世界の歪みのかかりの原因は魔術の圧倒的な力にあると思っただけ、放っておくつもりもない。冒険者ギルドに入る腕自慢の戦士が努力してB、才能があつてAランクにやっとなれるのに、魔術を一年ほどしっかり練習すればすぐ

にAランクに届いてしまう。それほどの違い。【体外魔力行使】のやばさ。

この優位性は隠密性によるところが大きいので、矢などの遠距離攻撃が強くなれば、多少は魔術師に対応できるようになるだろう。しかし、それだと銃にまで行き着いてしまっただろうから、その後の兵器開発競争を黒乃は恐れて、魔術を限定的に無力化する方向で魔術の優位性を削ごうと思っている。

黒乃自身はアンチマテリアルライフルにはいくつか好きな物があるので、いつかモデルガンか、魔力式でなら作ってみようと思っている。また、キヨウが三八式歩兵銃を作ってほしいといってくるのでそれも聞くつもりだ。

それを聞いた時、黒乃は「ボケを直すために手に持って背負うのか？」などと少し失礼なことを思ったが、即座にキヨウが【体外魔力支配 雷神】で発動したゼロ距離雷でおしおきしたようである。

キヨウも人格をもって会話を交わせるようになったため、懐かしい物への郷愁の念が強くなったのだろう、黒乃も自分の趣味を兼ねてキヨウの願いはかなえていくつもりだ。

さて、唐傘お化けと塗り壁を視界に捉え、祖父の形見の万年筆を右手に持って数回振る。

その度に数瞬遅れてお化けと塗り壁の周りに、黒乃の闇の魔力で黒く染まった幾何学的な魔法陣がいくつも現れる。

「『無魔空間』！」

発語とともに細く練った魔力で自動魔法陣のスイッチを入れる。

即座に暗闇の中でなお黒く発色する魔力光が煌めき、魔法陣が動き出す。

魔法陣からは膨大な魔力を練り、そのまま発散していく。目には見えない魔粒子の密度がうすくなっていくのを感じる。密度が薄くなると周りから集まろうとするが、そのまま魔法陣の方へ吸われていく。

「キョウさん。」

「わかりました。【変型】【切断強化】【鬼蜘蛛系作成】【系繰り】多重発動。」

黒乃の言葉とともにキョウを取り出し左手にもつ。キョウは銀時計から変型していき、銀色に光る一振りの刀へと姿を変える。抜き身の刀は刀身も柄も全て銀で出てきている。

「形式美は大切だね。俺はあの死神漫画は立ち読みだったから詳しくないけど。」

「『千本桜』。」

黒乃が無魔空間にとらわれている二つの化け物に向けると、さらさらと、音もなく刀身が上から下まで順番に銀と桃色に光る桜の花びらに変わり、一度空に浮き上がってから一帯に降り注ぐ。異変を察して塗り壁が逃げようとするが、千の桜の花びらが無造作に落ちてくるのだ、避けられる場所などない。

塗り壁に数枚の花びらが触れ、その瞬間に触れた場所が細切れになっていく。唐傘お化けも既に桜に囲まれ、当たったところから消滅していった。

そして無魔空間内で消滅した妖怪は復活する様子がない。やはり魔粒子で構成されていたようだ。

この『千本桜』がキヨウに人格が芽生えて、その恩寵技能を見た時から黒乃が考えていた技である。

【変型】で刀の形になった後、【変型】で桜の花びらとなり、その花びらを【鬼蜘蛛糸生成】と【糸繰り】でつなぎ合わせて操る。そして【切断強化】で切断属性を上げ、触れた側から切断していく。桜の花びら全ての花びらが鬼蜘蛛の糸でつながれているわけではなく、【不可壊】でちぎれないキヨウ自身と繋がっている花びらもあり、その細い繋がりでも細切れにすることができる。

この技の欠点はその威力が高すぎるのと制御が難しすぎることで、そして弱点もある。

威力については、レストの実験場でいろんなものを細切れにしすぎ

たせいか、低階【切断強化】が中階【切断激化】になってしまったためだ。制御に失敗すればその瞬間に死だ。

制御はキヨウに黒乃が【思考強化】を刻んでブーストすることにした。それでも千枚　直接操るのは50枚ほど　の桜を操るのはかなりきついのだが。

一番の弱点は風と氷には割かし簡単に防がれてしまうことだ。大半は鬼蜘蛛糸で制御しているために風で気流を見だされると、花びらそれぞれは軽いために飛ばされてしまい、直接つながって制御している50枚しか実際に使えなくなる。

氷の場合は空間ごと凍らされると花びらも動けないので切断どころの話ではなくなってしまう。

だからまあ黒乃が制御に失敗しても【魔力性質変換　氷】を使えば死にはしない。

本来こんな雑魚に使うような技ではないのだが、相手が細切れになつてしまったために、素材が回収できないのでブリトニア島では生物をあまり切らなかつたのだ。しかし今回は殺しても消えるだけなので遠慮なく細切れにさせてもらったというわけである。

キヌガサの重力魔術も試してみたかったが、後まわしにした。

「ばんわー、嬢ちゃんたちめっちゃ強いねんなあ。陰陽師以外で妖怪を滅したん初めてみたわ。」

それに私の武神、けっこう丈夫な索敵型やってんけど、粉々になつて塵すらのごつとらんし。」

またつまらぬものを切ってしまった、などと黒乃が悪乗りして余韻に浸っていると、いつのまにやってきたのか、後ろに20代後半くらいの男が現れた。

「はじめまして。俺は黒乃・田中です。男ですよ。そちらはどちらで？」

相手は飄々としながらも黒乃たちを注意深く観察している。

「ああ、道理で男物の浴衣をきとったんですか。ぼくは安倍清明といますわ。よろしゅう。」

「へっ！？ 安倍清明！？」

「なんやあんさん知つとるんかい？ ぼくの名声も大陸にまで広まつとるとはなあ。」

いきなりの大物の名前に黒乃が驚き、つい聞き返してしまった。

相手 自称安倍清明 は勝手に勘違いしてくれているようだが。

そして安倍清明というのは上位世界日本では有名な陰陽師の名だが……この世界は日本人が作成したのだからいてもおかしくはないか……。実際にエウリーペ王国の歴史でもジャンヌダルクと呼ばれる聖女がいたと記述があった。

日本であるジャポン自体は鎖国しているし、東の首都を新都「オエド」というらしいから江戸時代をモチーフに作られているはずな

のに、キョートは陰陽師がいて平安時代が元になっているらしい。時系列がめちゃくちゃだ。

(それに……なぜ大陸と?)

「なぜ大陸とわかったんです?」

「あゝ当たってるんか。いやなに、ここまで強いのに聞いたことないし、なんとなくそう思っただけや。」

……鎌かけにひっかかったか、と相変わらずな自分の不注意さに顔をしかめる黒乃。

顔つきの違いはあるが、黒乃は日本人と同じ系列の顔つき。しかもこの世界は髪の色が黒は特に珍しくない。閻属性のものはそうなる可能性が高いの。だから、上位世界みたいに髪色で人種を見分けることはできない。

だからパステルの髪を見て大陸の人間だと気付いたのか、と考えた黒乃の思考は間違いであった。

「まあ、悪い人やないみたいやから、うちの家に招待しますわ。」

「そしてよろこぶ、龍脈の中心点、魑魅魍魎、そして陰陽師の本拠、キョート入。」

29話 妖怪（後書き）

作者は大阪弁のネイティブなはずなのですが、既に東京に来てだいぶ経つので怪しいところばかりです。

次は今日の朝にでも

30話 陰陽術(前書き)

作者は陰陽術鼻貞かもしれません。

### 30話 陰陽術

「ここがぼくの家ですわ。どうぞ、エンリョーせずにあがってくださいな。」

キョートの五目状に広がる通りを、安倍清明と名乗るうさんくさい男 身長は180ほどで痩せ型。髪は黒で瞳は茶色だ。 についでいくと、大きな、壁の端が見えないくらい大きな和風屋敷が見えた。黒乃の屋敷より広いだろう。よくこんな街の中に土地が用意できたものだ。

さすがは大陰陽師の家系の家。      なのだろう、この世界でも。

「ほらほら、入っちゃってくださいーはい。」

「あ、はい。おじゃまします。」  
少し茫然とする黒乃だが、促されて家に入る。ジャポンは靴を脱いで入る形式だ。

久々だな、などと思いつながら黒乃は靴を脱ぎ、そして屋敷に比例して広大な廊下の左右に数人の家政婦がいることに気づく。デジーマで泊まっていた旅館の女将よりも遥かに質のいい着物を着ていた。

「もう夜遅いですけど、少しお話いいですか？」

廊下を歩いて奥へ進むと、客人用だろうか、8畳くらいの整った部屋に通される。

畳に掛け軸に障子がある。懐かしさがこみ上げ、輸入してもらったとを決める黒乃だった。彼が無類のお茶好きにも関わらず紅茶しか飲まなかったのは、緑茶やほうじ茶、そして極めつけの抹茶はきちんと和風の環境で飲みたいというこだわりによるものだった。

「はい、こちらからもお尋ねしたいことがありますので。」

「さいですか。ではこちらから。あなたたちは魔術連合の方ですか？」

口調が強くなったわけでも声を荒げたわけでもない。しかし確実に言霊の量が多くなっていった。

「……………つ。違います、なんですかそれは？」

その真剣な口調と、伶俐に細められた瞳を見て、この男は表面から読み取れる通りの飄々とした男でないことに気づく。パステルも少しだけ豹変ぶりに驚いたようで、クールな仮面が剥がれかけている。つかえたが正直に答える。

「……そのようですね。すいません、威圧するような形になってしまつて。」

「いえ。俺たちはどこらどうみても怪しかったでしょうから。事情は存じませんが警戒するのは当たり前です。」  
安倍清明も険がとれて黒乃も少し落ち着く。

「……そういつてもらえると助かりますわ。最近はこの国がたつき始めるのを感じているんです。大陸の者に買収された魔術師たちが、東の方で首都を建てたのがそもそも始まりなんです、西にまでちょっかい出しに来ることもありましてね。」

無礼なことをした礼ということなのか、他国の人間である黒乃とパステルに事情を語る安倍清明。

彼によると、数年前に新都オエドーができ、エド幕府が開かれたが、その裏に大陸の魔術師の息がかかった者が暗躍していたらしい。最近は刺客を送つてくることもあり、キョートを頂点とする、西ジャポンを束ねる陰陽術協会とピリピリしている。そんなところに大陸産の魔術を使う強いやつが来たので警戒したとか。黒乃が誤ってばらばらにした烏の式神で様子を見ていたとのこと。

「それにしてもびっくりしましたで、大陸魔術で妖怪を消滅させるなんて初めて見ましたわあ。」

清明が言うには、キョートは龍脈　魔粒子が魔力になりかかつて流れている　が集う地であるために、それを利用して広大な結界を張り、キョートの街とその周辺には強い妖怪は力を数分の一にさ

れ、弱い妖怪はたちどころに消滅されるらしい。  
しかし、あそこにはいた塗り壁たちは綻びたところから入ってきたらしく、偶然門の外にいた清明が直々に消しにきたらしい。低級の妖怪といえども、陰陽術以外では倒せないために街に近づかれたら一般人には脅威になるとのことだ。

「ほんにあちらは大陸の言いなりになりよって、このジャポンの伝統を忘れてるんよ。天皇陛下の皇室継承の術によつてこの国の瘴気は抑えられとるいうに」

いつのまにか酒をかつくらつて酔っぱらつた清明。途中でさらつと最重要なことが聞こえた気がしたが機密は大丈夫なのだろうかと思ふ黒乃、そしてその情報を心にメモするパステル。

「日本酒『鬼殺し』か……。」

黒乃はお猪口に入つた半透明の液体をペロつとなめるが、アルコールの強さに顔をしかめる。清明はもう二本目を開けようとしている。黒乃は大学に入ったころから先輩に飲ませられることも多かったが、かなり酔いやすいために早々リタイアというのが多かった。その分、味はわかるのだが。

彼は日本酒よりも果実酒、ワインのような西洋酒を好むので、お土産の日本酒は二本だけでいいかと考える。

この日は清明が酔いつぶれるまで愚痴に付き合い、黒乃とパステルは別の客間に案内してもらい、寝ることになった。こちらにもお風呂の文化はまだ無いようである。湯は頂けたので身体を拭くに留める。旅館では庭に勝手に風呂を作っていたが、ここでそれをするはずいだらう。

「おはようございます……。」

「おーおはようさん。ん、どしたんです？ 疲れているようですけど。」

廊下を歩いてきた黒乃の目元に隈がうつすらと写っている。

「いえ、何でもありませんわ。」  
口を挟んだのはパステルだ。顔が心なしかテカテカしている。人形ボディなのに。彼女にしてみれば普段から黒乃は清潔すぎるのだ、匂いが足りないのだ。

「あー。昨日はお楽しみでしたね。」

「っ!?!?」

清明の言葉に顔を真っ赤にする黒乃。未だに初心な価値観を持っているのである。

それを可愛い弟を見るような目で見る清明。パステルも似たようなものだ。

「と、ところで！ 昨日の夜の約束覚えてます？」  
話題を変えようとする黒乃。

「陰陽術について知りたい、であってるやるか？」

昨日の夜、酔っているときの清明に陰陽術について指導してくれるように言質をとったのだった。

「今日はぼくも仕事ないですさかい、こちらの部屋でやりましょうか。」

そうして連れてこられたのは紙がたくさん山となりタワーとなり積みまれている部屋だった。

「すいまへんな、人に物を教えるときにはこの部屋じゃないと冴えへんもんで。」

黒乃とパステルは畳に置いた座布団の上に座らせてもらう。

こうして陰陽術の講義が始まった。

陰陽術とは、陰と陽、大陸魔術で言うと闇と光、この二種類の属性を使うもの。

陰陽道では能動的で動き続ける陽と、受動的で沈静する陰が循環することで、万物の生成・消滅といった変化を発生させると考え、それを利用する術である。

大陸魔術のように火を発生させたり、風を起こすといったような自然現象を操るのは不得手で、魔の使役や魔を封じることの特化している。

なぜか魔粒子が瘴気によって汚染されている　東の海の中央にあるというストレンズ大陸の影響だと囁かれているが詳細は不明  
ジャポンでのみ陰陽術は発達したために、瘴気・魔を封じることの特化している。

そうではないと、この土地では住めなかったからというのが先だが、常に瘴気が渦巻き、妖怪が湧くのだから。

ここに初めてやってきたのが初代天皇と御三家と言われていて、その天皇家にしか継承しない術で瘴気を取っ払ってできたのが今のキョート。そこから浄化区域を増やしていき、いまのジャポンがあるという。その功績を讃えてこの国は天皇を中心、神のように扱いとまっている。

また、ジャポンでは黒髪で闇属性をもつ子供が生まれる確率が圧倒

的に高いのは、瘴気のせいだと言われている。

使える術は基本的には式神を操ったり、妖怪を完全に消滅させることである。魔を封ずるという特性から結界も得意で【結界魔術】を使用せずに強い結界を張ることができる。といっても物理結界ではなく、魔を通さないタイプの結界だが。

王国にいたときに図書館で魔術を調べていると、王国賛美の本の中に紛れて「もつとも魔術が進んだ文明が極東にある」と記述されている書物があったが、ここにその理由の一端がわかるだろう。

魔を封じる、つまり魔粒子や魔力を通さない結界を張れるということとは、正面からぶつかったときに大陸魔術では勝ち目がないということでもある。

この辺りには安倍清明の陰陽術びいきもあったかもしれないが、曰く「大陸魔術で作った現象も封魔結界の中に入ると制御を失い、陰陽師はその中でも符やお祓い棒に魔力を込めて一方的に攻撃ができる」と。

中庭にでて実際に封魔結界をやってもらったが、確かに魔粒子を固めて作った氷は結界にはいった瞬間魔粒子に還った。結界内では『氷槍』は黒乃の制御を離れる。一応結界外で水分を凍らせて結界内に投げると溶けて水にもどった。今度は水をしっかりと冷やして凍らせたものを投げると氷のままだった。

この実験により、魔力を完全に魔粒子に戻す効果があるとわかった。しかし起こった現象で、すでに魔力による制御を離れているものは自然にできる物と同じなので素通りする。

しかし十分だろう。魔力を届かせることができない場合に魔術の優位性の大半は消滅する。遠くから氷や土の塊を投げるなら魔術でなくて十分だし、『火球』や『風斬』は遠距離であっても、魔術に付いた魔力が形状を維持し続けるので、結界内にはいった瞬間に形が崩れてただの火と風にもどってしまう。

以上より、今のところ陰陽術協会と魔術連合の争いは陰陽師が圧倒的に優勢らしい。しかし、魔力を練って相手に届かせての暗殺というのは陰陽術ではできないために、被害者が多いらしい。

ジャポンの陰陽術は【体外魔力行使】という破格の恩寵技能を持っていないくても使えるように、符やお祓い棒、陰陽玉に術式が描きこまれていた。よって大陸魔術の不可視の魔術による暗殺には慣れていなかったのだ。元から準備しておく術がほとんどのために即座の応用性も低いのもいけなかった。

封魔結界が常に張られている重要施設は未だに攻撃を受けていないとのことだが。

最後に、陰陽術には天敵である『精霊術』というのがあるらしいのだが、あまり詳しく教えてもらえなかったので、王都によって調べて帰ろうと思う黒乃であった。

ちなみにパステルは『精霊術』については少しだけ記述をみたことがあった。魔術が『世界を騙す』のに対して、精霊術は『世界に手を貸してもらおう』のだとか。なるほど、自然現象に沿っている術なら封魔結界を素通りしてしまうのだろう。

外で訓練している戦士が多く、「武士」というジャポン独自の兵士だと紹介される。封魔結界により、人間同士の争いでも妖怪との戦いでも、近距離戦が中心となるので常に多くの人間が身体を鍛え続けていくらしい。

演習をやるこのことを見せてもらったが、黒乃とキョウは興奮しっ放しだった。憧れの本物の侍や陰陽師がぶつかりあるさまは、テレビドラマの殺陣など比較にならない迫力だ。

まず戦いが始まると、両陣営から相手の大規模な術を防ぐために封魔結界の大きいものを数人で張る。

武士が刀を持って斬り込むと同時に、手の空いた陰陽師は符を数枚使って式神　符で動物を形作るか、妖怪を使役する　を召喚する。式神となった鬼もその巨体と得物の棍棒やもしくは素手で武士との打ち合いに参加していく。

相手の封魔結界にまでたどり着いた武士は、結界を張っている媒体を壊すか、維持している陰陽師を気絶させて結界の範囲を狭める。その間に味方の陰陽師が来て味方側の結界範囲を広げ、大きな術式の準備を始める。

押しているほうが結界範囲を最初の二倍近くに広げた時に、数人がかりで唱えていた術が終わり、結界内を符が躍り狂い、紙で祭壇をつくっていく。そこに目を閉じてお祓い棒を振っている一人の巫女がいて、魔力が規則的に軌道を描きながら女のもとに降りて来て、

女の腰にある短剣に奔流となって入り込む。

結界が割れるような響きの後に、雰囲気ガラリと変わった女が正気かわからない目をしながら立ち上がり、敵方の結界に向かって風のように走り、短剣を軽く振るうだけで短剣の軌道の数メートル先にいた武士や陰陽師も吹き飛ばされる。そのまま数十人を相手取り、敵の陰陽術を無効化し、無双しながら相手の主将らしき男の首元に短剣を向け、演習が終わった。

間近で大規模な戦闘を見てその空気に圧倒されるもパステルの脳内は冷静だった。

ふと隣の主人、黒乃を見ると子供のようにはしゃいでいるが、自分の主人がこれほどまでに陰陽術に興奮するのもわかる。

封魔結界は魔術の天敵であり、陰陽術は可視の戦いであるために一方的な展開になりにくい。

攻撃性の陰陽術はいまの演習を見るに、鬼などの妖怪の使役と、散発的な雷撃や火球。それも大陸魔術より威力が弱い。攻撃力にとぼしい光と闇属性の人間ばかりであるからして苦手なのだろう、ただの牽制にしかなくておらず、しかも相手の封魔結界内では使えない。くらい。最後の大規模術式も魔術による不可視の一撃とは違い、数で止められる術だ。

つまりはこの隣にいる主の価値観。卑怯だとか正々堂々だとかにあっているのだ。和風というだけで惹かれるものもあるのだろうが。

主がすることにパステルは疑問を持つことなどないが、確実にブリ

トニア島に帰るのは遅くなるだろうな、と予想する。パステルにとつては二人っきりの時間が長くなるのに異存はない。

「安倍清明さん！ 俺たちに陰陽術を教えてください！」  
……果たしてその予想はあたったようだ。

結局少しの間だけだが教えてもらえることになった。

もちろんジャポン以外に陰陽術を出すことに渋るのは当然であったが、黒乃が真剣に頼んだことと、黒乃自身大陸魔術の使い手でありながら魔術に対して思うところがあり、魔術を無効化する封魔結界を大陸魔術式にエミュレートできれば、魔術師とそうじゃない一般人の差が縮まるので欲しい、という考えに押されて清明は許可した。

陰陽術に染まっている清明も魔術師のやり方と態度は嫌いだったの

だ。中距離から一方的に虐殺する魔術、剣や槍をもった戦士を馬鹿にしきつた魔術師が。

陰陽術は遠距離術がほとんどない。あつても封魔結界で威力がなくなる。し、式神による攻撃も武士の技量によつては防がれる。また陰陽術による戦闘は、陰陽師と武士の共同で行うのが当たり前。戦友という関係を築く彼らにとっては、西洋の魔術師の考え方は理解できないし、嫌悪するものなのである。

「まず、用意するのは符と墨と筆やな。符に祝詞や呪、大陸魔術やと魔法陣つてやつを書くのが基本や。書くときはちゃんと魔力を込めてやるんやで。」

簡単な式神や障壁を造つたり、符で剣を形成することもできる。

陰陽術の魔法陣は洗練されていて、魔力を多く練れない人でも大概のものは使えるようになっていくとのこと。

国民のかなりの数が闇属性であるために、それぞれの魔力の親和性が高く、また墨の黒とも同調しやすいというのも、だれでも使える理由の一端だろう。味方の封魔結界内になれば、結界内に溜まる魔粒子を使えるし、近くにいる仲間の陰陽師の魔力を借りることもあるという。

そこは様々な属性がいる大陸の人間には応用しにくいかもしれない。

「妖怪の使役やけど、妖怪は魔粒子が魔力のように固まって存在しているから、作り出すこともできるし、遠くから召喚するんも割かし簡単にできるんや。人の転送はできんけどな。」

妖怪の召喚は、遠くにいる妖怪を魔粒子に分解して運び、手元で符などを媒体に再構成することでできるそうだ。これも大陸では妖怪がないために難しいだろう。魔獣は魔粒子で構成されているわけではないので同じ方法は使えない。

「陰陽師同士の戦いで最後の切り札となるんが『神降ろし』や。封魔結界内に溜めた魔力を用いて、数人がかりで神を媒体を所持している一人の巫女に降ろし、神が降りた巫女は人外の戦闘力を得ることができ、しかもその身が封魔結界となっているために大抵そこで勝負が決まる。」

この世界に神がないのは天使（仮）に確認済みだ。となると、精霊か何かを憑かせるのだろうか、と黒乃は頭を悩ませる。

パステルは、あの儀式で人間の脳を刺激し、トランスさせてリミッターを外すのが一番ありえそうだと思っている。人間の非効率な身体構成や動かし方を研究して、自分の身体の無駄をなくし続けたパステルには、人間の限界が人間が思うより遥か上にあるのを知っている。

しかし、身体能力があがるならともかく、その身に封魔結界が宿るのはどういう理屈なのだろうか。

「そして封魔結界。これは術者の身体を結界の基点にすることが多い。相手の魔力を魔粒子に変換し、また結界内では魔粒子を自動的に練り続ける。強力ゆえに維持には数人必要だ。」

この術式だけは必ず覚えて持ち帰らなければならないと、パステルは誓う。主人が求めているのだから。

天皇家の浄化術式にも興味があるが、秘中の秘であるらしいこの目の前の男　　実は陰陽師協会の長とのこと　　すら知らない可能性が高い。

瘴気の侵入を拒む、各都市や街道に張られていた結界と違い、瘴気を浄化してなくしてしまうというから相当強力な対魔の性能をもっているだろうから欲しいのだが。

あと有用なのは龍脈、または地脈と呼ばれるエネルギーを利用する方法だろうか。莫大なエネルギーを地から回収できるなら便利なことこの上ない。王国では魔術の本に地脈のことは書かれていなかったから、やはりジャポンは大陸よりも魔術文明として進んでいるようだ。必要（妖怪と瘴気の発生）は成功（陰陽術の発達）の母ということだろう。

安倍清明の話はすでに陰陽術の講義を終えて、歴史についてとなっている。パステルは興味がないので意識を半分だけにし、もう半分は手元の書物に集め、【速読】により読んでいくのだった。

パステルは徹夜を連続してこの部屋にある書物を全て読みつくすつもりだ。人形の彼女に精神的疲労以外はないし、主人のことを思えばそんなものは耐えられる。一度読んで覚えてしまえばレスト翼休む刻　に帰ってからも研究できる。

一週間の間黒乃と身体を重ねる時間はなくなってしまうが、主人の真の願いのためなら肉欲など我慢できる。

こうして一週間を一日中陰陽術の勉強をして過ごしたのだった。

30話 陰陽術（後書き）

ジャパン編終了でござい。

31話 帰還の一日(前書き)

43話まで、土日に全て投稿し終えるつもりです。

のんびり読んでくださいませ。

11/10/22 誤字訂正

### 31話 帰還の一日

「……………」

一か月ぶりくらいにブリトニア島の南を収めるレスト 翼休む刻に帰ってきた日。

黒乃のあんぐりと口をあけて茫然とした姿と、「なかなかいい仕事をしたじゃないですか」と満足気なパステルが見られた。

490

「な、なんで……………城が……………」

そう言って正面にある黒い城を愕然としながら眺める黒乃。

そんな黒乃を見るはいたずらが成功したことを喜ぶように笑うグロリア 王都で会ったクォータードワーフの茶髪少女 や、以

前よりもさらに増えた侍女たちだった。  
エルフ族代表のトミー夫妻も黒乃を微笑ましそうにみていた。

ことの始まりは二時間前にレストの港町アステップに無事上陸し、  
久しぶりの帰還を住人に歓迎されながら「北の方へ行って」と言わ  
れてからだった。

と同時に、ブリトニア島の北を開拓し、島の4分の3までも既に制  
圧したという報告に黒乃は驚く。  
一か月前には5分の2くらいだったはずなのだから。黒乃がいない  
魔術師は増やせないし、ここ数か月、黒乃は新たに魔術師を増やさ  
なかった。もう十分な人数がいるため。のに、どうして開拓ペ  
ースがあがったのだろうかと疑問に思う。  
なんでも一気にやる気が出たとの話だが……。

北の方に飛んでいき、途中でセルヴィとトゥールに迎えられて、降

りてからは馬車で北へ向かっていく。

たしかに北まで開拓されて、森が切り開かれ、畑が広がっている。指示しておいた水田も準備してくれていたようだ、など観察しながら、そしてセルヴィの報告　なんと造船所や工場も稼働し始めたそうだが、原始的なものだが。そして北に隠れ住んでいたダークエルフが傘下に加わったらしい　を聞きながら進む。

そして、暫定的に土を固めて整備された道を通り、やがて森があつてその間の道路を抜けると、そこに高くそびえる黒い城があり、かなりの数の種族が集まって迎えてくれたという話なのだ。

目の前に堂々と聳え立つ城　黒曜石をふんだんに使ったために黒いとのこと　は西洋の城のようにも見えるが、構造は日本の城に似ていて、一階が一番広く、二階三階とあがるにつれて少しずつ狭くなっていき、頂点には天守閣がある。しかし途中から、ほぼ真直ぐと上に向かって建っているので、三角形に棒が乗ったような形、というのが正確な表現だろう。

装飾はとにかく黒。どこを見ても黒で染まっている。窓は少な目で空から入ることは考慮されてないよう　無礼となるのでこの世界でも普通は考慮されない、というか対空迎撃を仕込むのが基本だ。城を上空から見ると四角形となっていて、内部に入れるのは南方向の門しかなく、四角形のそれぞれの頂点には、物見やぐらというのには豪勢でしっかりとした塔が建てられている。おそらくは城壁で阻んでいる途中にそこから攻撃を仕掛けるのだろう。

城の設計は、『固定化』を存分に使ったらしく物理学的に少し無理があるのではないかな」と黒乃が不安を覚える高さだ。おそらく一階5メートルとして15フロアほどあるんじゃないだろうか……8階辺りからはもう塔と呼んだほうがいくらいだ。

これを見て、どれだけかかってもいいので【固定化】をかけてまわろうと強く心に誓う黒乃だった。

隣にいるパステルは城が放つ威容に、我が主人を迎えるには及第点でしょう、と呟いている。

グローリアたちドワーフ組　おそらく今回の建設に大活躍したのであろう　は黒乃の言葉を今か今かと待っている。黒乃が呆然としたのを見た彼女達は次に彼がどのような言葉を自分たちに言ってくれるかが気になっているのだ。

他の、建設を手伝った者たちも黒乃の感想が気になっている。彼らからすれば年始祭をこちらで出られなかった黒乃へのサプライズプレゼントである。

実は城を建てる計画はひそかに進められていて、材料や壁の一部も、数週間前から少しずつ準備していたのだ。これには黒乃が造った術者が必要なゴーレムや、単純作業しかできないが術者が必要ないガールゴイル、そして無数のスケルトン　普段は森の影に配置し、魔獣を足止めする　を動員していた。

本当は黒乃が帰ってきてからもう少しずつパーツを作り、一気に組み立てる予定だったのだが、グローリアたちドワーフ組が来て計画を

話し、だったら帰ってくるまでにやっちゃおうという話になっただしい。この世界の人々は『固定化』があるために少々の突貫工事など気にもしないのだ。

……固定化に頼らずに頑丈な建物をもっと造らしたほうがいいと思う黒乃だった。でないと技術が発展しにくいではないか。

「……。あ、えと、ご苦労？」

やっと絞り出せたのは、黒乃自身も明確な意思を込めていない、場当たりの言葉だった。

「はい！ 褒めて頂き光栄です！」

ドワーフの娘の一人が喜ぶ。労いの言葉と受け取ってくれたようだ。受け取る本人が良いならそれで良いのかもしれない。

「皆さん、国王テアナーク様がない間ご苦労でした！ 数々の仕事をやり遂げたことを我らが国王は大変喜んでおります。これからも期待することです。王は疲れているので私室に戻るのに、重要な案件があるものは私パステルに持つてきなさい。それでは解散！」

黒乃が混乱したままなのでパステルが場を閉め、黒乃の手を引いて城に空から入る。まだ迎撃装置は起動させていないようで、苦勞せず15階から入る。

どうやら私室は14階にあるようだ。上り下りが辛いので、内部に上昇機構を付けるべきだろう。

私室に入ると、すでに私物は移してあるようだ。報告書に、大事な物はすべてトゥールとセルヴィが運んだとある。当然だろう、研究成果などの機密情報を扱えるのはパステルも合わせた三人だけだ。パステルは他にも黒乃の私物が欠けていないかチェックする。……やはり黒乃愛用の服やアロマキャンドルが少しづつ亡くなっていることに気づく。黒乃はこの国レストでは神のように崇められ、弟のように可愛がられているので、しばらく私室を空けたとなれば暴走した侍女が出るのも想定範囲内だった。とられた物の多さは予想外だったが。

黒乃は新しく買えばいいと言って許すのだろうか、パステルは違う。すでに周囲に漏れ出た魔力により軋みがでているのだ。

「風潰しに回収しなければ。」

この後一週間、侍女の悲鳴と怨嗟の声があちこちから聞こえたそう  
な。

特にパステルとセルヴィの戦いは、黒乃の私物と女の意地をかけて熾烈な戦いとなり、数時間に及んだという。

お互い熱くなっている、敬愛する主人が治める国を傷つけるつもりはない。よって海の上で戦ったそうだが、上空にはパステルが嵐を背負い、海上ではセルヴィが津波を背景に戦ったらしい。

結局は相性の差によってパステルが勝利した。セルヴィも無尽蔵に

ある海水のウォータージェットや津波を起こして奮闘したようだが、空を縦横無尽に飛び回るパステルには両方とも避けられてしまう。風を操ることにより海の制御も乱されてしまったセルヴィになすべはなく、長期戦の末に敗れた。やはり制空権の所持は大きい。

凶悪な核属性をもつトゥールがセルヴィ側で参戦すれば結果も変わったかもしれないが、トゥールはまだまだ使いこなせず、それに黒乃の私物を盗んでいない。ちゃんと帰ってくるまでに返した彼女には戦う理由がなかった。

黒乃は正気に戻ると、まずはお土産を渡しにいった。

着物や浴衣は買ってきたものを、服飾関係の仕事をしている者に渡し、必要なものは全て用意するから同じような服を幾つも用意するように命令。

お酒は種族の代表者たちに持っていく。エルフ族代表のトミーは特に酒が好きで、エルフ族に伝わる酒を集めているほどだ。こちらで

は手に入らない変わった酒に大層喜ぶ。昼だというのに黒乃も少しだけご相伴を預かってしまった、酒と共に、

ジャポンでしかほぼ栽培されていない米は用意していた水田で作るように指示。まだ植える時期ではないが。

醤油や味噌もサンプルと、作り方をもって帰ってきたので、暇なものに大豆から作るように言う。

食関係は黒乃もジャポンに行くことになってかなりの期待をしていたのだ。

その他小物類 扇子、数珠、かんざしなど は個人的な仲のいい子たちに渡す。具体的にはレンさん、アイリス、フラン、ステラ、ミア、クスノハ 狐人族の金髪わっちっ娘 だ。

鉄扇は自分用に。黒乃は上位世界から持ってきた扇子を、オリハルコンで鉄扇ならぬオリハルコン扇にする予定だ。

お土産を配り終わると、黒乃はパステルと共にレンさんのところへ行く。陰陽術のことを伝えるのと、精霊術について知っていることを聞きたいからだ。

「精霊術は、精霊に気に入られた人しか使えず、精霊に頼んで現象を起こすそうです。魔術と違って世界に負担をかけませんし、魔術よりも更に使える人が少ないらしくて『選ばれた者の術だ』なんて呼ばれてるんですよ。」

レンさんの陰陽師を伝え、一緒に研究することを約束したあと、精霊術の話を書くことにした黒乃とパステル。

「魔術も精霊術も使える人は選ばれただの何だの……誰でも使える陰陽術を見習ってほしいです。」  
愚痴る黒乃。日本補正もあってか、陰陽術の評価がかなり高いようだ。

「たしかにいけすかない態度を取る人は多いですけど……。それに陰陽術が誰でも使えるというのは、同じ黒髪で閻属性だからというのが大きいでしょう。それに準備に時間がかかるのは難点ですね。戦闘中に新たな術式を符に書く暇なんてないですし。」

そこまで詳しく説明できていないのに、もう陰陽術を掴みかけているレン。さすが研究者ということだろう。

「魔術は概念を注いで『世界に詐欺を働き』、精霊術は精霊を通して『世界の力を借りる』、というのは的を射ていると思います。これと比べると陰陽術は『魔粒子（魔力）を扱う』のに長けた術といったところでしょうか。魔粒子でできている妖怪を分解して再構成、どこにでも普遍的に存在する魔粒子を通さない封魔結界。どれも魔力や魔粒子自体に強く理解がないとできないでしょう。」

たしかに魔力そのものを使う術が多かったような思い出す黒乃。式神も魔力を燃料として動いていた。大陸の魔術のように魔力を交換するのではなく、そのまま用いる。そのかわり雷や風のような現象を起こすのは苦手、と。

「龍脈というのを利用するというのも、魔力と魔粒子の間の状態の流れを、しかも地下深くの流れを感知するのが大陸の魔術師では

できないと思いますよ。私もそのあたりはしっかりと調べてみますけど。龍脈のエネルギーが使えるのであればこの島の防衛機能も強化できるでしょうし。」

この島は戦火にない。アークライト朝にもレストのことを察しられているだろうが、この島の有用性を測りかねているのだろう。実際に鉦山はあまりないし、あっても選ばれたメンバーだけでやってもらっている。

しかしいつこの島が王国の領に組み込まれることを強要されるかわからない。その時に条件によれば併合してもいいが、十中八九亜人は排斥されるだろうから戦うしかない。【体外魔力行使】を与えた者たちのうち一部には戦闘用の魔術を訓練してもらっているが、防衛戦力は多いほうがいい。

と、ここまで考えたところで隣にいたパステルが目配せをしてくる。次の予定の時間だ。

さすがに一月以上もあけていると、黒乃しか扱えない書類も溜まってしまふ。それを早々に片づけなければならぬし、それぞれの種族への顔見世もやらなくてはいけない。

この一か月でも人口がかなり増えたのだ。冬にはいつて避難してきた人が多数いたらしい。しっかりと食糧を貯蔵していたので大丈夫だったが、新たな住人の簡易審査や戸籍作成、居住区画の割り当て、ルールの説明などと手間がかかるために相当大変だったそうだ。そのおかげで元からいた住人は絆が深まったそうだが。

最近はエルフの一部も他の種族と話しているのを見かけるし、大陸から移ってくるエルフもそれなりにいる。他の種族の割合の方が大きいが。

大陸から逃げてきたエルフの中には事情に詳しい者もいて、話をきくと、エルフで王国内にいるのは小さな集落のみ。帝国ではその内の一つの国でエルフが中核を成している国家。しかし違う一族のエルフは入れない。があるそうだ。アイスル教国は土地が枯れているために、森と共に暮らすエルフでは住みにくいのでほとんどいない。ダークエルフは少しいるらしいが。さらに東。地球で言うロシアの東。にはエルフとドワーフの国家があり、近くの小規模な人族国家からたまにちょっかいを出されながらも跳ね返しており、余裕があるためか、あるうことにドワーフとエルフで戦争をしている。

そして一番の情報は、エルフたちが新大陸に逃げているということだった。新大陸は王国や帝国はまだ東海岸辺りにしかおらず、生活圏を広げる余裕がまだないために、少し内陸に行けば亜人も平和に暮らせるとか。

魔獣と判断されて迫害された獣たちは、海を渡れるものは海を泳ぎ、できないものは信じられないことに人族の残した船に乗って。それほどまでに生存本能を刺激されたのだろうか。暗黒大陸に渡っていつているらしい。暗黒大陸も王国は100年前に見つけてからそんなに入植していないので、魔獣のオアシスが広がっているとかが。

このレストの知名度は亜人の間では急速に広まっていて、大半は様子見段階だが、期待を寄せる者も増えてきたとか。黒乃にとって最後のは嬉しいことだ。

いまだに馴れない、城の私室で夕食を頂き、パステルと別れる。

パステルには陰陽師関係のことを紙にまとめる作業が黒乃から任せられる。重要な仕事だ。

黒乃は呼び出しを受けたのである。相手はどっかの種族の血の気の多いやつで、自分が一番強いからリーダーになると言っている。聞かないという。それなりに腕にも自信があるとか。

ということ黒乃は話を一応聞いてみて、そいつが襲いかかってきたらその瞬間凍りつけにした。

腐っても国民、殺すことはしない。氷はそいつの口元に張り付かないようにしたので、氷が解ける半日後までに、酸素がなくなっている。絶するかしないかくらいになる予定だ。

黒乃は無駄なことに体力使ったと後悔しながら、風呂に入るために城に戻っていった。セルヴィが風呂に先回りしていたのは語らなくていい蛇足であろう。

このように帰還初日は過ぎていった。



### 32話 半年後と魔造人間化（前書き）

少し長めの8500文字也。

最後の展開に悩みました。最も書き換える可能性が高い話です。

### 32話 半年後と魔造人間化

ジャポンから帰って半年経った今は7月で、黒乃は既にこの間に二回王都に訪問 珍しい恩寵技能をオリヴァー・ハーヴェイに見せるため。相変わらずシルフの子供は聖女として担がれていた。した。両方ともトウルをお供にして。王都は相変わらずの賑やかさで、表だけを見ている分だと大陸一の街と豪語するのも頷けてしまう。裏に気づき覗き込めば、表を素直に見れなくなってしまうのだが。

半年の成果を報告しよう。

この春からは、大幅に拡大した畑に様々な種の野菜を植えた。夏に収穫できるものは取り始めているが、出来はかなりいい。糞尿を使った肥料づくりがうまくいったのもあるが、【豊穰の女神の加護 ラウニプロテ】の効果は圧倒的だ。今のところパステルとキョウト、とある長い棒しか刻印されていないので、畑全体を周るのが大変で、どうしても恩寵技能の効果から漏れるところもあるが、それは仕方ないだろう。

誰かに刻印するのでもいいのだが、持っていることを王国側にバレた

ら即座に誘拐対象となってしまう。せめて自分の身を守れる者でない。

物に刻印するという手もあるが、高階恩寵を刻印するとなると相当良い素材でできているものに限定されてしまう。そんな良い素材は簡単に使うのをもつたいたく感じてしまっわけで……これは黒乃が貧乏性の日本人だからだろうか。

なのでダマルカスでできた物干し竿サイズの棒にだけ刻印されている。これは一番大きい畑の中央に立てている。一人、棒術を扱う者が「得物として使いたかったのに」と言っていたが、国のためだ、我慢してもらおう。

単純作業はスケルトン 人格持たせなくていいなら頭蓋骨が無くてもできた やゴーレム、ガーゴイルにやらせているために、人手が空き、産業の発達を促している。

ゴーレムは地属性魔術や金属性魔術で作る土や岩や金属で造られた意思をもたないロボットで、術者が直接起動させて命令をしなければならぬ。動かしている間常に魔力供給をする必要があるため、畑の周りや、森近くにいつも配置しておき、必要に応じて動かすという形となる。

ガーゴイルは自動魔法陣を用いた最新式ゴーレムで、命令をすればずっと動き続けることができる。

自動魔法陣の、刻印された媒体が壊れやすいという弱点は未だ健在だが、土できてきているなら術者が簡単に直すことができるので問題ない。

マスターになるには血を登録する必要があるが、レスト 翼休む刻では、スケルトンやホムンクルスの動力に血を与える 住人からもたまにもらっている 光景がありきたりなために抵抗感を覚える人はいない。

ちなみに、最初は創造主たる黒乃がホムンクルス達 セルヴィヤ トゥール以外にも自我が薄いタイプを数体作った。主に家事や雑用目的で に直接血をあげていて、それが一番喜ばれるのだが、黒乃が血のあげ過ぎで貧血になり倒れた時以降、家畜や住人からも血をもらうことになった。

……血を与えるのが信頼関係の証、という風潮ができそうで黒乃は頭を抱えている。それじゃ吸血鬼みたいではないかと。ぶっちゃけた話、黒乃に血を届けられても困るのである。黒乃はもっぱら褒美 被創造物にとって創造主の血は何よりおいしいらしい として飲まれる側なのだから。

警備はスケルトン 禁術の一種なので、森の影などに隠して用いている とガーゴイルとゴレムを島の周りに配置し、正規の方法以外では入国できないようにし、空いた人間は内陸で戦闘訓練をしている。もちろん人もスケルトンたちと共に見回りはするが。

そして最近騎士団を作った。ジャポンで見た武士も憧れるが、護るために戦うなら騎士だろうと黒乃のこだわりだ。

騎士団は『アンジャントトルシユヴァリヒ魔刻騎士団』と名付け、フランス語にしたのは響きが気に入ったから、魔術師26人と弓兵10人、槍兵34人の計70人で構成している。

陣形としては、最前衛の槍兵が敵を食い止め、中衛の魔術師が範囲に入った敵を不可視の刃で切り刻み、後衛の弓兵は魔術師の射程外を警戒するという布陣。

魔術師の魔粒子支配空間における即時魔術発動は、守りにこそもつとも適していると思っていたが、槍兵で魔術師の前で食い止めることで、魔術発動のわずかなラグで魔術師まで攻撃が届くのを避け、護りにはいることで後方に魔力を展開せず前方に集中できるようになると、予想していた防御力よりも遥かに高い。レスト最強のパステルであっても、空を飛ばない条件だと突破することができなくなるほどだ。

これに加えて、敵の魔術を無効化し味方の魔術を増幅する大規模な封魔結界を張ることができるようになれば、攻防一体の陣形となるだろう。

しかしジャポンと違い、属性がばらけているために封魔結界を張るのが難しい。封魔結界の魔を払う効果も味方の魔力を増幅する効果も、術者同士が同調するという要素が大きい。敵の魔力を通さないうのは同調している魔力以外を弾くから、ために、属性が違つと反発してしまうのだ。

今は術者全員が同じ魔導具を使って同調できないか研究中である。それとは別に光属性や闇属性の者ばかり集めて陰陽師の勉強をさせてもいる。特に闇属性は人数が少ないために数を揃えるのが大変なのだが、陰陽術の有用性ゆえに学んでもらう。

ちなみに、黒乃と、黒乃から造られたホムンクルスたちは大体が黒

髪で閻属性、しかも黒乃の根源の一部が混じっているために非常に相性がよく、黒乃たちならそれなりの規模の封魔結界を発動することができるとができる。

騎士以外にも戦闘訓練を施しているもの 警備隊に所属する

も300人ほどいて、王国から手を出されない10年ほどの間に、海を使ってしっかりとした防衛戦ができるように鍛えるつもりだ。高齡とはいえ、未だにオリヴァー・ハーヴェイは健康で健在なのでそれくらいは大丈夫だろうと黒乃は考えている。

パステルはその見積りを甘いとは思っているが、彼女が諫言することとは滅多にないし、主人が正しいのだと思いついて忘却の彼方に追いやった。……それが間違いで、忠誠ではなく盲目だと気付くのはいつになるのだろうか。

工業だが、ガーゴイルによって一部のオートメーション化は成功している。細かい作業はできないのだが、力仕事をやってくれるだけで十分役に立つ。

建築をする際に石や木材運びをしている姿を日常的に見ることができると。 機織り機を動かすようなことはまだできないのだ。

漁業については順調だ。

いつのまにか造られていた造船所が稼働し、自分たちで小型とはいえ漁船を造つてからは効率が倍増した。元々北の海 北海とそのまま名付けた 肥沃な海で、魚介類がよくとれる。地球と同じであれば油田もあるはずだが、石油があっても精製技術がまだない

ので無駄だろう。

北で取って魔術で氷漬けにした魚は、レスト 翼休む刻 の主要な輸出資源となっている。魔術で冷凍するには、王国であれば大量の報酬を払わなくてはならないが、魔術師が100人ほどいるレストではそこまで経費はかからない。漁船に一人は水か氷属性の魔術師を乗せている。

王国も帝国も、貧乏なアイスル教国ですら魔術師は戦闘しか行っていないのだ。生活に用いると途方もなく便利であるのにもかかわらず。むしろ戦闘以外に魔術を使うのは邪道だという考え方である。黒乃は勿体ないなあ、と思うばかりだ。

島の上には大きな鉱山がないと思われていたが、北東の山脈ではオリハルコンやミスリルが大量に埋蔵されていることがわかり、発掘を急がしている。武器を造るにも便利な道具を作るのにも、とにかく根源量が大きい素材が必要なのだ。

見つかる鉄鉱石や石炭鉱床も手つかず ほとんど人がいなかったから当たり前だが の所ばかりであり、発展は約束されている。

そして極め付けが、今まで銀や金が少量しかなく、廃坑にしようとしていた鉱山の地下に、まとまってヒイロノカネが見つかったとのこと。

大陸でも鉱山採掘の仕事をしていた人族の青年や、新たに来てくれたドワーフたちによると、ヒイロノカネはどんなところに行けるかがわかっておらず、偶然発見されることしかなく、しかも少量ずつしかないとのこと。今回のようにまとまって見つかるのは相当珍しいそうだ。

黒乃は都合のいい展開に飛びあがって喜んだ。ヒイロノカネは少量でも金貨数十枚が飛ぶ希少金属で、根分量も他と比較にならない。ヒイロノカネは素材段階で人格をもつことができるほどの根分量を有しているために、武具に少しずつ使うだけで性能の上がりは比ではない。

そんな資源が眠っていると知られるとまずいので、ヒイロノカネの採掘は信用できる者だけを起用し、王国に鉱石のまま売りだすのはやめ、武器や魔道具作りに活用することにきめる。パステルがヒイロノカネは全て王城へ集めるように指示した。

他にもアルミやチタンを少量だが見つけることができた。この世界では未だに有用性が理解されていないようだが、軽銀ともよばれるアルミは軽いので役にたつ場面も多いだろう。

といっても黒乃は上位世界の鉱石関係の知識はほぼないに等しい。大学受験で化学で製法を詰め込んだくらいであるので、アルミを造るものボーキサイトから大量の電気を使って作る以外に方法を知らない。

しかし、この世界には『錬金』も【錬金】もあるのだ。一つ完成品があれば、その辺の石からでも作ることができる。もちろんそれ相應の時間と手間がかかるので大量生産はできないが。錬金をより成功させるために、金属性魔術師には上位世界の化学知識を学んでもらっている。しかし、こちらの常識に一度染まっているために、セルヴィたちホームンクルスに教えるよりも覚えるのは遅い。時間はあるので黒乃は焦っていないが。

念願の【体内魔力行使】を手に入れたので、歳を取るのが遅くなり余裕があるのだ。

もちろん開発地域を広げる以上は魔獣を間引きし、障害物を薙ぎ払い、その過程で恩寵が調金された魔獣の牙などの素材や、鉱石や古びた武器などが見つかることがある。大体的場合は黒乃が【根源管理】で見ないと調金されていることがわからないので、少しでも怪しい物は全て黒乃が目を通すこととなる。よって、そんな開発過程で黒乃が手に入れた恩寵は低階恩寵を中心として多岐に渡る。

特に【守護】と【不可壊】、【結界魔術】は特筆すべきものだろう。すべて中階の恩寵技能だ。

【守護】はキヨウの持つ【守護霊】の下位であり、自身や所有者を自動で守る効果がある。具体的には所持者が知覚していない攻撃にも障壁を自動で張るので、不意打ちが効かなくなり、かつ自分で防御しなくてもよくなる。王族などはのどから手が出るほど欲しい恩寵だ。

【不可壊】はキヨウやキヌガサについている中階恩寵で、その名の通り『壊れない』。しかし、熟練度にもよるため、相手の攻撃が高階恩寵によるものならば強度で負けることもある。実際に、【不可壊】が刻印された古代の剣らしきものが見つかったときは、黒乃はキヨウを【変型】で剣型にして壊して吸収した。キヨウの【不可壊】が上回った結果だ。

【結界魔術】は、物理的な結界のみならず、概念的な結界を張れるようになる恩寵技能である。張ると維持に魔力が必要だが、どのようにして概念的な結界を張ることができるのかは目下研究中有る。

最後の【結界魔術】は、建国初期からいたエルフ族代表のトミーが事故　状況が納得できないことが多いので調査中。しかし未だに何も出てこない　で大けがをし、【治癒魔術】でも治せず死を待つばかりとなったとき、トミーが黒乃に自らを殺して吸収するよ　うに頼んだ恩寵だ。

トミーはエルフ族の未来を憂っていた一人であり、1年ほどの付き合いであったが、パステルの次に黒乃と多く会話しているほど仲が良かったため、エルフの未来を託してもいいと思い、黒乃とエルフトレストの未来に『自ら全て』を捧げると死の床につきながら誓った。

黒乃はトミーには禁術のことを教えてあった。つまり自ら全てを捧げるとは、己の根源の恩寵を黒乃に譲渡し、頭蓋骨やその他の骨をホムンクルスの材料に、血肉は合成獣の実験に使ってもらうということだ。

この提案に黒乃は悩み、限られた時間の中で一つのことを思いついた。

人間の妖怪化、つまりは魔粒子で構成する魔造人間への転換である。ジャポンで妖怪について聞いた時から考えていたことだ。

これなら記憶を持たせたまま　ホムンクルスにする時に記憶を維持しつつ造るのは、拒否反応により幾つも失敗していた　転生させられることができるかもしれない、と。トミーに亡くなられては若いエルフ達が暴走するかもしれない、友人としてもいなくなつてほしくないかと黒乃は必死になった。

トミーの命の灯はそう何日も持たない。前々から作っていた理論を

元に、レスト中の研究者や、休暇中だったレンさんを呼び戻し、パステルやトゥール、セルヴィ、そして多くのホームンクルス達と侍女を総動員して城や研究所で日夜実験に励んだ。

小動物での実験はすでに成功していたので、少しずつ人に近い生物を試し、そしてとうとう人族の死刑囚　スパイでレストに入り込んでいたのをセルヴィが捕獲した　での実験をすることになった。生きたまま頭蓋骨や脳、根源をいじるために、今までで最も非人道的な実験だったが、黒乃に躊躇はなかったし、元々周りにいるパステルやレンさん、セルヴィなども、犯罪者で実験することに何の忌避感も持っていないので止めなかった。

プロセスとしては、脳から人格と身体の構成情報と記憶を、中心核（ケアンと呼称することにする）の根源に写し、アンドロイド化する禁術の術式を一部応用してエネルギーを魔力で補えるようにする、これだけだ。それぞれの作業に莫大な集中力を必要とし、少しの手の元の狂いで失敗となってしまう危険なものであるが。

人間の人格を収められる根源量が必要なので、本人の頭蓋骨を使用する。補助としてヒビロノカネも使う。

まずは生きたまま頭蓋骨にヒビロノカネの板を差し込み、根源を一体化させる。そして【根源管理】で人格と記憶と身体の構成情報を記録して、頭蓋骨とヒビロノカネでできたケアンに寸分の狂いもなく書きこんでいく。胸ポケットに入れていた万年筆を取り出し、闇の魔法陣を数十も多重展開、セルヴィとトゥールが練った魔力を補助　黒乃の血を使ってできているので魔力の相性がいい　にして禁術を発動して根源を浮きやすくする。そしてケアンに幾つもの魔法陣を描きこんでいく。最後に意識をケインの方に移す。

作業が終わると、頭蓋骨ごとケインを引き抜いて死刑囚は絶命し、終了した。

ケインを地面におき、描きこまれた魔法陣に魔力を通すと、ケインを頭蓋骨の位置にするような形に魔力がなり、ケインに刻まれた情報をもとに魔力の肉体が構成された。

「お前、話せるか？」

「……。」

しかし失敗。意識はあるようだが人格が壊れているようだった。

「創造主<sup>マスター</sup>、次を。」

「……ああ。」

セルヴィの声に黒乃は沈痛な面持ちのまま次の検体を持ってくるように指示する。

何が悪かったのか考え、少しずつ条件を変えていく。ここにある知識と発想という材料は出し尽くしている、今ある物でできなければ一から研究し直さないとダメとなる。

そうして一週間かけて数十の検体が死亡した時、人族の女暗殺者の検体で記憶の保持に成功する。脳科学的な連続性についても問題なさそうで、直前までの記憶を覚えているようで、黒乃に襲いかかっ

てきた。しかし即座にパステルによりバラバラにされる。またケインに魔力を注げば復活することを確認する。今度も捕まる前の記憶も、数瞬前にバラバラにされた記憶も持っているようだ。

成功だ。

ケインを身体の中に埋め込まなければ比較的歪みを直すのは用意だった。根源に記録されていないケインがあるからこそ拒否反応がでていたのだ。よってケインは身体から少し離れた机に置いてある。

黒乃は達成感の余韻に浸る、が、それも数秒。

すぐに周りに指示し、トミーの家に魔造人間化するために必要な道具や設備を用意するようにいい、パステル、セルヴィ、トゥールを控えてトミーの元に一足先に向かう。

「トミーさん！」

エルフの居住区でも一際大きな家があり、エルフ達が集まっている。

人垣をかき分けて黒乃はトミーが眠るベッドにたどり着いた。静かにしると側仕えでいたエルフの女性が注意しようとするが、黒乃の真剣な顔を見て口をつぐんだ。

「容態は！？ トミーさん！ できましたよ！ 記憶を移すことができるようになりました！」

「……既に危篤状態で、おそらくもう目が覚めません。」

「なにっ！？ 早くしなければ！ トウール、外のやつらを急かせ！」

「はいっ！」

黒乃の剣幕に慌ててでていくトウール。

しかし黒乃の後ろからトミーの妻がでてきて、遠慮がちに声をかける。

「……テアナク様。夫も昨日に、テアナク様が自分のために寝ずにやっていることを知って、大変感謝していました。しかし、夫はその施術を望んでいません。」

「どうして？ まだ若いでしょう!？」

「いえ、夫は若く見えますが、エルフとしては寿命に近いのです。夫はエルフの将来を考えて長生きしようとしていたのですが、元々その未来を視れずに先に逝くことに納得していました。レストのエルフ族を率いるには自分よりも若い者の方が良いというのも私と夫の見解でした。」

そして、テアナク様にも夫は迷惑かけないように言っていないかったようなのですが、夫は出自が複雑で、人族とエルフ族のどちらからも狙われる立場にあった人物なのです。今まではそれでも慕ってくれるエルフたちを守りながらきました。先日の事故は不覚を取った結果でして、もうこれ以上自分が生きていることが知られたら、他のレストのエルフや他の種族まで狙われる可能性があります。

ですので、夫をもう逝かしてあげてください。私からもお願いします。」

「その……トミーさんを、狙った、組織は、なんという奴らなん、です……。」

友に教えてもらえてなかった寂しさと、友を殺した者への怒りで黒乃のきれいな瞳は濁っている。

「言えません。彼らの狙いは夫のみ。もうレストには関係なくなります。勝手ですが、夫の遺言でもテアナク様には教えないようにと頼まれました。テアナク様の道を無駄に遠回りさせてしまうのは耐えがたい、と。」

「勝手、だ……。」と黒乃は目を伏せたまま呟くが、自分が記憶を継承させようとしたのもトミーの希望を聞かない勝手な行為であったことを思い出し、そのまま開いた口をつぐんだ。

パステルがそつと近寄り、黒乃を部屋の外に連れていき、城まで連れて帰った。

黒乃を黙ってパステルを抱きしめたままベッドに倒れ込んだ。

部屋に残ったセルヴィの内心は冷めている。

トミーは良い男であったが、十分天寿を全うしたという年齢だった。そうだし、致命傷を負ったのも彼の過去の事情が理由で、自業自得といえる。

彼のおかげエルフ族数十人がまとまっていたのは事実だが、彼がここにいたことで、大陸からの密偵のほかに暗殺者　しかも手練れが増えていたこともまた事実。主人である黒乃には伝えていないが、実際にエルフ族や他の種族に被害がでている。

そしてこの後もトミーが早めに代表を退いて後進を育てなかったために、エルフ族と仲の悪いダークエルフ族との衝突も増えるだろう。よって評価としては微妙になっているのである。

結果として今も、セルヴィの手は何の感慨もなくトミーを永眠にいざなった。

彼とその従者の歪みなのだろう。

従者は主人を煩わせないために情報を伏せ、主人は従者が全て伝えてくれていると思っていた　全ての情報に黒乃が目を通せるほど

の能力を持っていないことに気づかず。

結局、お互い甘えていたのだろう。

今回のことは悲劇ではない。起こるべきことが起こった予定調和、それだけだ。

残ったのは魔造人間化の手法と混乱の火種。そして【結界魔術】、セルヴィが刺したナイフに宿った恩寵のみ。

### 32話 半年後と魔造人間化（後書き）

あとがき

魔造人間化は、りりなのプログラム体みたいなのでできればいいな  
ーって思ってたやりました。

ちゃんと見てないんで、あの騎士たちの身体がどうなってるか知ら  
ないですけど。

### 33話 エルフ騒乱

トミーが逝去して二週間。

「出ていけっ！ 『穢れた者』ども！」

「うるさいわっ！ 我が先にいたのだぞ！ この『もやし野郎』どもがあ！」

居住区の間にある広場で向かい合うは二人の男。周りの取り巻きがお互いに罵声を上げ野次りあう。片方は白い肌、もう一方は浅黒い肌。そして共通するはその尖った耳。

エルフとダークエルフである。

エルフは豊かな森に住み、風の精霊に愛されている種族であり、ダ

ークエルフは荒廃した土地を好み、蛮族のように争いを何より好む種族。

と一般に言われているが、真実はそうではない。二つとも元々は同じ種族であり、今でも種族間の習性にそこまで差はない。

ただ、エルフはダークエルフとの生存競争に勝ったために、肥沃な森に住むことができ、ダークエルフは追い出されて荒廃な土地や枯れかけた森に隠れ住むことを余儀なくされ、限った資源を魔獣と奪い合うために戦闘力を磨かなくてはならなかった、それだけだ。

エルフは魔術の扱いに総じて長けているために、種族として自尊心が強く、他の種族を見下す傾向にある。それが起こしてしまったのがダークエルフやドワーフとの対立だ。

エルフの蔑視が巻き起こすことは、彼らが最も嫌う人族と何が違うのだろうか。どちらも自らの行動は神聖で正しいと言い張り、相手を汚れた者、下等な種族だと侮り迫害する。

人族の場合は亜人の奴隷化で、エルフの場合はダークエルフの追放やドワーフの迫害だけだろう。両者に根本的な違いはない。

このように、元々火種の元となる問題はそこかしこに転がっていたのだ。

騒動は大きくなり、先日は重症者がでた。このままでは近いうちに死者が出て、引けない泥沼の争いに発展していくだろう。

トミーは寿命が近づいていたし、日々溜まり続ける煙りは自然発火

する寸前だった。元々会っただけで殺し合いをするような対立が種族間で形成されていたのだ、それがクロノ・テアナクへの信仰とそれを支える従者たちの武力によって押さえつけ続けるのも時間の問題だった。

「ですから、ご主人様が、黒乃様が心を痛める必要はありませんわ。」

そう提案するも反応しない主人を見て、パステルはそつと溜息をつく。もちろん主人に対する失望ではない。彼女にとって主人を否定することはありえないことでタブー、それが彼女の歪んだ世界。

主人である黒乃の優しさが黒乃を傷つけているのが心配なのだ。あの傲慢な種族をレストから消し去ろうか？ などと物騒な考えも選択肢としては考慮している。主人が許してくれるわけがないので、序列としては最下位だが。

「でも……私がもつとうまく気を配っていれば……。」「黒乃はパステルしかいないところ限定で、弱気になると昔の口調に戻ることがある。彼にとって以前の口調はハリスとその娘ヘイゼルに誓う前の弱さの象徴。よってセルヴィやトゥールの前ですら、この口調に戻ることはない。」

「トミーさんに任されたのに……」

「ご主人様は、エルフと他の全種族のどちらが大切ですか？ 守りたいですか？」

「それは……」

「エルフ族はシークリッド大国の東の果てに国を造っていますし、新大陸にも移住していると聞きます。それに魔術を扱えるのですから王国や帝国でも隠れて住むことができますよ？ しかし他の貧困にあえぐ人族や、獣人族は必ずしもそうではありません。抗う力を持つエルフよりも遥かに厳しいです。」

それに王国で狩られたエルフもほとんどが無駄なプライドを發揮して返り討ちにあつたり、人族を侮っていた愚か者ばかり。パステルにとっては擁護する理由がない。

「そうですね、エルフの皆さんに聞いてみませんか？ 他の種族と喧嘩せずに同じところで生活するか、出ていくかを。出ていきたいというなら止める必要はありませんわ。」

選択を絞る。この言葉には毒が含まれている。

「……ダークエルフやドワーフ側にも問題があるのかもしれないけど、今回の騒動はエルフの責任が大きい、か……。わかった、同じ国で暮らせないなら仕方ないね……。伝えて来てくれ。」

「ええ、了解しました。同じ区画エリアで暮らせないならいつまで経っても仲良くなれませんものね。」  
パステルは妖しく笑った。どうしてか嬉しそうなのが黒乃には謎だった。

「テアナク様の従者、パステルです。テアナク様は此度の争いをと  
ても悲しく思っています。余裕があれば時間が解決してくれるのを  
待つということもできますが、あいにくこの国はまだまだ不安定で、  
燻り始めた火種をいつまでも放っておくことができません。」

よって、エルフとダークエルフで同じ区画に住んでも問題を起こさ  
ない者しか、この国に置いておくつもりはありません。今回はエル  
フ族側の非が大きいと考えられるので、エルフ側でテアナク様の決  
定に従えない者は出て行つて結構です。」

城から翼で一直線に南下して居住区に來たパステルは、エルフ達が  
争っている広場に降りたち、【拡声】で告げる。

「なっ!?! 穢れた者どもと同じ区画で生活しろだ!?!」

「そうだった出ていけ! 俺たちダークエルフはエルフと生活するこ  
とに異議などない! あいつらが拒否するだけだ!」

「相手を煽らないように。出ていく方は荷物をまとめてください。問題なく生活できるという方はレストでの今まで通りの生活を保障しますわ。」  
「パステルが再び声を届かせる。」

「あの、もうやめようよ……王国から逃げてきたのにまた喧嘩しなくたって……」

一人のエルフの娘が激昂しているエルフを遠慮がちに嗜める。

「うるさいっ！ そんなに下等種族と一緒にいたいなら勝手にしろ！ 僕はでていくからな！」

しかし頭に血がのぼっていたエルフの男の耳には届かなかったようだ。

同じ区画に住むという条件は受け入れがたかったようだ、ダークエルフやドワーフの近くにいると穢れてしまうという教育を施された彼らにとっては。

他のエルフたちも意見が割れている。

屋敷に侍女として来ていた娘や歳をとった者たちは今更出ていこうとしないが、若い男たちは血の気が多く、魔術を他の人族や獣人族まで覚えたせいで優越感が薄れていたこともあって、一人、また一人と抜けていき、結局エルフ族の内13人がレストからでていくことになった。

全員騎士団に入れず、多民族に後塵を喫して不満を溜めていた者たちであった。

「ふんっ、俺たちを追い出して後悔すんなよな!!」

こうしてパリスに行く輸出船にのり、13人のエルフは出て行った。

そして残ったエルフとダークエルフは、一応の和解をした。暫定的な和解であるのをお互いわかっているので、前より悪くことはないだろう。

「全くよお、あの下等種族たちと来たらよお。」

「われら高貴なるエルフを追い出すとは精霊が罰を下すだろうね!」

「あの女どももほだされやがって。」

「あのテアナクって人族のどこがいいってんだよ。ちっこいしよあ。」

「そもそも俺たちみたいなの神聖なエルフがあんな人族の若造の下にあつたのが間違いだつたのだ！」

「うむ……トミーの爺さんが行くっていうから着いてきたが、我には耐えられなかった。」

「そういえばトミーのじじいの死骸をテアナクってやつがどうしたかしててるか？　なんと頭蓋骨を取り出して、血肉も実験に使ってるらしいぜ」

「やはりあれは所詮傲慢な人族ということよな。」

「はっは、ちがいねえ！　まああれだな、感謝することと言えば、あいつが俺たちに恩寵技能を刻印してくれたことと、『幻影』つきのピアスを渡してくれたことだな。」

「たしかに！　それだけは役に立ったよなあ。まさか赤の他人にあるんな馬鹿なことするやつあいるとは思わなかったぜ」

「な！　これからは恩寵とピアスを存分に使って生きるかねえ。」

「それいいな！　そういえば次の街にレストから買い出しにでてる商人がいて、その中に若い娘がいたはずだぜ」

「ほう、何族だ？」



「なんだ、子供かよ。」

「あれ、確かテアナクの周りにいた双子じゃないか？」

「嬢ちゃんたち、道に迷ったのかい？ 俺たちが次の街まで優しくしながら連れて行ってあげようかい？」

セルヴィを視認した瞬間に下卑た表情に変わる。セルヴィも自分の少女の容姿が油断を誘えるのを知っているために、あえて殺気や威圧感を出していない。

しかし、

「はんっ！ どーこが高貴なのよばあーか！ あんたたちなんか下種の中の下種よ！」

トウールが激昂して馬車の側面の林からでてきてしまう。会話が全部聞こえていたので怒りが溜まっていたようだ。

「ああ！？ 人族風情が何いってんだぶっころすぞ！」

「あんたたちみたいな雑魚にできるならしてみなさい！」

「後悔すんなよ……！ 風の精霊！力を貸せ！『風斬』！」

トウールの挑発にのり、一人が魔術を発動させる。

「そつちこそ！ 『エネルギーブラ』」

「『封魔結界』！」

トウールが応戦しようとした核属性の魔術を放とうとした瞬間、セルヴィが動き、馬車を囲んで封魔結界を張った。

ザツという音とともに6人の黒髪の少女たちがセルヴィと同じように符を掲げたまま林から出てくる。彼女達はセルヴィやトウールの後継のホムンクルスたちで、同じように黒乃の根源の一部を持って

いるために、封魔結界を張る際の魔力の同調率がほぼ100%であり、簡単に半径20mほどの封魔結界を張ることができたのだ。

「なっなんだこれは！」

「魔力が練れないっ!？」

「もうお姉ちゃん、余計なことしないでいいのに。」

「せっかく実践の機会があるのだから、無駄にしちゃだめですよトウル。資源の無駄遣いは創造主に叱られちゃいます。」

「ん……わかった。」

いつも頼ってきた魔術の発動ができずに狼狽えるエルフたち。彼らは近接戦闘の心得などない、典型的な大陸魔術師だった。何が起きたかわからないために対応策を考えることもできない。それを尻目にのんきに会話するセルヴィとトウル。

「セルヴィお姉さま、トウルお姉さま、準備が整いました。」

そういつて声をかけてくるは黒髪に紫の瞳をもったホムンクルス。彼女たちはこの間にも封魔結界内に魔力を練り上げ、祭壇を用意していた。

「ご苦労さまです。さあ、トウル？ トウルも『神降ろし』を経験してみましようか。」

そう言い、トウルに長さ80cmほどの剣を渡すセルヴィ。

「えー。めんどくさいかも。」

「その鉄扇、黒乃様がトウール用に作った礼装ですよ。」

「えっ!? ……ごほん。仕方ないなあ。そこまで言っただけならやっただけ。」

めんどくさいと断ろうとするトウールは、セルヴィの言葉でやる気がでたようだ。主人からの贈り物、しかも自分用となれば被創造物にとって最高級の労いだ。

そしてトウールが結界内の祭壇に立ち、目を閉じる。エルフたちは相変わらず動けないでいる。結界から逃げようともせずには棒立ちだなんて滑稽だ、とトウールは嗤う。

「『神降ろし』!」「」

結界を張っているトウールの妹たちが発動するとともに、結界内に溜まり渦巻く黒い魔力がトウールの持つ鉄扇に注ぎ込み、漆黒の奔流は鉄扇を所持するトウールにも影響を与える。

「舞いなさい。」

その言葉とともにトランス状態に入ったトウールは鉄扇を広げてエルフたちのほうへ向かう。と同時に封魔結界が解かれる。これに気づいたエルフたちは今が好機と魔術を行使する。

「なっ! あたったはずなのに火球がきえた!」

「こつちも首元に『風斬』を放つたのにきえちまった！」

「やはり陰陽術は面白いですね。神が降りた状態では魔術無効化、むしろ魔力を吸収して自分の力にすると。大陸魔術に負けないという言葉は本当のようです。」

しかし今のトウルに魔術は通用しない。

セルヴィは結果に満足する。これなら魔術師を用いて王国が攻めても妹達で迎撃できると。

彼女は他の人達が陰陽師を修めるのに期待していないため、自分たちが有効的に使える、創造主の役に立つとわかって安堵した。

ビュンツ！ シュンツ！

トウルが普段の数倍で動くと共に鉄扇をもつたまま踊るように舞い、鉄扇が月光を反射し銀の弧を描く。鉄扇の数倍の距離まで斬撃が届き、その度にエルフたちは絶命していく。

「あ、あんたたちは何でおれたちを襲うんだ！ あんたらが言うとおり国の外にでたじゃねえか！」

「そ、そうだ！ もう俺たちはレストに関係ない一般人だぞ！」

エルフが叫びだす頃には生き残りは4人しかいなかった。それぞれで叫ぶのを聞き、セルヴィは首をコテつと可愛く傾げた。

「はて？ レストに害をなした者を許しておくわけがないでしょう

？ 悪い噂も広まってしまうすしね。」

「創造主マスターが保護し目にかけるのは国に所属している者だけ。国民は私達も手荒な真似をしないように厳命されている。」

「でもあなたたちはもう国から出たのでその縛りから私達は解放されます。」

「この国は治安が悪くて盗賊がよくでるらしい。命が軽いから気をつけなくてはね。」

「ええ、道中には何があるかわかりませんからねえ。」

セルヴィとトゥールが交互に話す。トランス状態だからトゥールの口調が少し固い。

「そんなめちゃくちなな！」

「助けてくれ！！！」

命乞いを始める残りの4人。

しかし、ここにいるのは創造主至上主義のホムンクルスのみ。

「あなたたちが創造主の悪口をたまに言っていることは知っていた。」

「さつきも思いつきり言っていましたたよねえ。創造主の優しさを侮辱されるのは許せません。ということどトゥール、このつまらない寸

劇を終わらせなさい。アンコールはいりませんよ。」

数分後には血痕を全て隠し、エルフの死体を馬車につめこんで空へ飛ぶホムンクルス8人の姿があった。

「お姉ちゃん、この死体はどうするの？」

「そうですね……創造主に渡すと気付いて無駄なことで心を痛めてしまうかもしれませんからね。私たちで実験に使うか、海にバラバラにして捨てるか、どっちにしましょうか。」

「頭蓋骨は全員分回収しといたほうがいいか。どっちにするかは姉妹で多数決を取ろうよ。」

そういつてトウルは8人で多数決をとる。結果、実験が4人、バラバラも4人だった。

「同数になっちゃいましたか。ならば6、5人ずつに分けてそれぞれの案に使いましょう。」

「あはは、仕方ないね。それでいいか。」

そういつて笑いながら空を気持ちよさそうに飛んでいくのだった。

33話 エルフ騒乱(後書き)

パステルやセルヴィに呆れることが多いトウルですが、彼女も基本歪んでる気がします

### 34話 城、魔改造とマギレーヴェン

パステルが諭して行われたエルフ族13人の追放が行われている頃、そんなことは些事だと言わんばかりに自分たちの好きな事をする者たちがいた。

「これどう？ レンさん！」

元気に声を掛けるのは、茶色いストレートヘアに茶の瞳をもつ人族の少女ステラだ。

「ん〜たしかにそこにトラップを仕掛けるのは有効かもしれませんがね。」

丁寧な物腰のロリ巨乳な緑髪少女はハーフエルフのレン、たまにマツドな研究者である。

「いやー楽しいわねえ、迎撃機能をつけるのって。レンさんは何をやってるの？」

「年頃の女の子がそんなことに興味を持つなんて……クロノくんが

聞いたらあきれますよ？ 私がやっているのは掃除スライムの作成です。今実験してたんですが、やっと完成しました。」

ステラはタメ口でレンは敬語を使っているが、実際はレンが10も年上である。

この二人はお互いに実験好きや工作が大好きという点で同い年のように仲良くなっている。

……それに彼女たちは年齢を比べるのは無駄になっている。

「もう呆れられているわ。この身体になったときにも、何度も確認されたもの。」

掃除スライムかぁ。以前作ったやつは衣服も食べるんで駆除するまで大変なことになったわよね……。」

「17歳の少女が魔造人間 『マギレーヴェン』と命名された化してくれて言うなんて思いませんよ。黒乃くんはトミーさんの時からあの術は封印するつもりだったそうですし。」

今回はちゃんと埃や生物の死骸だけを食べるようになってますよ。その条件をつけるのに莫大な時間がかかりましたけど。」

そう、ステラは既に肉体を手放し、自ら魔造人間になったのだ。つまりは今城の廊下に立っている彼女は魔粒子で構成されている。

「んー元々そういうの試してみたかったのよ。【体内魔力行使】で若さを保てるって言われたけど、この身体なら決して歳をとらないし、食事も必要ないから便利よ？ たまに血や体液を取らないと中心核が劣化しちゃうという話だけ。」

スライムに関してはおめでとぅ。さらに侍女の仕事がなくなるわね、今でも暇でサカってるのに。」

「いや、そういう問題ではない気が……。子供を産めなくなるんですし。」

城がやたら大きくなったから侍女やお手伝いも一気に増えましたからね。」

「それは冷凍卵子を抽出したから大丈夫ってクロノ様が言っただわよ？ それに私の身体も冷凍して残してあるのだから大丈夫でしょ。もし身体がダメでもホームクルスになればよいのだし。」

侍女たちもクロノ様を狙って大変そうだわ。ほんとに私達は初期組でよかつたわよね、早めにご寵愛を頂けて。」

ちなみに行方だけなら魔粒子で構成されていてもできる。ステラの身体が質感も全て再現されているのだから。」

「そういえば培養器（？）がどうかで子供が造れるって言ったね。クロノ君は根源を深く見られるから、生命を造るのも変質させるのも自由自在ですし、とんでもない恩寵ですよ。皆さんが天使だ、神だ、っていうのもわかる気がします。」

最後のはノーコメントをお願いします。」

レンさん真っ赤　　って言ってステラがからかう。

黒乃はステラがどうしても魔造人間になりたいと言ってきた時に、慌てて魔造人間状態から人間の身体に戻す研究を始めた。そしてそのとっかかり　　本人の頭蓋骨を用いずにケインを造れるようにした。よって身体は無事なまま　　を見つけた所でステラに押し切られて魔造人間化を行うことになった。

なのでステラが自分の身体に戻りたいと言った時に戻せるかは未知数である。

ステラがやっているのは、城の内部にトラップを仕掛けることだ。今の所はどこかが攻めてくることもないが、城の対空迎撃は必要ということ、セルヴィが塔から射出される矢や、特定の場所を通ると発動する魔法陣などを取り付けていると、ステラが設置を見ている興味をもったのである。セルヴィの下で修業中の身となっているのだ。

ステラとしては、自分が魔造人間になってケインを壊されない限りは倒されても死ななくなったのだから、この城を守ろうという思いもあるのだ。

そのために侵入者撃退を考えるのも当然といえよう。

ちなみに、ケインには親馬鹿な黒乃が【不可壊】を刻印したので、余程のことがない限りは大丈夫である。

「レンさん、敵だけを溶かすスライムって作れないの？」

「敵かどうかを認証するのがまず難しいんです。血を与えて味方を認識させるにしても、人数が多いと無理です。誰かが命令を与えて敵味方を判断するならいいのですが。」

「ふーん、そう上手くいかないかあ。」

「迎撃はスライムに頼るよりも、ガーゴイルを使ったほうがいいと思いますけどね。対侵入者での勝利条件は奥に進まれないことですから、相手の足を止められないスライムは不得手です。」

「ガーゴイルも動きは鈍いし、単純な攻撃しかできないのが不満だ

なあ。やっぱり人の撃退は人がやらないとだめか、ということだ  
訓練してくるわね。」

そういつてステラは自分のケイン　ブレスレット型　を持って  
城の外へかけていった。

レンもそんなステラを見送って溜息をつきながら、城の中に新たに  
与えられた研究室に戻っていく。掃除スライムの後は何を造ろうか  
しら、と。

「そっだ、落とし物を拾うモンスターを造りましょう。城が広いので  
物を失くした時になかなか見つからないのですよね。」

えっと、素体はクロノ君が造ったネズミ型合成獣にしましょうか。  
ゴミと区別するのが難しいですね。やはり形があるか否かでわけ  
べきか、汚れの多さでわけ」

レンもすぐに自分の世界に入ってしまった。

パステルが私室で机に向かって何やら作業をしている。

パステルの私室は13階にあり、14階の黒乃の私室にすぐ駆けつけられるようになっていた。

13階や14階になるとワンフロアの広さが40m四方くらいしかない。……40m四方が狭いと思うほど下の階になるにつれて広くなっていくのである。

この城の一階はなんと5km四方もあるのだ。よって城には空き部屋も多く、一階や二階には様々な公共施設も入っている。

城の中央にはエレベーターが通っていて、階段で来なくてもよい構造となっている。エレベーターは魔力式で、常に二人のエレベーターが居て操作を行っている。動かせるのは許可証をもった人間だけなのだ。これは防犯上重要なことである。

防犯といえば、城の外には対空迎撃装置や術式が大量にあるし、壁や床を壊して侵入できないように、黒乃とパステルが1か月かけて城中に【固定化】をかけてまわった。最初に『固定化』を城を造ったドワーフたちがかけていたので魔術と恩寵の二重掛けだ、滅多な事では壊れないだろう。

そして迷いやすい構造も侵入者対策だ。

黒乃は気づいていないが、この島にはいつてくる不審者は相当な数でなので、幾度もスパイを排除してきたパステルは、城を造ると噂

を聞いた時に迷路のようにすることを指示した。

これで正しい道を知らずに彷徨うスパイを見つけるのである。

だからこの城に仕えにきた侍女たちは真つ先に構造を覚えなければならぬのだが。

パステルはこの半年間も陰陽術を研究し続け、封魔結界は完璧に理解している。そして10階以降を全て魔術を使えない空間に設定した。

これも防犯だ。結界を張る起点は15階を中心に。基点を各階の壁に仕込んだために大規模な封魔結界が発動し、登録されたものしか魔術が使えなくなっている。

また、城の近くを通っていた龍脈から魔力を吸い上げる術式を作成し、城の内部を魔粒子で強く満たすようにしている。

普通の魔術師にとっては魔粒子の密度が増えたところで大して何も変わらない。たしかに魔粒子を使いすぎてなくなれば魔術が使えなくなるので魔粒子が多いに越したことはないが、それでも周囲の魔粒子が無くなる前に自分の精神が先に参ってしまうのがふつうだ。

しかし、この城には魔力で構成されて動く魔造人間 マギレーヴェン がいる。といっても今はステラー人だが、実際にはマギレーヴェンになりたいという娘はけっこういるのだ。黒乃はあずかり知らぬことだが。

パステルやセルヴィも何度か侍女から相談されているのだ。

この二人はどうすればマギレーヴェンになれるか聞かれた時には「身体を鍛えて強くなってから」と返している。

なぜこう返すかといえ、二人はマギレーヴェンを素晴らしい戦力

だと考え、増やしたいと思っていて、マギレーヴェンにした瞬間の肉体情報が再現されるために、最盛期で登録した方がいいからである。

疲れを知らぬ戦士、死んでも魔力で黄泉がえり、経験を積んでいくことができる。死の経験など人生で一度しかできず、そこで終わる。しかしマギレーヴェンは前提を覆し、死の体験すらフィードバックして強くなり、しかも激痛はシャットアウトするようにも設定できる。

死を恐れず、何度でも復活し、どんどん強くなって帰ってくる。こんなに恐ろしい戦士があるだろうか。相手がスケルトンなどの頭の悪い生物ならいざ知れず、同じ知能をもつ者が向かってくるのだ。

これらの利点をパステルはトミーが亡くなる時に見抜き、セルヴィに相談したところ、同じ意見を持っていたので侍女たちにマギレーヴェンのことを伝えたのだ。ちょうどステラが黒乃を押し切ってマギレーヴェン化した所だったので宣伝にもなった。

若い娘が望むのは永遠の若さだ。それをマギレーヴェンは手に入れる。

彼女たちに伝えたデメリットは肉体を捨てるという点と、中心核<sup>ケイン</sup>から遠くへは行けないという点と、たまに他人の血液や体液を吸収しなければ劣化するという点。

しかし魔力で構成されているといっても、根源の情報を元に正確に肉体が構成され、味覚を感じることもできるし、他人と触れ合うこともできる。行き過ぎた痛覚の遮断や調整までできる。魔造人間化する時にした設定は変えられないが　のだ。

子供を成すのも冷凍卵子を保存するか、冷凍している自分の肉体に戻るかすればよい。

中心核を破壊されない限り寿命は永遠で、黒乃がケインに【不可壊<sup>ケイン</sup>】を刻印するために滅多に壊れない。黒乃がケインに刻印すれば恩寵が持てるのは今と同じ。

そして遠くへ行くには自分のケインを自分で持てばよい。幸いにして腕輪型やペンダント型など種類がある。

最後のデメリットである血液は動物のものでもいいために困ることはないだろう。おそらく黒乃の血液や体液を狙ってくるだろうが。

ちなみにマギレーヴェンの血液は本物の血液ではないので意味がない。

服は基本はマギレーヴェン化した時の服だが、魔力を弄って自分の服を違う服にすることくらいはできる。体型を変えると根源の情報と一致しないためにできない。よって服代も必要ないのだ。一度魔粒子に戻ってまた再構成すれば服を着た状態にできるのだから。

ただし戦闘中にオシャレな服を着ると、それが破けたらそのままの姿で戦うことになってしまうので注意が必要となる。あくまでも服を再構成できるのは、身体ごと再構成するときのみだ。

ここまでメリットを並べれば、この生命倫理など存在しない時代、厳しい訓練と戦いが待っていたとしても、マギレーヴェンになりたいたいと思う娘は多かった。

材料に使うヒイロノカネは少量といえどもかなり高いので、しっかりと鍛えた者のみに施術を施すとすれば、マギレーヴェンになりたい娘たちもやる気が出てくる。

ちなみにパステルとセルヴィは、娘たちにある一つのデメリットを

言っていない。

それは、彼女たち自身の肉体を無傷のまま、違う人物の頭蓋骨とヒイロノカネをケインにする場合、拒否反応が起こるかもしれないということだ。

これを教えると、ためらう娘が増えると思って教えなかった。パステルたちにとって娘たちの優先順位は、黒乃と比べて遙かに下なのだから。

パステルが机でしていたのは、以上のこと　　城の防犯とマギレーヴェン　　に關係する研究をまとめることだ。

一度丁寧にまとめれば他の者が研究するときにやりやすくなる。

防犯に関しては、特に重要な資料がある11階以降は絶対に立ち入らせてはならないので、新たに兵器を開発しようかと考えている。今考えているのは壁で押しつぶす仕掛けだ。しかしどうしても壁やその周りの強度が低くなり、一度引っかかると簡単に避けられてしまう。相手が魔術を使えない結界内なので抜かれることはないと思うが、万全を期すのが従者の役目だと思うゆえに。

そのためにもマギレーヴェンに値するような娘が出てきてほしいと考えている。

そしてマギレーヴェンを造るための頭蓋骨を回収するために、だれか使いをやって死刑囚の死体を買ってきてもらわないといけない。根源が多いとなお良し。

ちなみにパステルやセルヴィが率いるつもりなので男はマギレーヴエン化しない。パステルや娘たちは黒乃を天使や神として崇拜に近い感情を持っていて、またそれを恋愛感情に転化する者が多いためにまとまりやすい。同じ男性を慕うものとしての結束が生まれる。しかし、男をレーヴエン化すると黒乃を尊敬や崇拜することはあっても、最も簡単な崇拜の形である恋愛にはなりえないし、女性が周りにいると男性は欲がでてしまい、黒乃を裏切る可能性もあがってしまう。

それにいちいち好色な目で見られるのは嫌だというパステル、ステラ、セルヴィ、トゥールの考えによって女性だけにすることにした。彼女らにとって見てくれるのは黒乃だけでいいのである。

そんな事情に巻き込まれてマギレーヴエンをさせてもらえない男性は少し不幸かもしれない。

「こんばんは、セルヴィです。」  
突然窓から入ってきたのは黒髪に水色の瞳をもつホムンクルス、セルヴィだった。

「よく迎撃を避けて入って来れましたわね。あなたのことは認証していなかったはずなのに。」  
そう、パステルは黒乃と自身以外は迎撃術式の対象外にしていない。

「エレベーターを使うのすら煩わしかったものですから。さっきまであなたに頼まれて一仕事してきたのですよ？」

パステルの問いには答えず、セルヴィはドサドサつと死体を落とす。出て行ったエルフの死体だった。パステルが【電心】で愚かなエルフの討伐を依頼したのだった。

「全く、その間あなたは創造主マスターを慰めているなんて卑怯ですよ。セルヴィの目が少し吊り上る。不満を感じているようだ。」

「お疲れ様です。でも妹たちの実地訓練をしたいとトウルが言ってきたのですから、文句はあの子に言って下さいな。それよりも残りの死体はどうしたのですか？」

前半の言葉は半分嘘で半分本当だ。依頼をしたのはパステルからトウルへ、そしてトウルはやり方を自分で決めると言ってきたのである。

「残りは海で魚の餌にしました。でも頭蓋骨は全員分もってきたのですから文句はないでしょう？」

「ええ。でも侍女たちでマギレーヴェン化に値する子が出てこないですから、材料だけあっても意味がありませんけどね。」

「あっても無駄ではないでしょう。少し劣化はしますが。それにまだまだ時間があるのですから、のんびりと育てましょよ。」

あ、それとこの城の防衛の話ですけど、死んだ侵入者を自動でゾンビ化しちゃう術式って作れませんか？ かつての仲間が蘇って襲いかかってくる、しかしゾンビみたいな！ というのは面白いと思うのですけど。」

セルヴィが名案を思い付いたというようにクスクスと笑う。

「あなたも悪趣味ですわね。黒乃様がそれを知ったら何と仰るかしら。」

「こればかりは性分です。純粹属性はツールに置いて来たんですよ。」

そうしてセルヴィは入ってきた窓から出て行った。嵌められているガラスは黒乃が『錬金』で何とか作ったのを、パステルや地属性魔術師が地道に複製したものだ。未だに城の全ての窓に配備するには至っていない。

少し窓から月が浮かぶ夜空を眺めたあと、パステルは仕事に戻った。24時間働けるパステルに夜は関係なく、精神的に回復するために黒乃の血を頂ければ問題はない。

既におねむな小娘セルヴィとは違うのだと、パステルは一人思いながら、明日の侍女たち　マギレーヴェン候補　の訓練メニューを考え始めた。



34話 城、魔改造とマギレーヴェン（後書き）

マギレーヴェン。やりたかったことの1つ。

35話 エピローグとプロローグ(前書き)

今回は短いです。かなり。

### 35話 エピローグとプロローグ

大陸歴1846年

「きゃあああああ!」

「腕が! うでがあああああ!」

「やめっ、もうやめて! もう」

ここは地獄絵図だった。

赤々と燃え盛る炎に煉瓦でできた家が飲まれ倒壊し、中にいたであろう悲鳴が聞こえる。潰走していく魔術師や兵士たち。どれだけ優秀な者でも数の暴力には勝てない。男は殺され女は犯される。上位世界でもこの世界でも幾度も繰り返された光景。

苦勞して作った家も、畑も、工場も焼き払われる。

逃げ遅れた一般市民に残るは絶望のみ。

殺害か、私刑か、強姦か、奴隷化か。

この世界において軍に規律なんてものはなく。あっても行き届いて  
いるわけがなく。

蹂躪は、征服は、席卷は、極上の蜜となる。

亜人と貧困にあえいだ人族の開拓した地は、人族の本質である略奪  
により、王国の覇権をより磐石とするものになる。

肥沃な土地とその鉱山資源、漁業資源で栄えることとなる、迷宮島  
ブリトニアが生まれた日。

「この階は絶対に通すな！」

「もう魔王は仕留めた！ いさぎよく投降しろ！」

「騎士の役目は護ることだ！ この城を守れと命じられた以上絶対に死守する！」

「おいこいつら、髪飾りやら腕輪に『奴隷の首輪』をつければ奴隷にできるぞ！」

「きゃああああ！ やめっ」

「下の階まで制圧完了しました！ 捕虜50名、全て拘束か奴隷化が終わりました！」

「捕まった者は自害しろ！ 我々に死は存在しない！」

「ここは魔術が使えない！ 矢で面制圧せよ！」

魔王上と呼称されることになる城の10階で戦闘が行われている。

この階を死守せんとするは十数人の女性の騎士、全員が同じ甲冑を着込み、魔術と剣を併用し、敵を薙ぎ払っていく。

この階を落とさんと欲するは数百人の精鋭。魔術が使えなくなっても、弓兵によりすぐに立て直してくる。

「引くな！ マギレーヴェンナイトの底力を見せるのだ！」

「全てを奪え！ 全てを壊せ！ 全てを倒せ！ 正義は我らが神聖  
エウルーペ王国にあり！」

数に押される騎士と、狭いが故に決めきれない王国兵士。

初代迷宮『魔王城』。

莫大な資源と貴重な武器に、発達した魔術の資料と新しい発想の原  
典、それらを内包した正しく宝の山として知られることになる。

「これで終わりだな、魔王ティアナーク。単純が故に効果があったか。」

声をかけるは特殊な鎧を着た兵士たち。

顔には追い詰めた者特有の獰猛な笑い。相手の全てを握っているという愉悦。

「……下種が。」

答えるは満身創痍の黒ずくめの男。

流している血液からも無数に刺さる矢からも、男が既に虫の息であることがわかる。

「あつはつはつは！　これが人族の強さだ。

亜人に慕われて人族を侮ってたんじゃないか？」

歴史から人族は卑怯であり、それが強さなのだと一目瞭然だろうか？

兵士の一人、リーダー格がそう発言する。

手にもつ鎖の先は、緑に近い色合いの透き通るような髪をもつ少女の、細く白い首につながっている。

「すっかり、面白いもんだたくさん残してくれたっすねえ。この女たちもそうっすけど。」

そう言って仲間へ同意を求める男の手元には二重の腕輪があり、黒づくめの男に『破魔の槍』を向けるうら若き少女が立っている。

「んじゃまあ、喋るのも追いかけてこも飽きたしな、終わらせようか。」

リーダー格の男はそう嘯き、首輪をつけていたシルフの少女を黒づくめの男に蹴りだす。

「なっ？」

黒の男はその行為に驚愕する。自分を追い詰めた少女を手放したのだから。

「エルルーペ王国国王ジェラルド・アークライト様　いまはエウルーペ神聖王国国王か　の指示さ。」

よくできた筋書きだろう？　魔王を倒すために聖女がその身を捧げました。その功績は後世に語り継がれましたとさ、ってな！」

言い終わると同時に後ろで構えていた矢が無数の雨となって降り注ぐ。

黒の男は魔術で弾こうとするが少しずつ当たり刺さる数が増えていく。

そしてそこに破魔の槍をもった騎士然とした少女が駆け

「がはっ！」

突き刺した。

黒の男が右手にあつた一振りの剣を離した。口から鮮血が零れ落ち、肺がひゅーひゅーと音を立てている。しかしおもむろに左で『何か』を取り出し、

「……三流だよ、……役者としても、兵士としても、な。

『えいえんのせかい』。

いっしょに、止まれ。」

『びっぴ』

世界が止まる音がする。

闇。暗い。黒い男の周りにいた兵士数十人の視界が染まる、浸食される。

身体が動かないことに遅まきながら兵士たちは気づく。

そして思考も 止まった。

この日、島の北側、海岸に黒く大きな氷が現れた。何をしても溶けず、いつまでもただあり続ける。

これから数十年間、『魔王の氷棺』と呼ばれることになる。

「……懐かしい夢を見ていた。」

黒の男は回想から戻り、瞑目したまま呟く。

男がいる部屋は質素な部屋だ。床には何も敷かず、インテリアの類もおいていない。あるのは簡易式の王座のみ。

しかし、彼にとっては十分。胸に光る銀時計、傍らに控える従者3人。そして目の前で、破魔の槍の女騎士を中心として臣下の礼をとるマギレーヴェンナイトと、その後ろに跪く兵士たち。

顔ぶれは種々多様だが、全員がこれからの復活劇を確信している。

そしてこれだけの部下がいれば、彼はどこでも彼女たちの王に、主人になれる。どんな状況でも王で、主人であり続けよう。

563

「<sup>ケイン</sup>中心核の回収状況と、部下の係累の保護状況を。」

「はい。前者につきましては25%、後者は10%であります。」

「そうか、少ない戦力では十分な成果だ。自由に動けたのもここ20年ほどだけだったろうに。」

「もつたいないお言葉。部下も浮かばれましょう。」

黒の男と傍らの純白の従者が格式ばった問答をする。以前の關係に

戻れないことをお互い感じていた。

黒の男は部下をゆっくりと見渡し

「時代は代わり、私たちの技術や神刻物レリックはばらまかれ、亜人は激減し、さらには新たな敵性種族出現の噂まである。

しかし私の目的は150年前と変わらない。

弱者が蹂躪されぬ世界をつくるために。

まずはこの浮遊島アークを用い、部下を奪還する！」

力強く、宣言した。

大陸歴1995年、新たな歴史が紡がれる。



35話 エピソードとプロローグ（後書き）

8話ほどに渡って、回想で埋めていきます。

### 36話 亜人狩りと、裏切りの騎士アルメイダ

「なんだこいつらは!?!」

「狩りは中止です! 逃げましょう!」

突然の出来事に慌てているのは二人の男。

醜い太った男と細見のいかにも腰巾着といった風貌の男だ。

彼らは焦っていた。

二人がいるのは、シークリッド大陸の西端にある神聖エウルーペ王国から南に海峡を越えた先にあるダークヌス大陸。

暗黒大陸という意味で名付けられたこの大陸は、文字通り魔獣や一部の亜人が多数生息しており、『狩り場』として有名だ。

いつも通りにダークヌス大陸の北西にあるアルジェリンから少し西に行ったモーリタニアでの狩りを楽しんでいたはずだったのに。

王国の辺境開発最前線基地のあるナイジェリンとならまだしも、とつくに王国が基盤を築き上げた土地での残党狩りであったはずなのに。

安全圏からの娯楽としての狩りであったのに。

途中までは普段と同じ、楽な仕事であった。

今日の獲物は西の方に集落を作っている兎人族。戦闘能力は高くない、逃げ惑うくらいしかできない、獣人族にしては脆弱な種族だ。

そんな種族は奴隷にしても大して役に立たないと思われるだろうが、実際に兎人族の価値は高い。

なぜなら兎人族は雌しかおらず、しかもエルフほどではなくとも整った容姿をもつ割合が高いからだ。

よって労働奴隷や戦奴隷としては使えないが、性奴隷や愛玩奴隷として人気がある。雌型しかないのが兎人族は他種族の男の精をもらわねばならず、兎人族を孕ませる目的で飼う物も多い。発情期があるために比較的堕ちしやすいといのも人気の一つだろう。

よって危険度は低く、金も儲かり、更に気に入った娘がいれば奴隷として飼えばよいと、まるでピクニック気分で狩りに来たのだった。しかも今日は先日王都の知り合いから買った魔造戦乙女があるのだ、万に一つも失敗などない。

魔造戦乙女とは、失われた技術の一つであり、腕輪などの装飾品に魔力を注ぎ込めば騎士姿の娘が虚空から顕現するという不思議なアイテムだ。ケインという核が装飾品の中にあり、魔力を使って身体を構成しているらしいが、その質感は本物の肉体と全く相違ない。また死んでも魔力を注げば復活し、若い娘の姿のままのために、死地に放り込むのにも性欲処理にも使えるということ。亜人より遙かに価格が高く、しかも数が少ないためになかなか手に入れない。

こんな便利アイテムだ、もちろん数多の研究者が研究を重ねている

が、ケインは【不可壊】により壊すことができないうために研究が遅々として進まず、できたのは【屈従】【従属】【隷属】などの恩寵をもった首輪を上から重ねて奴隷化することと、それにより150年ほど前に王国に敗れた魔王ティアナークが作成したことを吐かせたくらいだ。

最も魔造戦乙女たち自身もどんな仕組みでできているか知らされていなかったようで、魔王が優れた技術を持っていたということを確認したに留まっている。

こうして特に気負うこともないままに兎人族の集落を見つけ、遠距離から矢を放ちながら包囲し、そして中距離になると兎人族が飛びかかってくる前に『亜人隷属』の魔術を使って片っ端から奴隷にしていく。

この『亜人隷属』は数十年前に現れた『大賢者』と呼ばれる、神聖王国に召し上げられた男が開発したという魔術で、そのあまりの効果と人族への貢献性から自称他称共に『魔法』であるというのが王国から認められた。

効果は亜人を隷属させること。これをされた亜人は主人の命令に逆らえず、危害を加えることも自害することもできなくなるという優れものだ。

原理は一般にいられていないが、魔法陣を覚えれば誰でも使用できるために世界中に広まることになった。

最も魔力が届く範囲で魔術を発動するのは、他の魔術と変わらない

ために、魔術師なら射程は30m、そうでなければ5mというところだ。それでも対亜人の狩りを大きく効率化させたことは間違いない。

ちなみに大賢者も未だに存命で更に魔法の開発に務めているらしい。彼の住まう豪邸には二百人の亜人奴隷が侍らされているとか。

男は『亜人隷属』で奴隷化した兎人族に、こちらに来るように指示し、部下に命じて拘束をさせる。この悪魔のような魔法も効果は数分といったところだ。よって拘束し、後で直接肉体に魔法陣を刻むか、『亜人隷属』の魔法陣を描いた首輪をつけるかして一連の奴隷化の作業は完成する。

男は王国の魔術師特有の優越感に溢れた表情をしながら、奴隷化の作業を進め、時には可愛くない娘を刺殺して遊んでみる。一つの魔法の出現が亜人と人族の差を圧倒的にしていた。

しかし、その暴虐に割り込む影があった。

その影は銀色の髪を後ろでまとめ、青色の瞳をもち、顔は実直な印象を与える。黒色の甲冑を身に着け、下半身は広がった青のドレススカートを穿いていた。

「貴様の狩りはここで終わりだ。」

凜とした声がこの場に響き、兎人族の悲鳴と王国の人族の嗜虐的な笑い声が飛び交う戦場、否、虐殺場とも呼ぶべき一方的な、戦いともいえぬ戦いの場に静寂が訪れる。

突如現れた騎士の堂々とした立ち振る舞いに一瞬驚く部下たち、しかしその銀色の髪の上に獣人族特有の耳があるのを見て、すぐに下卑た表情に戻り、魔術師の男へ視線を向けた。

「うむ、あれは犬人族か狼人族だろう。あれほどの毛並ならば高く売れるな。」

部下の視線に答える太った男。

すぐに魔力を練り、犬人族　こちらを半眼で睨み、腰だめに片手で剣を構えている　まで届かせる。「この雌犬は『亜人隷属』のこともしらんらしいな」と、自分の勝利、この美しい犬人族の娘の奴隷化を確信しながら魔術を発動させる。奴隷の兎人族が犬騎士に注意を促そうと叫んでいるが、命令で黙らすまでもなく魔術が発動した。

「そこのお前、武装解除してこっちにこい。」

そう命令すると、女騎士は持っていた剣を地面に放り出し、こちらへ向かって歩き出す。

「よしよし、これで一丁上がりだ。」  
と部下が拘束用の手錠と首輪を持ってくる。女騎士の肢体を想像しているようでだらしなく表情を緩ませている。

そして今まで何度も繰り返してきたように首輪を付けようとしたとき

「あいにく、私の主人は既に決まっている。」

女騎士が呟くとともに何も持っていなかった右手に西洋剣が現出し、部下の首を刎ねた。

「なっ！　なぜ奴隷化していない！」

「説明する気はない。」

来い、マギレーヴェンナイツ達よ。」

太った魔術師の男が叫ぶ。失敗したことがない魔術が効いていないという事実、自分を圧倒的強者だと錯覚させていた『亜人隷属』の無効化により動揺している。

それを尻目に見ながら女騎士は左手に持っていた大小様々な装飾品を掲げる。装飾品から魔法陣が浮かぶとともに彼女の周りの虚空から、青、赤、金、紫の魔力光が迸り、人型を作っていく。光が消えたときに佇んでいたのは、女騎士と同じく黒い甲冑を来た少女たちだった。

「なぜ亜人が魔造戦乙女をもつておるのだ！」

「我々が主人から与えられた名はマギレーヴェンだ。そんな名前で呼び隷属させている同朋を返してもらおうか。」

「くっ！　こちらも早く持ってきた魔造戦乙女を出せ！」

その言葉に慌てて男の部下が腕輪を男に渡す。そして男も腕輪を発

動させた。

騎士の少女たちと同様に虚空から現れるエルフの少女。その服は戦闘用の装備をしているが、スカートに大きくスリットが入り、胸当てしかしていないことから、昨夜か今朝にでも男が命令した行為の後が窺える。

「……あなたは、裏切りの騎士……？」  
小さな声で疑問を発する人族の娘。

「貴君は確か第一防衛組にいた者だな。今、貴君を解放しよう。」

さあ、ティアナーク様に使える騎士達よ！ ここにいる狩人全員の抹殺をする！ 我らが主人達の久方ぶりの命令だ、存分に使命を果たすぞ！」

はっ！ と答える女騎士四人。すぐに臨戦態勢に入り、近くの男の部下に攻撃を仕掛ける。

「レミアよ！ そいつらを足止めしろ！」

「くっ……はい。」

レミアと呼ばれた戦乙女は命令を拒否しようとして激痛が走り、その瞳から光が消えて人形のようになる。

そして腰に吊るしていた大剣を軽々と持ち上げ、裏切りの騎士と呼ばれた少女に斬りかかった。

裏切りの騎士。

574

そう私を呼び始めたのは人族、王国側だっただろうか、それとも他の種族、レスト側だっただろうか。

……もはやどちらでもいい。昔過ぎて調べようもないことだ。

この呼び名は私を今も戒める物。

もう二度と主人に槍を向けないために。忌まわしき記憶を忘れないように。

主人の胸に、主人から頂いた愛槍で貫いた感触を、忘れないように。そして最悪の目覚めを、目を瞑る度に思い出すように。

「裏切りの騎士」と、侮蔑のこもった視線とともに呼ばれる度に私の主人への忠誠は確固たるものとなっていくのだ。

アルメイダ・ランスロット。

これが私の名だ。苗字は主人ティアナーク様が、封印が溶けた後、私を操っていた術者がとうの昔に死んで正気に戻った私がティアナーク様の前で跪き、いかなる贖罪でも濯げぬ罪を前にただ後悔に打ちひしがれていた時、「裏切りの名を背負い続けてなお私に仕えろ」との言葉と共に下賜されたものだ。

この言葉を聞いた時、私の瞳からは川が氾濫したかのように雫が溢れ、主人の寛大さに平伏した。

ランスロットとは主人が元いた世界での昔の英雄の一人。仕えた王を裏切ることになってしまっても、最後まで王を慕い続けた騎士だといつても150年ほど前だが 仰っていた。

ランスロットの名を頂いた私アルメイダは、裏切りの汚名を負いながらも忠誠を誓い続ける。それが唯一の贖罪となる。道を、主人は示してくれたのだ。

「はっ！」

愛槍『貫きし道に魔は残らず（ツアヴェルジェルグ）』を魔術師の方へ突き出す。槍は届かないが、穂先から20mの空間から一瞬で魔力が飛散し、相手の発動しようとしていた魔術が無効となる。

「ばかな!？」

動揺した魔術師を見て一瞬で距離を詰め、槍を一直線に突き刺す。赤い線となった刺突は寸分たがわず男の心臓を貫いた。男は最後まで起こった現象を認められないままに絶命した。

「脆弱な……。自信の源であった『亜人隷属』が使えぬだけでこの有様か。それも自分で開発した魔術ではないというのに、どうしてここまで傲慢になれるのか。」

私はあまりのあっけなさに嘆息した。

逃げていく者から追撃して仕留めていったために、多少時間はかかったが、一人も逃していないだろう。

この魔術師の男は味方や奴隷にしたばかりの兎人族を盾にして逃げ回ったために、私も少々時間をかけてしまっただけで反省すべきところはある。

「アルメイダ様、こちらの掃討も全て終わりましたわ。捕らわれた兎人族も術者の死により解放されました。私達が来る前に殺された者も居ましたが、数人だけに留まりました。」

私の部下が報告しに来てくれる。

彼女たちは王城組だったのだが、ティアナーク様の復活と共にこちらへ移動し私の指揮下に入ってくれた。

王城組の騎士は150年もの間、王城の上層を死守し続けたためにティアナーク様への崇拜も強く、また護り切ったことに誇りを持っているので、総じて『裏切りの騎士』を嫌う。そんな生易しいものではなく、憎悪しているといってもいい。者が多いので、私の下についてくれるのはかなりの少数派だ。

「ご苦労だった。我らが主人も喜ぶ。貴君ら歴戦の騎士には簡単すぎる任務だっただろうが。」

「いえ、やっと活発に活動できるようになったのですから、それだけでも十分です。」

彼女達から聞いた話なのだが、ティアナーク様が氷の中に入っている間、同じ騎士や生き残ったレストの住人の中でも多くの意見がでて割れていたらしい。

全員が主人を崇拜しているのは同じだったが、安易に王国に復讐に走る者、城だけを守る者、他の大陸に逃げる者と、意見が分かれたままバラバラに散って行くことになった。

王国に十分な準備もせずには突いた者は、ブリトニア侵略のときのように数と圧倒的物量に押され、一人残らず殺されるか奴隷化させられた。城を守る者は一番最初の侵攻時以来、なんとか12階以上には通らせなかったが、多くの資料や武器が奪われ、戦いに敗れケインを奪われ隷属させられるものもいた。他の大陸に逃げた者は、運よく隠れ住むことができたか、他の集落に受け入れてもらえた者以外は、狩りの対象となつてその数を減らされていった。

協力しあつて動かなかったために無為に数を減らされ、王城に残る以外のマギレーヴェンは各地に点在するか、人族に使役されて屈辱の日々を送っている。  
亜人の子孫も、まだ残っている者もいるが、既に全滅させられたところも多い。

「こんな愚者でも亜人に対して圧倒的優位に立ててしまえるほど『亜人隷属』は強力ですからね。私達には効きませんが。」

魔術師の男に隷属させられていた兎人族と共に、同朋も回収して西

の海岸に向かう。そこには船があり、海岸線に沿って航行し、ダークヌス大陸南の亜人解放基地に戻るのだ。

部下の言うとおり、数十年前に大賢者と呼ばれる男が開発した魔法によって事情は一変した。

今までも魔術は人族最大の武器となっていたが、『亜人隷属』により亜人の間引きは加速した。

『亜人隷属』は、王城　魔王城などと呼ばれているが　から持ち出された自動魔法陣の情報と、主人が研究していた根源を弄る闇魔術の資料を大賢者が手に入れてできた魔術だ。

主人によると大賢者は言動や動向から考えて、主人と同じ上位世界から堕ちてきた者　勇者と呼称される　で、主人の魔術理論を理解しやすかったために悪用されたという。

自動魔法陣が組み込まれているために、魔力は魔術を発動させる一瞬でいいために少なくよく、結果として魔力を練れる距離が飛躍的に伸ばすことができる。一般の魔術よりも射程が二倍ほどに伸びるのだ。

よって亜人は人族の魔術師と40mくらいの距離に入った途端に無力化されてしまう。

これだけ強力な対亜人魔法があるなら、人族の魔術師が増長するのもしもさもありなんといいところか。

対抗できるのはシークリッド大陸の東にあるエルフの国くらいだが、近年はその均衡も破れそうらしい。

なんと遠く離れた王国や帝国が協力してエルフ狩りに勤しみだした

からだ。それほどに魔術を使える奴隷が魅力的ということだろう。エルフはその美貌から愛玩奴隷としても目がくらむような価値で扱われるという話だ。

部下と話しているうちに船にたどり着いた。兎人族にも共に来てもらうつもりだ。どうしても残りたいというのならは好きにさせるが、すでに周りが人族のテリトリーに囲まれてしまったここでは、海から逃げない限りは滅びる以外ないだろう。

事実ほぼ全員が少量の荷物をもって船に乗った。

回収した騎士レミアも、隷属させていた仮の主の男魔術師の死に伴ってケインの中に戻った。すでに隷属の首輪はケインから外している。

あとで主人が基地に来るか、もしくはアークにレミアを連れて行く時があれば、主人に【隷属】をかけてもらえばよい。そうすれば他の者の上書きして奴隷にされる危険はなくなる。

マギレーヴェンと亜人の解放。

ティアナーク様の復活により、ようやく停滞していた歯車が動き出し、ゆっくりと裏舞台で始まる。

先は長いが、悲観するものは誰もいない。

主人の優しさと、その身に宿す神のごとく恩寵を知っているのだから。

36話 亜人狩りと、裏切りの騎士アルメイダ（後書き）

マギレーヴェンナイツのトップ12人の苗字に、アーサー王伝説の  
円卓の騎士の名をつけようと思っています。

### 37話 浮遊島アークとトゥール

この世界には、浮遊石という物質がある。

原子配列で天然の魔法陣が形作られていて、周囲の魔粒子を魔力に変え、浮力を発する。

浮遊石の多くはアンノーン大陸 新大陸の更に南にある大陸。「Unknown」から名付けられる に埋蔵されていて、大地が浮かび上がっているのを散発的に見ることが出来る。

そして、この大陸で多く見られる浮遊石を最もたくさん埋蔵していたのが、今はアンノーン大陸東海に着水している『浮遊島アーク』である。

50年ほど前の地殻変動により、ブリトニア島北部の海岸にあった魔王ティアナークの氷棺が陸地を離れて海を流されていったのを追っていった、当時氷棺を影から見守っていた一人のマギレーヴェンが人間で初めてこの大陸に上陸した。

まだ人族にも亜人にも発見されておらず、魔獣が闊歩している環境を、ティアナークの封印が溶けるのを待つ者たちの潜伏場所としては好都合と考え、最初に発見した女騎士が他の仲間を呼びに行き、このアンノーン大陸南東部に最初の街リオデジユができた。

ある程度人が増えてくると、有志で氷棺を海から引き揚げ、この時も浮遊石が活躍した、街の中央にある祭壇に供え、ティアナークへの信仰を魔獣と戦い続ける日々の糧とした。

100年の年月というのは、元から居た者が尊敬を信仰や崇拜にまで昇華させるに十分であり、ティアナークによくしてもらった亜人達の子孫も、誇らしげに語られる昔話を聞いて崇拜するにいたった。それほどに100年という年月は長かったのだ。

魔獣を倒し、生活圏を広げて少しずつ、亜人や元の仲間だった人族が逃げてこれる環境を整えていく。生活にある程度余裕が出てくると、ティアナーク様が復活した後、氷が溶けた後にスムーズに行くように準備を始めようという者が現れてくる。

そうして計画されたのが浮遊要塞の建設。

アンノーン大陸に大量にある浮遊石を見た時から誰もが考えていたことだ。高低差というのは大きなメリットとなり、制空権という考え方がないこの時代でも、空に浮くというのは敵の侵略を大幅に抑えられるということは理解できた。

しかし、浮遊石を集めて船に積んでも、うまくバランスを保つたま

ま浮かせることができない。不幸な事にリオデジユには優秀な研究者が居らず、要塞建造は遅々として進まなかった。

そこで、一から要塞を造るのがダメならば、空に浮いている大小様々な浮遊島から、一番大きいものを選んで要塞化すればいいのではないか、という案がでて、アンノーン大陸中を探索隊が探しに周ることになった。

空を飛ぶことができるのはマギレーヴェンの内でもごく少数だが、小さい浮遊島に乗って即席の浮遊船とし、魔術で推進力を出して探索を行った。

そして10年の探索の末にアンノーン大陸の南の海の上に、とうとう断トツで巨大な浮遊島を発見でき、これまた数年をかけてリオデジユまで数百人がかりで持って帰り、浮遊石の量を調整して東の沖合に着水させ、すぐさま要塞化にとりかかりはじめた。

この頃には避難してきたドワーフも増えてきたために、浮遊島アークのあちこちにこだわりの建築がされるようになる。まず持ち上がったのが、ティアナークを迎えるための城を作ろうという話だった。

その準備のため、さっそく巨大なアークを測量するために後方アークは上から見ると船のような形をしている。へ探索隊を送る。そしてやけに巨大で、常に黄金に発色している神秘的な一本の木が発見され、世界に数本しかないという世界樹だと判明。また、左方にはどういいう原理なのか温泉が湧いており、怪我の回復が異常に早くなることから聖泉と名付けられる。

以上のように、貴重なものの宝庫となっているアークを発見したも

のは讃えられ、ティアナークを迎えるにふさわしい島だとして、俄然やる気がでた住民はアークをものごい勢いで整備していった。

この頃には『亜人隷属』が一般的になっており猛威を振るっていたのだが、アンノーン大陸に住む者たちはその脅威にさらされることなく、ティアナークの復活を信じて愚直なまでに未来を見ていられた。

「あれが幻獣の森か。」

「はい、創造主<sup>マスター</sup>。アークの幻獣の森にいる幻獣とは【獣通じ】で接触をはかったところ、良好な関係を築けてます。彼らも迫害されたり生存競争に負けて逃げてきた者たちですから、協力できるはず。」

私は久方ぶりの　　150年ぶりの　　クロノと二人きりの状況に途方もない喜びを感じている。

といつても、私が再起動したのは、創造主であるクロノの『時』が動き始める10年前だから、体感時間ではそこまで久しぶりだとは思わない。10年であっても私達の中ではクロノから離れた時間ナンバーワンだけどね。

私は嬉しいと思っているのに、クロノは変わらず仏頂面だ。せつかく私がアークを案内しているというのに。

本当なら直接整備や建築をした人たちに案内させるべきなのかもしれないけれど、クロノがそれぞれの仕事を邪魔するわけにはいかないと断つて断つた。

150の時を数え、より強固に、より伝説となったクロノへの崇拜があるのだから、案内するように言えば仕事を放り出して喜んで来ると思うんだけど。クロノは鈍いから気づいていないかもしれない。もしくは過去の、あの時のことを考えていて、他の事へ頭をまわす余裕がないのかも。

過去のことは私だってお姉ちゃんだって、何度も思い出してうなされてしまう。

再起動してしばらくは悪夢のせいで寝られなかったほどだ。

今でも思い出したくはない。

私の150年前最後の記憶は、妹の人造人間達ホムンクルス3人を率いて、エウルーペ王国の港街パリスへの補給線を断つべく、王国からの大群を魔術や陰陽術で押しとどめ、押し返そうとしていた場面だ。

パステルからお姉ちゃんへ中継した【電心】によって、かなりの数にブリトニア島に上陸されたことはわかっていた。しかし王国側へ来ている私も、海の上で戦っているお姉ちゃんも、憎たらしいけど圧倒的に強いパステルや、まだまだ未熟だったとはいえ、形になってきていたマギレーヴェンナイツも居たのでどこか安心してしまっていた。

どちらにしろ、この時から戻ろうとしても間に合わなかったとはいえ、もっと早めに島に帰還するべきだったのかもしれない。

敗北条件は『キング』がとられることだったのだから。

そして敗北の時は唐突に訪れた。  
今まで戦闘をしていた私達4人の身体が急に動かなくなり、即座に  
敵兵に倒される。

『お姉ちゃん！』

『こつちもだめ！ 動けない！』

あまりの異常事態に創造主のクロノに何かがあったんじゃないかと  
不安に駆られる。

「この真祖の吸血鬼め！」  
トゥルーヴァンパイア

ガッ！

倒れた私の息の根を止めるために、罵倒しながら心臓を槍で刺そう  
としたものがあるようだ。しかし布の服で阻まれた。

ここで私は疑問を感じる。

私達ホムンクルスは心臓のような器官をつけているが、それは人格  
を刻印するのに使った人間の根源が人間の身体を覚えているために  
器官をそれぞれの位置に配置しないと拒否反応が強くなるからであ  
って、心臓が致命傷とはならない。

よって心臓部分にはほとんど防具がないので、渾身の槍の一撃が肌  
を貫かないのはどう考えてもおかしい。

それと、ホムンクルスやマギレーヴェンは身体の維持に血が必要で

あり、且つ太陽の下でも平気　つまり吸血鬼らしい弱点が存在しない　なことから真祖の吸血鬼と呼ばれているのは知っていたが、本物の吸血鬼たちが知ったら怒るんじゃないだろうか……？

その後も兵士たちは今までのうつ憤を晴らすように、私と妹たちに向けて槍や剣を突き刺そうとする。目にも、戦っていたときに浮き上がっていたスカートの布にも全く刺さらない。

『トウール！　これは身体だけじゃなくて装備も同時に動かなくなってるわ！　海流に巻き込まれてるのに服も髪もはためきもしない。』

『私も今気づいた！　物理法則を無視してるわね。』

『これは創造主が何かをして、根源でつながっている私たちにも影響がでていると予想されるわ。』

『何かって……？』

お姉ちゃんは海上にいたから海を沈んで行ってるみたいだ。いくらホムンクルスの身体といっても、水圧でいつかは潰れてしまう！　もしこの状態が終わって身体の金縛りがとけたらその瞬間に死んでしまう……これは兵士達に飛ばれている私達も同じだけど……。

きいーん……

な、なにっ？　何か思考が、止まっていく、よう、な。

『トウール……？』

最後に聞こえたのはお姉ちゃんの声。見えたのは薄汚い兵士の靴の裏。気分は最悪、だ……。

こうして私の主観は終わった。

目が覚めたのは、主観では一瞬後のことだった。自分の中で、根源で黒い海が揺れ、胎動し始めたのを感じる。

少しずつ視覚や聴覚が蘇ってくる。

いきなり視覚情報が入ったせいか真っ白でまぶしく感じる。聴覚も

うまく働いていない。

少し時間が経つと目が慣れてくる。

と同時に自分があるのはどこかの金庫のようだと悟った。10m四方の部屋に、金銀財宝がこれでもかと積み上げられている。自分はその中に以外を埋もれ刺していた。

ホムンクルスの、人よりは丈夫とはいっても人形とは比較にならない弱さの身体が潰れそうに悲鳴をあげる。

頭にある核が無事な限り死ぬことはないが、新しい身体を見つけない限り身体に核が埋もれ刺す。拒否反応を起こして人格が消えないとも限らない。

ただちに自分の身体を救出することにした。

「つ…… 『エナジーブラスト』」

とっさに魔力を練って発動したのは核属性の基本魔術。純粋なエネルギーの塊を自分の身体の上に放出し、のしかかっているものをまとめて吹っ飛ばした。

金庫の中では財宝が崩れ、飛び交うことになるが、余程丈夫に作られているのか、金庫自体は揺れもしなかった。

「ふう……。もう、ここはどこなのよ……。」

そう愚痴っても答えてくれる人がいないのはわかっている。

意識を失う前の記憶は鮮明に覚えている。なんせ主観時間ではほんの数分前の出来事なのだから。

「ああ！ むかつく！ なんだったのよお！」

金庫がびくともしないことをいいことに、暴れてストレス発散させてもらう。

出力を間違えていくつか金貨や宝石が溶けてしまった。核属性の魔術は威力が高すぎ、どれだけ手加減するかが重要な面倒くさい属性なのだ。

「はあ……。あれは何が起こったんだろう……。クロノは無事、なのかな。」

普段は創造主と呼んでいる主人の名前が零れた。

『こちらトウル。だれかいらない？』

電心で知り合いに無差別に送ってみる。しかし誰からも返事がない。少なくとも私の電心有効距離である9kmにはいないようだ。

ここがどこであれ、早く脱出しなくてはならないだろう。

まだ黒乃が危ない状況であれば助けに行かなくてはならないし。

金庫がいかに丈夫とはいえ、高純度の熱を直接扱える核属性に壊せないものなどない。どんな物質でも高圧高温では制御から離れ、元の性質を失うのだから。

「核よ、球となりて、障害を消し飛ばせ、範囲指定上方、摂氏4000、『エナジーバースト』！」

案の定金庫の天井は跡形もなく溶ける。天井を狙ったのは、側面や

地面よりも天井の方が強度が高いことよりここは地下だと思ったからだ。

「よしつ。熱はこつちに来なかったし制御はうまくいった。」  
果たして天井から出るとそこは屋敷か何かの大広間。おそらく大貴族の地下金庫だったのだろう。見つかつても軽くあしらえるだろうが、それも面倒くさいのでさっさと窓から飛び出すことにする。

背中に翼を形成、しかし私はパステルみたく翼で揚力を得ることができないので、膝をまげて且つ足の裏から下向きに魔術によりエネルギーを噴出し、同時にホムンクルスの脚力で空に飛びあがる。あとは大きな翼を広げて滑空すればよい。

「ん〜ここは王都ではなさそう。」  
空に飛びあがると知らない街が眼下に見えた。見慣れない様式の家が規則正しく並んでいる。通りもきれいに整備されて、馬車が数台も隣り合って走っている。かなり文化が進んだ街のようだ。

こんな大きな都市は王都以外に心当たりはないので、帝国だろうか？

今はおそらく夕方。エウルーパー王国は西端であり、ブリトニアはその北となるので、太陽の方に飛んでいけばいいか、と開き直る。

なぜこんなところにいるのかは知らないが、はやくクロノの、創造主の元に戻らなくては。

日が暮れた頃にブリトニア島と思われるところにまでたどり着いた。どれだけ飛んできたか覚えていないけど、やはり空は速い。

595

もうすぐ城に着くころだけど、ブリトニア島の様子がおかしい。私達が開拓した名残はあるが、家も田も道も様変わりしている。なにより、下に見える人間が人族ばかりしかいない。また、遠目に見える城は以前と変わらないが、手前の森があったところが切り開かれ、何やら二階建てで横に広い建物が置かれている。城とその建物の間には行ったり来たりしている人族が見える。

……なんかむかつく。

なぜ人族ばかりなのか、なぜ隠していた炭鉱が開かれているのか、なぜ育てている野菜が変わっているのか、それらも気になるが一番の問題は

クロノの城に群がるな部外者が！

「核よ、闇よ、エネルギーを圧縮、浸食しろ、この目の前の虫けらを犯し尽くせ！ 『舞い落つる漆黒の爆羽』！」

詠唱が終わり魔術名を発語するとともに、私の目の前数m先の空間から無数の黒い羽根が現れ、そして風に乗るかのように城の方へ向かい、ゆっくりと無数の羽根が落ちていき、

「があああっ！」

「おい、どうしがはっ！」

「何か落ちてくるぞ！ 逃げる！」

城に無断で入ろうとしていた不届きものに当たり、触れた場所から弾け飛んだ。

すでに10人ほどが巻き込まれ、頭や腕が「ポンッ」という小気味いい音とは裏腹の破壊力で爆発していく。

「あははははっ！ 無礼者め！ お前たちのような盗人が入っていないところではない！」

逃がすものか。

一度範囲にはいつてしまえば不規則に動く無数の羽根を全て避けきれぬわけがない。

無数に舞う漆黒の羽根が舞い落ち、そして消えた。

10人中6人は死亡、残り4人はいずれも重傷。

二度と城に空き巣へ入ろうとしないだろう。

「ふー……。」

広範囲へ影響を及ぼす魔法を使ったので少し精神力が削られる。早めに創造主の血が欲しい。

『トウル様！ よくぞご無事で！』

と、突然城の方角から電心が入る。

『あ、城にいたんだ。なんなの、こいつら。さっさと掃除しなよ。』

『え？ ご存じじゃないのですか、探索者達を。神聖王国や帝国が』

ら援助されているので、いくらでも湧いてくるためきりがありません。』

『……どういうこと？ 創造主は、私達の主人はいまどこに？』

『ティアナーク様は致命傷を負って氷棺に入られたじゃないですか！ ……何やら祖語が生じているようなので、城に来てくれます？ 空からきていただければ、一時的に迎撃システムを停止しますので。』

『はあ！？ クロノが致命傷！？ それってまだ生きてるの！？』

『ですから全て説明しますので、こちらへ。ティアナーク様はおそらく生きています。』

……どうなっている？ 私はそんなに長く眠っていたのか？

考える間に急く身体は暗くなっている夜の闇に溶けつつ、黒いクロノの城に向かって飛行していった。

そして私は、『あの日』から既に135年もの年月が経っていることを知る。

あの日のことも、クロノが今どうなっているのかも、そして、パステルやお姉ちゃんがまだ見つかっていないことも。

姉のセルヴィの行方を探すのは絶望的だと直感でもわかった。

私は運よく動けるようになったときに金庫の中だったが、海に落ちたお姉ちゃんはどこかの海岸に打ち上げられていない場合は、海の底にあるということになる。

陸であれば人の流れで追うことができるが、海の底にある場合は遠くまで流されているかもしれない。

海の底にあった場合は意識がもどった瞬間に水圧で粉々だ。そうないとさすがの創造主でも復元はできない。

この後私は当てどのない姉探しにでることになる。

……城の警備も、浮遊島のことでもマギノーヴェンや子孫たちに任せ  
て。

37話 浮遊島アークとトウール（後書き）

今回はトウールの回でした。

### 38話 浮遊島アークとセルヴィ

浮遊島アーク。

大きさはブリトニア島の半分ほどで、浮遊島としては規格外の大きさであり、上空から眺めると船の形をしている。

浮遊島であるために、方向を表わすのに東西南北という言葉はせず、前後左右と呼んで指し示す。主に船で船頭となる方向を前方にして動くので、島の尖っているほうを前方と表すのが基本となる。

浮遊島アークは計画的に数十年かけて開発された島であり、都市であり国家だ。

よって区画ごとに整理されている。

中央区にはクロノ・ティアナーク王が君臨する漆黒の王城があり、城の後方以外は居住区となり、城下町が広がっている。

前方区には平野が広がっており、居住区や大きな施設を建てるための空き地となっている。今のところあるのは、空を飛べる幻獣の育

成施設と、一時的な客人のための宿泊施設だ。

最先端には浮遊島の窓口となる大きな門が立っていて、前方から哨戒に出るための駐屯施設や、大量の荷物を保管する倉庫が立ち並んでいる。

右後方には山脈があり、炭鉱や鉱床となっている。山の麓には幻獣や魔獣が住む森がある。

右前方には雨が染み込み、ゆっくりと山から流れてきた川が集まる湖があり、そこから前方区に向かう途中で下水施設や浄水施設を設け、水を左方の畑にまわすようにしている。ついでにクロノは湖にいずれダムを造り、水力発電を試みようと思っている。

左前方には一面に畑と水田　クロノは生粋の米好きである　が広がる農業区となっている。畜産業もできないかを検討するつもりだが、空の上がどのような影響を与えるかを調べなくてはならない。左中央には聖泉がわき出ている。右方にあつた湖と同じくらいの面積で、十数個に泉がわかれていて、場所によって回復量も泉の色も違うために、それぞれに名称をつけて分けている。アーク住民には最も大きい混浴湯が人気だ。理由としては、解放感があり、しかも崇拜対象のクロノが気に入っているからだろう。

左後方は標高が最も低く、島の着水時には海水が入り込むので、海水から水を造る施設が建設中。また、養殖ができないかを研究させている。養殖ができなくても生きたまま鮮魚を運べるんじゃないかと考えている。

城の後方には研究用の土地があり、さらに後方には世界樹がある。

世界樹とは龍脈の中心点であり、魔粒子を常に大量に放出している。

世界樹の後方は右方からの山脈がまわりこんでいる。

以上が簡略的だがアークの紹介だ。

他にもアンノウン大陸にある小さい浮遊島を衛島として連れていくように、目下橋を研究中である。

アークの理念は空にあり続ける不可侵国家。

よって基本的に全てを自給自足するつもりである。

一番難儀な水不足は、雲の下を通して雨を回収することで賄おうとしている。

シャツシャツシャツと筆で羊皮紙に書き物をする音が聞こえる。

ここはアークの中心にある王城　　18階建て　　の15階のセル  
ヴィの私室である。セルヴィしかいないために必然書類とにらめっ  
こをしているのはセルヴィのみになる。

今の時間、クロノ復活以降初の作戦が実施されており、トゥールはクロノにアークを案内している最中だ。

セルヴィがなぜ執務室ではなく私室で書類を見ているかというところ、クロノと従者三人という、上位世界の知識を持った者しかかわからないことを検討しているからである。それも緊急性が低いものを。

ほとんどがクロノが出したもので、科学技術の発展　ただし環境問題が起きないように憂慮する　を主として、この島を空を総べる国家というだけでなく、聖泉を利用とした観光業や、移動できる島での農業や養殖業による商売など、あと数年は動きだせそうになりものであった。

今は、クロノが復活してまだ一か月も経っておらず、少しずつ戦力を回復していこうという段階だ。

未だにブリトニア島で城を守り続ける騎士を合わせても、アークの戦力は150年前の10分の1しかない。150年前でも王国の圧倒的物量と卑怯とも狡猾とも呼べる作戦で負けたのにだ。

空に上がることで滅多に攻められることはなくなるが、こちらも幻獣や魔獣を乗騎として扱えるようになるまではしばらくかかる。

結局、奪われたマギレーヴェンや武器や魔導具の回収と、生き残った住人の子孫による騎士団『アンシャントルシュヴァリエ魔刻騎士団』や一般兵の熟達を進めるしかない。

クロノはマギレーヴェンはともかくとして、武器や道具については金で穩便に払い戻したいと言っていたが、セルヴィ達としてはそんな余裕もつもりもない。

相手が王城から盗んでいったものなのだ。王城が魔王城という迷宮として指定され、拾ったものは全て拾った人間の物になると王国や帝国が保証していたとしても、当然看過することなどできない。

それにクロノが恩寵を刻印した武器や魔導具 『刻』が刻まれているので『神刻物』と呼ばれるようになった はほぼ例外なく『不可壊』が刻まれており、他にも有用な恩寵 自然には調金されなくてもような組み合わせで がついているために、市場価格がとんでもないことになっており、現実的に今のアークでは買うことができない。

しかもその性能から王国や帝国の大貴族、果ては王族に受け継がれてしまっている物もあるため、手が出せない『神刻物』が多い。

幸い、魔王城に残ったマギレーヴェンナイトの奮闘で、最上層にある『神刻物』は奪われなかったために、クロノは手が出せない物についてはしばらく放っておくことを指示した。

戦力が整わない段階で戦力を更に減らすのも、勳付かれてしまうのもごめんということだ。

そのために今は少数戦力による隠れながらの奪還活動しかできない。

数十年前に上位世界から降りてきた勇者 降りてきた者を勇者と呼称するだけで、勇者の資質があるとは限らない。現にクロノはあまり恩寵をもっていなかった は『亜人隷属』という最悪な魔法をクロノたちの研究成果から作成したと思われ、その時に同じ上位

世界の人間だと看破され危険視されるだろうから、相手にぎりぎりまでこちらの存在を知られたくないという思惑がある。

クロノだって同じ上位世界の人間に対しては元からの住人よりも危険視する。同じような知識を持ち、同じくらいの根拠量を持っているのだ。相手がこの世界を物語の中の世界としか認識せずに世界を壊そうとする危険人物の可能性すらある。

4人で議論した結論として、第一フェイズが、少量ずつでいいのでマギレーヴェンを回収していくこと。存在の隠匿や隠ぺいを必須とするために、敵が少ない場合は一人も生きて逃がさず、多い場合は変装をして行く。

第二フェイズが、奴隷とされている亜人や人族を回収し取り込んで、アークの戦力とすること。幻獣や魔獣に乗騎できるようにすること。

第三フェイズが、アークの存在を全世界に認知させ、同時に今も神聖王国のヴァストウーユ牢獄に捕らわれている大量の亜人を解放する。

第四フェイズが、残りのマギレーヴェンと奴隷を回収していくこと。これ段階までにアークに住める人数が厳しくなると思われるので、新大陸やダークヌス大陸、アンノーン大陸に王国や帝国の手が伸びない街を作ること。

第五フェイズが、アークを常に浮かせ、発展させていくこと。

第二フェイズまで完了させるのを五年間でやる予定にしている。

第一フェイズでは、魔王城の地下で冷凍保存していた、マギレーヴ  
エンたちの肉体の回収も進めなくてはならない。

この辺りの計画もセルヴィの仕事となっている。  
パステルがあまりアークに居たがらないために。

「ん〜疲れました。」

私室で伸びをしながらつぶやくセルヴィ。

セルヴィの私室は妹のトゥールに比べて遙かに落ち着いた色合いと  
なっていて、女の子らしい小物とは無縁である。カーテンはダーク  
グリーン、部屋全体は薄い青白色の壁紙、床の絨毯も暗い緑だ。家

具もそれなりに良い物を用意してもらっているが、ほとんど入っていない。トップ4人　もちろんクロノ、パステル、セルヴィ、トウルである　はトウル以外私物が少なすぎる。国のトップとしてはもつと贅沢をするべきだと言われるのだから、アークの財政状況は良くないので豪華な服や装飾品を欲しがらないのは、むしろ良いことだろう。

「はあ、あのメンタル弱い純白従者め……。145年前のことにいつまでもぐじぐじと……。」  
ホームクルスである彼女たちは相応に疲労を感じ得る。だから人形で、実質精神的疲労しか感じないパステルに書類仕事を片付けてもらいたいのだが、あいにく彼女は単独で王国に侵入している。彼女の戦闘力は他と隔絶しているので単独任務でないと周りが邪魔になっってしまうのだ。

しかし彼女が浮遊島アークに滅多に帰ってこないのは、パステルが145年前　今は大陸歴1995年で　のことを気にしていて、クロノに見せる顔がないと言いはっているからだ。

クロノはクロノで自分で責任を背負い込もうとしているから性質が悪い。

結局二人の未熟者のしりぬぐいとしてセルヴィが踏ん張らないといけないのだ。

トウルは肉体労働派なので内務能力は期待していない。それにトウルはシルフの娘フレデリカの世話が忙しい。

「私としては、145年前のことよりも、3年前まで寝坊していたことのほうが問題だと思うのですがねえ。私も5年前に起きましたし。一番の従者を自称する人が最も遅いつてどうなんですよ。」

眠気に誘われたセルヴィは、私室に備え付けられているベッドに身を投げた。

柔らかなベッドに身体が沈み込んでいく。

セルヴィは自分が起きた時のことを思い出す。

寝る直前の記憶も起きた直後の記憶も、両方とも思い出したくないものではあるが、後者の方が幾分ましだ。

前者は創造主の、後者は自分の命の危険があったのだから。

私ことセルヴィが起きたのは、大陸歴1990年、新大陸のはるか

北の海底でした。

水圧と水温の低さで、自分の身体が痛覚をシャットダウンし、悲鳴を上げるのを感じるといふ最悪の目覚めです。起きる直前には創造主<sup>タ</sup>の胸に抱かれている時のような安心感があったんですが……実際起きてみると死ぬ寸前とは、神がいるなら余程私のことが嫌いなようです。

しかし、私は『闇水』属性をもち、とくに水属性に関しては並ぶものがいないという自負があります。そんな私が溺死　正確には圧死？　など許されるわけがありません。

（水よ、我を包む球となりて、外へ押し出せ、半径1m、水の揺り籠<sup>ウオータクレイドル</sup>！）

頭の中で詠唱をします。詠唱破棄するには出力が不安だったのでせめて脳内でイメージを高めることを狙いました。

魔術が発動。私を闇色の魔力が包み、外へ圧力を加える水の球体ができ、私にかかる圧力を弱めました。

ちなみに水の揺り籠の内部に酸素があったりはしません。人間だと酸素がないと死にますが、私達人造人間<sup>ホムンクルス</sup>については口や肺などの呼吸器官は、言うならば『遊び』です。根源に入っている情報との祖語を少なくし、拒絶反応がおこりにくくするためという理由はあります。それだけなら形を模した物を入れるだけで済みます。しかし呼吸器官をつけて人間と同じように呼吸しているのは、少しでも人間、しいては創造主に近づきたいという被創造物の本能みたいなものでしょう。

また、どんな物質でも身体の一部とできる人形のパステルとは違い、私達ホムンクルスは身体にできる素材に制限があり、より人に近い材料をつかっています。つまり壊れやすいのです。よって、水の揺り籠から身体に入る水で内臓がほとんど壊れてしまった今、新しく作り直さなくてはなりません。それが面倒です。

少し落ち着くとすぐに上へ向かって泳いでいきます。もちろん水を操って水流を操作しているので秒速50mはでていくでしょう。その代りに制御が甘くなって片腕がバラバラになってしまいました。

一応無事に脱出。かかった時間的に水深3000mくらいだったみたいですね。人間だったら一瞬でバラバラです。

海どころか水の中が大嫌いな創造主がこの話を聞いたら、想像して顔を青くして倒れてしまおうと思われませぬ。もちろん伝えませぬが。

深海にいたので時間はわからなかったのですが、どうやら今は太陽がぎらぎらと輝く昼間のようです。

それにしても身体が寒くて痛覚をシャットアウトしたままです。この今いる場所が極に近いのかもしれませんが。

というか海の上に分厚い氷が浮かんでいて、真っ白な熊がそのうえに寝ころんでいます。これから極であることは確実なようです。上位世界地球の北極にあたるのか南極にあたるのかはわかりませぬ

が。

とにかく昼なので太陽がでている方へ向かって海の上を走ることにしました。赤道上を太陽が通るのなら、太陽の方へ行けば極から離れられるということですから。

そうして海の上を走り続けて数時間、どうやってか、空に大きな島が浮いています。

創造主に教わった上位世界の常識にも、本で読んだこの世界の常識にも島が空中にあるという光景はなかったと思うのですが……

ひとまず、浮遊島に向かってみることにしました。

「止まりなさい！　こちらは我らアークの領土！　止まらないと交戦の意思ありと見て撃墜します！」

島に近づいていくと空から降りてくる影が。

飛行するだけでもかなり上位の魔術師、しかも飛行しながら攻撃できるとなればトップレベルです。……まさかブリトニア島以外でのクラスの使い手に会うとは。

こちらが上の自信はありますが、油断できる相手ではありません。

先手必勝です。

「ウォータージェット！」

まずは十八番の水魔術で牽制。一番展開が速い魔術を選びましたが、牽制といっても攻撃力も一番高かったりします。

「なっ！」

相手は私のウォータージェットを紙一重で交わしました。あまりの速度に驚いているみたいです。避けることができたのは称賛に値しますが、次の行動に移れてない限りは的にしかりません。

「多重展開、ウォーターシュレッド！」

準備していた魔法陣を同時展開、相手が立て直す前にウォータージェットを多数放って相手の行動を制限します。

そして相手の行動が狭まったところに闇と水の合成魔術『浸食する毒』を浴びせます。

さあ、これでとどめを

『とどめさしちゃダメー！！』。

愛しい妹の声が電心でいきなり聞こえてきて、急いで術式をキヤンセルします。

『トウル？ 久しぶりね。どうしたの？』

『どうしたもこうしたもないわよ！ 何で味方同士で争ってるの！』

「味方……?」

今まで戦っていた相手を観察します。ルックスはなかなか、髪もきれいに手入れがされている。そして黒い防具にロングスカート……まさか！

『そう！ マギレーヴェンよ！ 長く寝たからボケちゃったの！』  
『?』

「あー、ごめんなさい、マギレーヴェンナイツ。」

「こ、こちらこそ申し訳ありませんでした！ セルヴィ様だとは気付かずに！」

相手もトウルから電心を受けたのか、こちらの正体に気づき、慌てて空中で低頭しました。私よりも上空にいるのだから、上から下を覗きこむようになっていきます。これは逆に失礼では？ 気にしませんけど。

数十秒後、トウルが迎えに来て、今はアークの浮遊操作の演習中だと説明されました。

せめてアークとは何かから教えてほしいものです。……そんなふうに抜けているところが可愛いのですけどね。



### 39話 パステルの自己存在証明とは

私の意識が戻ったのは唐突でした

わけでもありません。前兆があつたのです。

ただただ眠っていた自分が起こされようと、まどろみの中で身体を揺すられるように。

黒くて暗い周りを包み込む海。私は揺られ波にのまれ、濁流が私をどこかへ導こうとする。

それでも私は拒んだ。あの最後の瞬間、槍が心臓を貫いた映像を思い出したくないから。現実を拒否したのです。

そして私はご主人様に起こされなかった。

私を起こしたのは。

「！」

視力は戻らず、音も聞こえない。しかし誰かが私を呼んでいます。

「……」

「とっ」と起きなさい……！」

「………うるさいです。」

「ふん。ねぼすけにはちょうどいいでしょうっ？」

起きるとセルヴィというホムンクルスの顔が目の前にありました。先ほどから耳元で叫んでいたのはこの娘のようです。

「遅すぎるのですよ、起きるのが。わたしたちの中で最後ですよ？」  
この口ぶりだとセルヴィ、トゥールの妹たちですら私より先に起きていたようですね。  
私本人としても不覚です。

「まずは報告。いまは大陸歴1992年、既にアレから142年が経ったのよ。」

先ほどまでセルヴィの後ろにいたトゥールが発言する。

そしてセルヴィにアレの結末を聞きました。

大方最後の瞬間に悟った通りでした。

化け物よりも凡百の人族の方が恐ろしい相手で、私ご主人様も認識が甘かったというだけ。

なぜキヨウ様を受け取ってしまったのか。なぜ、心配してくれたのを知って、そのまま甘受してしまったのか。……私が持つなど完全な判断ミス。

ただ自分の喜びを主人の安全よりも優先してしまった。主人の指示だというのを免罪符にして。

これでどうして一番の従者などと言えようか。

主人のピンチに側にいなくして何が従者か。

マギー・ヴェンにご主人様を任せてしまい、しかもその中から裏切りが出たとは何事なのか。

これは私パステルの責任。

周りは誰の責任でもないというでしょう。しかし私にとっては違う。

アイデンティティが揺らいでしまう。私の存在証明はなくなりかけていた。

1995年。

王国に来ている私に。電心をいくつも中継してある情報がまわってきた。

『ティアナーク様を包む氷が溶けだしている』

果たしてアンノーン大陸の東海岸にある街リオデジュに私が着いたときには、他の従者や騎士のかなりの数が既に来ていた。

なんせ150年近く閉ざされていた氷棺が溶けるのだ。

私の中の根源の繋がりもご主人様が目覚める寸前だと告げている。自分も一緒に時間が凍結されていたことで、ご主人様との繋がりが根源的なものにまで及んでいることをしり、うれしくなった。しかしこの嬉しさも主人の不利益に繋がる可能性があれば排除しなくてはならない。

もう二度と同じ悲劇を繰り返すつもりはないのだから。

だから、私はご主人様に罪を告白し、許しを乞い、ただ謝罪しよう。

氷棺は端から溶けていき、取り囲んでいた兵士達の時間も戻り、意識があることに気づくものがでてくる。

即座に我に返る前に、控えていたマギレーヴェンが取り押さえ、拘束します。

そしてとうとう氷の中心、裏切りの騎士アルメイダと共に、クロノ・ティアナーク様とシルフの少女フレデリカが解き放たれました。

ご主人様が生きていることを確認すると、マギレーヴェンも周りにいて今か今かと待っていた民衆も大歓声をあげました。

それに比べてアルメイダとフレデリカへの視線は剣呑な色を湛えています。きつと彼女たちは視線の重み、殺気を感じているでしょう。それもそのはず、フレデリカはご主人様を死地に追いやり、アルメイダは途中から裏切り、心臓にとどめを刺したのですから。二人が奴隷の腕輪や、洗脳系の魔術で操られたということには皆さん薄々勘付いています。感情が納得できるかはまた別の問題です。私も無意識のうちに彼女たちに殺気を向けていたと思われ。アルメイダと目があつた瞬間に震えだしましたから。しかし私は責める気はありません。むしろ私に多くの責任があり、私こそその目を向けられるべきだと思っからです。せめてご主人様に罵倒して糾弾して頂きたい。

「パステル！ 迷惑かけてすまなかった。ごめん。」

しかし望み通りにはならず。

我に返ったご主人様は胸に刺さった槍を気にすることなく、私に抱き着いてきました。

主観時間で2年ぶりの抱擁。その前が週に数回は抱き合っていたことから考えると、異常なまでに待ちわびた感触でした。

ですが私の心は冷えるばかり。罵られるどころか、何もできなかつた自分が逆に謝られる。

なぜだ私は役に立てなかつたのに、お守りできなかつたのに、それが私の役割だったはずなのに、生まれたときから側で守り続けるのが私なのに。

私の存在意義は存在証明は自己証明は自己同一性は。

……私は私を見失った。

「嫌な、記憶を思い出しました。」

つい独り言がでてしまいました。

今日の仕事は手を抜いてできるほど簡単というわけではありませんし、隠密行動中なので最大限に注意していなければいけないのです。

「覚えているのはいいのですが、忘れては絶対にいけないのですけど。それでも、思い出していいかどうかは別ですね。」

私は自分で思っている以上に壊れそうなのでしょう。

セルヴィは「創造主が責めていないのだからそれでいいじゃないですか。真っ先に抱きつかれといて贅沢ですよ。」と顔を顰めながら言ってくるのですが、私にとっては正しく死活問題です。

私のように肉体的に死が遠い者　ホムンクルスよりも遙かに  
にとっての死とは精神が摩耗しきること。

そして今の私はアイデンティティが大きく折れかかっている状態。  
自分の存在する意味を早く見つけなければ、遅からず精神的に死亡  
するかもしれません。『ご主人様の側で守る』以外の私の意義を。

「  
」  
「  
」

男と女の話し声が聞こえ、思考を仕事モードに戻します。  
物思いをしていて任務に失敗したなんて洒落にもなりません。

いまの任務は、この憎き神聖エウループ王国の中級貴族の屋敷からとある神刻物<sup>レリック</sup>を回収することです。

そのレリックは『玻璃壇』といい、ある一定の範囲の街や山などを再現し、一度登録した人物がどこにいるかを見ることができ効果をもち、大変有用なので早期に回収することになりました。これがあれば誘拐されても比較的容易に発見できるようになります。

元ネタは炎髪灼眼のメロンパン好き少女の物語に出てきた同名の宝具。

ご主人様と私の共同で作ったもので、消費する魔力が大きすぎて個人が練れる魔力では自分たちの周囲1kmほどが限界なのですが、浮遊島アークに『世界樹』があることにより事情が変わりました。世界樹を調査している研究員によると、理論値では半径1000kmもの範囲をカバーできるといことです。これはつまりアークを王国の隣にまで近づけた時に、王国の端から端までが効果範囲に入ることを表わします。

まだ見つけていない人を探す際には使えませんが、誘拐や泥棒をさ



すし。

馬に蹴られる前に、この騒動が収まらない内に『玻璃壇』を回収しましょう。

倉庫の一部を【錬成】して脆くし、静かに壊して違う通路にでます。高階【錬成】は【錬金】から発展したもので、固体でも液体でも気体でも組成を変えることができるという恩寵技能です。

既にこの屋敷の構造は、倉庫から数十分かけて超音波で精査したので把握しています。超音波を出しながら人間を避けていきます。この家の貴族はそこまで悪い貴族というわけではないので、できるだけ殺さないようにとのお達しですので遭遇しないように気を付けます。

屋敷を【無音】で数分歩き、宝物庫にたどり着きました。

『玻璃壇』の見た目は大きな懐中電灯の形をしています。胴体に魔法陣が精緻に書き込まれており、光を出す部分から魔力によって地形を映し出すのです。

他においてある財産は金やオパールや宝石類ばかりなので、特徴的な形をもつ『玻璃壇』は容易に見えました。

あとは『玻璃壇』を持って帰るわけですが、大きいので両手が塞が

ってしまいます。それに加えて、『刻』シリーズだけを盗っていくとご主人様関係に勘付かれる可能性もあるので、他の財宝も少し回収しなくてはなりません。

現在私は異空間を使った道具の収納ができないかを考えています。ご主人様にファンタジーの定番として聞いた時は、そんなに便利なものがあるのかと思ったのですが、残念ながらこの世界にはなく、自分たちで考えなくてはならないようでしたので。

上位世界と下位世界という関係があるように、同じような位相にも異空間は無限にあるでしょうからいつかできる可能性はあると思います。

いま研究しているのは空間系恩寵技能、中階【転送】【転受】です。これは一方通行で、生物を送ると根源がからっぽになった物体になってしまいますが、それを差し置いても便利な技能です。熟練度によって送れる質量や大きさ、距離も変わりますが、数百mを2秒程度で送れます。アークでもこれらの恩寵を活用するために、腕輪に加工した銀などにご主人様が刻印し、アーク内に転送所を設けています。

【転受】を刻印した場所を数か所用意すれば、【転送】が調金されたアクセサリーをもつ人が近くの転送所に送ることができ、鉱石の採掘員や収獲した者たちの役に立っています。

「待て！」

こうして『玻璃壇』の他には根源が多そうな、つまりは高価な素材

を使われている物品を回収して、屋敷からでるところです。

ご主人様なら恩寵が刻印されたものもわかるのですが……天階恩寵は私ですら根源量的に無理ですから。まさに天から、上位世界から降りてきた者専用の恩寵ということでしょう。

「止まらないなら止める！ 風弾！」

先ほどからやかましい男がいます。先ほど友人と奴隷を争っていた息子のようです。

盗人 私からしたら返してもらっただけですけど にわざわざ静止の言葉を言うとは、この腐った王国の貴族とは思えません。あの奴隷が好感度を持っていたのもありますし、珍しく良い青年なのかもしれませんね。

風弾？ 【体外魔力操作 颶風】【魔力性質変換 風】をもつ私には並大抵の風属性魔術は効きません。

【魔力性質変換 風】はマギレーヴェンになった一人が持っています。マギレーヴェン、つまりはケインになるときに一度根源を剥がして移すので、恩寵が一度浮き上がってしまい、定着するのに24時間かかるので、その時にご主人様が【根源管理】で恩寵を吸収できるのです。これが私とセルヴィがマギレーヴェン化を押し進めた大きな理由でもあります。もちろん戦闘力増強という意味もありますが、その意味でも恩寵をご主人様が回収し、その人物にあった恩寵を刻印するのは有効です。たとえばご主人様は【魔力性質変換 風】【魔力性質変換 雷】を持っていますが、闇と氷属性なので使えないです。このように本人の性質と全く関係ない恩寵が刻まれていると勿体ないです。

「風斬！ 風弾！ なぜ効かん！？」

いつのまにか殺傷クラスの威力で放ってきていますね。

それはそうと、風属性以外使えないのでしょうか……？ 【体外魔力操作】をもつていれば、その恩寵の属性じゃなくともある程度魔力の運用がうまくなるはずなのですが。雷単属性のアイリス 今ではマギレーヴェンの一員です でも他の属性をある程度は使えます。効率は悪いですけども。

おそらく風属性の魔術だけでも圧倒できたから他を覚えようともしなかったのでしょうか。まだ年齢16ほど、先輩の魔術師に叩きのめされた経験もないでしょうし。王国では魔術を使えると少なくとも精鋭の兵士団に入れますから、親や周りも喜び、持て囃し、甘やかしてきたのが容易に予想されます。

まあ、未だに王国の魔術レベルが奴隷方向以外に上がっていないのは私達にとって良いことです。150年前に兵士に使ってきた薬の開発はかなり進んでいるみたいですが……次は負けないように戦力を整えるので大丈夫でしょう。

いつまでまとわりつかれても面倒くさいので、こちらの魔力の間合いに入り、貴族の息子の首筋に威力を弱めた『風槌』を叩きこみ、気絶させます。

【魔力性質変換 風】があるので、発動までのラグは0、5秒程度。自分で使っていてもこの恩寵が低階であるのが信じられません。

マギレーヴェンから回収したものや、150年間の間に集められた武具や素材から恩寵をご主人様が吸収した結果、核・光・金属性以外の【魔力性質変換】は手に入ったので、マギレーヴェンナイツや

アンシャントルシュヴァリエの戦力が大幅に増大するでしょう。今はまず頭数を揃えなくてはならない段階なわけですが。

その後、いつのまにか屋敷中の人が集まってくるのを感じたので、見つかる前に脱出するとなりました。

「包囲している！ 投降しろ！」  
と、いつつ矢を放ってきます。

あれだけ騒いでいたら誘導先も決めて囲んでいましたか……悔りすぎていたようです。

空に逃げてもいいのですが、一瞬動きを止め、空にジャンプしなければならず、矢や魔術が飛んでくる状況だと『玻璃壇』に当たって壊れてしまう可能性があり、それは避けねばなりません。『玻璃壇』は戦闘が行われている場所に持ち込むような神刻物ではないので、【不可壊】が刻印されていないのです。【不可壊】は中階恩寵とはいえ、それなりに容量はとりますしね。

本当はできる限り目立つ魔術を使いたくなかったのですが、仕方ありません。

攻撃を避けつつ、脱出用の大規模術式を使うことにします。

「風よ、光よ、荒れ狂う暴風、瞳を焼き尽くす光瀑、半径100m、

詠唱とともに、周囲が莫大な魔粒子を集め、魔力に変換していきます。そして補助をする魔法陣が周囲に20個ほど浮かび上がり、私の立つ地面から小さな魔法陣が段々と大きくなっていき、こちらに攻撃を仕掛けている人達の下まで伸びます。

「『光嵐結界』！」

発動とともに地面に描きこまれた魔法陣が純白の光を伴って浮き上がり、空中にある魔法陣と同調していきます。そして私の近くにあった魔法陣を基点として白く強い光を放ちながら風が渦巻きはじめ、空中にある魔法陣の魔力を吸いながら一気に100mまで広がりました。

目つぶし目的の光の後に暴風で戦闘員を吹き飛ばし、風がない中央で私はのんびりと翼を形成し、身体に風を纏い、跳躍してそのまま空を飛び離脱しました。

王都郊外の屋敷から輝きながら渦巻く暴風が見えますが、殺傷能力はないはずなので大丈夫でしょう。

こんな初期から大規模で目立つ魔術を使ったのは完全な失点でした。次からは気をつけなければなりません。

成果を、玻璃檀の感触を確かめながら悠々と空を飛んで帰ります。帰る先はアークではなく、ダークヌス大陸の南にある、奴隷解放前線基地です。アークのご主人様の前には顔を出しにくいので、前線での仕事に精を出すという建前を使わせてもらいます。セルヴィに

ご主人様の周りを任せるのは不安ですが大丈夫でしょう。

……他の者にご主人様の側を任せてもいいと思っ  
ている時点で、やはり私の『側で仕える』という存在証明は失われて  
います。150年前の敗因はご主人様の周りに誰もい  
なかったことであり、私でもセルヴィでもトウ  
ールでもはたまたシルフの少女フレデリカ  
でも、側に居さえすれば守りぬけるのです。私  
である必要が……ないのです……。

### 39話 パステルの自己存在証明とは（後書き）

こうしてパステルはプロローグのような考え方へ。

元々害虫排除の考えはもっていましたが、今回のでより積極的になります。つまり主人に寄って来なくても動くように。

主従共々、どうもオーバーキルといいますが、不必要に派手にやる傾向があります。

妖怪に千本桜したり、逃げるのに大魔術を使ってみたり。

40話 ビッグイーターと子孫(前書き)

11/10/22 誤字訂正

## 40話 ビッグギターと子孫

ジャリ、と砂つぽくなってきた地面を茶色い編み上げブーツで踏みしめる集団があった。

「これがビッグギターっすか……。」「  
一人の無精ひげを生やした犬人族の男がぼやく。

「ボラル、君は初めてあいつらを見たのか。  
最初は気持ち悪いと嫌悪感を覚えるものだよ。」  
答えたのは集団の先頭に並び立っていた、純白の甲冑を纏った齡25ほどの兎耳女である。髪は青色で目は深い青色、白い肌が透き通るように美しい。

「隊長、今はどうなんすか？」  
犬人族の男ボラルの質問に、隊長と呼ばれた女性は「慣れるものさ」と不敵に微笑んだ。

「……魅了させそうっす。  
それに慣れるほど戦いたくないっすね。」

「【魅了】は発動していないはずだがね。それに無駄口はそろそろ止めようか。あちらもこちらに気づいたようだ。」  
兎人族の女性は、祖母の祖母のそのまた祖母の、などと数えきれな

いほど前から引き継がれてきた【魅了の魔眼】に手を当てる。

恩寵技能は息子や娘に引き継がれることも多い。しかし劣化しているのがほとんどなので、最初の代では周りに常に【魅了】の効果を振りまいていたそうだが、彼女は左目で目を合わせた者のみにしか影響を及ぼさなくなっていた。

「では、間引き作戦をこれより遂行する！」

先頭の女性は大きく通る声で号令をかけた。

彼女の名をクラリッサ・フラン。

始まりの血統と呼ばれる、ティアナークの下に最初期に下った家の子孫であり、アンシャントルシュヴァリエの団長である。

アンノーン大陸北西部、浮遊島アークが発見された場所の正反対に位置する草原地帯。  
さらに西を見ると海岸があり、そこには灰色に鈍く光る生物が群れて存在した。

仮称ビッグゲイター。

数年前、大陸歴1980年頃に新大陸 地球でいう北アメリカ大陸 の西側の海で発見された魔獣である。

当時、新大陸に逃げて来た魚人族 先に避難していたエルフの集落からはじき出されてより西に追いやられた が海に潜って漁をしているときに初めて見つけられた。

その姿は醜悪というしかなく、無節操なものだ。なぜなら同種と見られる固体それぞれに統一性がないのである。

たとえば、鱗とエラを持つのは同じなのだが、ある個体は鱗が銀色で4足とヒシと複眼がついており、またある個体は二足で鱗の代わりに岩が肌となっていた。

発見した魚人族は珍しさとその種族が醸し出す忌避感に興味を覚えるが、母なる海では進化も多く、新しい種族が海底から出てきただ

けなのだろうと、さして取沙汰することはなかった。

しかし、仮称ビッグイーターが生態系を崩すほどに魚介類を食い散らかし、金属などの資源までもをその胃に収めるのを見て、間引きをすることが魚人族の集落で決定される。

魚人族は男も女も他種族と比べて水中に居られる時間も深さも大きいため、さして海中にいるビッグイーターを仕留めるのに手間はかからなかった。

そうして定期的にビッグイーターを狩っていたのだが、ある時海岸から地上に上がってくる個体が現れた。

最初に地上にあがってきた個体はワニのような姿をしていたが、小さかったために近くにある湿地帯に入り込んだのを見落とすことになってしまった。

ビッグイーターは繁殖率が高く、一気に個体数が増えてその地にある物を食い尽くしてしまう。

魚人族が気づいた時には広大な湿地帯はビッグイーター以外に生物がなく、泥や岩すらなくなっていた。場所によっては地面が20mほど掘り進められたところもあったほどだ。

この時には数が多すぎ、魚人族の集落に来るのも時間の問題とかわれたために、新大陸にいるエルフに救援を求めることになる。

エルフも最初は渋っていたが、良識のあるリーダーによって討伐体が送られ、多彩な魔術を使えるエルフ達によって侵攻を食い止め、間引くことに成功する。

しかし、そう簡単に協力できるならば、新大陸にまでエルフなどの  
亜人種が追いやられることなどなかっただろう。つまりはごく自然  
に魚人族とエルフ族で争いがあつたのだ。共通の敵であるビッグイ  
ーターが居たのにも関わらず、だ。

両種族が揉めている間に魚人族の集落は大方ビッグイーターに壊さ  
れ食い荒らされ、数人の死者まででてしまう。

結局は魚人族だけで奪還は不可能と判断され、エルフの協力も今回  
は仰げなかつたために、魚人族は新大陸の最西部からアンノーン大  
陸の北西部に移住することとなる。

そしてまた数年、新大陸のビッグイーターは適度に間引き　エル  
フは自然と共にある、自然の化身だ、等と豪語しているために全滅  
させていない　され、移りすんだ魚人族はあらたな土地で平和に  
暮らしていた。

しかしその平穏もすぐに破られることとなり、この時に魚人族は油  
断をせず、すぐにアンノーン大陸の東に居た亜人集団、浮遊島アー  
クに助けを求め、すぐさま討伐隊が送られることとなった。

この時より定期的にアークから人員が派遣されている。

海中で永続的に活動できる亜人種が確認されていないため　魚人  
族もエラ呼吸ではない　に、地上が上がってきたものと、海岸近  
くのビッグイーターしか間引けていないが、生活圏が脅かされてい  
ないので及第点といえよう。

「マギレーヴェンナイトNo.2、ミスターマックモット『悪戯好きの改造屋』ステラ、  
お願いします。」  
クラリツサ・フランは腕にはめていた銀色の腕輪に手を当て、魔力  
を注ぎこむ。

彼女の魔力光である青色で腕輪に刻印されている魔法陣が輝き、す  
ぐさま自動魔法陣により大気からも魔力を生成し始め、彼女の前方  
に茶色の魔力が人型に集まり、最後に一際強く発色すると共に人族  
の娘が黒い甲冑をまとって現れた。

「ハロー、ですわ。今回のお仕事はゲテモノ退治、遠慮なく実験品  
を試させてもらいます。」

お気楽な口調で声を発する少女ステラ。  
クロノが二番目にマギレーヴェンにした少女である。ちなみに一番  
目は欠番となっている。元々この技術は150年前のブリトニア島  
エルフ族の頭領であるトミーを助けるために開発されたため、一番

はトミーのために空けてあるのだ。

「お久しぶりですステラ姉さま。今回は大規模な間引きとなりますので、マギレーヴェンナイツを数人呼ばせて頂きました。」

クラリッサ・フランはステラ　マギレーヴェンなので当時17歳のまま姿が変わっていない　に対して敬礼をした。  
クラリッサはアンシャントルシュヴァリエの騎士団長ではあるが、マギレーヴェンナイツの一般騎士に対しても敬語を基本としている。なぜならば、アンシャントルシュヴァリエに加入して、鍛え上げられた者がマギレーヴェンになってマギレーヴェンナイツに編入するのがルートとなっているためだ。

最も、クラリッサはステラの親友だったフランの子孫、個人的な付き合い合いとして「姉さま」と呼び、敬い慕っているのだが。  
ちなみに、初めて会った時に「ステラおばあさま」と呼んでしまい、大目玉をくらって慌てて呼称を変更したというのは余談であろう。

「ほんとねえ、ナイツを5人も連れてくるのにふさわしい物量……広範囲に破壊をもたらす物を持つてきといてよかったわ。」

なにやら物騒なことを零したステラ。

150年前からレンと仲良く楽しく城を魔改造して楽しんでいたステラだが、未だにその悪癖は変わっていない。

ついでに、元々長命なことに加えて、【体内魔力行使】を刻印されたことにより寿命が大きく伸びたレンは、マギレーヴェンになっていないのに若々しい身体を保ち、今日も今日とて城の後方にある研

究室に籠っている。

「では、私は先に行きますね。」

そう言っつて腰からレイピアを引き抜き、クラリッサは走り出した。既にクラリッサとステラ以外はビッググイーターとの戦闘を開始していたのだ。

「はいはい。私も準備できてるわ。」

ステラは身体に茶色い魔力光を纏いながら嘯く。すでに地面には『錬成』や『形成』で作られたシーソーが5個あり、手前側に金色の球体が10個ずつ乗っていた。そして魔粒子を固めて岩を作り出すと、シーソーの反対側に勢いをつけて落とし、ビッググイーターが大勢群れている周囲に向けて飛ばしていく。

「よし、巻き終わったわ。」

このレンさん特性の『ビッググイーターはいはいver1,2』を起動させましょう!」

手元に残った金色の少し大き目の球体にステラ自身の魔力を注ぎこみ、魔法陣を起動させる。

そうするとビッググイーターの方へ放り投げられた金色の球体と魔力のラインが繋がれ、球体からジジジという異音が発せられた。

「えっちよつと!」

マギレーヴェンナイツの一人が驚くのも無理はない。

交戦していたビッググイーターが金色の球体に引き寄せられていくの

だ。

……彼女も巻き込んで。

茶色い魔力で自動魔法陣が起動させられた球体たちは魔力光を発して周囲10mほどのビッグイーターを吸い寄せていく。数秒後、金色の球体を核としたビッグイーターでできた球が完成した。

「な、なんなのよおこれえ！」

巻き込まれたマギレーヴェンの非難がましい叫び。

「ケインは巻き込まれてないから大丈夫でしょう？」

『起爆』。

ステラの言葉と共に金色の球体が爆発し、その爆風と熱でビッグイーターを飲み込んだ。

……哀れ、巻き込まれたマギレーヴェンの少女もバラバラになった。

甲冑を着ていても至近距離の爆発では意味がない。

いくらマギレーヴェンがケインを破壊されない限り死なないとはいえ、同朋に対してひどい態度である。

ステラは塵ほども気にかけていないようだが。

「危険なら先に言ってください！」と叫ぶクラリッサの言葉もなんのその。レンと共に過ごした150年、もともと悪戯好きだったステラがマッドになるのに十分な時間だったのだ。

この後も3つほど、効果があつたりなかったり、効率が良かったり悪かったりする発明品を試し、その度に周りの騎士たちも巻き込まれたとか。

……生身のアンシャントルシュヴァリエに死者が出なかったのが最後の良心であつたのだらう。

私の名はクラリッサ・フラン。

年齢は26歳で、最近やっと子孫を残す当てができた。クロノ・テイアナーク様の寵愛を承る機会に恵まれたのだ。正直『行き遅れ』と言われても仕方なかったが、それも寵愛を受けたことでマイナスどころかプラスに大きく振り切れただらう。

……事が終わった後にクロノ様がボクの苗字を知り、「直系は何代

降りてもダメだったような！」などと焦っていたが、些細な問題だ。そもそも近親婚は王族や貴族では血を薄めないためによく行なわれているし、クロノ様は王なのだから。

ステラ様と違い、私のご先祖様であるフラン様やミア様は、最後までマギレーヴェンにならなかった。

『あの日』には2歳の子供を抱えて兎人族や猫人族と真つ先に避難したと伝えられている。『あの日』は王国によって捕虜にされた者。つまりは奴隷か殺されるかだ。も多かったので、彼女たちの行動は英断と言えよう。

逃げた先は新大陸の北東部。船で海を越え、先に逃げていたエルフ族とたまに衝突を繰り返しながらも南下していき、アンノーン大陸にまで辿りつき、集落を作って細々と生きていったらしい。

だからこそティアナーク様の氷が流れついて時にも、初期に集うことができたのだ。

氷の漂着からは大勢が騎士として鍛え上げられていき、ボクも子供の時から復活の時のために身体を鍛え、親から受け継いだ【体外魔力行使 水】をランクアップさせ、とうとうアンシャントルシユヴァリエに14で入団した。

それからも訓練の日々、魔獣との戦いの日々、時には新大陸の方へ行って王国の冒険者と応戦をし、メキメキと腕をあげ、身体的には亜人種でも強くない兎人族にして最優の手練れと知られることになった。

そしてクロノ様復活の後、マギレーヴェンナイトに勧誘されるが、

「ご先祖であるフラン様が人としての生を全うしたのを受けて丁重に辞退し、代わりにアンシャントルシュヴァリエにの団長を拝命することとなったのだ。」

「はっ！」

私は気合いを入れながら左手にもったレイピアで、両生類型のビツグイーターを突き刺す。

そのまま【体外魔力操作 水渦】で即座に形成した水の刃で身体の内から切り裂いた。

水属性の魔術は剣に纏わすことで血糊を流し、切れ味を落とすにくくするので重宝している。

「ガアアアア！」

既にだいたい倒したはずなのに、一体屠つてもまた次の個体が大きく口を広げて迫ってくる。その後ろにも数十体が控えており、一体ずつ相手してはきりが無い。

周りをさっさと見てみると私以外の区域では大方掃討し終えている。私だけ遅いのも体面がよくないだろうから、さっさと決めることと

しよつ。

レイピアを前に出し、細い刀身を伝うように魔力を流し、水を圧縮していく。

刀身は水色に光を纏う直線となり、切っ先に小さい球体、つまりは高圧で抑え込まれた水がある。

「『ウォータージェット』！」

レイピアに刻まれていた魔法陣の補助を受けて、セルヴィ様から直接ご指導頂いた『ウォータージェット』を発動、少しずつ角度をずらしていき、扇型にビッグイーターを貫いていく。

その貫通力は数体のビッグイーターを貫いてなお余りあるほど。

レイピアは魔法陣での補助以外に、ウォータージェットを使う時の圧縮・放出のイメージをつかみやすくするために愛用している。

最近ティアナーク様から頂いた特別品で、【不可壊】以外にも【貫通強化】【水辺の土地神の加護】が刻印されている。

【水辺の土地神の加護】は、『水があるところでのステータスが上昇する』効果があり、水魔術を行使するものにとっては垂涎ものだ。

数十体いたビッグイーターはウォータージェット二発でほぼ壊滅し、残りは近くに援護に来ていたアンシャントルシュヴァリエの一人がとどめを刺した。

「よし、作戦は完遂された。数名を残してキャンプに戻れ！」

終了の声を掛ける。

珍しい個体があれば回収すると言われているが、今回では発見できなかった。

……正直、繁殖率が高いとはいえ、このような弱い魔獣　奇妙ではあるが　に気を使う必要があるのか疑問に思う。　ただの魔獣に過ぎないではないか。

まあいい、今も未来も、クロノ様の命令に従うのみだ。

クロノ様が居らず、指導者の不在によって停滞していた過去とは違うのだから。

……この5年後、この時の判断　ビッグイーターを舐めていたこと　に後悔することとなる。

ビッグイーターの個体差の理由、なぜ海から地上にあがってきた最初から足をもっていたのか、どれだけの数が海にいたのか。

これらに思い当るか、せめてしっかりと細かく報告をしていければ結果は変わったかもしれない。

覆水盆に返らず、通り過ぎた過去を踏まえてできることを成すことしかできない。ボクは生涯ビッグイーターと戦い続けることになる。

## 41話 出会いと決意と騎士団長ヘンリエッタ

「ヘンリエッタ様！ 探索者26名が9階を突破寸前です！ こちらの損耗は、魔獣54匹、アンシャントルシュヴァリエ3名です！」  
世間で魔王城と呼ばれる城にて、今日も戦い続ける騎士達がいた。

「10階からの封魔結界内で迎撃準備。マギレーヴェンナイツを6名出す。11階に絶対防衛網を敷くように。」

報告を受けて即座に指示を飛ばすのは、ウエーブする金髪を波立たせる身長145cmほどしかなく、人形のようにかわいらしい、左耳が半分欠けたダークエルフの少女。

しかし部下に命令を出す少女の表情には、笑みなど一欠片も存在していない。能面のように、自分と部下の動かし方を考え、合理的に使命を果たす。

仕事の時だけは彼女は表情を失くし、不思議な威圧感を発するのだ。何を隠そう、この人形のような少女こそがマギレーヴェンナイツの団長、150年もの間魔王城を守り続けた、最強の騎士ヘンリエッタ・ガヴェインである。

「城を守る騎士達よ！ 今宵から重要物の運び出しが行われる。しかし、私達がすることは何も変わらない。150年もの間戦い抜

いた私達に敵う者などいない！ その胸にある忠誠を捧げ、城を守りぬけ！  
「

今でこそ、裏切りの騎士アルメイダ・ランスロットと対比され、マギレーヴェンナイトのリーダーとなり、クロノから忠節の騎士ガヴエインの名と神刻物『ガラティン』をもらった彼女だが、そこまで辿り着くには果てしなく長い戦いの日々があった。

私とクロノ様の出会いは、屠殺場であり、白馬の王子様との出会いのようにロマンチックなものではなかった。  
あったのは血と死体だけだ。

『屠殺場』とは、亜人や人族で強力な恩寵技能を持っている者を文字通り『屠殺』する場所だ。王国には『恩寵狩り』をする部隊があり、その人員は全員自分の根源をいっぱいまで詰め込んだ者たちで、根源量が大きい武器を用いて殺し、ステータスや恩寵技能を武器に吸収させる。

『屠殺』と俗に言われることから、いかに亜人や貧乏人が家畜扱いされているか分かるというものだ。

屠殺場に入れられたのは、私のいたダークエルフの集落がダークヌス大陸への避難を決め、海を越える直前を急襲されたのだった。

ダークエルフは魔術も身体能力も中途半端な種族だ。エルフのように魔術を扱える者ばかりというわけでもなければ、獣人のように身体能力が高いわけでもない。それに魔術を使っても大抵は閻属性であり正面からの戦いには向かない。

私のいた集落は人族を侮っているわけでもなかったが、直接狩られた村を知っているわけでもなかったため、人族に対する見積もりが甘かった。自分たちのような小さな集落を何日も見張っていると思っておらず、同数より少し上程度の集団なら返り討ちにできるだろうと思っていたのだ。

しかし実際に襲撃してきたのはこちらの3倍以上の1000人。しかも魔術師が数人混ざっており、最新式の弓矢で次々とダークエルフたちは、瀕死の怪我を負い倒れていった。

こうして私達の集落30名は拘束され、盗賊のアジトかと思まがうような薄汚れ、崩れかけた洞窟に連れてこられた。

奴隷にされるならまだいつか脱出の目があるかもしれないと、希望ともいえないような希望を抱いたが、道中に聞こえた『恩寵狩り』や『屠殺』という言葉の前にその淡い希望も失っていた。

「ほう、ダークエルフか。魔術系を持っているのは？」

……6名だけかよ。しけてんな。」

奥からでてきた胡散臭げに微笑む男は、引きずられる私達を品調べするように眺めた。

魔術系の恩寵技能を持っているかどうかは、同じ技能を持っている人が見れば、常に纏う魔力などから大体の見当がつくらしい。

「そういうなよ。これから貴重な恩寵を得られるかもしれないだろう？ さてと、どんな恩寵を持っているかどうか吐いてもらおうか。」

後ろから私達を連れてきた男が声を掛けてくる。

そして始まったのは拷問。

口をつぐむダークエルフの指は落とされ、誇りをもつ長耳をえぐり取られ、家族がいるものは家族の命 絶対に助からないとわかっ  
ていても 盾に自分の持っている根源を言わされる。

少数種族は自分の恩寵を小さいうちから把握する風習がある。自分の力を知ることが生き延びるために重要なことだからだ。

「おつ、この娘かわいいじゃないか。殺す前に使ってもいいよな？ さあ恩寵を教える。」

いつのまにか私の番になっていたようだ。早速ナイフが右耳に当てられる。

若い少女が捕まった時にどうなるかなどわかつてはいたが、実際にその危機に陥ってみると、途方もなく悔しく屈辱的だった。この男は私を性交を交わす人間とすら見ていない。ただ自分が満足するために『使う』道具としか見ていない。

「んー？ びびっちゃったのかなあ？ なめんなよ…？」

男の目が本気になり、右耳から血が数滴流れる感触が伝わる。

「かつ、【ベクトル変換】ですっ！」

私は慌てて叫んだ。そして周りの男たちに驚愕の表情が広がり、そしてすぐににやけた面が変わる。

「あ、あにき！ 【ベクトル変換】って確か！」

「ああ、高階恩寵の中でも上位クラスだったはずだ。おそらく金貨3000枚はくだらないぞ。」

「それだけあれば貴族位すら買える……。」

「もう仕事せずに暮らせるじゃねえか！」

皮算用をして色めき立つ男たち。私は自分が確実に取られる狸であることを認識すると共に、この男たちが本当に王国の正式な部隊なのか疑問を覚える。あまりにも低俗すぎるだろうと。

「これだけ貴重な恩寵だと、確実に吸収しなきゃだめだからな。こいつは繋いどけ。すぐに本部の人間とヒイロノカネを使った武器が派遣されるだろう。」

そうして一人の男が近づいてきて右耳からナイフを離す。私はひとまず、誇りの耳を守れたことに、幾ばくかの安心感を覚えてしまった。命は確実に失われることが確定し、しかも男たちの低俗さを一瞬忘れていたのだ。

「なあに安堵してんだよ！　ぎゃははははっ。」

顔の左顔に激痛が走った。

「いつつ……あ、あ、あああああああ！」  
左耳を中ほどから切り離されたことを悟り、痛みではなく怒りで咆哮する。

意味がない、意味がないことで私の誇りを、こいつは叩ききったのだ！

「おいおい、ちゃんと繋いどけよ。この調子じゃお楽しみは後だな。」

いくら顔を憤怒で彩っても、手錠に首輪に足錠もされていては、目の前の憎い男に拳を届かすこともできなかった。

数時間後。

外が俄に騒がしくなってくる。本部の人間とやらがやってきたのだらう。

私の周りには犯されて殺された女ダークエルフや、拷問の末に殺されたダークエルフたちが転がっている。ただ死ぬだけではなく苦しまれ、そして最後にはそのダークエルフの価値は恩寵にしかないと宣告するように、恩寵を吸収されて殺される。

私の【ベクトル変換】で無理やり犯すこともできず、しかし憎悪で睨んでくる男の権限では私を勝手に殺すことはできない。よって服を脱がされるのみだった。人族と流れる時間が違うとはいえ、30年間守った純潔はそう安くない。それにダークエルフが長い生涯で捧げるのは一人のみ、というのが基本だ。

656

「……………なぜ、人が来ない？」

外から騒がしい音がして、本部の者が来たと思ったが、違ったのか？盗賊にしても、国に所属する無法機関に刃向おうとするだろうか？

相手が荒事専門だとわかっているのに。

キンツ、ドンツ、ドサツという音が絶え間なく聞こえ、こちらに近づいてくる。もしかして誰かが助けに？

甘い考えは数瞬も経たずに追いやる。ダークエルフを助けようとする

る種族などない。

闇の眷属、魔の一族。浅黒い肌は邪悪の象徴。

ダークエルフに安住の地はない……。

「大丈夫か？」

誰だろうか、私にやさしい声色で言葉をかけるのは。顔を上げる。手慣れた手つきで持っていたマントを掛けてくれるのは、あでやかな黒い髪に、今まで見たことがない黒い色の瞳、顔は少女と見間違えるように整っており、先ほどまで犯そうと躍起になっていた野蛮な男と同じ種族、同じ性別だと信じられない少年だった。

地味で無難だが仕立てのよい服とローブを着ている少年は、私の手錠や首輪を一瞬で腐食させて壊し、あっさりと私を解放した。

「……遅くなってごめん。」

少年はそう謝りながら手を差し出してくる。

おそらく、もっと早く来れば周りに物言わぬ死体となっている家族たちを救えたのに、と思っているのだろう。

しかし私には家族や親族の事は頭から抜けていた。私の髪は金色で、ダークエルフが一般的に黒髪であるのと違い、それを理由に軽くいじめられていたこともあったことと、私の持つ珍しすぎる恩寵がい

つ集落を壊滅に追い込むかと恐れられ排斥されていたために、親愛はあまりなかった。あったとしても、今は目の前の少年に救い出されたという嬉しさで忘却していたのだろう。

そのまま、洞窟を出ていく少年。細腕でどうやって私を抱えているのかわからない。後で聞くと、抱いた時に【軽量化】を私に刻印していたらしい。が、私を抱いたまま残っている恩寵狩り部隊の人族たちを氷でばらばらにしていく。周りには数人の亜人がいて、少年の仲間のようだ。

そしてケンタウルスの馬車に乗せられ、自己紹介をされる。クロノ・テアナクというらしく、20歳で成人とのことだ。145cmしかない私が言うことではないが、男にしては身長がだいぶ低いので驚くことになった。

彼らは王都からの帰りに、恩寵狩りの人間が集落を襲う算段を立てているという噂を聞き、仲間にはダークエルフがいることからほつとけずに妨害しに来たそうだ。しかしダミー情報に惑わされ、来るのが少し遅れてしまったとのこと。そのことで謝られたけど全然責める気にはなれない。そもそもダークエルフを助けようと思うのがこの世界では異常なのだから。

近くの街に着き、休憩となる。ケンタウルスは疲れておらず、野宿をすることも多いらしいが私に気を使ってくれたようだ。そして、宿の私の部屋にクロノ・テアナクが訪ねて来、彼らが本拠地としているブリトニア島のレスト 翼休む刻 に来るかどうか聞かれた。

「もちろんです！ クロノ様！」

答えるまでもなかった。

初めてなのだ、手を差し伸べられたのは。

この人だけなのだ、常に逃げ続けた私に、安住の地を保障してくれるのは。

レストでは驚きの連続だった。

全人種が共に協力し、たまに小競り合いがあってもクロノ様の下にまとまる。

家は出来立てでしっかりとした煉瓦造り、食べる物はおいしい白い小麦パンに、野菜と肉が入ったスープ、そして甘い果物。たまに肉料理や魚料理すら出る。

各種族の優秀な者は城で重要な仕事ができ、娘たちは拳って争うように侍女として仕えようとする。

異様に数の多い魔術師たち　魔術が苦手な獣人族すらいた　が、戦闘ではなく生活を豊かにするために魔術を使っていた。

私も恩を返すために侍女として仕えることを決め、そしてしばらくしてからこのレストの豊かさ、クロノ様への崇拜とも呼べる敬愛の理由を知る機会に恵まれた。

天階恩寵【根源管理】【恩寵刻印】。そしてこの世界全体よりも比べるのも烏滸がましいほどの圧倒的根源量。

命を助けられた恩から人一倍一生懸命に働いた私は、周りよりもかなり早くクロノ様のお側まで来ることができ、そして私にクロノ様がやるうとしていることを教えてくれた。

曰く、この世界の不条理な不幸を無くしたい。理由は、生み出した人間と同じ世界出身としての責任と、自分が世界の汚く悲しい部分を目にしたくないというエゴから。

これをクロノ様が言い終わった後、「変なこと言っでごめんね」と仰られたが、思想は立派であるし、欲からであつても助けられた立場からすると、助けてもらつた事実だけは決して消えない。

「クロノ様ならできます。私もお手伝いさせていただきます!」

私はクロノ様に抱きついていて。クロノ様が危うく見えるのだ。この少年は確固たる信念か誓約か、貫くものを持っているが、本質は平和に育ってきた心優しい一般人。いつか折れて立ち上がれなくなつてしまわないか、どうしようもなく不安になる。

そして彼の下に人が集う理由が、もう一つわかった。

神のごとき恩寵と根源量とそれによる恩恵、そしてどこか不思議で酔つてしまう、魅了の魔眼かのような黒い瞳。

だが、彼が引き寄せる要素はそれだけではない。外部から見れば、近くで接していない者が見ればその二つを上げるだろう。しかし、近しくなればわかる。この少年は、どうしようもなく、守りたくな

るのだ、仕えなくなるのだ、支えなくなるのだ。

壮大な願いも、クロノ様の恩寵技能があれば、成し得ると私は確信し、信じている。人の身では敵わぬ分相応の願望も、神と最も近く、天使そのものであるクロノ様であるならば。

【豊穡の女神の加護 ラウニプロテ】を刻印した道具による土壌改善と収穫率の激増と安定。【体外魔力行使】を刻印して生活環境を改善し、魔獣の脅威を下げる。その他便利な恩寵や防衛に役立つ恩寵の数々を全てクロノ様は持ち、他人に与えられる。そしてパステル様はクロノ様の持つ全ての恩寵技能を行使できる。

【根源管理】により、24時間以内であるならば他人が得た恩寵を吸収でき、直接根源に触れて新しい生命体を作ることすらできる。また、魔造生物化で不老不死も実現できる。

これらを天使の、神の力と言わずしてなんと言おうか。

人々は自らにないとあきらめていた才能を、いつも圧倒的な実力差で身分差を確立していた魔術を、クロノ様は与えてくれる。後遺症などなしに。

根源量は増えずとも、そのバックアップとして恩寵を刻んだものを身につければよく、根源量が世界を内包するほど大きいクロノ様の近くにいれば、少しずつといえども増えていく。

そして貴重な恩寵や種族固有の恩寵を持っていた者にとっては、人を殺めなくても恩寵技能を吸収し、複製し、与えることができるという点が衝撃だ。

魔造生物化、マギレーヴェン化の研究成果に一つの技法がある。ケインに一度根源を写し、定着しきっていない根源から恩寵を吸収し、そして根源を肉体に戻せば、相手を殺すこともなく、純粋に恩寵技能が無限に増えたということになる。

神から与えられたと謳われる恩寵を無数に増やし与えることができ。このことは恩寵狩りに狙われる人々、時には恩寵の事を迷惑だと恨んできた人々にとっては一番の救いとなる。

恩寵が理不尽で気まぐれで存在の不確かな神ではなく、身近で優しく間違いなく存在している神クワによって管理してもらえる。クロノ様の下では貴重な恩寵など存在しないも同然となるのだ。必然、それを狙われて殺される心配など皆無。

クロノ様は、この世界に降りてくるまで本当に平和に暮らしてきたのだろう。私達の辛さや悲しみを理解しようとする努力してくれているが、そのことは嬉しくて救いになるのだが、しかしクロノ様には理解できないだろう。

理解できているならば、「何でこんなに讚えて、慕ってくれるんだろうか」などというお言葉はでてこないはずだ。クロノ様は自分がどれだけ素晴らしい能力を持っているか、どれだけ私達への救済の希望となっているか、つまりはわかってくれていないのだ。

そのことは少し寂しい。でもクロノ様が自分の価値をわかっている

いというのなら、周りがゆっくりと、理解していただけるように働きかければいい。

私達が受け取った救い比べると小さすぎることだ。どれだけ頑張ってもほんの少しの返済にもならないかもしれない。

それでも、この心身をクロノ様に捧げ、その夢を追うのを手助けしたい。

こうして、私は私が持ち私を悩まし私を苦しめた【ベクトル制御】をクロノ様の役に立てて頂くために、ケインへの一時根源移植をして頂いた。

そして今度はこの身も捧げるために、不老不疲不死、永遠の騎士、魔粒子で出来た高次の生命、マギレーヴェンになることを決めたのだった。

41話 出会いと決意と騎士団長ヘンリエッタ(後書き)

作者的に最も好きなキャラがでした

## 42話 騎士達の誇りと探索者

ブリトニア島の中心に位置する黒曜石の城、第一のSクラス迷宮  
魔王城。

10階以降では大規模封魔結界により、魔術が使用不可能になり、  
純粋な白兵戦のみとなる。

幾人もの研究者がその封魔結界の原理を調べようとしたが、そもそも10階までに、魔獣や亜人やスケルトンなどが徘徊する魔王城を研究者という足手まといを連れてこれるわけがなく 魔王城はどこどころせまくなっており、物量に任せても上手く進めないようになっている、本家であるジャポンでは100年に渡る内戦が起こっていて、留学生を出せる状況ではない。

「リーダー、やっと10階にたどり着きましたね。」

「ああ、そうだなリオ。ここからは魔術師ではなく我ら冒険者の独

壇場となる。」

魔王城は10階の封魔結界もそうであるし、それ以下の階でも細い道が多く、魔術師が従来よりも力が出せず、魔術を使えずにいつも舐められていた冒険者の方が活躍できるという状況にあった。

よって、150年前に魔王城が最初の迷宮として登録され、空前の迷宮ブームとなったときにも、迷宮は冒険者向けのもものと認識されるに至った。

魔王城は、多くの武器や魔導具、魔術礼装に魔術理論を求めて冒険者が大量に訪れるが、死んだ冒険者は、死体やゴミを特殊なスライムが掃除し、小さなネズミと猿の混ざったような魔獣が城内に落ちている装備や金を回収して宝箱に収めるといふシステムになっていた。

それを見た金持ちの貴族が道楽として、または町興しのために迷宮を立ち上げたのが迷宮ブームの始まりとなる。

ある程度の宝を迷宮にいれ、魔獣や亜人や奴隷戦士を放ち、うまくいけば宝を手に入れられるが、失敗すれば死んでその骸にある武器などが回収されるという仕組みにしたのだ。

難易度を迷宮ごとに決めて、探索者ギルドという冒険者ギルドの出張版までできるほどのブームとなった。冒険者には死か宝かというのが受け、また世論が迷宮を嫌う冒険者は臆病者だという流れになったためだ。

そして封魔結界は流出していないが、クロノが造った『無魔空間』  
については早々に流出していたために、疑似的に魔術が使えなくなる空間を作成できるようになったので、年々価値が下がっていた冒険者の復権が遂げられた。

ちなみに迷宮に入れる魔獣については、魔王城から初期に盗み出された魔術である、魔獣のゾンビ化があるために需要を賄った。奴隷戦士を迷宮に入れて、何人殺せば解放してやるという条件を与えて冒険者を襲わせるなどした。特に魔法『亜人隷属』ができてからは、奴隷にした亜人は迷宮に入れることが多くなり、さらに奴隷狩りが加速することとなった。

「確か13階まで上がったのが150年前の最初期だけなんだってな。」  
冒険者グループ26人のリーダーが話題を振った。すでに10階に入ったところだ。

「やはり昔の方が冒険者が弱かったってことですか？」  
先ほどリオと言われていた少年が、手に持つ片手剣をいじりながら質問する。

「いや、そうじゃないよ。」  
答えるのは隣にいた弱い20ほどの女性冒険者だ。両腰にレイピアを下げている。

「最初はこの魔王城の上の方にいた魔造戦乙女達も未熟で連携がとれず、しかも王国の魔術師や兵士が圧倒的な人数で攻めてかかったからね。いくら大人数で戦いにくい構造をしていると言っても、相手の精神力や魔力が切れるまで戦い続けられたら厳しいよ。」

でもそれ以来13階まで辿り着いた者はいないし、11階に上げられるだけでも確か」

「10年ぶりだな。最も貴様らに11階を踏まず気はさらさらないが。」

突然割り込んできた声に、まずリーダーが反応して牽制にナイフを声のほうに投げつけ、数週遅れて周りの冒険者たちも武器を構え、動揺することなく散開する。この前の階まで頼りになっていた魔術師たちは後ろに控えて自分の身を守るようにする。

「……誰だ。」

「ここまで来られるだけあってそれなりにやるようだ。しかし名を名乗れというのなら貴様らから名乗るべきだろう?」

暗闇から現れたのは8人の騎士。全員が娘で黒い甲冑を着ている。冒険者たちから息を飲む声が聞こえた。既に正体がわかったようだ。

「俺たちは探索系冒険者グループ『銀の竜槍』。俺の名前はリーダーのゲオルグ。」

お前たちは黒い甲冑ということは……」

騎士たちは身を正す。

「貴様らに敗北を与える我らのことは既に知っているようだが、改めて名乗ろう。」

私はリーナ。そして我らは『マギレーヴェンナイツ』、ティアナーク様に仕える騎士だ。

魔造戦乙女などと言う名で呼ばれることは拒否する。」

凜と通る声で戦闘にいた騎士　　赤い髪をしたエルフの娘　　リーナが名乗る。

一系乱れぬ陣容は騎士達の実力、そして自信と誇りを表わしているかのよう。

「……9階まで見なかったが、10階で待ち伏せているとはな。」

「待ち伏せとは嫌な言い方だな。城の最上階を守れと命じられた騎士としては動けぬのだよ。」

嫌味なゲオルグに涼しげに答えるリーナ。

「ほんとにその身体は偽物なんですかい？」

いままで少し縮こまっていた少年リオが勇気を出して聞いてみる。

横から入ってきた声に眉をしかめるがそのまま話す。

「偽物と言えば偽物だ。しかし本物の肉体と変わらず臓器があり骨があり血が流れている。それも魔粒子で出来たものだがな。」

「ほえええ。」とリオは気の抜けるような声をだして、その技術に關心する。未だに魔獣のゾンビ化ですら失敗することがあるというのに、この城では人間の死体がゾンビ化され下の階を彷徨い、さらには魔力でできた人間などという物を150年も前に作ったというのだから。

「ふふん。驚くのも無理はない。我ら自身ですらティアナーク様のお力の一端も理解できなかったからな。しかしティアナーク様のおかげで我らは生き延び、永遠を仕える騎士となれたのだ。

彼の方は我ら亜人を救い導き　　」

主人を誇るリーナ。しかし最後まで言うことはなかった。

『ズドオオオン!!』

と、いきなり大きな鉄塊が飛んできて、騎士と冒険者の間に落ちて煙が舞う。

「な、なんだ!?!」

「これはまさか!?!」

ゲオルグもリーナも驚く。

砂煙が晴れるとそこにはクレーターを作っている無骨な長く薄い鉄の塊、そしてその横に立つ背の小さな金髪少女がいた。

「……無駄なことを話し過ぎ。とっととやりなさい。」

浅黒い肌に金髪、そして赤く光る双眸。人形のような少女がかわいらしい声で、しかし抑揚がなく冷たい声色でリーナに話しかけた。

「なっ、なんだてめえは!」

「ここはガキの来るとこじゃねえぞ!」

いまままでリーナたちマギレーヴェンに気圧されていた冒険者メンバ

「が、小さくて貧弱そうな少女を見るなり、一気に気を取り戻して叫ぶ。

「うるさい。」

そう少女が呟くとともに左手が動き、腰にあった投げナイフが銀の閃光となり、気色ばんでいた冒険者二人の肩に突き刺さった。

「があああああああ！」  
肩に走る激痛に悲鳴をあげる冒険者の男たち。

「お前たち無礼であるぞ！」

こちらはマギレーヴェンナイトの団長、最強の騎士ヘンリエッタ・ガヴェイン様である！」

「リーナ。いいから早く潰しなさい。」

赤髪エルフ騎士のリーナは誇らしげにヘンリエッタのことを紹介するが、ダークエルフの少女ヘンリエッタの反応は冷たかった。

ゲオルグが口を開く。

「ほう、嬢ちゃんが最強ねえ。見た目は……いやマギレーヴェンナイツは全員若いまま150歳を超えているんだっただな。」

とりあえず、嬢ちゃんを倒せば他のやつらは倒せるってわけだ。」

「……私は出るつもりはない。リーナ達8人の騎士で十分。」

「我々冒険者を甘く見過ぎていませんか、魔王の騎士よ。あなたたちの武器や所有している恩寵の情報もこの150年間で集められ分解されているのですよ？」

最強の騎士ヘンリエッタ。武器は主に大剣か大槌。高階恩寵【ベクトル制御】により軽々と振り回す少女、でしたね。」

若い女性冒険者が不敵な笑みを浮かべて口を挟む。

「……むしろ8人も出している、といったところ。  
私達の仲間を攫って隷属化させて情報を吐きださせているんだっ  
たわね。」

敗れ辱められ利用されることとなったかつての仲間たちを思い、ヘ  
ンリエッタの瞳は鋭くなった。

「盗人どもよ、もう冥土の土産は十分でしょう？」

王を守る剣、マギレーヴェンナイツよ！ 盗人を殲滅せよ！

ヘンリエッタは表情をより冷酷で無感情なものに変え、しかし声に  
は滾るクロノへの想いと騎士の誇りを彩らせ、騎士を鼓舞した。

『はっ！』

团长直々の鼓舞を聞いて騎士達は即座に攻撃行動に入った。そして  
ヘンリエッタは、巨大な鉄塊をその小さな肩に乗せて後ろに下がる。

「覚悟！」

リーナが手に持つ赤い両手剣で斬りかかり、それをリーダーのゲオ  
ルグが受け止める。

「散れっ！ 相手は8人、こちらの戦士は16人だ！ 必ず一人につき二人であたれ！」  
リーナの重力を活かした重い振りおろしを、手にもつ大剣で止めつつ指示をだすゲオルグ。しかしそのまま抑えきれずに手首で斬撃を逸らすことに専念する。

「実力差はわかっているようだな！」  
軽く挑発しながらもリーナは休むことなく横から胴体に向けて薙ぎ払う。

「じゃねえと生き残れないんでねっ！」  
ゲオルグも軽口のように返しながら薙ぎ払いを、見た目にあわぬ身のこなしで後ろへと飛び回避する。刹那の間に態勢をたてなおし、右足を前に出すと共に赤い大剣を槍のように突き出す。ゲオルグの大剣は先のほうに行くにつれて、幅が細くなっているために突き刺すこともできる。

「一度死んだら終わりとは、人間とは難儀だな！」  
突きを何とも気負わずに横に避けたリーナは突きで空いたゲオルグの左から、つまりリーナの右から両手剣を操り切りつける。今度は受け止められる斬撃と見てゲオルグが大剣を正面からぶつけた。

「あんたらだつて元は人間だろうが！ 化け物になりやがって！」  
「むっ、化け物とは聞き捨てならぬな。マギレーヴエンと呼べ！」  
「似たようなもんだろ！」

数合打ち合い、その度に言葉を交わすリーナとゲオルグ。  
おそらく、彼らは魔王城で会わなければ気が合う友人となっていた

だろう。

キイイイイン！

「『銀の竜槍』のゲオルグだったか、覚えておこう。なかなかの腕前だった。」

ゲオルグの大剣をリーナの両手剣が叩ききった音だ。先のほうが槍のようになっているがために折れやすかったのだ。

「しかし竜槍というにはいささか武器が負けていたようだな。」  
「素晴らしい両手剣を降ろし、周囲を確認するリーナ。  
全てマギレーヴェンナイツが押している。数分のうちに終わるだろう。」

「……リーナ。相手は膝をまだついていない。」

しかしヘンリエッタの声に、はっと違和感に気づくリーナ。  
リーダーがやられたというのに周りの冒険者たちに同様はなく、リーダーと共に二人でいたが、全く斬り込んでこなかった少年の目にも悲壮感はない。

「150年の研鑽、技術はさすがというべきか。しかし筋力は所詮女の範疇にすぎん。」

銀の竜槍を見せてやる。」

ゲオルグがそう言うと、後ろに控えていた少年リオが棒を布で巻いたようなものを投げる。空中で回りながら布がとれ、中から現れた

のは

「……それが銀の竜槍か。たしかに竜の素材を使っているようだな。」  
「全身が銀色に鈍く輝く長槍だった。」

「ああ、これは地竜の亜種である金竜の骨と牙、鱗を使った逸品、『銀の竜槍』だ。売れば金貨2000枚はするだろうな。」  
柄は太く銀色で、ゲオルグの癖にあわせて調節がしてあり、穂先には竜の牙をまるごと使って研いだ刃がついている。

「今からが本番ということか。ならば私リーナもこの両手剣『炎獅子の鬣』の真の力を見せよう。」  
高らかに言い放ち、赤い両手剣を向ける。その名の通りに刀身に炎を纏いだす。

「ゲオルグさん！ あれはこの空間では刀身に込められた魔力が続く間しか使えないという弱点がある！」  
リーダーにアドバイスを送るは女冒険者。もう一人の男と共にマギレーヴェンナイツ一人を押している。

「その情報も隷属させられた仲間たちから齎されたことを思うと遣る瀬無いな。」  
確かに結界内でこの炎が持つのは4分ほどだけ。しかしそれだけあれば十分だ！」  
啖呵を切るとともに炎を纏う『炎獅子の鬣』を振るい、炎の斬撃を飛び道具のように放つリーナ。

「こつちこそ、3分ありや十分だ！」  
売り言葉に買い言葉と答えるゲオルグは、予期せぬ飛び道具として

の使い方にぎよつとするも、すぐさま身体を射線から反らし、振り下ろしたばかりのリーナに向けて突き出す。先ほどの大剣で突きをやったときは雲泥の差だ。それほどまでに槍が伸びる速度は速く、銀の輝きそのまま避け遅れたリーナの左肩に突き刺さった。

「ぐっ！」

リーナは刺された肩を急いで修復させる。

極度の痛みはシャットアウトするように設定されているが、身体の危険を知らせるために痛みの違和感が残されている。

封魔結界内では魔粒子がないために、回復を自分の身体を構成している魔粒子でやらねばならず、怪我を完全に治すと他の部分に影響がでてしまうために、傷口を浅くするまでに留めた。

「まだまだあつ！」

ゲオルグの槍の連続突きを交わし続けるリーナ。しかし少しずつ傷が増えていく。

「炎の渦を吐け！」

ごうっ！ とリーナの叫びとともに『炎獅子の鬣』より炎がでてリーナの周り5mに渦巻く。ゲオルグは巻き込まれる寸前に距離をとるが、槍の柄が熱くなり、手のひらが焼けていくのがわかった。

「その温度……普通の槍なら溶けていたな。」

『炎獅子の鬣』が纏う炎は最高3000度まであげることができる、火属性から核属性へ一歩踏み入れている神刻物だ。しかし燃費が悪く、封魔結界の外ならともかく中ではすぐに魔力が切れてしまう。

封魔結界内では登録者 クロノとパステル 以外は魔術が使えないために、武器に魔力を込めて武器の能力として使うという抜け道を見つけたが、武器に込められる魔力にも限界がある。

そしていま大技をつかったために残った魔力は後少しだけだ。

「悪いな、リーナ。これで終わりだ。『銀の竜槍』よ、銀光で貫け！」

ゲオルグの叫びとともに穂先の根本、鱗でつばぜり合いができるようになっていている部分に銀の光が溜まり、竜のブレスが放出された。銀の光の柱はリーナへ向かい、炎獅子の鬣で防ぐ前に身体を中心へ突き刺さった。

「がはっ！ ……すみません主様、ヘンリエッタ様。」

そのまま身体が魔粒子へと還り、魔粒子は魔力に練られるまえに封魔結界により吸収された。

「……同じ放出タイプの武器だったが、こちらの金竜の格の方が高かったようだな。」

パチパチパチと、やるきのなさそうな拍手が響く。いつのまにか周りに音が消えていることにゲオルグは気づいた。

「……お見事。しかし仲間は死んだ。残っているのも逃げようとしているけど、構造を熟知している私達からは逃げられない。」

「！？」

追撃しようとして新たに動き出した騎士をゲオルグが牽制して止める。

「……あなたの相手は私。」

そう言ってヘンリエッタは自分の身長のおよそ三倍近くある剣を持ち上げる。

「それは、剣だったのか。」

シュツ、ゴイイイイイン！！  
ヘンリエッタが答える前に動き、軽々と振り下ろす！なんとか避け  
たゲオルグだが、またもや地面にはクレーターができる。

「…………『ガラティン』。私の忠義の証。」

「くっ！ 【ベクトル変換】 ってのは反則だっ。」

「…………数秒は持つて、ね…………？」

宣告の時には、すでにヘンリエッタは刀身5mの無骨な黒い大  
剣ガラティンを振り上げていた。

## 42話 騎士達の誇りと探索者（後書き）

アーサー王伝説のように、ガヴェインの忠義がランスロットの帰還を認めずに主を死に追いやることになる、なんてことにならないければいいのですが。

ちなみにこの世界ではベクトルというものはきっちり認識されていません。ただ【ベクトル変換】というのがあるので、ぼんやりと『向きのような概念』と知られているのみです。

また、とても繊細な恩寵技能なので、新たに刻印しても操作失敗で身体がはじけ飛ぶこともあり、注意が必要です。

重力のベクトルを変えて空を飛ばうとしても、身体全体にかかる重力をひとまとめとして捉えきれずにやると、身体の一部だけが上に向かい、他の部分がそのままとなって、ちぎれるとまでは行かなくても大げがすることになってしまいます。

### 43話 後始末と騎士の軌跡とクロノ

「冒険者は二人に逃げられてしまいました。」

「そう。」

報告を聞くヘンリエッタは13階にいた。

結局ゲオルグは20秒も保たせることができたのだ。その20秒の時間稼ぎが2人の命を残すこととなったのかもしれない。

ゲオルグの『銀の竜槍』のなかなか 神刻物以外ではトップクラスに 良い武器だったが、クロノが恩寵を刻んだ神刻物には勝てない。『炎獅子の鬘』も最初から魔力を多く使って『全炎の獅子』をすれば、炎の獅子レオンが召喚され、ゲオルグに負けることなどなかっただろう。

そもそも、封魔結界の中では魔術が使えず、身体の修復やブーストをする魔粒子を身体の中の一部を削って捻出しなければならないために、マギレーヴェンの戦力は潜在能力の半分に落ちる。

様々な属性の魔術師がいる場合は封魔結界の魔力共有ができず、むしろ反発してしまう。これについては150年前でも解決できなかった。

ちなみに『銀の竜槍』は回収したが、ヘンリエッタの『ガラティーン』

が真つ二つに破壊してしまった。

【不可壊】や【重量化】などが刻印されているガラティンは、【ベクトル変換】を用いるヘンリエッタ専用の武器だ。ただでさえ大きく重いオリハルコンの大剣を【重量化】で更に重くしているために彼女以外では持ち上げることができず、その破壊力は『固定化』している床をぶち抜いてしまうほどだ。

そして中階恩寵【同調】が刻まれているために、ヘンリエッタの【ベクトル変換】がガラティンに触れたものに対しても適用される。これによって、ヘンリエッタと打ち合ってもベクトルは反射されたり逸らされ、また、ガラティンから生じる衝撃刃の指向性を自在に変えることができる。

欠点といえば【ベクトル変換】はアクティブスキルなため、某アクセロリータさんみたく四六時中のオート反射ができないことか。

150年前は熟練度が低く、ベクトルを変えるために2秒ほどかかったために、身体に当たる弾丸を弾き返すこともできなかった。できたのはせいぜい体内のベクトルを操作して最適な動きをできるように補助するくらいだ。

今では神速の攻撃でない限りはベクトルを反射して対応できるようになっている。

ちなみに女冒険者が語っていた情報は60年ほど前のものなので、彼女たちが想定していた対処法ではいまのヘンリエッタには通用しない。

彼女たちが見た勝ちの目は、制御できないほどのベクトルを多方向から与えることと、ベクトル変換をやる前に貫く、つまりは神速の一撃を放つことだ。

後者はゲオルグの槍の最高速度でも無理だったと予想され、前者については全員で飛びかかれれば一撃くらい反射し損ねたかもしれない。

マギレーヴェン最強の騎士の名は安くないのだ。

補足。

マギレーヴェンの武装だが、服と同じくケイン内の根源に登録し、魔粒子で構成して呼び出すことはできる。よって他人の武装でも情報を教えてもらっていれば好きなように変えることができる。

しかしこれも服と同じく、一回の構築で作った後は一回ケイン魔粒子に戻って再び構成しないと違うものに変えられない。

つまりは、状況によって服や武器を変えるには一度死んで魔粒子に戻らなくてはならない。ちなみに毎回剣などで自殺するのは精神的にショックがでかいとのことで、服用すれば魔粒子に戻って死亡する薬を、各自身体を構成するときに一緒に構成する。この薬はスイッチのようなもので、実際に毒性があるわけではない。他の人間が服用するとただの魔粒子の塊だ。

また、恩寵調金武器の場合は、ケインに武器の根源をそのまま移せば、恩寵つきのまま武器を構成できる。よってメンテナンスいらすとなる。

しかしケインには武器の根源と拒否反応を起こさないように、武器と似た素材をケインに組み込む必要がある。

また、恩龍が自分と融合するのと変わらないので、他人が武器情報だけを真似て構築しても、恩龍は入っていないレプリカとなる。

結局は恩龍調金武器を登録すると、本物はその人の固有武器となるということだ。

「あのゲオルグという男、相当な使い手でしたね。探索者ランクS  
…だそうですね?。」

「そう。昔だったら突破されていたでしょうね。」

そう、150年前は幾度も12階まで突破されていた。

押されて一度は13階の重要な資料室や武器庫まで開けられて流出させてしまい、『亜人隷属』の手がかりとなったのは彼女達が奪われてしまった資料で、間接的に責任がある。

最初の頃の彼女たちは弱かったのだ。

訓練を積み、肉体を最適化してからマギレーヴェンになったとはいえ、戦闘経験が不足しているうえに、主人であるクロノ・ティアナークが死亡という情報も出て浮足立っていた頃の話だ。

彼女達は所詮ただの少女だった。

敵が数十倍の数でくると不老不死であるとわかっていても恐慌に陥った。

そしてケインを奪われ、隷属させられ、犯されるものや裏切らせられるものも出てきた。

立て直し、ケインを13階の魔力溜まりに嚴重に保管して反撃するころには多くの仲間が敗れ、奪われていた。

残った騎士たちも持つていた自信を打ち砕かれ、悲しみにくれながら情性で戦うしかなく、何度も負けて奥に土足で踏みじられた。

その流れをなんとか変えたのが当時新人のヘンリエッタだった。

彼女は新人ながらもその恩寵を効果的に使い、クロノへの想いを胸に、一人でも敵を撃退し続けた。

いつしか彼女の周りには共に訓練をし、共に戦う者が集い始める。

彼女がほとんどの騎士を掌握するようになったころには10階以上に入られることはなくなる。それまでに10年かかったが、何とか

騎士団の体裁が整えられたのだった。

エウルーペ王国のアークライト王朝が、クロノを亜人と共にゾンビやスケルトンや吸血鬼を従え、人間界に仇名そうとしていると、そしてハーヴェイ王朝はそのクロノに王族でありながらも支援していると述べ、まずはハーヴェイ王朝を打倒し、レストの魔王を倒すと宣言した時、つまりはあの150年前の、マギレーヴェンナイトの団長だったアルメイダは、あるうことか戦争中に寝返り、クロノに致命傷を負わせたために、裏切りの騎士と罵られ、団長は空席となっていた。

その空席争いも騎士団がまとまらない原因だったのだ。

そこにヘンリエッタがまわりから推される形で就任し、騎士団をまとめあげて戦果をあげ、争っていた騎士までも認めさせた。

この時から、ヘンリエッタも団長としていくつかの問題に頭を悩ませることになる。

マギレーヴェンナイトは不老不死だが、攻撃を食らって傷つけば魔力で回復しなくてはならず、炎症を起こした筋肉部分の修復などもある必要がある、しかも封魔結界内では活動できる時間に限りがあり、魔粒子を充電する期間も必要であった。

最初のほうにケインを持ったままの行動をして奪われた騎士が多かったので、ケインは13階に置くことにしたが、それだと充電できる魔粒子に限りがあるため、全員が一度に顕現できない。しかも1

3階に置くと行動範囲としては10階までしかいけず、封魔結界の範囲内までしか行けない。

このことは彼女達のジレンマとなった。

ケインを持ち運べば、永遠に死ぬ可能性もあるし、隷属の首輪などで隷属させられると、悲惨な目 死んでも死なないことから、無理やり犯されたり、サンドバックにされる にあう上に、敵に戦力をあたえることになってしまう。

しかし13階に置けば10階以下で行動ができない。

結局個人でどうするかは決めることになる。

ケインを持ち運ぶものにはたまに外にでて情報収集してもらった。対空迎撃装置はもちろん切ってた。

しかし、『亜人隷属』がでてからは前者の行動、9階以下の魔術が使える階に亜人が行くというわけにはいかなくなる。最初は何をされたかわからず、亜人の騎士を隷属させて上の階に忍び込ませられ、ケインや神刻物、資料をいくつも強奪された。

すぐに対応策として9階以下には行かないことにしたが……この時も被害は大きかった。

『こちらトウール。創造主の命令に従って最重要物を回収に来たわよ。』

少し過去の回想をしていると、【電心】が刻まれている左耳のイヤリングからメッセージが届いた。

エルフやダークエルフは耳に傷をつけるのを嫌うが、あえてヘンリエッタは半分までしかない左耳にイヤリングをしている。

城の窓から見ると、空を黒い翼を広げて浮かんでいる影がある。

『こちらヘンリエッタ・ガヴェイン。了解。』

対空用の迎撃装置を切る。

昔、パステルが忍び込んでくるセルヴィを撃退しようと魔改造したために、トウールですら殺害してしまうような凶悪な罠がしかけられているのだ。

「久しぶり、だったっけ？ それにヘンリはいつまで仕事の口調をしているの？」

クロノやセルヴィと話するときと同じように親しげに接するトウール。4人の中で最初に起きたのがトウールだったため、仲良くなる時間があったのだ。

「まだ仕事中です。」

「相変わらず固いのね。クロノの前だとかわいらしいのに。」

からかわないでください、とヘンリエッタも慣れたやり取りを返す。トウルもヘンリエッタと同じく、クロノの前とそれ以外で大いに態度が違うのに指摘してくるのは墓石を掘っているとしか思えない。しかし年上なヘンリエッタはそこをつつくことはしなかった。

「はい。これを明日までにまとめてね。数人は私と一緒にアークに行ってもらおうよ。」

トウルはヘンリエッタに羊皮紙を渡す。クロノから預かった目録だ。指示も書かれている。

「相変わらず、クロノ様は優しいですね。」

「クロノは甘ちゃんなのよ。」

指示書によるとクロノの思惑は以下の通りだ。

最重要なものは回収するが、経済の流れができてブリトニア島の欠かせない産業になっているために、できるだけ魔王城の迷宮としての形を残したい。よってゆくゆくは、重要度の高くない宝物を設置し、守護者を今のままにする代わりにブリトニアの街から上納金をもらうつもりになる。交渉がうまく行かなかった場合は城の全てを運びだし、城は凍結処理を施す。

しかし、今はクロノの復活を知られるわけにはいかないので、第三

段階、つまりは魔王復活の公表までは現状維持とする。

「あと、自由だけど、アークに行けばクロノから【隷属】や【屈従】を刻印してもらえるわよ。『亜人隷属』に上書きされなくなり、しかもクロノへの忠誠の証となるってことでアークやダークヌス大陸にいるマギレーヴェンに人気となって」

「私明日行きます。」  
トウルに最後まで言わせなかった。

「……………」  
トウルはからかうように笑い、ヘンリエッタのクロノ愛の高さをしている同僚は微笑ましそうにヘンリエッタに目をやった。にやにやと。

「…………… 目録通りにさっさと集めますよ。」  
そして目を点にしている新入りのアンシャントルシュヴァリエの娘もいることに気づき、ヘンリエッタは仕事に戻ると言い張り、部屋を出て行った。ヘンリエッタのクールで堂々とした拳動しか知らない後輩にとってはさぞ衝撃だっただろう。

頬の色は夕焼けの空を映しているようだった。

アークの王城17階のクロノの私室にて。

「んんっ、クロノさまぁ。」

「もう少し待って。後ちよっとだから」

「あんっ、まだですかぁ……んっ。」

「よしっ、全部入ったよ。」

「私にしっかりと刻み込んでくれたのですね、クロノ様。」

注意：グレイスエンゲレイヴァー【恩寵刻印】の使用中の音声です。

クロノの欠点に『【恩寵刻印】を使うときは刻印する対象の中心点に触れなくてはできない』というものがある。まあ欠点というよりは癖であり、定着してしまったのだが。

そして剣の場合は刀身の中心、ペンダントであれば宝石部分となるわけだが、人体の場合はどうなるか。

胸である。

これは初期の、パステルがビスクドールボディだったときに、どこに手を触れて刻印すればいいのだろうと悩んだ挙句、身体のある中心である心臓でいいかな？ と思って刻印し続けたせいである。

もちろん最初のパステルはビスクドールでツルペタどころじゃなかったので意識していなかったのだが……。

何も言わずにアイリスをはじめとして、フランやステラ、ミーアの胸を握ってしまったのはすでに懐かしい思い出だ。

クロノはこの癖を直したほうがいいだろうと考えてはいるが、逆に喜んでいる子も多いのでそのまま放置している。むしろ直そうとするとパステルやセルヴィの妨害が入るのだ。

さて、現在ヘンリエッタ・ガヴェインがクロノの私室に来て甘えて  
いるのは、【屈従】を刻印してもらったためである。

「他の階、たとえば謁見の間でもいいじゃないか」と、他の侍女に  
妨害されそうになったのだが、ケインのメンテナンスをしてもらう  
だとか、久しぶりに近況を話したいだとか、なんとか押し込んだ。  
それでも食い下がる娘たちには『騎士団長のカリスマ』を発動して  
押し通した。

そして最近ずっとクロノから離れたがらないシルフの少女フレデリ  
カもトウルに押し付け、お付のホムンクルス トウルたちの  
妹 にも退室してもらい、二人きりである。

ちなみに奴隷化する恩寵は、低階から【屈従】【従属】【隷属】

【隷属】はフレデリカの首輪から吸収 となっていて、刻印は  
一番容量が少なくてすむ【屈従】にしている。

もっと上の恩寵が良い、私をクロン様の「物」にして欲しい、など  
と言う変態もいるのだが、貴重な容量を圧迫するのはもったいない  
と何とかクロノは説得した。

「なるほど……全員【屈従】から初めて、クロノ様へ従順に仕える  
ことで熟練度を上げて、忠誠度を見せってみるということですね！  
私が最初に【隷属】になってみせます！」

「……………えっ?」

暴走するヘンリエッタだった。

先ほどアルメイダ・ランスロットと険悪な雰囲気になっていたのが嘘のような能天気さである。

「という事で早速奴隷としてご奉仕します!」

「は?……………ちよっ、ちよっと持ち上げるなって!」

「相変わらず小さいし軽いんですね。」

「身長145cmに言われたくない。それにもう成長が『止まった』からどうしようもない。」

ってベッドに投げるな!」

「なぜです? 服を脱がしますね。む、いつも通りの白い肌……………女としての自信失くしちゃいます。」

「男としては全くの無用の長物だよ……………。というかいつの間にか全裸にっ!」

二時間後、窓から朧な月の光が照らしだすベッドの上に、クロノとクロノの二度と鼓動を刻まない胸に頭を乗せるヘンリエッタの姿があった。クロノの細い身体を彼女の長く波立つブロンドの髪が隠している。

クロノはその中性的な顔を安らかなものに変えており、ヘンリエッタは体温の低いクロノを抱きしめながら満足げに、しかし優しくな色をその瞳に湛えていた。

ヘンリエッタ・ガヴェインは主人に笑顔でいてほしいと願っている。だからクロノを引っ掻き回す。しかし傷には触れない。

これは復活後ずっと暗いクロノを励ますための純粋な行動なのである。

多分。

#### 43話 後始末と騎士の軌跡とクロノ（後書き）

同時間軸の話（大陸歴1995のほぼ同じ日）がこれでおわりました。

次は5年後にキンクリで、やっとプロローグに追いつきます。これからはほのぼのと、奴隷回収や内政や商売や神刻物回収、そして勇者（本物と偽物）との対決、謎の敵対種族との生存競争に生態把握と発生過程調査。

これから書きたかった部分が始まります。

書きたいところに来るまで時間がかかってしまいました……。

正直プロローグの後そのまま魔王編進めればよかったかなって後悔してたり。

この構成にしたのは、魔王Ⅱ黒乃を最初はわからないようにするためだったのですが、ミスリードの仕掛けにしても意味がなかったかなあ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1107x/>

---

浮遊島の黒の恩寵管理者

2011年10月23日23時38分発行